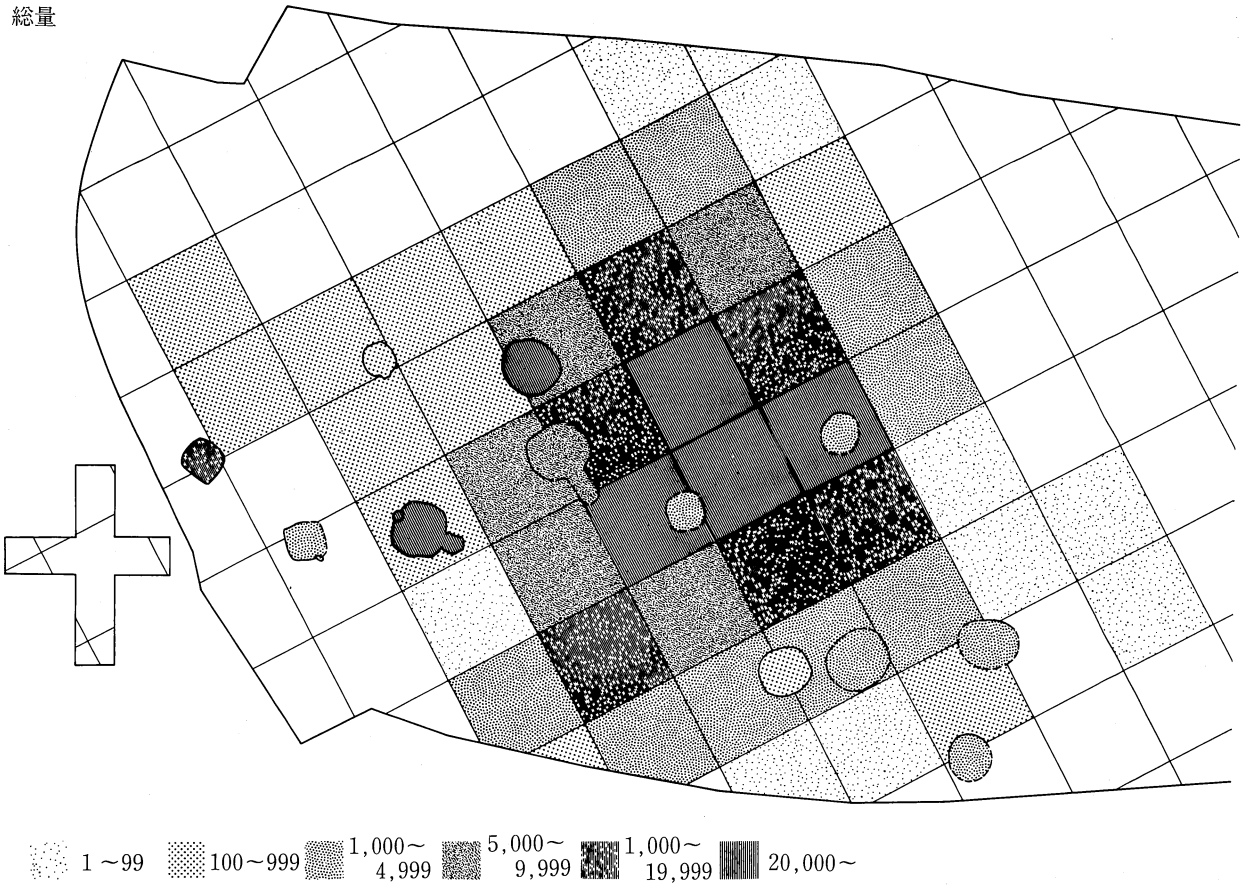


図105　出土土器のグリッド別分布（１）

された。この分布は時間的にほぼ並行すると考えられる「陥し穴」の分布とも重なり、調査区の南方に存在する湧水地を意識した谷頭から谷底への指向と判断できる。

中期後葉第Ⅰ期の土器分布（図106下）

出土数量は少なく、分布も限定される。５号住居址およびその周辺に濃い分布を示すとともに、R13・14グリッドにもやや離れて分布が認められる。この両グリッドは以後も引き続いて高密度の分布を示す箇所であり、集落形成期に相当する本段階に特別な場としてすでに意識されていたことが考えられる。

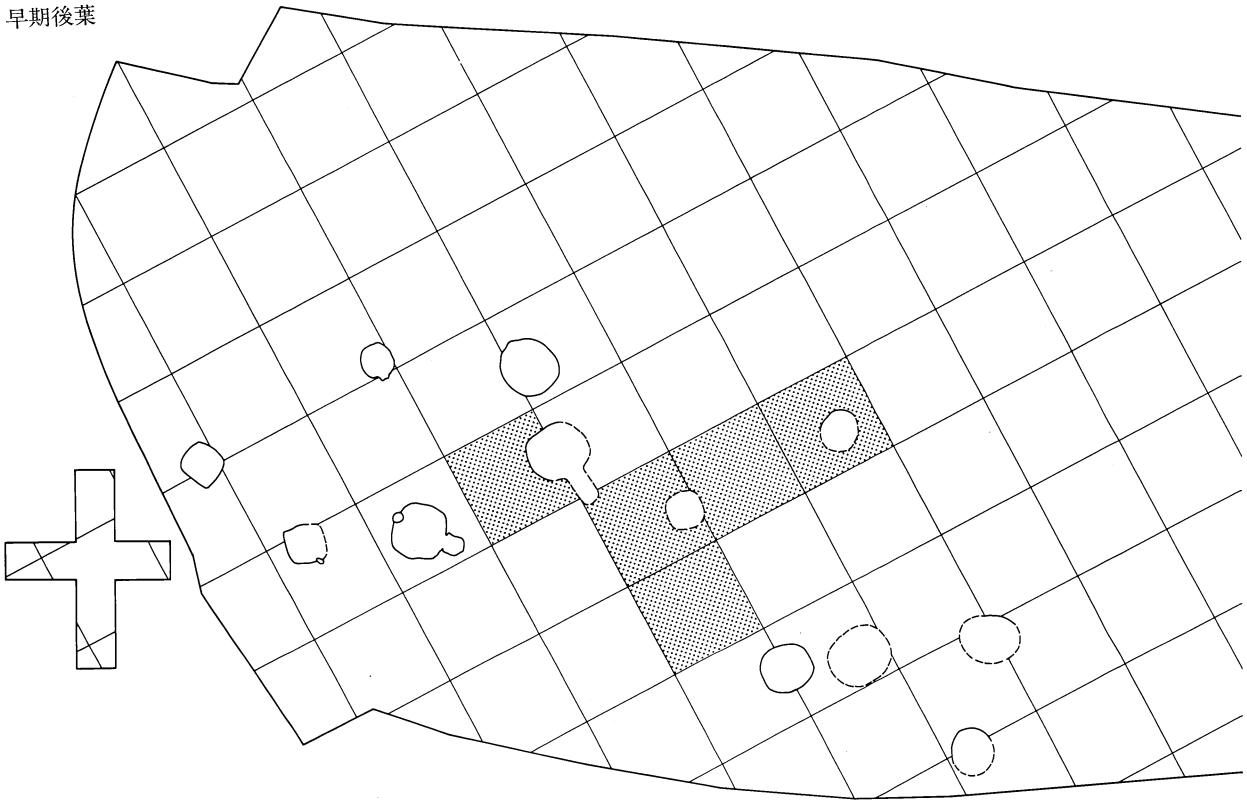
中期後葉第Ⅱａ・ｂ期の土器分布（図107上）

破片資料のため分類に際して細分化の困難な個体が多数占めたことから、ａ・ｂ両期を一括した。土器の出土量が飛躍的に増加し、分布域も拡大する。５号住居址の覆土中に集中する一方、遺構外では前段階に限定的な分布が認められたR14グリッドに集中する傾向が一層明瞭となる。また、分布の主体も同グリッドを核として、先述した凹地部分の東半に偏在する。R14グリッドは凹地底から斜面上方へ若干高まった地区に相当し、地形的条件からは自然の営力による集中化は考え難い。何らかの意図的人為の顕れと判断するのが妥当であろう。

中期後葉第Ⅱｃ期の土器分布（図107下）

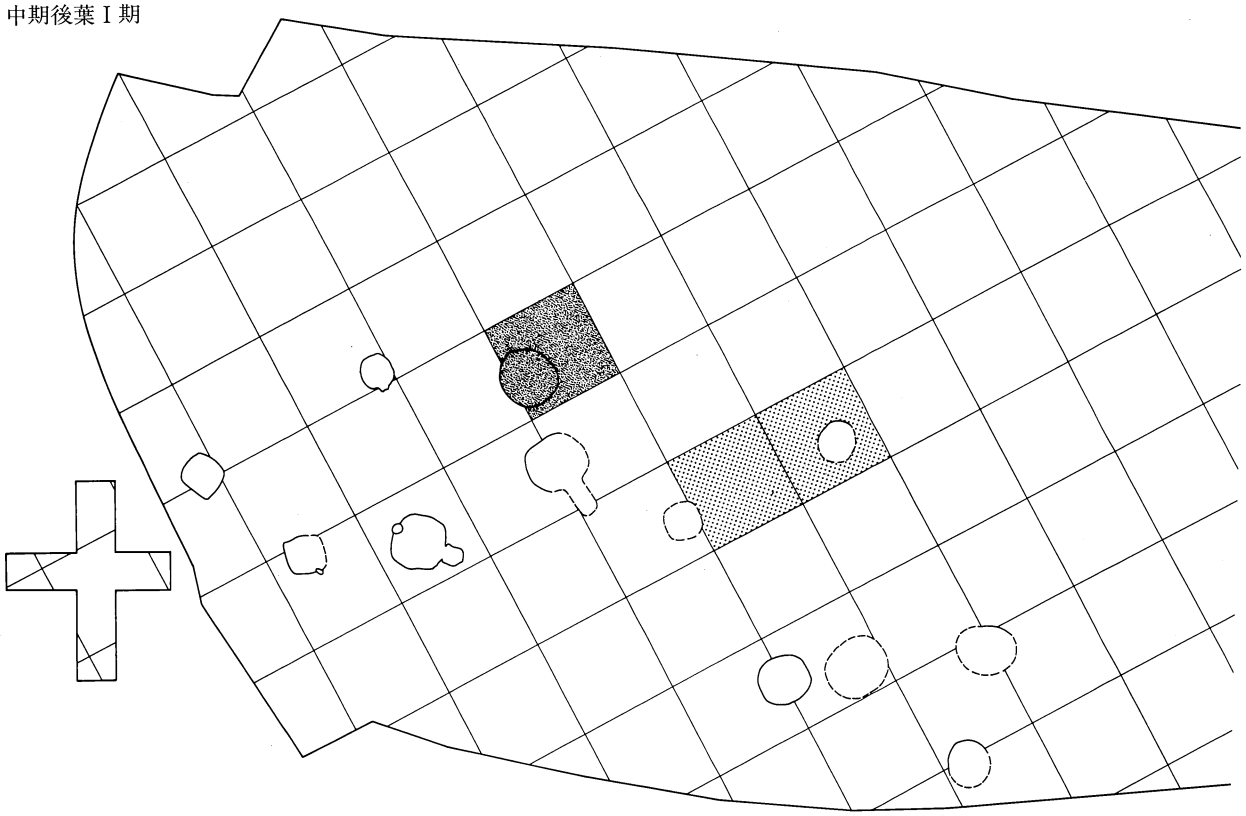
本段階になると分布域に大きな変化が認められないにもかかわらず、先のR14グリッドを核とする傾向がなおいっそう顕著となる。その中でもR14グリッドに南接するR19グリッドへの新たな集中化傾向の萌

早期後葉



1～100（g）

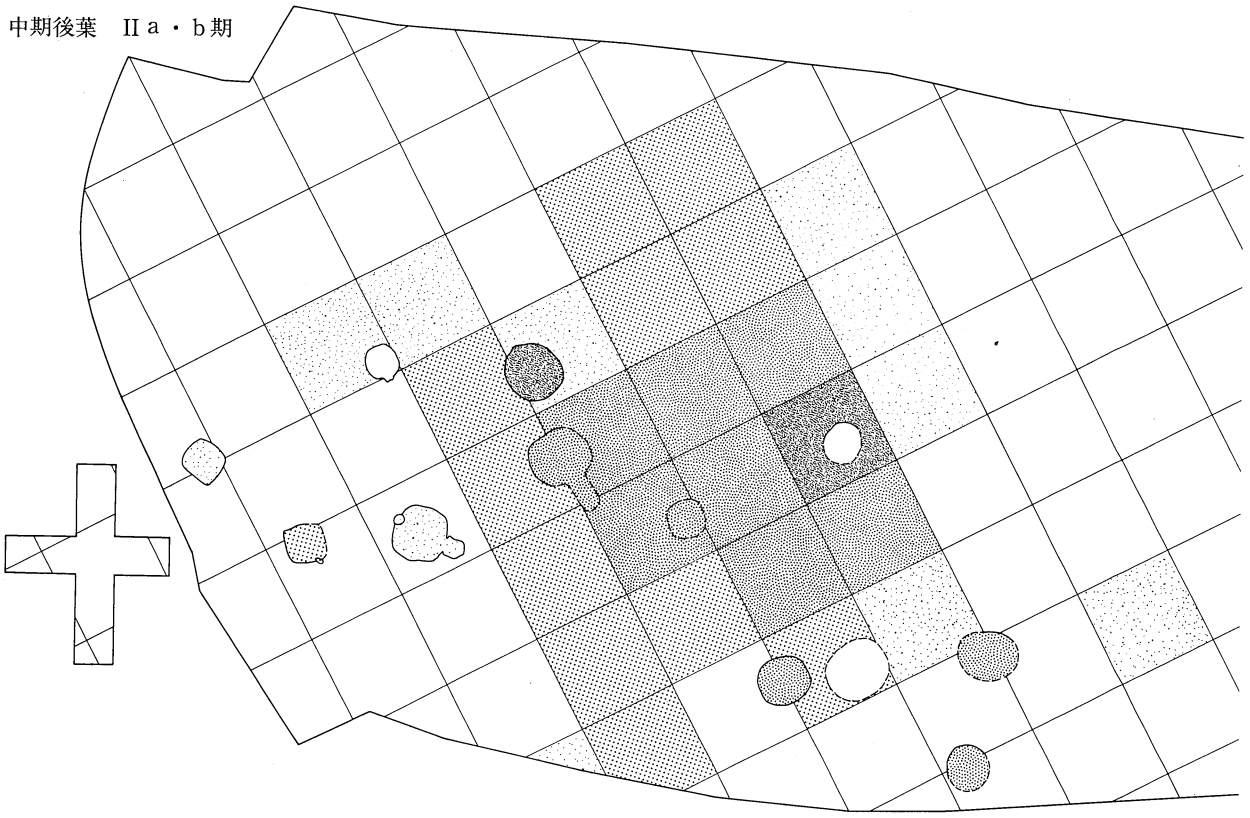
中期後葉Ⅰ期



1,000～（g）

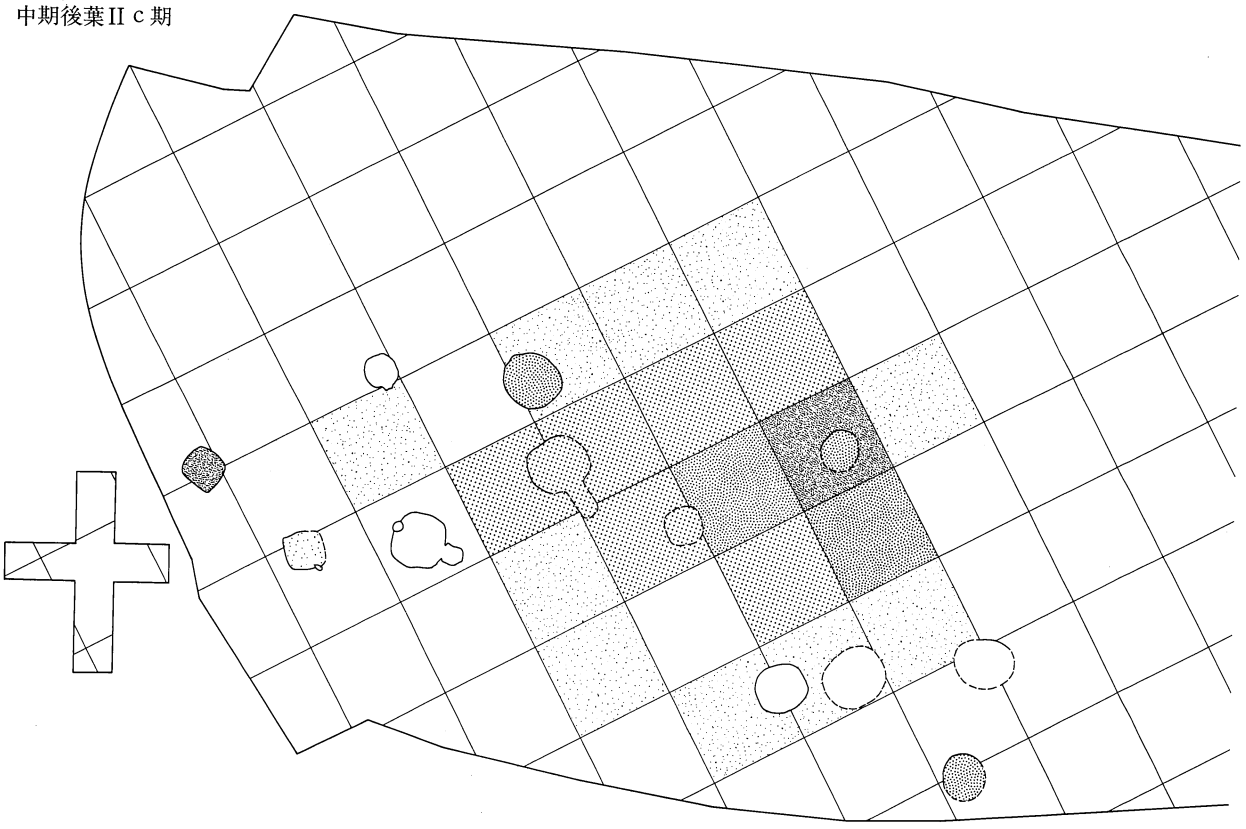
図106　出土土器のグリッド別分布（2）

中期後葉　IIａ・ｂ期



1～99　100～999　1,000～3,999　4,000～(g)

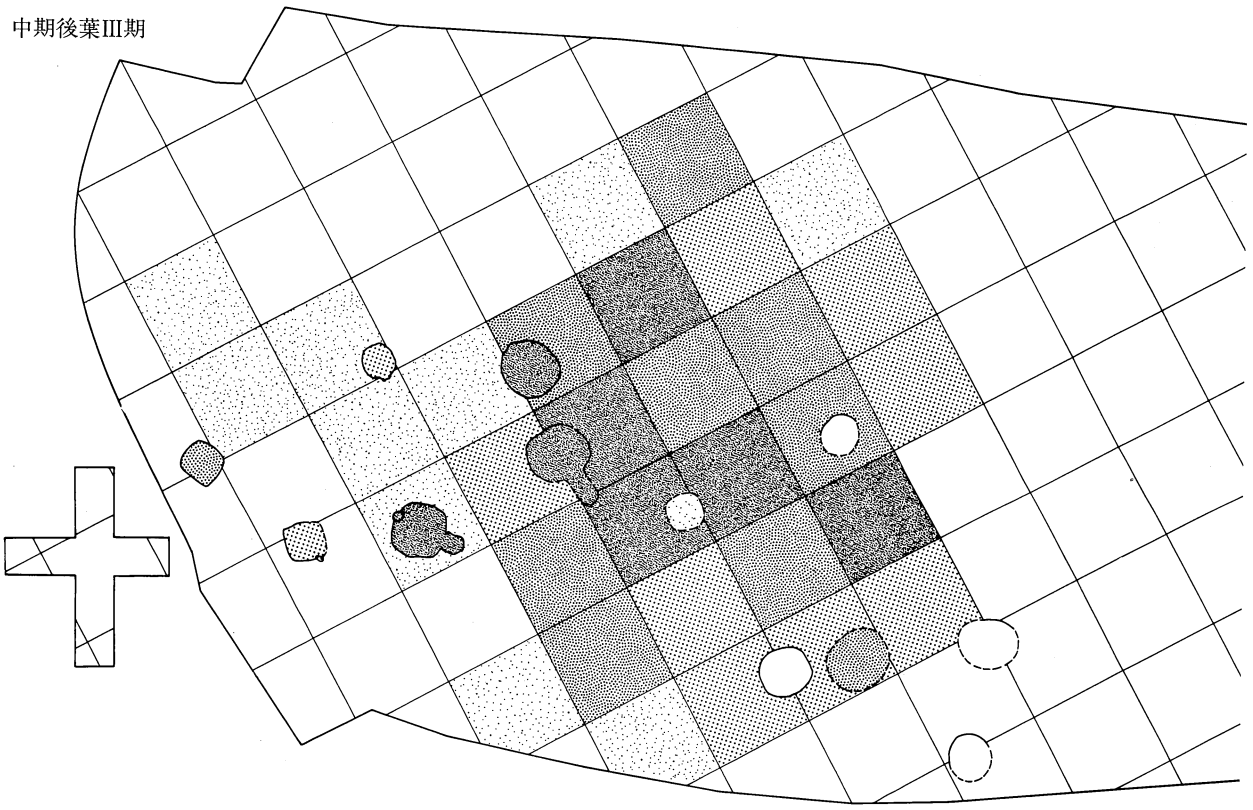
中期後葉IIｃ期



1～199　200～999　1,000～2,999　3,000～(g)

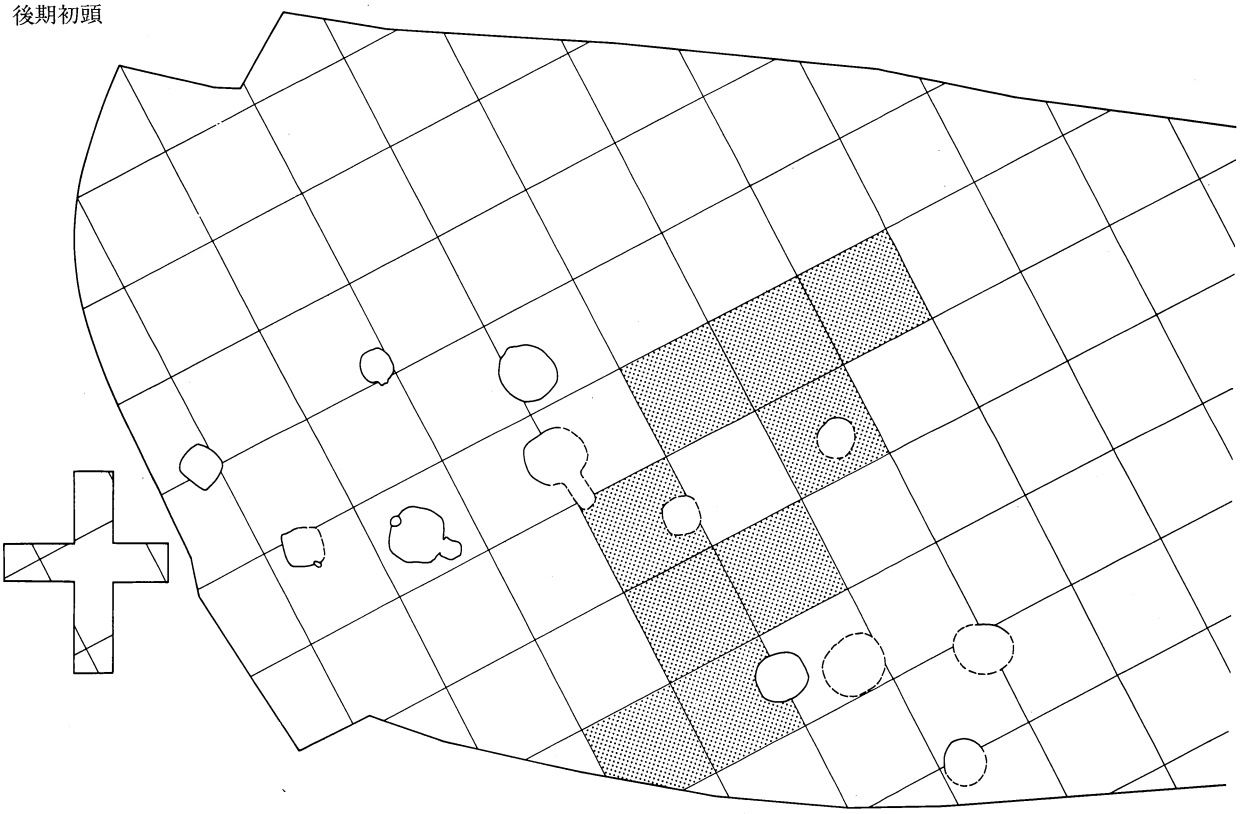
図107　出土土器のグリッド別分布（３）

中期後葉Ⅲ期



1～199　200～999　1,000～3,999　4,000～(g)

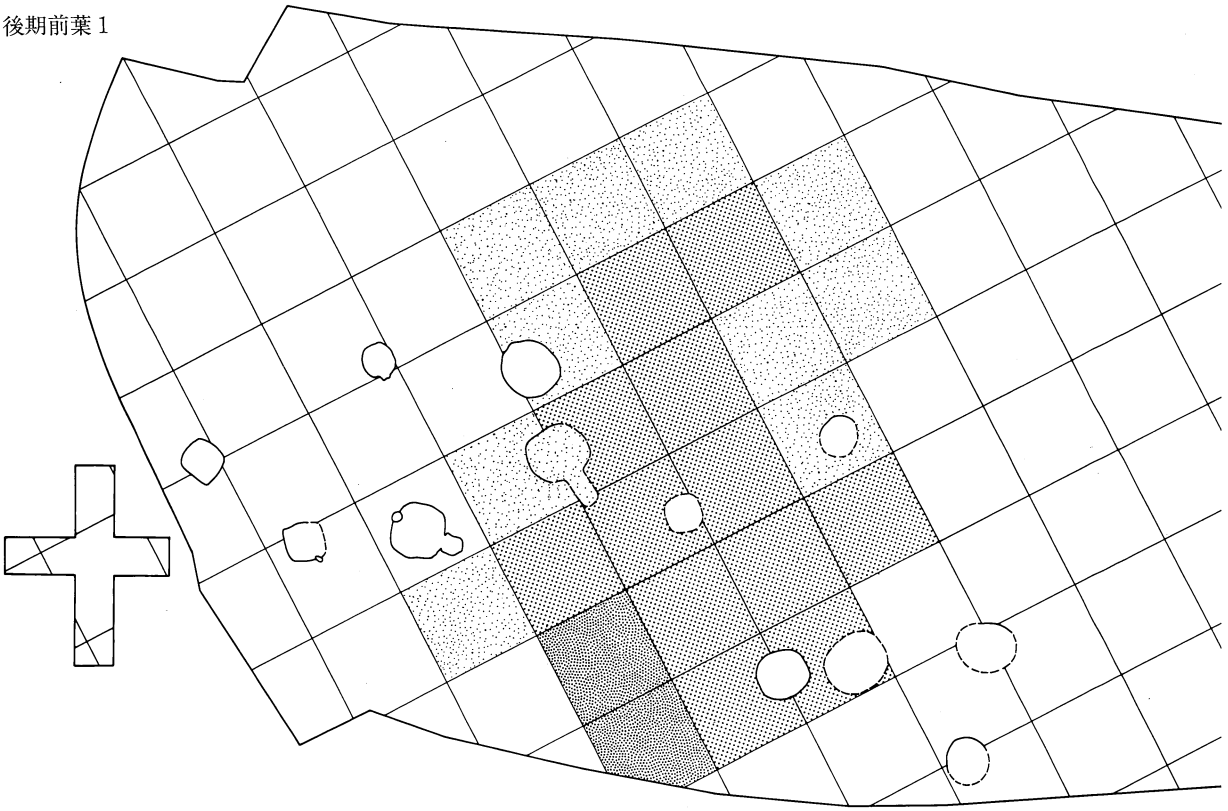
後期初頭



1～500 (g)

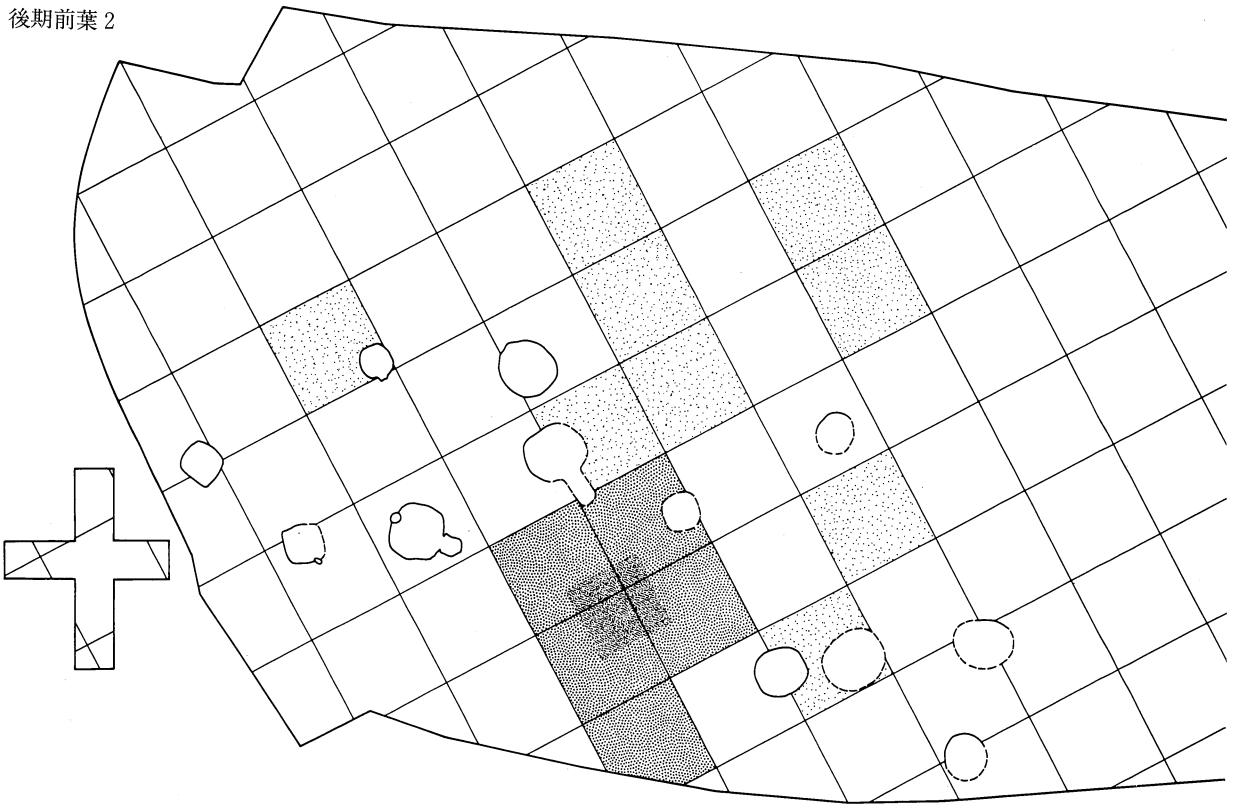
図108　出土土器のグリッド別分布（4）

後期前葉１



1～99　100～999　1,000～(g)

後期前葉２



1～99　100～999　1,000～(g)

図109　出土土器のグリッド別分布（５）

芽が注意される。また、5号住居址覆土中にも引き続いて多くの土器が認められるほか、11号住居址の覆土中にも多数の土器が確認された。

中期後葉第III期の土器分布（図108上）

本段階も分布域そのものに大きな変化は認められない。しかし、9号住居址および4号住居址の内外に主要な分布を示し、分布の偏在傾向は一転して凹地西半部へ移行する。また、5号住居址と11号住居址の覆土中にも依然として土器の存在が確認される。そうした分布傾向の変化とは裏腹に、前段階に形成され始めたR19グリッドへの集中化が進行し、凹地東半部にあっては際立った分布密度を有する。このことから各段階をとおして偏在性が認められるR14・19グリッドには、ほかとは異なる意識が働いていた蓋然性がきわめて高いと考えられる。

後期初頭の土器分布（図108下）

称名寺式に比定される土器の分布である。前段階までに各期をとおして認められた分布密度の偏在性が見られなくなり、調査区中央の支谷状部分に散在する傾向を示す。また、量的にも出土数は激減する。

後期前葉の土器分布（図109）

堀之内式に比定される土器の分布である。同I式とII式とでは分布や出土数量に差異が認められることから、2時期に分けて図化した。

堀之内I式期には前代に比べ若干出土量が増し、それにつれて分布域も広がる。出土土器の多くは引き続き小支谷状の中央凹地に沿って細長く分布する傾向を保ちつつも、調査区南端のR16・21グリッドに集中箇所を形成する(図109・上)。堀之内II式期になると出土総数量は減少傾向をたどるものの、R16・21グリッドを含む調査区の中央南端部付近への集中化はいっそう著しくなる(図109・下)。その中でも、遺物集中箇所IIとしたR—D・E12・13グリッドを中心とする部分は、際立って高い分布密度を示している。この堀之内II式期以降、後期中葉の土器片1点が出土した以外遺物の出土は皆無となる。

(3) 石器の分布状況について（図110・111）

吹付遺跡で出土した石器の大半は遺構外からのものである。全体の分布のあり方については前述したように、地形的に旧小谷地状を呈すIIR区に集中し、さらに、器種として分類される石器以外にも、緻密な安山岩（安山岩C）や板状節理によって板状礫と化す安山岩（安山岩B）などの礫・石片もこの範囲に分布している。一方、この範囲には住居址・配石遺構・焼土址・土坑などの諸遺構が少なからず検出され、とくに配石遺構はこの地区にその多くが認められる。これら遺構の存在と出土した石器の分布の状態とは、それらが無関係であるわけではなく何らかの関連性を持っているはずである。

このことは、諸遺構が構築された各々の時間差の中で、出土した石器類を分割し捉えていく必要を求める。たとえば、住居址が構築され、生活が営まれた時間における石器のあり方、配石遺構が存在した時間における石器のあり方などのことである。本来ならこのような時間差の中で石器類を位置づけて行くべきであろうが、実際には、時間差を示す出土土器の時期は、短期間(加曽利EIII～IV期)を示し、石器は細かな時間差を本来もてないというのが現状である。それでも、石器の分布と遺構が重なり合うことをポイントにすれば、遺構に伴う石器や廃棄されたものが一緒になっていることは明らかである。

ここではいくつかの特異な分布を示す石器から諸遺構のあり方を結びつけて考えるなど、単に石器が出土したということから一歩でも先に進めばと思う。なお、遺物の取り上げが徹底し得なかったこともあり、

８ｍグリッドを単位として分布状況を捉えたが、これも全体の３割近くが落ちてしまっている点を留意されたい。

まず、打製石斧・大形剝片石器を除いた各石器の分布状況を図に示した。図中に示し得なかったものもさりながら、各出土数の絶対量が少なく、全体に散在するように見えるものが多い。その中で、例外的に多孔石にみられるような特異な分布を示すものもあった。多孔石はＲ―12･13グリッドに集中してみられ、ここは調査時に遺憾ながら見落してしまったが前述したごとく列石状遺構が存在する。

多孔石については凹み石と混同している向きもあるため、連続敲打によるＵ字状の凹みと比べ、逆円錘状の凹みを持つものをそれとし、たとえ１穴（凹）であっても凹みの形状を基本に多孔石とした。これに従い、凹みが穿たれる素材を見てみると最低２穴（凹）しかもたないもの（300）などをみても、大きな板状礫の表裏にあって、凹石とは形状の点でも異なることは明白である。長野県内においては、多孔石（ハチノス石など）の出土例は東信地方（佐久･小諸など）に多いとされている（五十嵐1982）。最近の成果では隣接する群馬県田篠中原遺跡の発掘調査から多孔石が配石遺構などに伴う祭祀的遺物であるという指摘がなされている（菊池1990）。

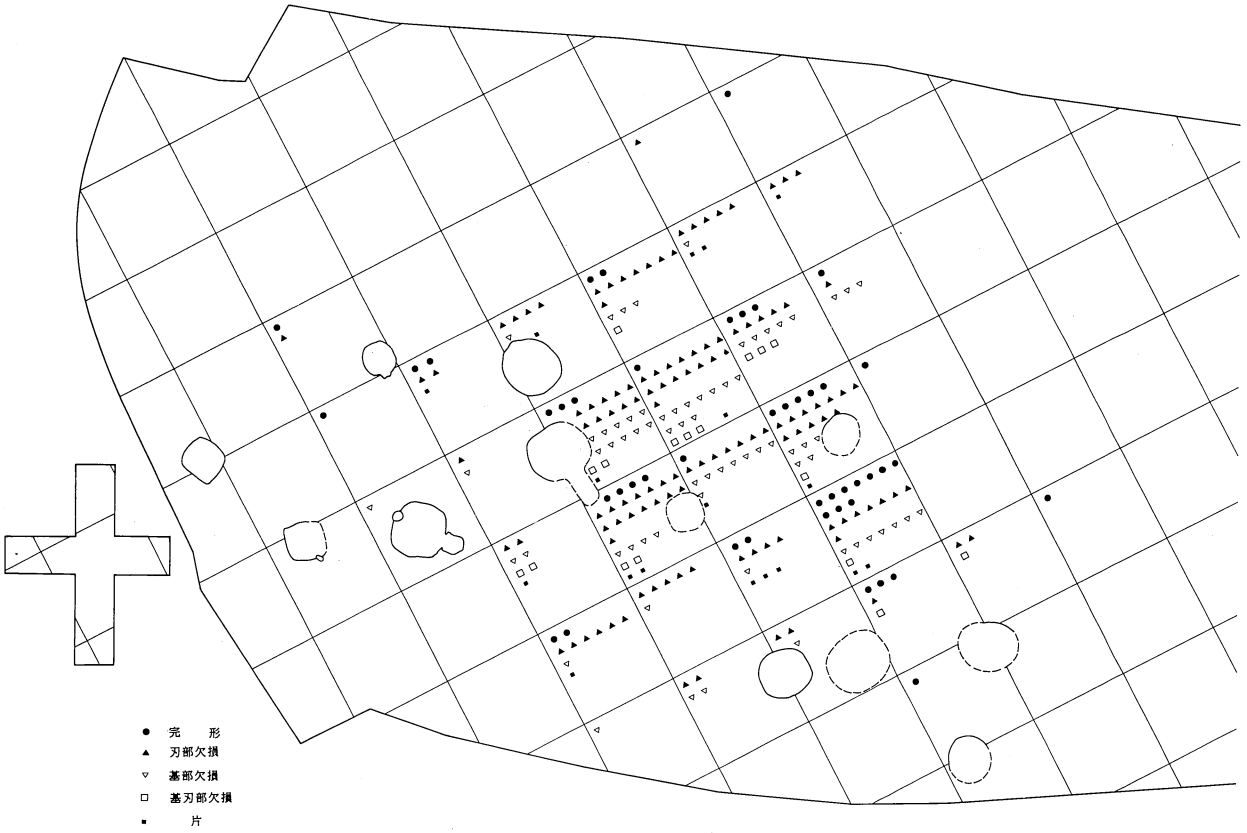
多孔石が祭祀的遺物であるという指摘は、多孔石にみられる凹みが石棒という祭祀的遺物に認められる点や、同じく凹みが認められる石皿が後世の石臼にみられる魂抜きという行為に似て、遺跡から出土する多くの場合欠損しているという見方なども考えてみるならば、石皿を逆円錘状に凹ませるという行為に何らかの意味があったことを裏付けるものとなる。そう考えれば、本遺跡で出土した多孔石は逆にそのような遺構に伴うものと考えてよいことにもなる。実際、本遺跡の配石遺構（敷石住居も含め）からは少なからず多孔石が出土している。とすると、列石状遺構の存在もあながち的はずれではない。そして、多孔石が遺構に伴うものとすれば、Ｒ区に集中分布する石器のうち多孔石は廃棄されたものとして扱うことは本遺跡において妥当でないことが指摘される。

次に、打製石斧の分布状況を図に示した。

打製石斧は本遺跡の石器組成の６割を占めるもので絶対量も多い。ここでは、１号配石遺構で完形の打製石斧が欠損はしているものの大形の磨製石斧と重って出土したことも考慮して、完形品・欠損品３類に分けてその分布状況をみてみる。全体におのおののグリッドで若干のまとまりが指摘できるが、ここで特徴的なのは完形品（完形品の定義は難しいがここでは使用可能なものと理解する）がＲ14グリッドに多いことであろう。先にも触れたが、１号配石などのある地点である。また１号配石の北２ｍには欠損しているとはいえ石棒が立位で検出され、石棒が集落における境界性などの内面世界の表象であるなら、打製石斧の出土のあり方も、何らかの意味があったことを指摘できないことはない。確かに打製石斧は、完形で廃棄されるものも多く、その理由が検討されて来た（斉藤1985）。出土した打製石斧の多くが欠損品であり、廃棄されたものであろうが、本遺跡の遺構外出土遺物がすべて廃棄されたものであるということがいえないことは先に多孔石でみてきたとおりであった。とすれば石棒や配石遺構と関係したものも何点かあったことは１号配石出土の打製石斧から充分推測されることではないかと思われる。

遺構との関係については明確な指摘はできないが、別の面から大形剝片石器と緻密な安山岩（安山岩Ｃ）の分布状況について図に示した。安山岩Ｃについては重量で示してある。これも多くのものが８ｍグリッド以上の枠（40ｍグリッド他）で取り上げられているため資料的に徹底したものではない。

全体にまんべんなく広がって、安山岩Ｃの石片は分布している。大形剝片石器の呼称については、前述したようにあいまいな横刃形石器という名称をさけるためである。先にみたように、大形剝片石器としたものの中には、板状素材（安山岩Ｂ）利用のものと、安山岩Ｃを利用したものとがある。安山岩Ｃ製のものは、どちらかというと「切る」・「切載」する機能をもち（何点か本来のスクレイパー状のものもあるが）、それより素材と



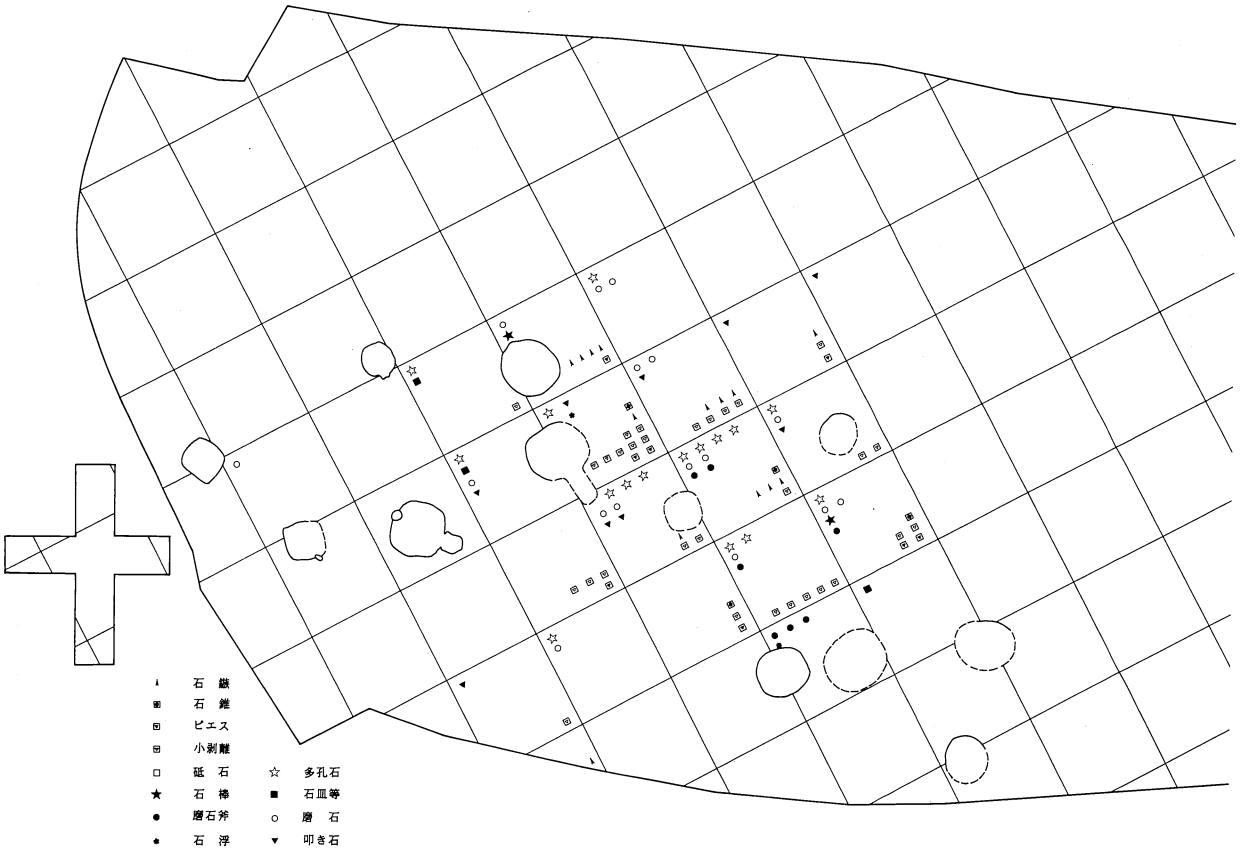


図110　出土石器のグリッド別分布（1）

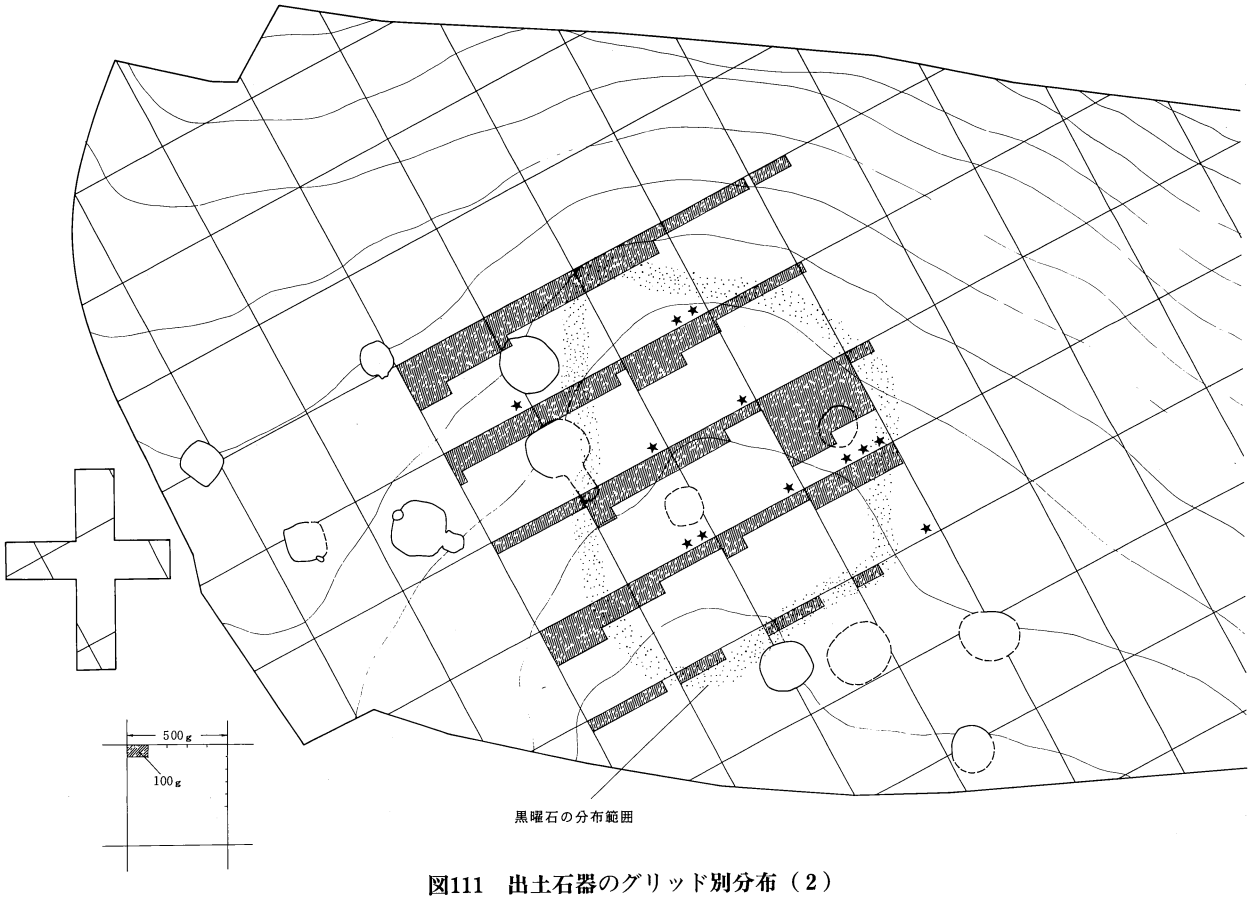


図111　出土石器のグリッド別分布（2）

して刃部の鋭さの点で劣る安山岩B製のものがある。両者のうち、安山岩C製の方が多く出土し、さらに石片類も多量に出土したことは何度も触れている。安山岩C製の大形剝片はいわゆる不定形な石器であり、石片類の中にも使用されたものがあったと思われる。

ところで不定形な石器、形より機能重視の石器は、一般に器種として認定されてきた定形石器とくらべ以下の点で異った背景をもつ。定形化され認識されるということは、その石器（器種）が世代をこえて、集団・地域の中で受け継がれ、形として選択・採用されていたことになる。また、逆に不採用選択もしたわけで、いずれにせよ選択行為の前には選択される対象となりえる石器が存在している。一方、不定形な石器は新たに定形化せずに多様に選択・使用されたもので、利用に適した形を求めた結果、世代をこえると形が先行する「石器」に対して、利用に適した形を求める必要がなかったものである。そして、不定形な石器が組成に占める割合いが多いことは、一定の選択の同時制は安定した社会基盤を表わすとすれば、選択の背景が異なるとはいえ軽視できないものとなる。

本遺跡で、多分に利用されたものと思われる安山岩C製の石器は、黒曜石・チャート製の小さな石器類の替わりをなしたものといえる。周辺で簡単に採取できる石材を利用することによって、黒曜石などの搬入材を利用せずに済んだことは黒曜石製石器が少いことや廃棄されていた粗悪な原石・残骸を見ればうなずけるところであるから。また、安山岩C製の石鏃が他の遺跡で散見されるが、けっして石材の主体を占めることはなかったようである。本遺跡で出土した安山岩C製の石核から石鏃などの素材片を生産したことも考えられるとはいえ、生活基盤を形成する道具として主体を占めたものではなかったことは、石器組成からうかがえる。安山岩C製の石器の主体は不定形な剝片石器にあるといえよう。これら定形化されない石器は形を求めないという背景から逆に、多量の不用な剝片を必要としたと考えれば、分布量の多さを支えるものといえる。

以上、第一地点の分布状況から、ひとつにこれら石器の集合のうちいくつかは、遺構として捉えうるものであって、すべてが廃棄されたものではないことを指摘できた。(なお、廃棄というよりその場に放置された可能性の高い台石については、残念ながら原位置がわかるものがほとんどないためここでは触れ得なかった。)

しかし、出土した石器の多くは廃棄されたものであろう。自然に集ったものとするには分布の中心からはずれ、より低地である南側に石器の出土がほとんどみられない点が矛盾する。そうであれば廃棄の場としての空間が存在していたと考えねばなるまい。さらに、同範囲に遺構が認められることは、集落における空間利用の変化があったことを認める必要がある。そして集落における空間利用の崩壊と新たな建設は、そこに大きな画期が存在したことが推察されよう。その表象として、敷石住居や配石遺構の登場があったといえるのではないかと考えたい。

敷石住居が出現するのは、縄文時代中期末から後期初頭にかけての一定期間とされる。この時期は自然科学の成果から寒冷化が進んだ時期とされ、縄文時代の人々の生活のあり方も大きく変化せざるをえなかったことは、さまざまな考古学的事例が示すところでもある。このような背景の中で登場した敷石住居というものは、一般に生活の変化に伴った「祭祀性」をもったものとして理解されて来た。本遺跡の敷石住居を石器のあり方からみてみよう。

4号住居址においては、打製石斧・磨製石斧などが敷石の外縁、柄の部分に配置され、丸石は炉の北東方向で検出された。多孔石は柄の部分に多く配置される。さらに、炉の北側(住居奥)には、礎石状の板状礫(123)が、打ち割られて配置されている。123は中央に人為的と思われる円形の凹みが認められ磨り面も観察された。欠損した石皿も柄の部分に配置されている。これらの配置の状況は、そこに意図があったことは明らかで、前述した多孔石、石皿の性格を考えると、「祭祀的」色彩が濃厚である。また、敷石に利用されていた2本の打製石斧(106・107)は、形状は打製石斧としたものの、礎器に近く、特に106は、裏面は礫面を残すもので、形式的な色彩を持っていた。

9号住居址は、出土遺物の量は少ないものの、興味をそそられるものとして石棒(134)があげられる。この石棒は5号住居址出土のものと接合し、5号住居址が土器のあり方から、9号住居址よりも古い段階のものであることが解っている。とすると、9号住居址から5号住居址に石棒が意図的に廃棄されたことになり、さらに出土石器量が本遺跡内で廃棄の多い5号住居址が、9号住居址、4号住居址など敷石住居の登場に際し、いままでの廃棄の場を変更したことによる結果の可能性も推察される。以上、2軒の住居址から知れることは、敷石住居が「祭祀的」な意味を持っていたことと同時に、その登上(採用)によって集落内における空間利用に変化が起きたことも考えられることである。

いくつかの石器の分布をみるなかで、分布状況の性格を考えてみたが、そこから導き出されたものは、一言でいえば集落内における空間利用の変化といえよう。そこで次に、これらの背景となる生活基盤の変化が、石器組成の中でどう捉えられるのか考えてみたい。その場合、先に触れた大形剝片石器と安山岩C石片も考慮せねばなるまい。

出土した打製石斧は、前述したように石材をある程度意図的に選択していた。すなわち、素材形状にあわせて、形態を整えたといってよいだろう。このように簡便かつ大量消費をうながした石器は、得られた素材石片の出土量に注目すれば、大形剝片石器としたものも同様である。両者を結びつけるものは石器組成からみて植物食料生産に関係するものであったと推察されよう。ところが本遺跡の敷石住居、配石遺構が構築される段階は、形式的な打製石斧や、完形打製石斧の分布の集中などに認められるような特異性(付加価値性)が看取されることから、出土した打製石斧の所属時期が細かな部分でほとんど不明であるうらみはあるが、やがて打製石斧を基盤とした縄文中期的様相の崩壊の兆しとして捉えらることになる。

さて、香坂川流域は、第2章1節で示されるように、水はけの悪い所で、当時もあちらこちらに湿地が

あったと思われる。また山地は落葉広葉樹林が広がっていたことであろう。本遺跡も近接して湧水地が存在する。「陥し穴」の存在も、水場が本遺跡の周辺に存在したことを示唆している。このような湿地を利用した、食用植物の自然発生を充分利用したであろし、落葉広葉樹林の堅果類を食用としたことも想像される。薄手の打製石斧が多くみられ、整形も簡単であるにもかかわらず、完形品が一定量あることは、その使用対象が軟弱な土であった可能性が指摘できないであろうか。また、厚手の打製石斧はクリの木の植生管理における伐採などに利用された可能性も指摘されよう。むろん樹木は縄文時代における多用途材であり、この手の打製石斧も磨製石斧とともに用途の点でひとつに限定することは避けねばならないであろうが。（とくに、機能・用途については推測の域を出ない。）

大形剝片石器（剝片も含め）の多出性・多様性は、食料加工段階で使用されたものとして、鋭角的な剝片刃部を利用したもの（安山岩Ｃ製）は、石鏃など狩猟具の少量さから考えても、植物食料加工に利用したとしても間違ってはいまい。たとえば、根茎類の切断など（村田1985）がそれにあたる。また安山岩Ｂ製のものは鋭いとはいえない刃部であるから別機能・用途が考えられよう。また、香坂川流域では東祢ぶた遺跡（第３章）でも出土している軽石製品は、漁労活動が少なからずあったことを示していると考えられる。

生活基盤である生産のあり方は、いままでみてきた石器のあり方に示されるように、変化を余儀なくされ、その変化の象徴として、集落の空間利用のあり方も変化したものと考えたい。

自然と自然の一部である人間が対峙し、人間の働きかけの表象として道具（＝石器）が位置づけられる。その両者の関係の中で道具を捉えることが、道具の本質を見い出すことである。自然―道具―人間の３者の関係は自然環境の違いと集団おのおのの思考の違いという差の中で、さらに人々の行為は多様化し、ともに道具も多様化する。これらのことについては、課題として残されている。

(4)　遺跡の形成と消長

今回の発掘調査では、吹付遺跡が主として縄文時代早期後葉および中期後葉から後期前葉にかけての遺跡であることを明らかにすることができた。検出された遺構や出土した遺物の詳細は前記したとおりであり操り返すまでもないが、それら遺構・遺物は個々ばらばらに存在したのではなく、歴史的事象の産物として有機的な〝場〟と〝時間〟を共有しているはずである。

最後に調査時や整理段階で得られた所見や先に試みた遺物群の内容や変遷に対する検証をふまえ、遺構群の展開と消長を基軸とした遺跡の復原的な操作を行って調査報告のまとめとする。

早期後葉

吹付遺跡の初源をなす「陥し穴」４基が掘られる。小支谷状を呈す調査区中央に集まり、谷頭から谷底にかけてを指向する。これは調査区の南方にある湧水を意識した配置であり、水を求めて谷筋に集まる動物の狩猟を目的とした遺構と考えられる。また、本遺跡で検出された「陥し穴」は木戸平Ａ遺跡（第１節）のまとめにも記したように、同遺跡の尾根斜面に検出された「陥し穴」と密接に結びついて機能していたことが推定される。このことから、木戸平Ａ遺跡を含めたこの一帯が、該期において狩猟域として人々の生活基盤の一端を担っていた事実が浮かび上がってくる。陥し穴を用いた猟場がどの程度の期間存続したのかは断定できないが、分布特性や検出数から判断すれば、極めて短期的な使用であったと考えられる。以後、中期後葉に至るまでこの地に遺構が残されることはなく、遺物の出土もほとんど途絶える。

中期後葉第Ⅰ期（図112上）

１号・３号・５号住居址の３軒が営まれる。調査区中央の凹地部分を中心に一定の間隔をおいて構築さ

れ、本遺跡に初めて集落が形成される。各住居址には平面形態や炉址に若干の相違が認められるものの、規格性のある3本の主柱穴をもつ点で共通する。三角形に配置される主柱穴については、該期の東北地方南部に類例を見ることができる。しかし、当地域にあってはその系譜を明らかにすることができない。また、1号および5号の両住居址は出入り口部埋甕を有す。それぞれ曽利系土器・佐久系土器を用い、ともに口縁部と底部付近を欠いた胴中位のみを正位に埋設してあった。土器群についてみれば、出土量が少なく断定には至らないが、加曽利E式（系）土器と佐久系土器がほぼ拮抗した出土量を示す。

この段階で注目されるのは、量的には少ないながらも、出土土器がR13・14グリッドに集中し、なおかつ、その空間に焼土址が存在する点である。焼土址の帰属時期については、遺物の分布特性から導き出したもので推定の域を脱しえないとはいえ、本段階にとどまらず他の段階においてもそれぞれの遺物分布の動きと極めてよく合致する状況からすれば、あながち見当はずれの推測ではないように思われる。遺物分布の集中・偏在と焼土址とが組み合わされる事例は、東祢ぶた遺跡（第2章第9節）でも検出されており、同遺跡では強い儀礼的な性格が確認されている。本遺跡においても第IIb・C期の1号配石土坑の存在や第III期の石棒出土にとどまらず、打製石斧など石器群のあり方からも考えられたように、祭祀空間とは限定できないまでも、このR13・14グリッドの場所がある種の儀礼を伴う空間として認識されていた可能性は極めて高いであろう。また、こうした空間は位置を移動しつつ第III期まで継続しており、集落がその形成段階より何らかの空間認識にもとづく内部構造を有していたことが考えられる。

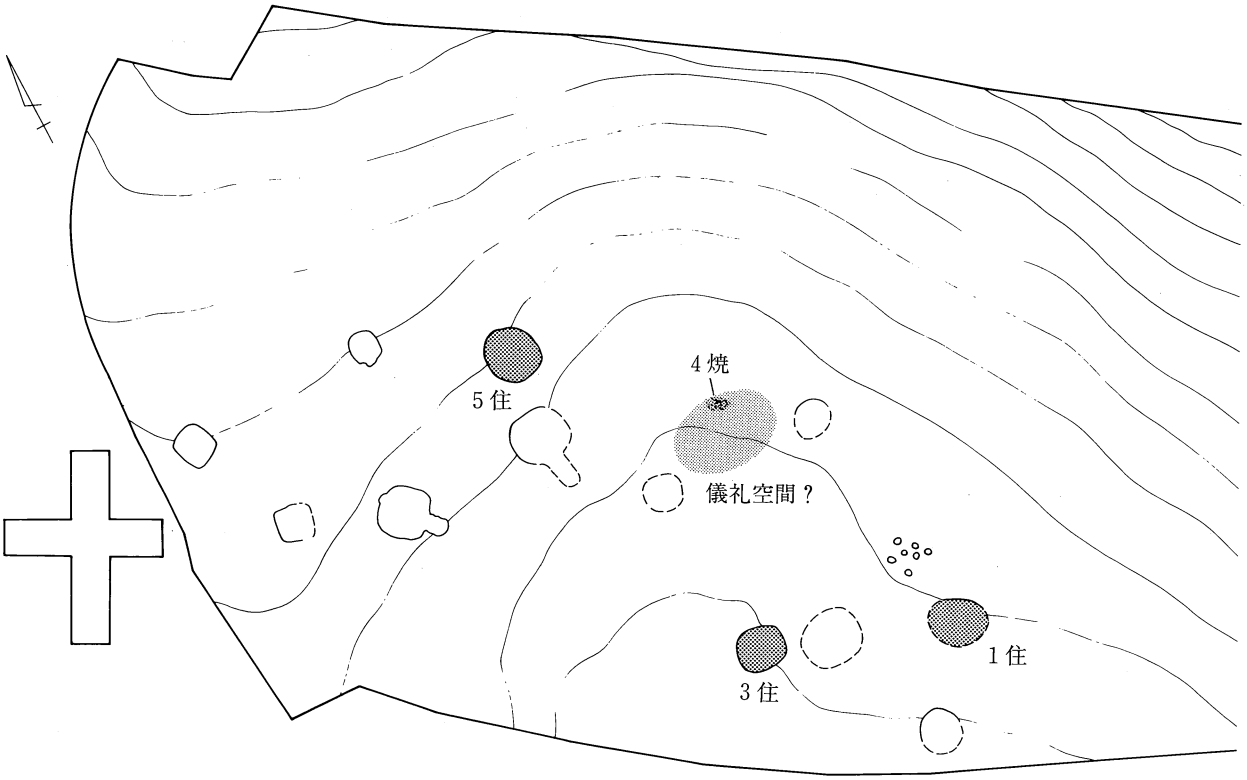
集落構造という面では、本遺跡の南西に展開する曲尾遺跡にも該期集落の存在が予想され、2つの集落単位が隣接して営まれていた可能性が高い。恐らくこれら2つの集落は中間に位置する湧水を共有し、社会的に緊密な関係にあったと考えられる。出自や社会組織の面など興味深い問題を提起するあり方といえ、集落の内部構造とともに解明されねばならないテーマを含んでいよう。

中期後葉第IIa期（図112下）

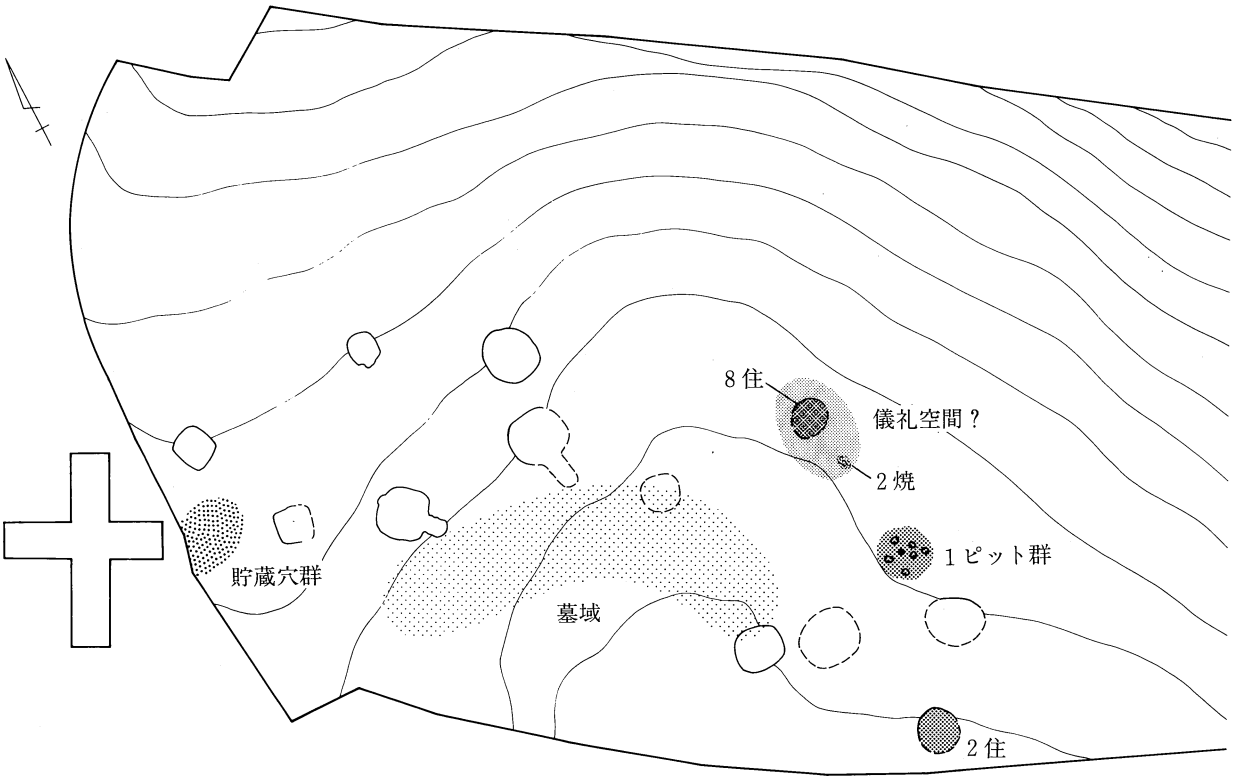
2号住居址と8号住居址が営まれる。このほか、住居址であった可能性の高い1号ピット群も、柱穴配置の状況から本段階に帰属すると考えられる。さらに、前段階にも認められた遺物の偏在箇所との関連からすれば、2号焼土址の存在が推定できる。

1号ピット群については不確定な要素を残すものの、2号住居址は前段階と共通する3本の主柱穴を基礎として上屋を構築する。2号住居址の場合、埋置か設置かという相違こそあれ、5号住居址同様石囲い炉内に胴下半を欠いた土器を伴っていた。また、特異な遺物の偏在性を示す空間は前段階のR13・14グリッドからR14グリッドへ収束・集中化する傾向をみせ、この認識レベルの空間移動に伴って、焼土遺構の機能も4号焼土址から2号焼土址へ移されたと考えられる。このR14グリッドには上記した8号住居址の存在が考えられ、炉址を中心とした床面上に多孔石を含む大形の扁平礫をめぐらすという同住居址自体の特殊性とともに注目される。とりわけ、石器類の分析の中で得られた多孔石に関する見解と照らし合わせるならば、床面に据えられた多孔石には実用的な機能とは次元を異にする象徴的な意味が込められていたと考えられよう。逆にまた、そのような祭祀的遺物を伴う8号住居址の存在は、同住居址が位置するR14グリッドに対応する〝場〟に与えられていた空間認識に儀礼行為・儀礼過程の介在を想定する根拠ともなる。

集落構成からみると、調査区西端の尾根部には貯蔵穴群が、R11・12・18グリッドの一帯には墓域がそれぞれ形成されたことが土坑群の分析からうかがわれる。また、この時期を境として、文様・モチーフにおける加曽利E式土器との同化傾向を示し始める佐久系土器は、質的にも量的にも急速に独自性を失っていく。



第Ⅰ期



第Ⅱａ期

図112　縄文時代中期後葉の集落変遷（１）

中期後葉第IIb・c期（図113上）

遺構の面でIIb期とIIc期とを分離することはできない。しかし、埋甕を含めた床面出土土器の特徴や覆土出土土器との関係からすれば、11号住居址をIIb期構築・IIb期廃棄と、6号住居址をIIb期の新しい段階に構築・IIc期廃棄と位置づけられる。11号住居址と12号住居址が形態や占地を同じくするのに対し、6号住居址のみ配石状の敷石をもち分布も異にすることは、そうした時間差を反映した事象と考えられる。

以上のような状況から、IIb期にはまず居住の場が前段階の調査区東寄りの部分から西端の尾根部へ移ったと考えられ、それとともにIIa期までの特徴であった3本主柱穴の住居構造を喪失する。居住域の動きに呼応して貯蔵穴とみられる土坑分布もわずかに移動する。土坑は個別的な占有を示すかのように各住居址に近接した位置に掘られており、注目に値する。11号住居址と12号住居址の存続中か廃棄後かは明らかではないが、若干の時間差をもって6号住居址が構築される。同住居址は上述したように、敷石住居址の先駆的な形態を呈し、占地にも次段階への過渡的なあり方をみることができる。

一方、儀礼を伴う〝場〟と考えられる遺物の偏在箇所は、前段階の位置を踏襲しつつも、IIc期にはR14グリッドの南側に相当するR19グリッドへの展開を見せ始める。また、配石墓と考えられる1号配石土坑がこの空間に近接して構築されていることは、すぐれて象徴的な意味を持っていよう。さらに推論を進めるならば、この1号配石土坑と対峙する位置に同様な配石墓と考えられる2号配石土坑が存在する点は双分組織や階層差といった集落内の社会構造を端的に示すあり方と受け取ることもできよう。

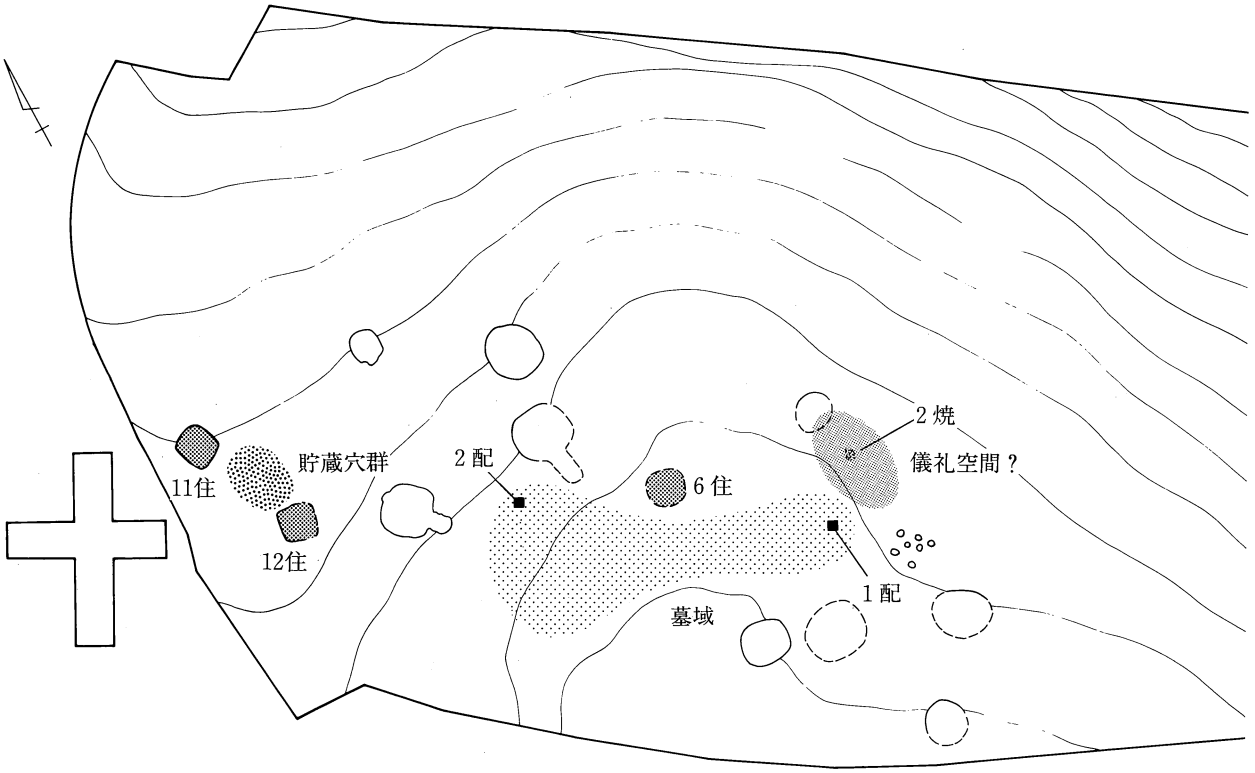
本段階における土器群は、加曽利E式（系）土器の質的・量的な拡張傾向が強まり、IIc期には同土器の占有率はなお一層高くなる。こうした加曽利E式（系）土器の動きは佐久系土器の退行現象に拍車をかけ、その独自性をますます失う結果を招く。土器群に現れたこのような変化の要因を明らかにすることは困難であるが、住居址の形態や占地の変化とも軌を一にした現象であることからすれば、単に過渡的な様相としてだけではなく、より能動的な意味での変革を伴う変化であったことは確かである。

中期後葉第III期（図113下）

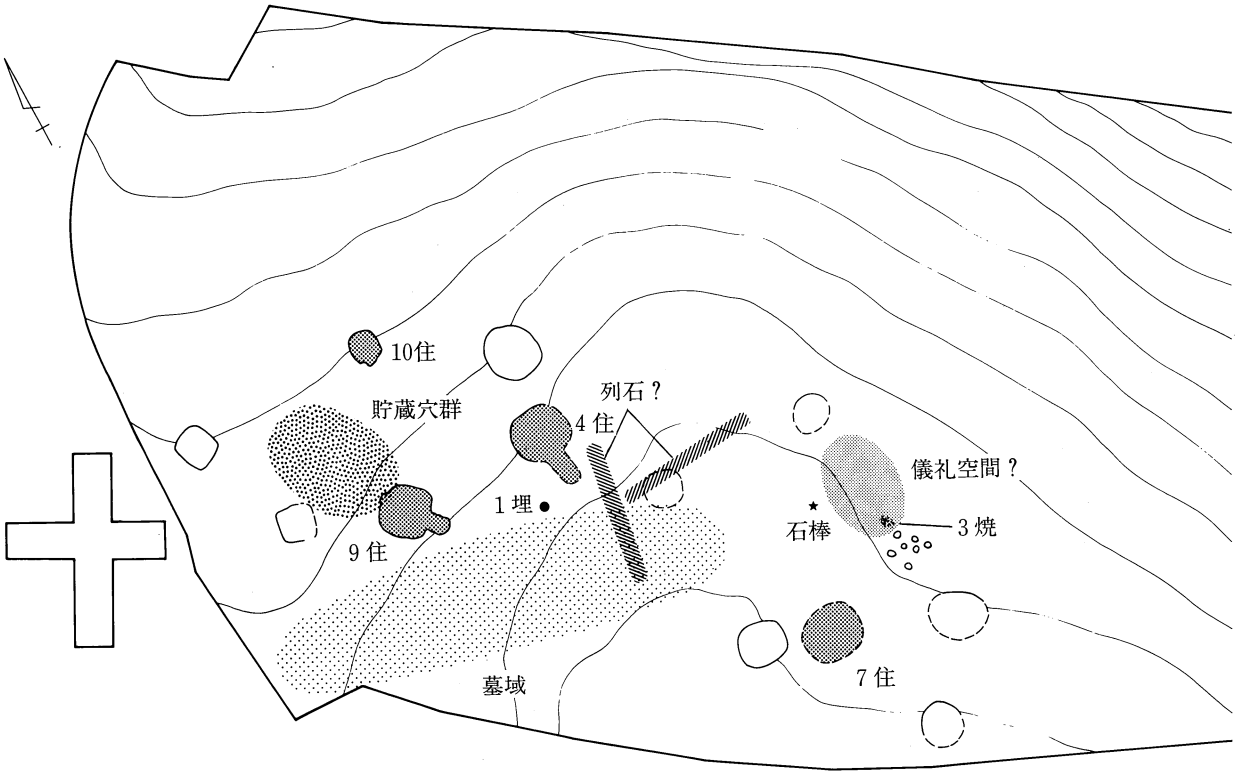
2軒の柄鏡形敷石住居址（4号・9号住居址）と7号・10号住居址が構築される。構造上特異な10号住居址は別として、7号住居址はすでに触れたように4号住居址や9号住居址と同様、柄鏡形の住居址であった可能性を残す。これら4軒の時期細分はなしえないが、4号と9号住居址を例にとれば、住居形態のみならず敷石の用材の敷き方、あるいは柱穴配置などに大きな相違が認められ、構築時期に微妙な差があったことも考えられる。

7号住居址が調査区の中央付近に位置するほか、他の3軒は西側の支尾根からのびる斜面に占地する。2軒の敷石住居址は占地を同じくしつつも、形態および構造上著しく異なり、また、9号住居址が炉奥の敷石面に石棒を立ててあったのに対し、4号住居址が奥寄りの敷石面両隅に丸石を有するという決定的ともいえる相違を呈する。この石棒と丸石はともに祭祀的な性格を具えた遺物と理解され、一般に相異なる機能をもつと同時に一対の関係をなすとされていることは周知のとおりである。上記したように、両住居址には構築時期に微妙なずれがあったと考えられるものの、両址が異なる祭祀を分有し相互補完的な役割をそれぞれが果たしていたとみられることからは、両住居址の併存と密接不離な関係が浮かび上がってくる。また、10号住居址については柱穴の状況から角錐状の上屋構造が想定され、規模も著しく小さいことから日常的な居住を目的とした住居址とは考え難い。集落構成上、位置的にやや隔絶した場所に存在する点からも住居とは異質の〝場〟であったことは想像に難くない。

一方、繰り返し示してきた儀礼的空間と考えられる遺物の偏在箇所はR19グリッドへ移行し、そこには



第Ⅱｂ・ｃ期



第Ⅲ期

図113　縄文時代中期後葉の集落変遷（２）

３号焼土址の存在が推定できる。また、この空間の西に接する場所から他の遺物と検出層位を同じくして石棒が立位の状態で出土したことは特筆すべき点であろう。本段階ではさらに、調査区中央部に列石状の

遺構が存在した可能性を指摘できる。発掘時において注意が払われず充分な記録が残されているわけではないが、土器分布の特徴や多孔石を中心とする石器のあり方、航空写真などを総合的に検討した結果、その存在を推定した。列石状遺構の存在した可能性と推定位置のみを報告しておきたい。貯蔵穴と考えられる土坑群は東へ移り、墓域は西方へその範囲を広げたことが考えられる。貯蔵穴群と判断した土坑の中には埋め戻されたとみられる土坑が少なからずあり、墓坑への転用があった可能性を残す。

遺構外出土遺物の分布については、儀礼的な空間のみならず廃棄空間の抽出も可能であり、4号住居址の東側および5号住居址への遺物廃棄が看取される。5号住居址への廃棄行為はすでに第II期から始まり、本段階における廃棄の実態は、9号住居址床面出土の石棒と接合する破片が同住居址の覆土中に遺棄されていたことからもうかがえる。また、本段階には佐久系土器の存在がほとんど把めなくなり、土器群は実質的に加曽利E式（系）土器によって占められるようになる。これは関東方面からの加曽利E式土器や柄鏡形敷石住居址を指標とした文化的・社会的情報の流入が活発化した状況を反映した結果と解せよう。

9号住居址が28号土坑に切られており、少なくとも9号住居址廃絶以降も集落が継続していたことは確かである。しかし、本段階を境として吹付遺跡に形成された縄文中期集落はその姿を消すことになる。

後期初頭

第一地点ではわずかな量の遺物出土が確認されたにすぎない。分布的にも偏在性などは認められず、地形の窪みに沿って散漫に出土したにとどまる。しかし、谷をはさんで西に位置する第二地点からは、大形破片を含む若干まとまった資料が出土し、さらに尾根を越えた西方の鶉ヲネ遺跡からは、中期後葉第III期に後続する時期の住居址が検出されている。本遺跡第二地点や鶉ヲネ遺跡に代表されるあり方は、中期後葉に形成された大規模集落が解体し、短期居住の場や小集落へと変化していった状況を端的に示す事例である。そして、こうした変化は本期に先行して柄鏡形敷石住居址が出現する中期後葉第III期の段階からすでに顕在化していたことが、東祢ぶた遺跡（第2章第9節）の調査結果から推測できる。

後期前葉

堀之内I式期—前段段階の状況を発展的に継承するかたちで、第二地点にまとまった量の遺物が残される。第二地点からはまた焼土址と配石状の遺構が検出され、出土土器の多さと石器群の分析からも、生産活動あるいは生活の場としての機能が考えられる。

一方、第一地点では遺構こそ検出されなかったものの、遺物量の増加とともに調査区中央南端のR16・21グリッドには遺物出土の偏在傾向が現れる。この遺物偏在箇所の出現は、中期後葉段階でのあり方を参考とするまでもなく、何らかの機能が付与された意味空間の発生を意味している。こうした空間の存在は住居址などとは次元を異にするとはいえ、きわめて強い人的働きかけがなされたことを物語っている。

また、両地点出土土器には若干の時期差が認められる。第二地点出土のものが前段階からの継続性をもち全体に古い様相を示すのに比べ、第一地点出土の土器は本段階の中でも新しい要素を有するものを含んでいる。短絡的に結論を導き出すことは危険とも思えるが、第二地点から第一地点への回帰的な移動といった現象も考慮の対象とすべきであろう。

土器そのものについては、第二地点出土の堀之内I式土器にみられる北関東的な特徴を指摘することができる。このことは、当地方への堀之内I式土器の流入過程を探る上で重要な意味をもっていよう。

堀之内II式期—第二地点では人為的な痕跡がほとんど見られなくなる一方、第一地点では遺物量こそ前段階に比べて減少はするものの、出土状況から読みとれる人的活動の痕跡はより明瞭な形となって現われる。堀之内I式期に出現した遺物分布の偏在性がなお一層鮮明となり、遺物集中箇所IIとした極めて特徴

的な遺物出土状況も確認される。この遺物集中箇所については、前記したとおり、住居址の存在や祭祀施設の場を想定することが可能であり、本遺跡が生活あるいは生産の場として再び選ばれたことを象徴的に示している。

本段階以降は後期中葉の土器片が１点出土したのみであり、縄文時代のみならず平安時代に至るまで人々の残した痕跡を見ることはできない。

平安時代以降

平安時代後半の土師器甕や中世の陶磁器類の破片がわずかに出土したのみである。平安時代の住居址が検出された東祢ぶた遺跡や西祢ぶた遺跡などに比べ、より生活適地と考えられる本遺跡に生活の痕跡がほとんど認められないことは今後の検討課題となろう。生産域としての捉えも可能であるが、土層観察の結果などからは断定に至らなかった。

(5)　おわりに

吹付遺跡は香坂地区にとどまらず佐久地方においても稀有な規模と質をもつ縄文時代遺跡であった。この貴重な遺跡を調査・報告するのに際し、組織上の問題から調査責任者と整理・報告責任者とが異なるという事態が生じた。その結果、発掘調査時点における現場責任者の不勉強と報告者の力不足とが重なり、充分な報告をなしえなかった。住居址や土坑など発掘時に失われた遺構も数多くあったことは否定しえない事実であり、記録として充分に残されなかったデータも多々存在する。また、整理時における誤った解釈も介在しよう。最後に本遺跡に対する調査・報告の実態を明らかにすることを遺憾の意の表明にかえさせていただくとともに、掲載資料の不完全性をお断りしておきたい。

ただし、遺構の認定や記述に際して、データの不備を補うべく主観的な拡大解釈をつけ加えたことや、その結果としての報告内容に関するすべての責任は整理・報告担当者にある。

参考・引用文献

五十嵐幹雄　1982　「多凹石考」『中部高地の考古学』
宇賀神　恵　1990　『四日市遺跡』真田町教育委員会
大竹　憲昭　1988　「上木戸遺跡」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書２』（財）長野県埋蔵文化財センター
菊地　実ほか　1990　『田篠中原遺跡』群馬県教育委員会（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
斉藤　基生　1985　「打製石斧研究の現状」『信濃』35―4
高嶋　幸男　1985　『火の道具』柏書房
高村　博文　1987　『西祢ぶた』佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター
高村　博文　1988　『曲尾Ⅱ』　〃　〃
谷井　彪ほか　1982　「縄文中期土器の再編」『研究紀要』（財）埼玉県埋蔵文化財事業団
徳江秀男ほか　1985　『荒砥二之堰遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
羽毛田伸也ほか　1987　『西片ケ丘・曲尾Ⅲ・曲尾Ⅰ』佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター
綿田　弘実　1989　「長野県東北信地方の中期末葉縄文土器群」『縄文中期の諸問題』群馬県考古学研究所他
福島　邦男　1989　『平石遺跡』望月町教育委員会
福島　邦男　1990　『上吹上遺跡』　〃
藤巻幸男他　1985　『荒砥前原遺跡』群馬県教育委員会（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
翠川　泰弘　1988　『鶉ヲネ』佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター
村田　文夫　1985　『縄文集落』考古学ライブラリー36
百瀬忠幸ほか　1987　『殿村遺跡』山形村教育委員会
百瀬　忠幸　1987　「境甕と境界性について」『長野県埋蔵文化財センター紀要１』
森嶋　稔ほか　1990　『円光房遺跡』戸倉町教育委員会

第3節　上中原遺跡（かみなかはら）

1　遺跡の概観

上中原遺跡は、佐久市の東方八風山から閼伽流山に連なる山系より南方に伸びる尾根上に位置する。香坂川右岸に続く南側斜面は、田地として利用されており、昭和初期において、大規模な田地の造成がなされたようである。小さな谷を隔てて西側に鶉（うずら）ヲネ遺跡（第4節所収）・東林遺跡（第5節所収）があり、これら3遺跡の地形図を図1に示した。また東側の急峻な尾根を隔てて吹付遺跡（第2節所収）がある。

2　調査の経過と概要

調査は鶉ヲネ遺跡と並行して、6月9日から実質5日間行った。調査区域は、佐久市大字香坂字仙太郎369番地を中心とした一帯で、区画造成の景観から、地中深くまで削平がおよんでいることが想定され、当初からその残存状況は不良であると考えられた。そこでもっとも削平が少ない南縁に沿って、10本のトレンチを入れ土層の観察を行った。縄文時代早期を主とした遺物が出土し、鶉ヲネ遺跡のⅢ層に対比される黒褐色土も認められたが、きわめて部分的で、削平による攪乱が広い範囲におよぶことが判明した。そこで面的調査は不要と考え、トレンチ設定図と土層柱状図を作成して調査を終了した。

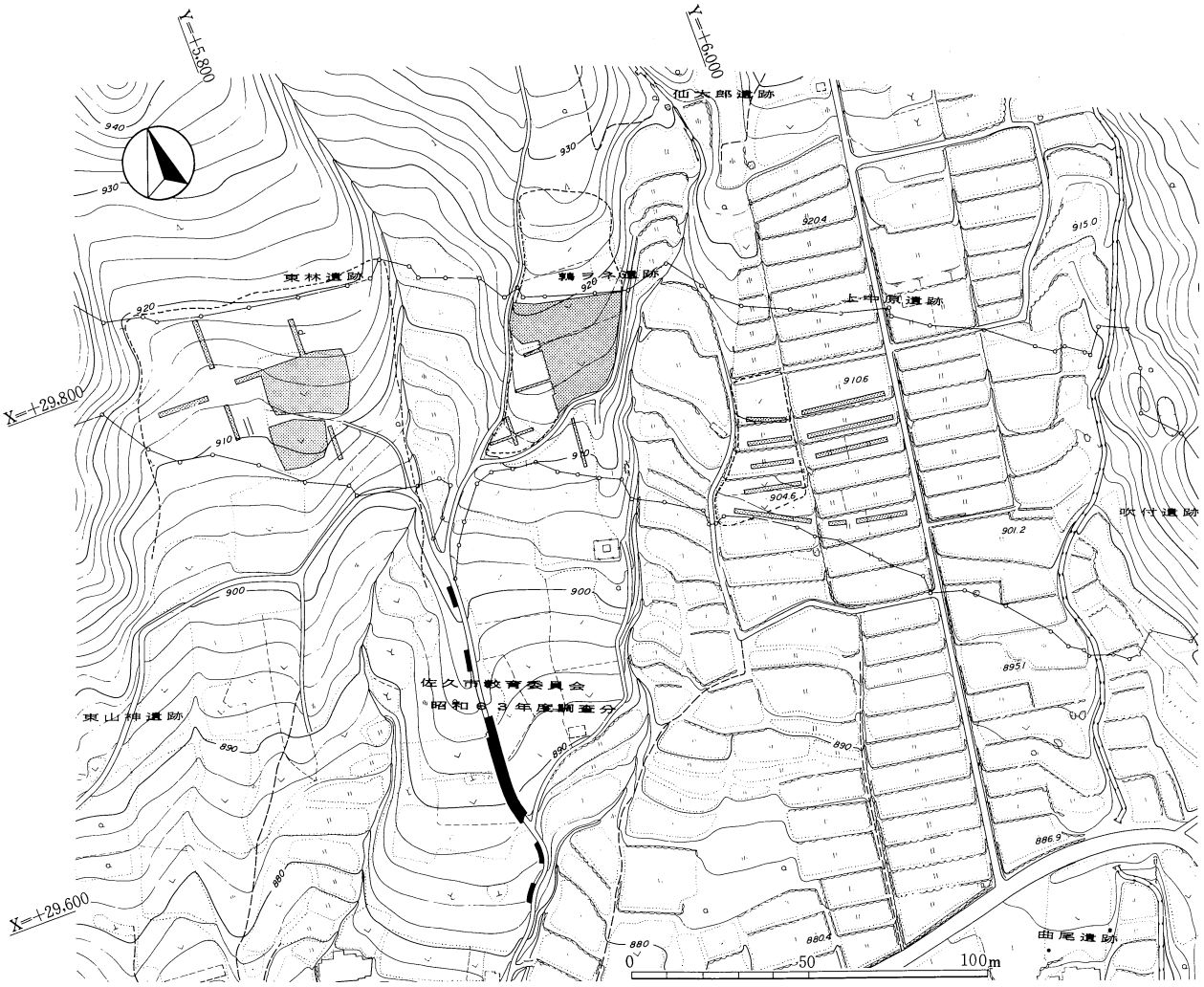


図1　地形および調査範囲（1：2000）

調査日誌抄

昭和63年度

６月９日　鶉ヲネ遺跡から重機を搬入しトレンチを入れる。
６月14日　トレンチ内精査。攪乱土より剝片石器など採集。
６月20日　土層柱状図の作成・写真撮影。
６月21日　既設引照点から三角測量を行い設定図を作成。
　　本日で調査終了。

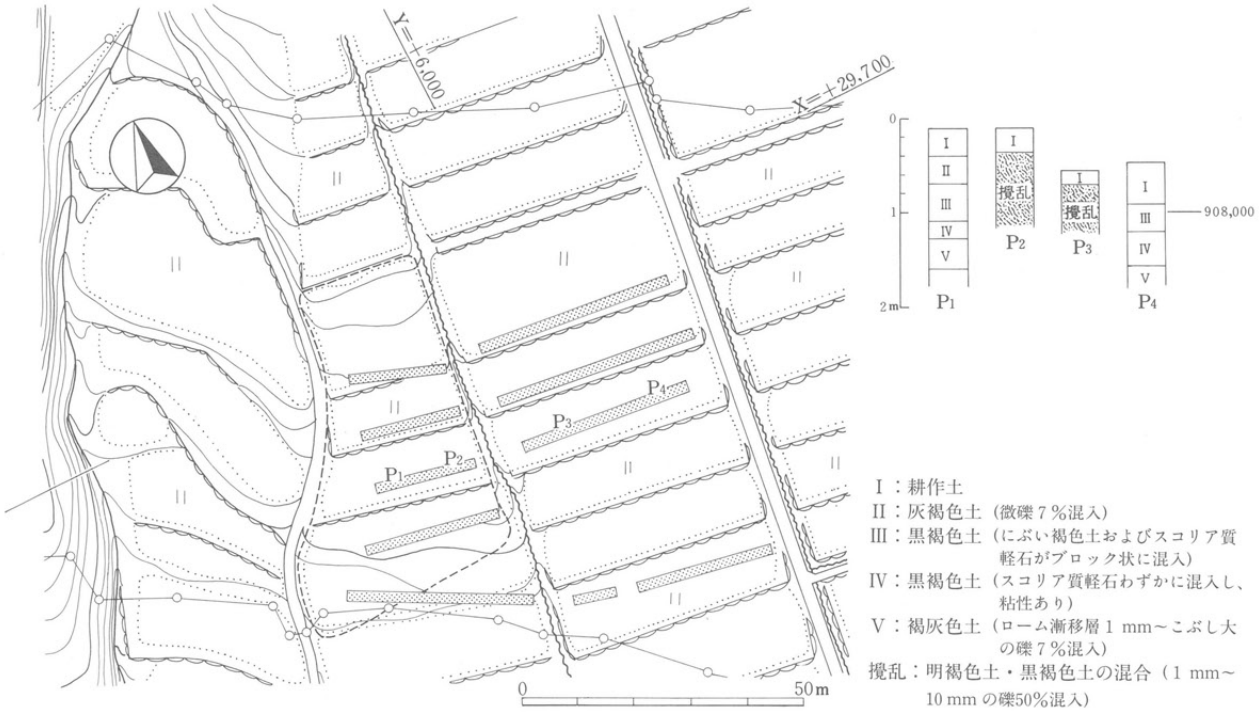


図２　トレンチ設定・土層柱状図

３　遺構外出土遺物

縄文土器４片は微小破片で図化しえなかったが、早期末葉および中期後葉の土器とみられる。また、石器は緻密な安山岩製の剝片石器（1）のみで、厚手の素材に片面調整を施し刃部を作出したものである。

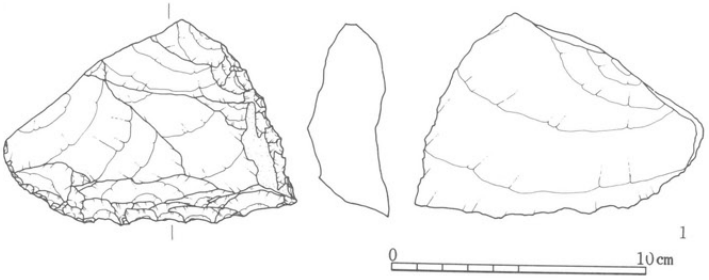


図３　遺構外出土遺物

４　まとめ

造成前の地形は、幅広な尾根部であったようだ。北側には縄文時代の遺物が表採される仙太郎遺跡や鶉ヲネ北遺跡が所在する。本遺跡は単に遺物散布地でなく、縄文時代の生活域であったことも十分に考えられるが、今となってはそれを検証する術はない。

第4節　鶉（うずら）ヲネ遺跡

1　遺跡の概観

鶉ヲネ遺跡は、佐久市の東方、八風山から閼伽流山に連なる山系より南方に伸びる尾根上に位置する。香坂川の右岸に続く、幅50ｍほどの狭小な南向き斜面は畑地として利用されており、佐久市教育委員会および長野県教育委員会の分布調査により、縄文時代の遺物散布地とされた遺跡である。小さな谷を隔てて東側に上中原遺跡（第３節所収）、西側に東林遺跡（第５節所収）が所在し、また北側の尾根上部には仙太郎遺跡や鶉ヲネ北遺跡が知られている。今回の調査に先立ち、尾根沿いの200ｍほど南下方で佐久市教育委員会などの調査が行われ、縄文時代中期末葉から後期初頭にかけての住居址５軒・土坑２基が検出された。

2　調査の経過と概要

調査対象区域は本遺跡の北端部にあたり、面積は2,400ｍ²ほどである。地籍は佐久市大字香坂字鶉ヲネ611番地ほかで、標高は915～925ｍをはかり、眺望は良いものの風が厳しい一帯である。

調査研究員４名で、既設三角点より引照して標高を設定するなどの準備ののち、４月18日から６月22日までの実質40日ほど発掘調査を行った。発掘作業員22名の協力のもと、まず遺跡の概況をつかむ目的で、直交する幅１ｍのトレンチを開けた。対象区域は、戦後開墾され畑地として利用されてきたところで、原地形を留めるのは中央部分のみであった。そこで、重機による表土の剝ぎ取り後、全面を手掘りにより調査することとし、さらに、開墾時に巨礫を廃棄した場所である西側の尾根縁までトレンチを延長した。

面的な調査の結果、土坑８基を検出したほか、中央部の旧谷部に堆積した黒褐色土層中より縄文時代の土器片、黒褐色土層下のローム漸移層中より緻密な安山岩製の石器などが認められた。遺物の取り上げは、８ｍグリッドごとに行った。なお、グリッドの設定は第１章第３節に示した従来の方法に依っている。また部分的であるが、坪掘り状にローム層中の精査を行ったが、石片などは認められなかった。

調査日誌抄

昭和63年度
- ４月18日　調査開始。テントの設営と周辺の整備。
- ４月19日　雨の中で草刈り。テントの補修。
- ４月21日　人力によるトレンチ掘り、総勢14名。
- ４月25日　杭打ち開始。
- ４月１日　本格的な整理作業の再開。
- ４月27日　中央部の面的掘り下げ。テントの移動。
- ４月30日　測量基準点設定報告書の作成。
- ５月６日　重機による表土剝ぎ。遺構の検出開始。
- ５月９日　４号土坑の検出。Ⅲ層の遺物取り上げ。
- ５月12日　トレンチ土層図の作成。
- ５月17日　礫出土状況の写真撮影。Ⅲ層調査継続。
- ５月23日　雨のため午前で作業中止。図面の整理。
- ５月24日　航空撮影の実施。土坑の掘り下げ開始。
- ５月27日　平面図・断面図の作成。完掘写真撮影。
- ５月30日　Ⅲ層下部中島武一氏有舌尖頭器を検出。
- ６月６日　１号～８号土坑の調査終了。
- ６月８日　Ⅳ層掘り下げ開始。安山岩質石片検出。
- ６月13日　遺物の取り上げ。Ⅳ層の地形測量。
- ６月17日　Ⅴ層の坪掘り開始。遺物確認できず。
- ６月22日　土層柱状図の作成。調査終了。
- 11月１日～平成元年３月31日　整理作業開始。
  （図面の確認および修正　遺物注記）

平成元年度
- ４月１日　本格的な整理作業の再開。

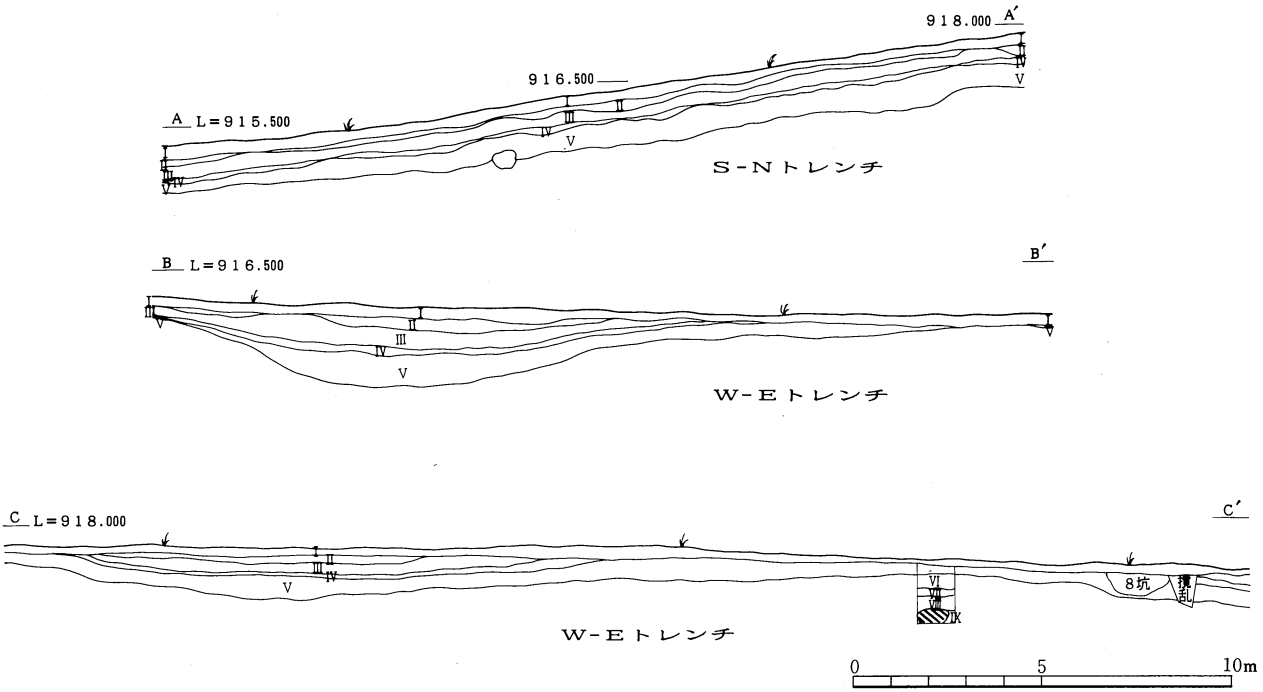


図1　基本土層

3　基本土層

調査区域の東側は、後世に削平されているため表土下ローム土であり、また西側も同様である。右に示した層序は、中央部の旧谷状地形の土層であり、それは主として流れ込みなどの二次的な堆積によるものと考える。Ⅲ層下部より縄文時代早期の押型文土器や有舌尖頭器、Ⅳ層中より特徴的なスクレイパーなどが出土したことなどから、この二次堆積による成層は、縄文時代草創期～早期にかけてなされた可能性が高い。

Ⅰ層：耕作土（暗褐色を呈する）
Ⅱ層：暗褐色土（5 mmほどの微礫やスコリア質軽石10%含む、植物質の混入により部分的に黒褐色を呈する）
Ⅲ層：黒褐色土（10 mmの軽石粒やスコリア質軽石わずか含む、褐色微粒砂ブロック状に混入、崩落礫・早期の遺物含む）
Ⅳ層：乳灰～薄い黄色なローム漸移層（軽石粒やスコリア質軽石10%含む）
Ⅴ層：（上部）微粒なローム土（スコリア質軽石集中）
（下部）淘汰良ローム土
Ⅵ層：黄褐色ローム（5 mm軽石粒10%含む）
Ⅶ層：黄褐色シルトローム
Ⅷ層：黄褐色シルトローム（2 mm軽石粒わずか含む）
Ⅸ層：黄褐色シルトローム（2～5 mm軽石粒10%含む、径10～50 cm巨円礫を混入）

4　遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構は土坑8基で、谷状地形の肩部を中心に分布する。時期を判断しうるものは、縄文時代早期後葉の4号土坑のみであるが、覆土からして、ほか6基も縄文時代の所産と考えられる。また出土遺物は、縄文時代早期前葉～後期前葉までの土器片や早期を主とした石器で、そのほか平安時代の武蔵型甕15片や中世の内耳土器10片などが出土したが、図化しえるものはなかった。

(1)　縄文時代の遺構と遺物

ア　土坑

1号土坑（図4）

Ⅰ C—23グリッドに位置し、Ⅲ層下部で検出した。長軸140 cm・短軸100 cmほどの楕円形を呈し、深さは20 cmをはかる。壁は概して緩やかに立ち上がるが北東側は直であり、底面は固くしまっている。覆土は二層に分けられ、ともにⅢ層を基調とした黒褐色土であり、1層にはスコリア質軽石の混入度が高い。出土遺物は皆無であった。

2号土坑（図4）

Ⅰ C—23グリッドに位置し、Ⅲ層下部で検出した。長軸130 cm・短軸70 cm ほどの楕円形を呈し、深さ20 cm をはかる。壁は緩やかに立ち上がり、底面は中央部でややくぼんでいる。覆土はⅢ層を基調とした黒褐色土である。出土遺物は皆無であった。

3号土坑（図4）

Ⅰ C—23グリッドに位置し、Ⅲ層下部で検出した。長軸110 cm・短軸80 cm ほどの楕円形を呈し、深さは15 cm をはかる。壁は緩やかに立ち上がり、底面は中央部でややくぼんでいる。覆土はⅢ層を基調とした暗褐色土で、下部から黒曜石片が出土した。1号・2号土坑と同時期の所産と考えられる。

4号土坑（図3、PL51）

Ⅰ H—02グリッドに位置し、南側をわずか土層観察用トレンチに切られる。Ⅳ層上面で検出されたが、掘り込みはⅢ層中とも考えられる。径200 cm ほどの円形を呈し、深さ40 cm をはかり、小竪穴状遺構ともいえるものである。壁は緩やかに立ち上がり、平坦な底面である。覆土は二層に分けられ、ともにⅢ層を基調とした暗褐色土である。

底面から多くの土器片が出土し、1は口縁下に刺突文をめぐらすと思われるもので、口唇部にはキザミ

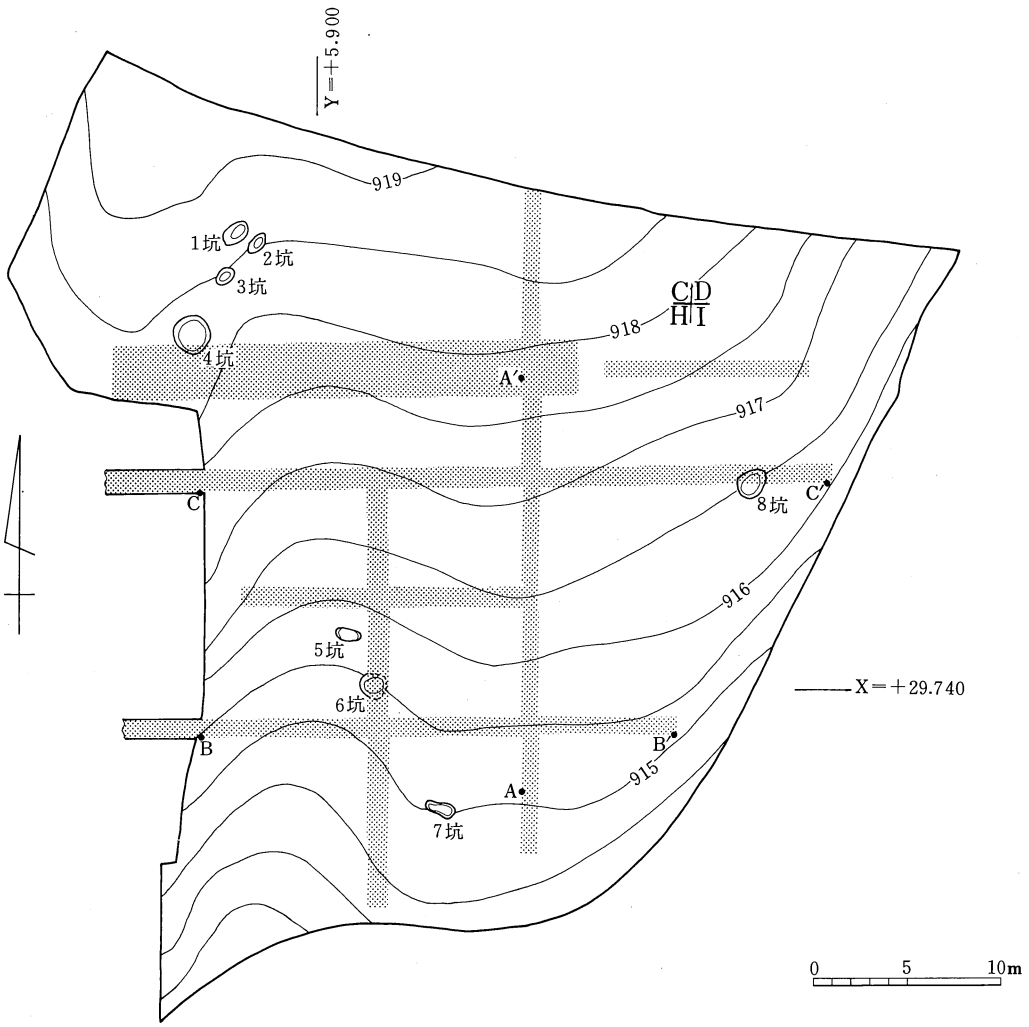


図2　トレンチ設定・遺構分布・Ⅳ層コンタ（1：400）

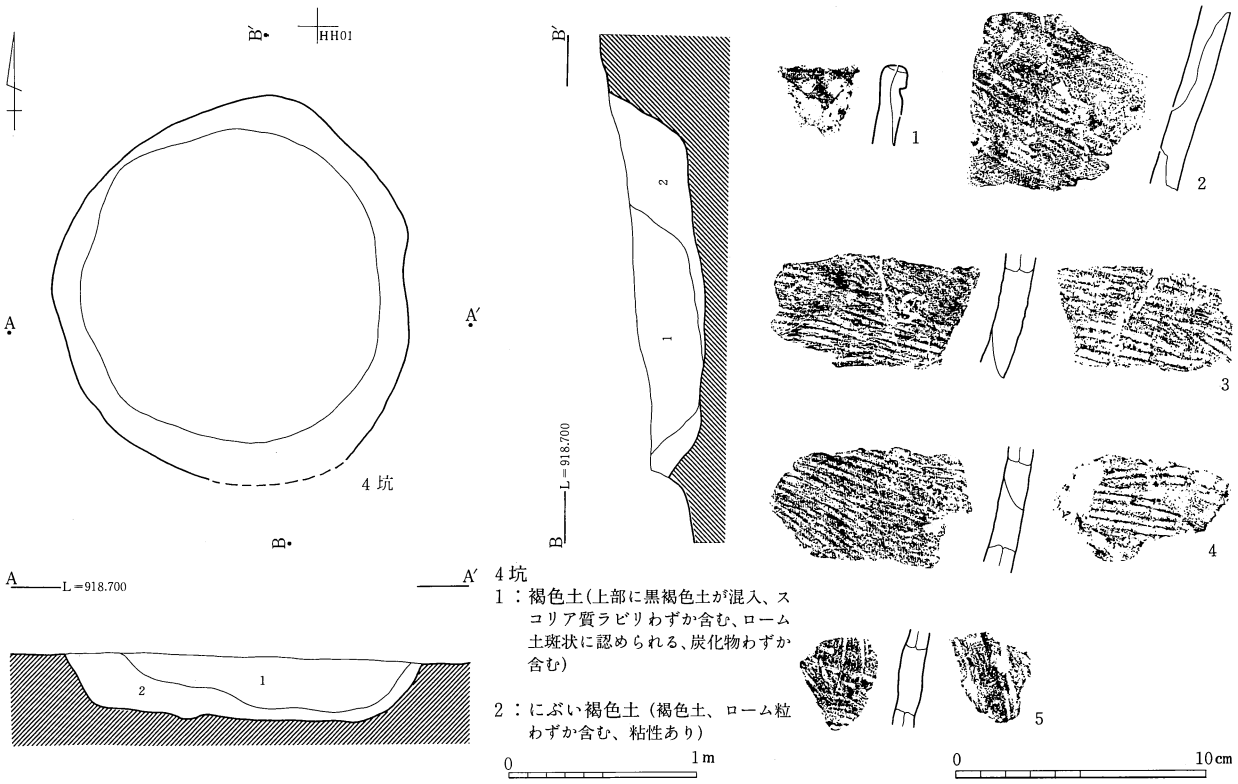


図3　4号土坑

が加えられる。裏面が剝落しており、器圧・調整などは不明であるが、表面にはわずかに条痕も観察されている。胎土に植物繊維・粗砂・小石などを多く含む。2～5は表裏に条痕をとどめた胴部破片。1を含め、2～4は同一個体とみられる。1の土器から、これらは早期後葉・貝殻条痕文系土器の中でも茅山下層式の新しい段階～茅山上層式にかけての所産と考えられる。なお、石器は出土しなかった。

出土土器より、本土坑は縄文時代早期後葉のものと判断され、また生活遺構としての可能性を残す。

5号土坑（図4）

Ⅰ H—13グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出した。長軸100 cm・短軸60 cmほどの楕円形を呈し、深さ15 cmほどである。覆土がⅢ層を基調とした暗褐色土で検出が難しかったが、掘り込みはⅢ層中と考えられる。なお、出土遺物は皆無であった。

6号土坑（図4）

Ⅰ H—13グリッドに位置する。土層観察用トレンチにかかっていたが、ベルトを除去したⅤ層上面で検出され、掘り込み面の観察ができなかった。径140 cmほどの円形を呈すると思われ、深さは40 cmをはかる。覆土は二層に分けられ、1層はⅢ層を基調とした暗褐色土であり、2層はⅣ層に対比されうるが、地山の可能性もある。なお、出土遺物は皆無であった。

8号土坑（図5）

Ⅰ I—06グリッドに位置する。調査区域の東端、耕土下Ⅳ層上面で検出され、掘り込み面は不明である。中央部は土層観察用トレンチにより切られているが、径150 cmほどの円形を呈し、深さ40 cmをはかる。西側部は水道管の埋設によって不明確なものの、壁は緩やかに立ち上がる。覆土はⅢ層を基調とした単一層で、スコリア質軽石をやや多く含む暗褐色土である。なお、出土遺物は皆無であった。

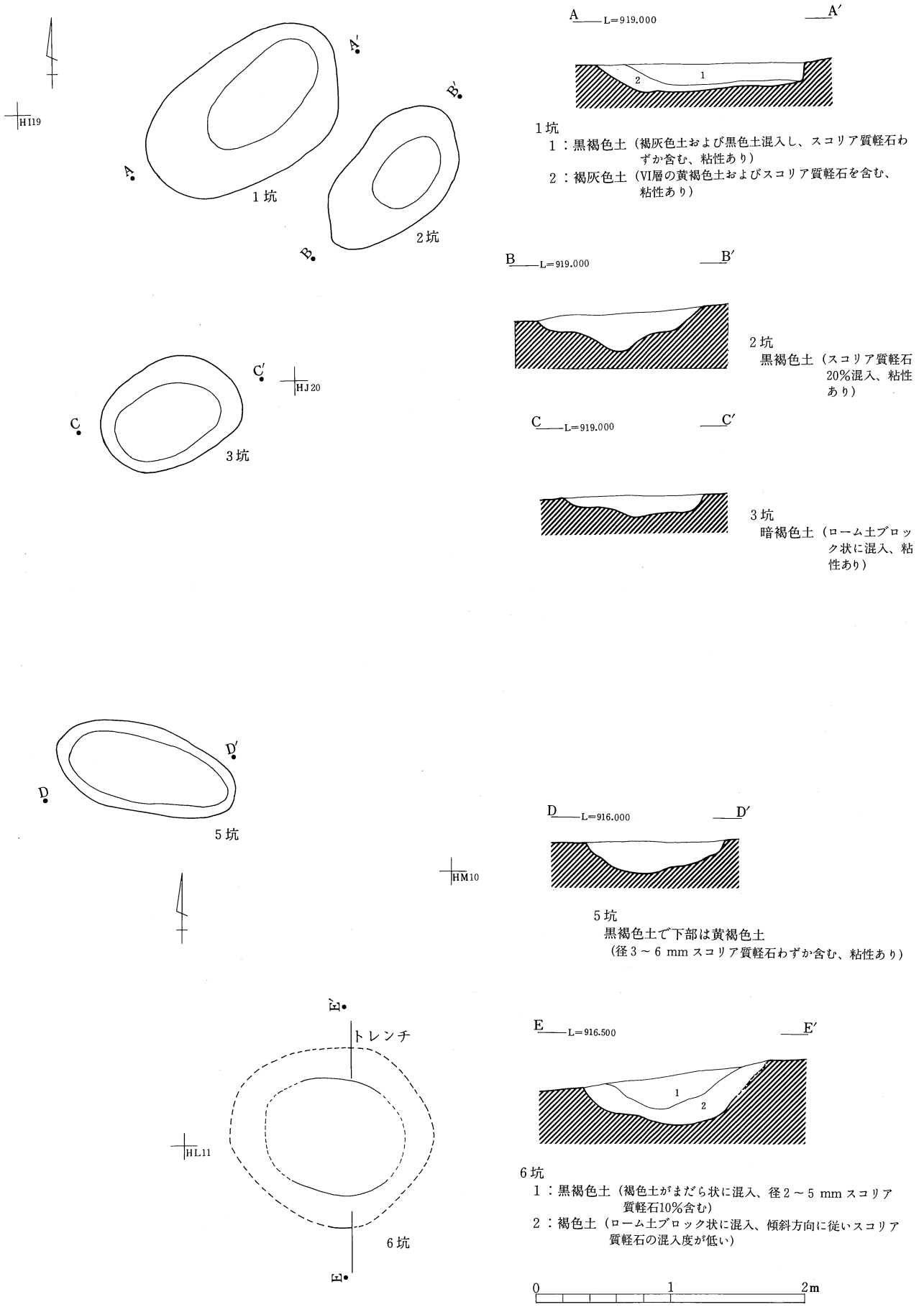

A
L=919.000
A′
1
2
1坑
1：黒褐色土（褐灰色土および黒色土混入し、スコリア質軽石わずか含む、粘性あり）
2：褐灰色土（VI層の黄褐色土およびスコリア質軽石を含む、粘性あり）
HI19
A′
A
1坑
B′
B
2坑
B
L=919.000
B′
2坑
黒褐色土（スコリア質軽石20%混入、粘性あり）
C′
HJ20
C
3坑
C
L=919.000
C′
3坑
暗褐色土（ローム土ブロック状に混入、粘性あり）
D′
D
5坑
D
L=916.000
D′
HM10
5坑
黒褐色土で下部は黄褐色土
（径3～6 mmスコリア質軽石わずか含む、粘性あり）
E′
トレンチ
HL11
6坑
E
E
L=916.500
E′
1
2
6坑
1：黒褐色土（褐色土がまだら状に混入、径2～5 mmスコリア質軽石10%含む）
2：褐色土（ローム土ブロック状に混入、傾斜方向に従いスコリア質軽石の混入度が低い）
0
1
2m

図4　土坑（1）

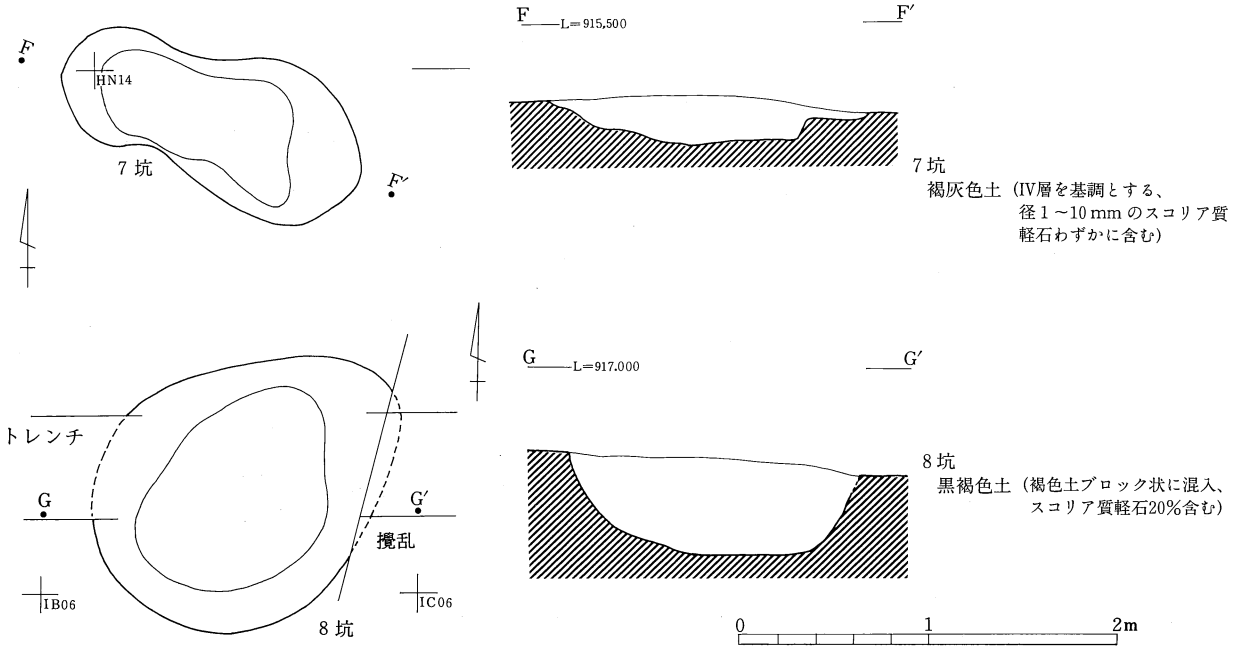


図５　土坑（２）

イ　遺構外出土遺物

土器（図６、PL51）

総数110片余りの土器が遺構外より出土した。時期的には早期前葉～後期前葉までを含んでいる。小破片のため図化できない資料が多いものの、採拓しえたものについて以下概略を述べる。

６～９は早期前葉の押型文系土器であり、図示したものが出土したすべてである。６・７は山形押型文、８は格子目押型文がそれぞれ施される。９は不明瞭ながら縄文施文が認められる。８・９は胎土に石英・長石などを多く含む。

10～14は早期前葉末の無文土器と考えられるものである。10・11はともに口端が折り返し状をなす平縁の口縁部破片。ほかは同類の胴部破片。胎土に粗砂及び雲母などを多く含むものの、全体に硬質なつくりである。

15～29は早期後葉・貝殻条痕文系土器に比定される一群であり、本遺跡出土土器の中心的な位置を占めている。15は口唇に棒状工具によるキザミが加えられた口縁部破片。２本１組の沈線により格子目状の文様が施される。16は半載竹管による連続刺突文が施されるものであるが、小破片のため全体の文様構成については不明である。17～19は「段」を有する頸部破片であり、屈折部に刺突ないしキザミ目をめぐらす。18・19は裏面に条痕をとどめる。20は沈線と連続刺突文との組み合わせにより曲線的なモチーフを構成する。21･22は縄文が施文されるもの、23～28は表裏に条痕をとどめたもの。29は底径４ cm をはかる底部破片であり、表面は縦位方向のていねいな器面調整が行われている。それらは総じて胎土に植物繊維を含むほか、粗砂・石英・長石などが混入されるものが多い。全体的な特徴から、貝殻条痕文系、鵜ガ島台式の最も新しい段階から茅山下層式にかけての所産と考えられる。

30は羽状縄文の施された平縁の口縁部破片。口縁下が若干肥厚し、口端は尖頭状に細まる。施文原体はＬＲ縄文。胎土に植物繊維とともに砂粒・褐色粒子などを多く含む。前期初頭の土器であろう。図示した１点のみの出土である。

31～33は中期後葉・加曽利ＥⅢ式～同Ⅳ式土器に比定される。図示した３点がすべてである。

34～39は後期前葉の土器。35・36は甕形土器の口縁部破片とみられるもの。37・38は棒状工具によるキザミが加えられた隆帯を伴う。39は球胴状の肩部に現存４条の刺突文列をめぐらす。34～38は堀之内式に

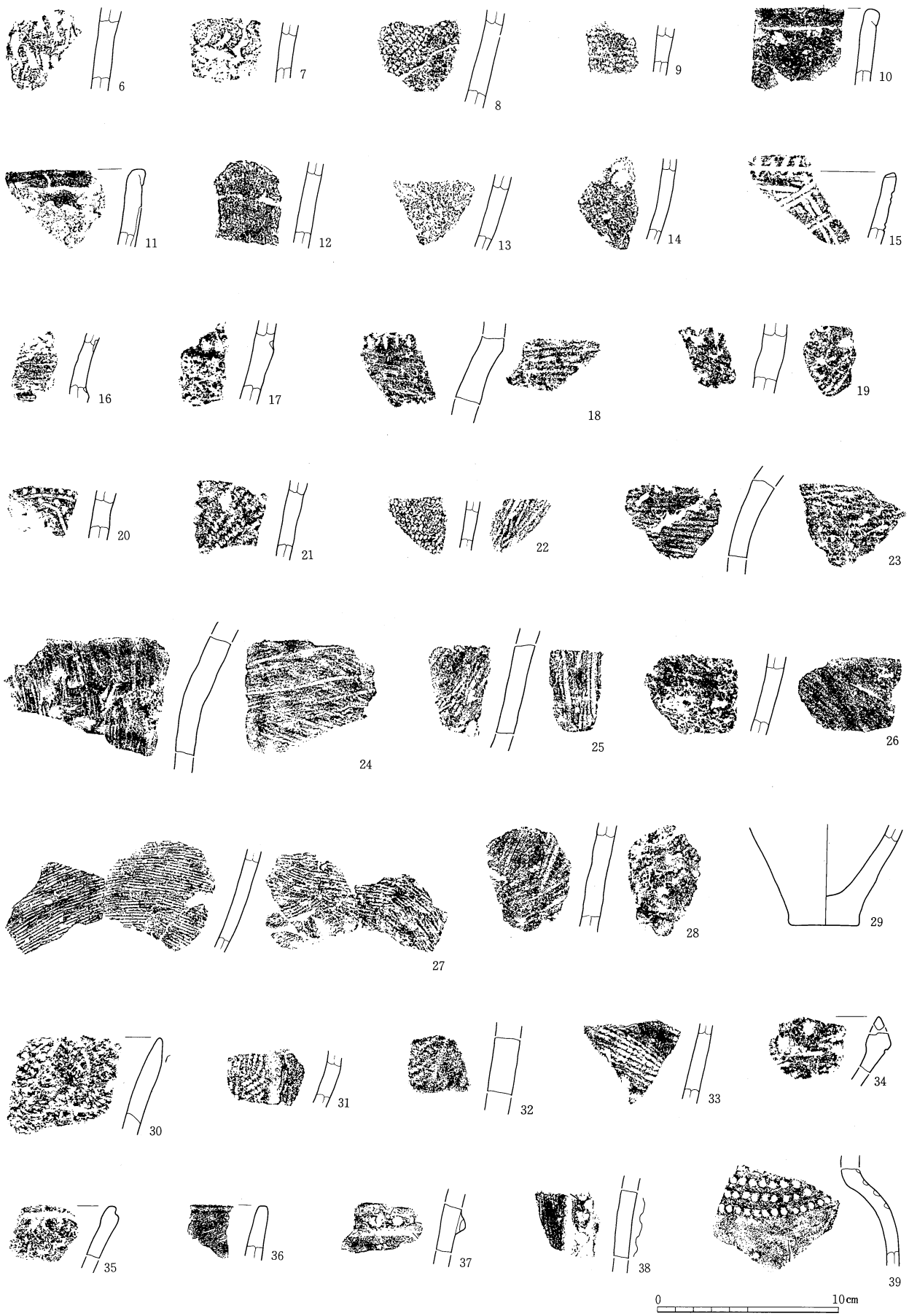

6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
0
10cm

図6　遺構外出土遺物（1）

比定されようが、39については疑問を残す。

このほか、図示しえなかったが、前期前葉、有尾式に伴うと考えられる縄文施文の土器が数片出土している。

石器（図7・8、PL52）

形態的特徴から縄文時代早期に時期指標されるものが多い。

有舌尖頭器（1）は黒曜石製で、表裏とも緻密な押圧剥離調整により整形され、先端部と舌部を欠損する。石鏃（2～5）は、黒曜石製の無茎凹基鏃4点で、すべて図化した。2は鏃身が長めで、基部を逆V字状に抉る。両側辺部は直状で、鋭い先端部を作出する。3は幅広な貝殻状剥離痕が被い、両脚を欠損するが、いわゆる鍬形鏃と思われる。4は背面に自然面、腹面に第一次剥離面を有し、剥片素材の性状を良く残すもので、急角度の片面調整のみで整形する。5は薄い剥片を素材とし、縁辺部に簡便な調整を施す。

スクレイパー（6～10）は5点出土した。6は粘板岩の剥片を素材とし、直状な刃部を作出する。7は粘板岩製で、片面調整により急角度の刃部を作出する。8・9は緻密な安山岩製で、両面調整を特徴としたエンドスクレイパーやサイドスクレイパーである。10は黒曜石製で、原材は板状礫と思われる。ピエス・エスキーユ（11～14）は4点出土し、すべて図化した。11は粘板岩製で、直交する二対の刃部を有する。12～14

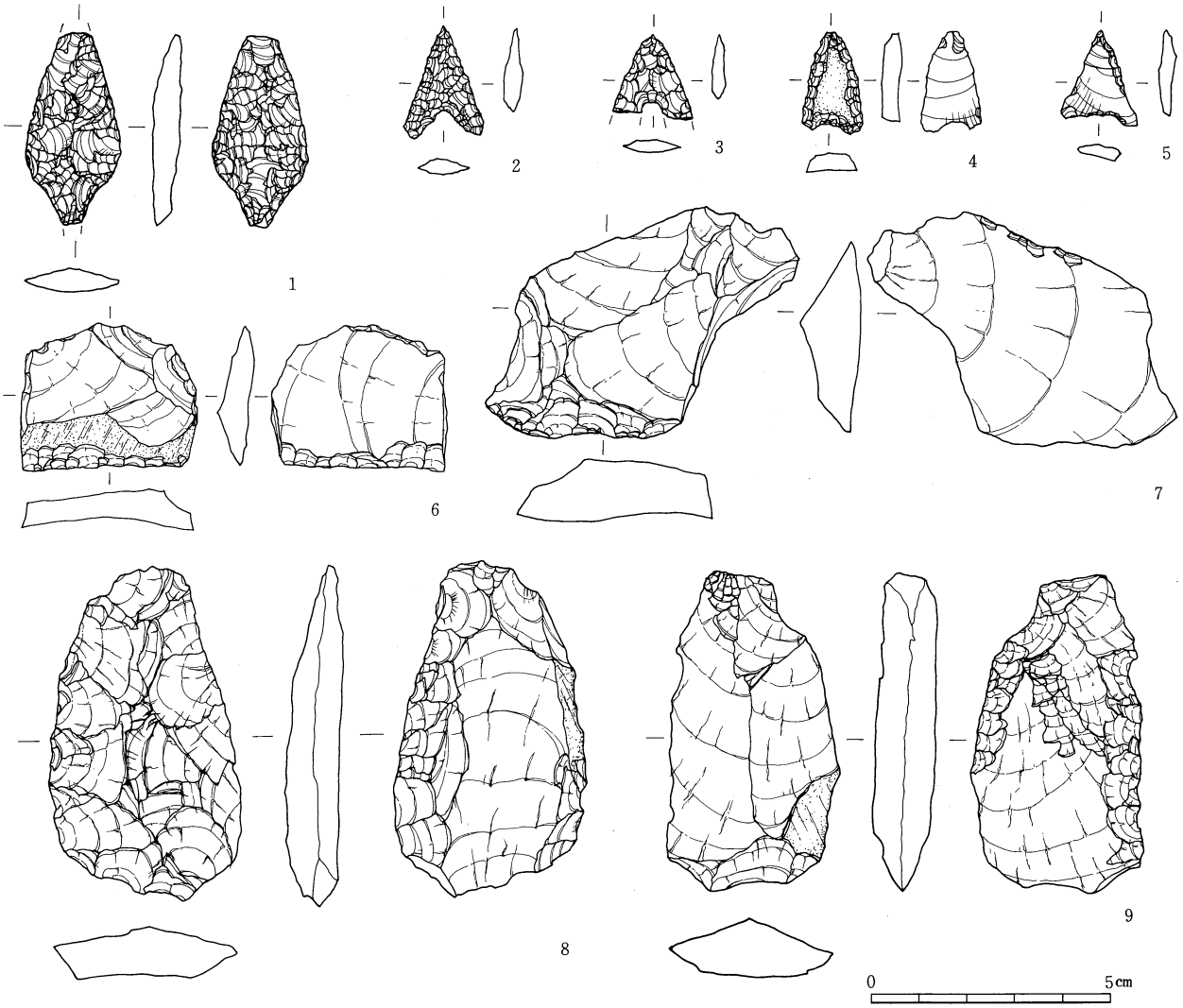
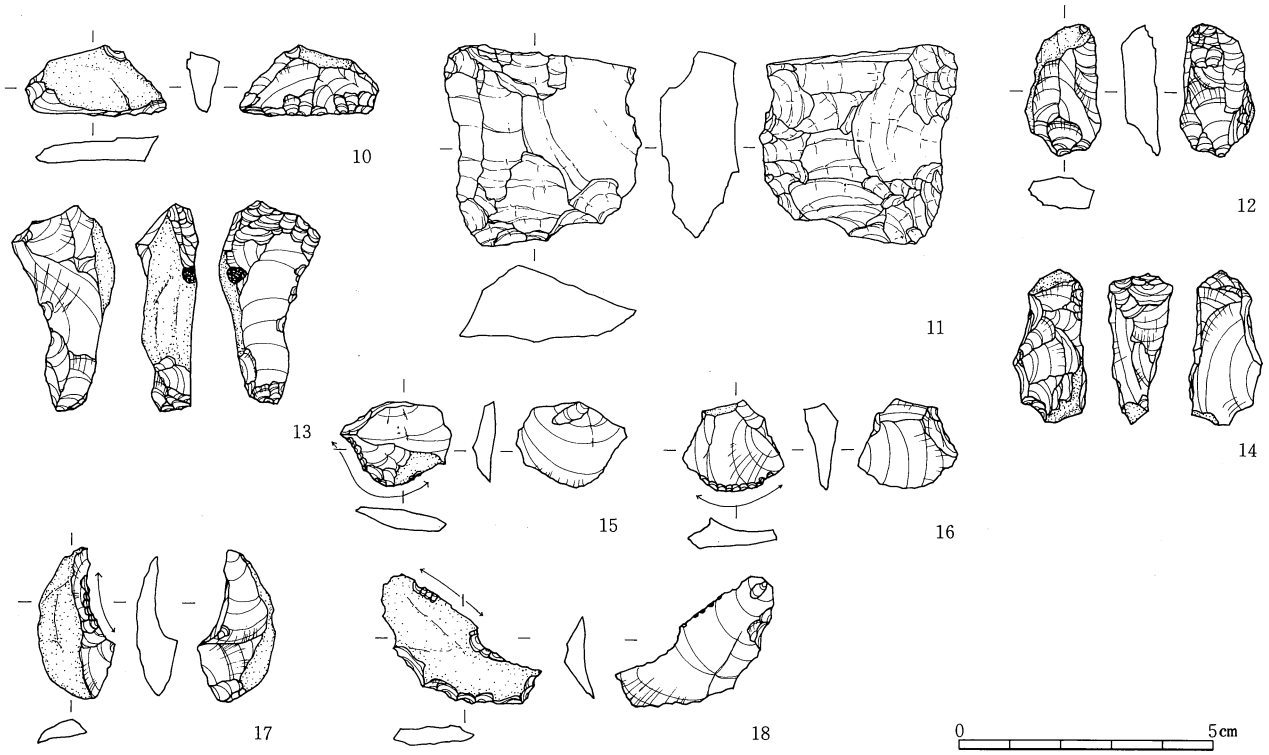


図7　遺構外出土遺物（2）



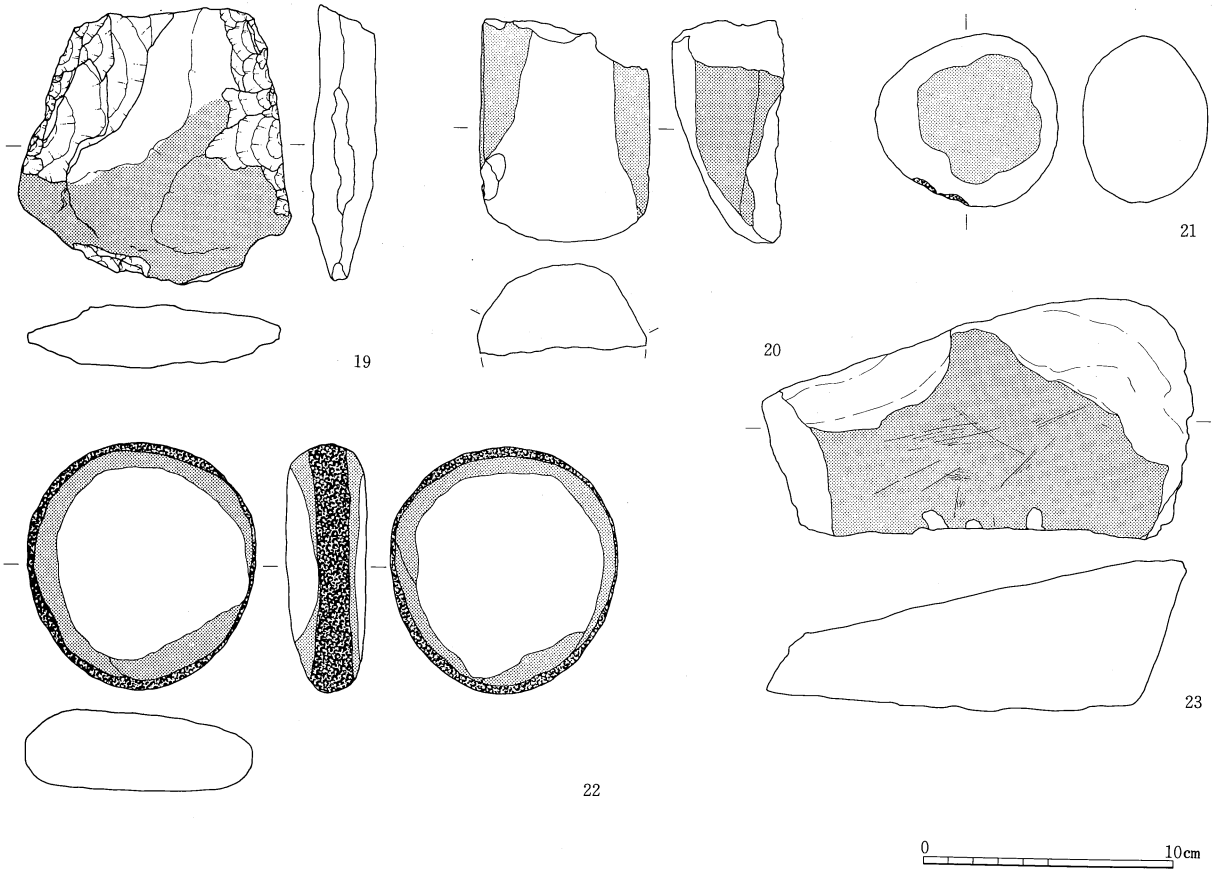


図８　遺構外出土遺物（３）

は黒曜石製で縦長の形状を呈し、14の下端部には、特有な剝離痕は認められない。

小剝離痕を有する剝片(15～18)は４点出土し、すべて黒曜石製である。15～17は大きさが揃った剝離痕が規則的に並び、18は不揃いな剝離痕である。

打製石斧 (19) は板状節理安山岩の剝片を用いた撥形である。刃部は著しく磨耗する。

磨石(20～22)は安山岩製である。20は特殊磨石で、機能面に対して横方向に欠損する。21は径７ cm のほぼ球体状で、一部に敲打痕がある。22は円盤状で、整形痕と思われる敲打痕が外周部に認められる。

砥石 (23) は安山岩製である。作業面には交差する線状痕が認められる。

(2)　時期不明の遺構

７号土坑

Ⅰ H―19グリッドに位置し、Ⅴ層上面で検出された。長軸160 cm・短軸80 cm のひょうたん形を呈し、深さ20 cm をはかる。壁はだらだらと立ち上がり、覆土はⅣ層に近い単一層である。明確な掘り方が認められず、地山自体の落ち込みの可能性がある。

5　まとめ

調査区域中央部の谷部に黒褐色土が堆積して現地形が形成されたのは、主として縄文時代草創期～早期にかけてである。前記したとおり、それはⅣ・Ⅲ層中より出土した土器や石器から判断されるが、特にⅢ層の成層は流れ込みによる二次堆積であって、文化層として捉えることには問題がある。しかし、この旧谷状地形の肩部に分布する土坑のうち、縄文時代早期後葉の所産である４号土坑が注目される。まず、近隣の南佐久郡後平遺跡の土坑群のうちのいくつかを参考にすると、おもに貝殻条痕文系土器が出土した円形のもので、大きさや深さが類似する。ただし残念なことに、性格などについて明らかにされていない。

こうした曖昧な位置づけを避け、本遺跡の４号土坑について積極的な提示をしたい。径２ m ほどの小竪穴状遺構ともいうべきもので、内部施設や焼土址を伴わないが、居住遺構としての性格づけも十分可能であり、簡易的で野天小屋に近いものが想定される。検証可能な条件は少ないものの、この場が移動を伴った季節サイクルの中でのキャンプサイト的な場であったことなども考えられる。また、500 m ほど東方の木戸平Ａ遺跡（第１節所収）や吹付遺跡（第２節所収）では、湧水池の周辺に、本土坑とほぼ同時期の「陥し穴」群が検出されており、動物性食料の獲得という面からの関連も考えられる。

参考文献

後藤　守一　1956「衣・食・住」『日本考古学講座３縄文文化』
佐久市教育委員会ほか　1988『鶉ヲネ』
佐久町教育委員会　1985『後平遺跡』
長野県埋蔵文化財センター　1987『中央自動車道長野線発掘調査報告書１』
　1988『中央自動車道長野線発掘調査報告書２』
長野県教育委員会　1988『長野県史考古資料編第一巻(二)主要遺跡（北・東信）』

第5節　東林（ひがしばやし）遺跡

1　遺跡の概観

東林遺跡は、佐久市の東方、八風山から閼伽流山に連なる山系より南方に伸びる急峻な尾根端部の谷中斜面に位置する。この南向き斜面は、畑地として利用されており、長野県教育委員会などの分布調査により、縄文時代および平安時代の遺物散布地とされた遺跡である。小さな谷を隔てて東側に鶉ヲネ遺跡(第4節所収)、南下方に東山神遺跡が所在する。

2　調査の経過と概要

調査対象区域は本遺跡の北半にあたり、面積は7,900 m²ほどである。地籍は佐久市大字香坂字東山神946番地を中心とした一帯である。標高は905～920 m をはかる。日当たりが良い緩斜面という地形的な景観から、多くの遺構・遺物の検出が予想された。立木の伐採と搬出を待ち、5月9日から調査を開始した。鶉ヲネ遺跡と同時並行した調査で、まず調査研究員3名が、放置された灌木の処理とトレンチ設定などの準備を行った。

重機によるトレンチ掘りを延べ170 m にわたって行い、土層の観察を行った結果、尾根際の西半分は傾斜のきつい谷状地形で、崩落土や巨礫の二次堆積が認められた。また集水する場所で遺物なども出土しなかった。そこで調査の主眼を東半分に置き、面的な掘り下げに入った。地表面から30 cm ほどでローム土に達し

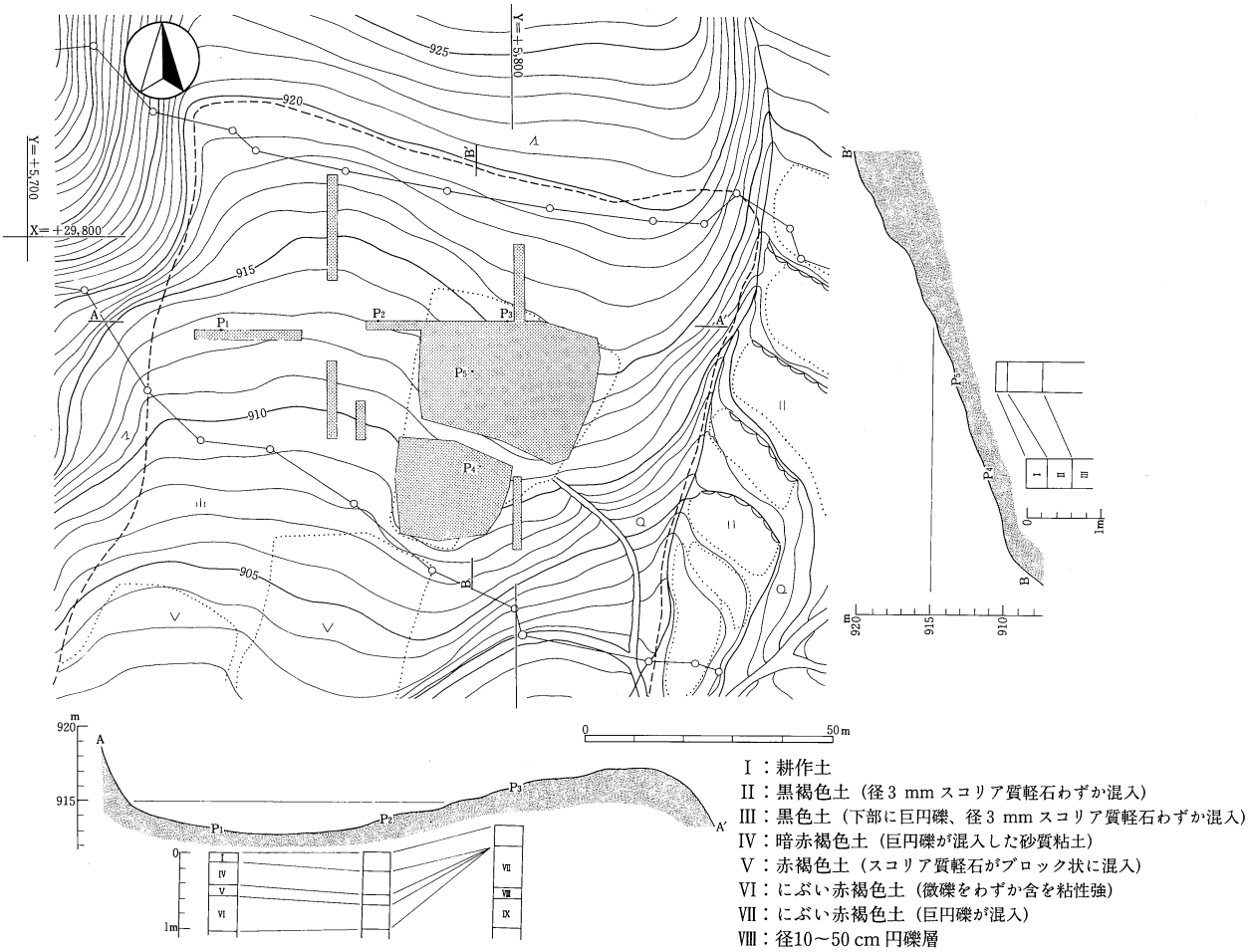


図1　調査範囲および土層柱状図

た。ほぼ全面にわたって後世の耕作による削平を受けており、当初の予想にたがうこととなった。検出された遺構はなく、遺物もわずかであった。土層の柱状図などを作成して、調査を終了した。

調査日誌抄

昭和63年度

５月９日　重機と人力で伐採木の除去。足の踏み場がない。
５月11日　トレンチ内を精査。土層の観察。
５月24日　快晴の中で航空撮影。
５月27日　杭打ちとトラバース測量。
６月７日　東半分の表土剝ぎ検出を行うが遺構認められず。
６月13日　ローム下にトレンチを入れ土層柱状図を作成。
６月20日　土層の写真撮影。調査終了。

３　遺構外出土遺物

縄文土器２片、打製石斧１点が出土したにすぎない。縄文土器は小破片であり図化しえなかった。うち１点は早期後葉の貝殻条痕文系土器であった。

打製石斧（1）は、厚手の安山岩剝片を素材とした短冊型に近い形態で、刃部は片面のみ磨耗する。

また、中世の内耳土器１片が出土した。

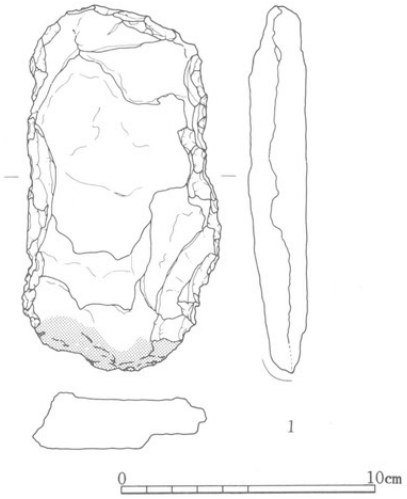


図２　遺構外出土遺物

４　まとめ

西側部分は地形的な要因と水などの影響から、生活を営むに適さない場所であったと考えられる。また削平されていることを考慮しても、東側部分はローム土に達するまでの掘り込みが認められず、地形的にはプラスの要因があったにしろ、利用面からの空白部分であったと考えられる。なお、未調査分の南下方部に生活域が展開する可能性は十分にある。

第6節　西林（にしばやし）遺跡

1　遺跡の概観

西林遺跡は、佐久市大字香坂字裏林1054番地を中心とした一帯に所在する。上信越自動車道建設に伴う踏査によって、新たに確認された遺跡である。八風山山系南側、香坂川右岸の南面する谷地形内に占地しており、南北約300 m、東西約30～60 m の谷のほぼ全域が遺跡範囲となっている。標高は890～915 m をはかる。現在は一面畑地として利用されているものの、大きな地形変化はない。

西側の尾根に沿って、幅１ m 前後の小さな沢が流れているが、そのすぐ下流域の宅地部分を中心とした範囲には裏林遺跡が存在する。遺跡範囲が明確におさえられておらず、本遺跡が裏林遺跡の一部に相当する可能性も考えられる。また、尾根を挟んで東側の谷には本報告書所収の東林遺跡、西側の谷には同様の干草場遺跡がある。

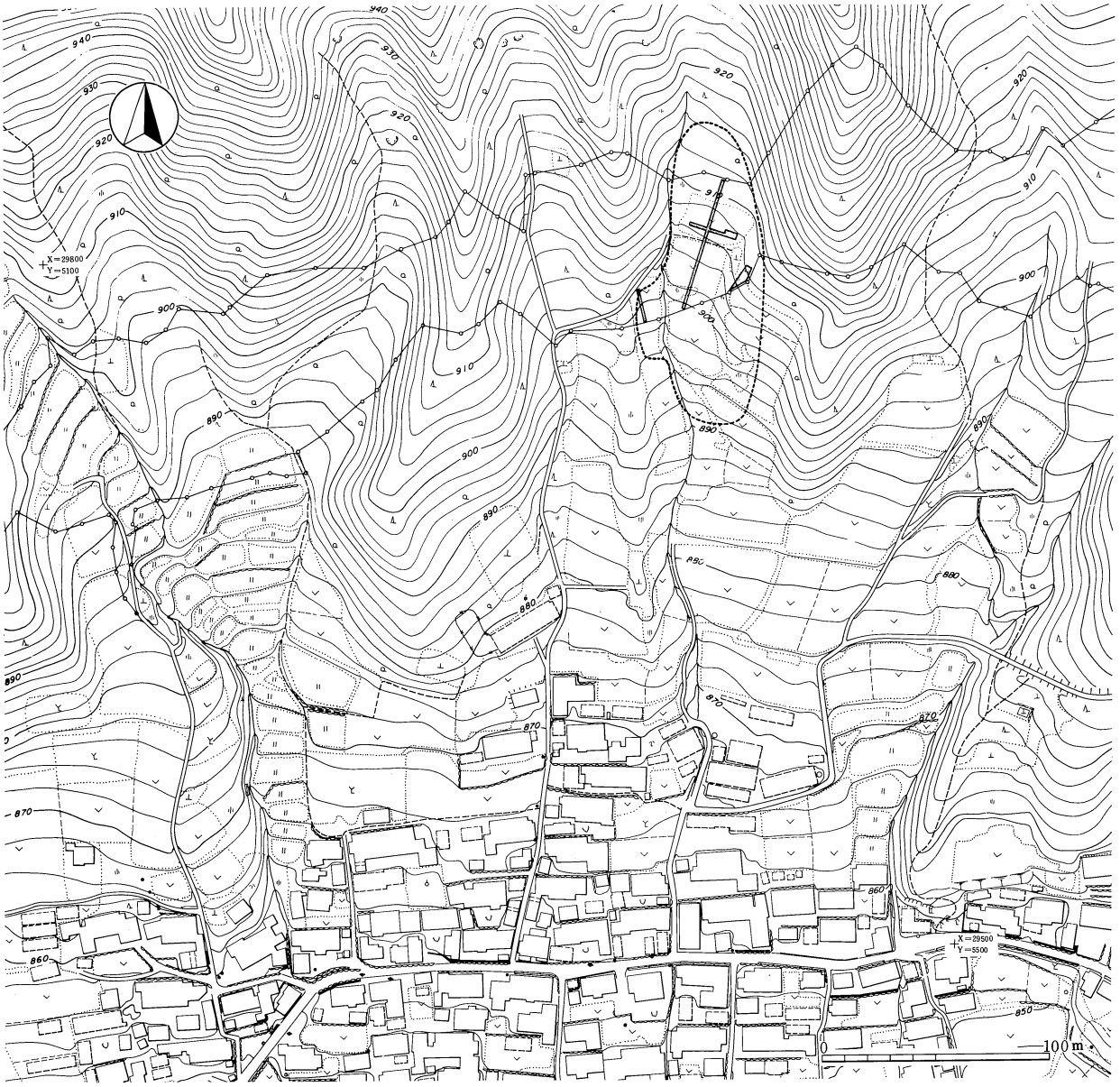


図１　地形および調査範囲（１：3,000）

2　調査の経過と概要

上信越自動車道は遺跡の北半を中心とした部分を通過し、これによって約2,400 m²が調査の対象域となった。発掘調査は昭和62年９月１日から同８日にかけ、調査研究員４人･作業員21人の体制で実施した。調査日数６日・延べ作業員数121人である。

遺跡の内容を把握することを目的として、まず、手掘りによるトレンチを入れることから開始した。幅１ m、計３本、延べ長95m に渡って設定したが、遺構は皆無で、出土した遺物も極めて少量であった。さらに、大小の安山岩質の角礫が多数認められたほか、各所で湧水が生じるなど、遺構群の展開を想定できる状況ではなかった。したがって、面的に拡げることなく調査を終了させた。なお、調査区南東端だけは尾根周縁の緩斜面が対象となっていることから、わずかな範囲だがここのみ面的調査を実施した。これもすべて手掘りによるものである。

調査日誌抄

９月１日　テント設営。器材搬入終了後、調査前の近景写真の撮影。
９月２日　トレンチ調査に着手。谷中央に南北のトレンチを設定。
９月３日　調査区南東端の面的調査を開始。
９月４日　谷中央に東西トレンチを設定。
９月７日　南東端の調査終了。沢を隔てた南西隅のトレンチ調査に移行。
９月８日　トレンチ調査終了。面的に調査する必要なしと判断し、土層のセクション実測・終了後の全体写真を撮影して全調査を終了。

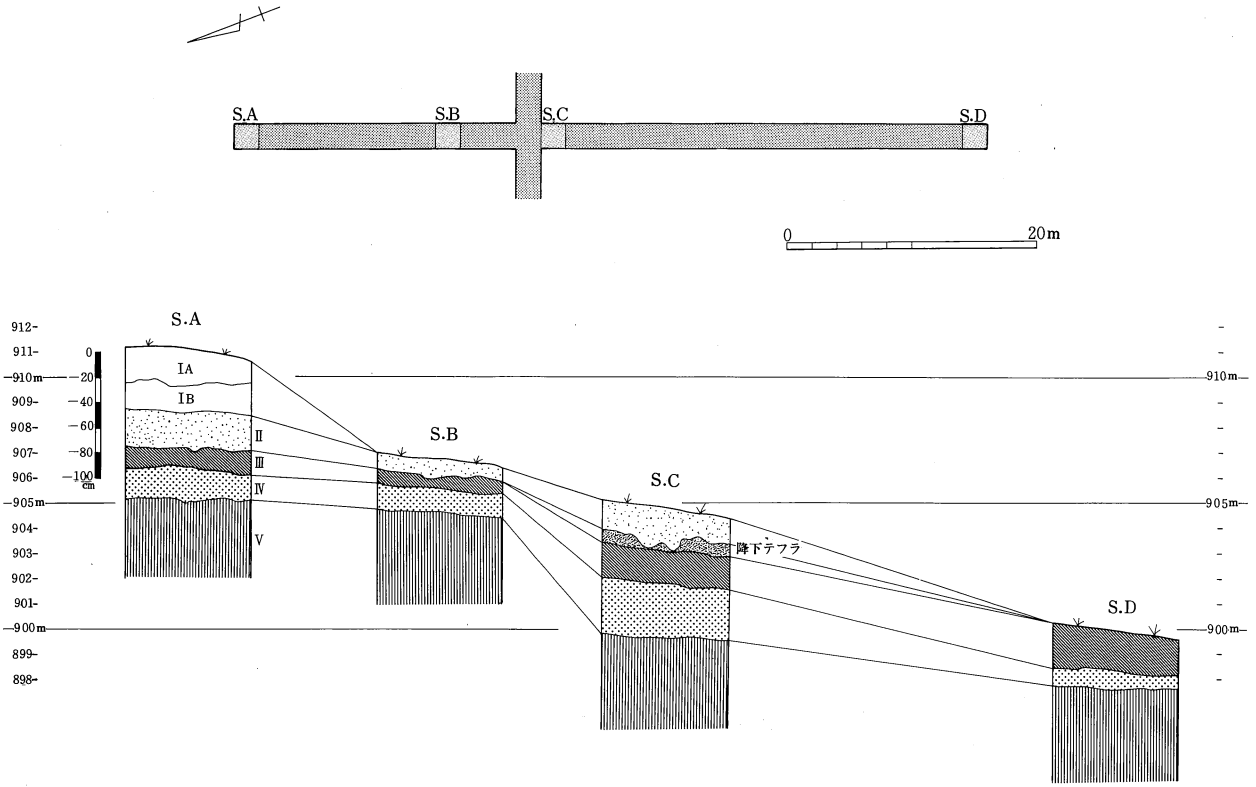


図２　基本土層

3　基本土層

Ⅰ層は、茶褐色を呈する粘性の強い土で、風化礫・安山岩の角礫を多量に含んでいる。耕作が及んでいる部分をⅠA、その下の部分をⅠBとした。Ⅱ層は、粘性に富む黒色土。白色のパミス・スコリアをやや多く含み、また褐色土のブロックが混入している。Ⅲ層は、黒褐色の粘性に富む土。風化礫、赤色スコリア、および安山岩質の小粒子を含んでいる。Ⅱ層とⅢ層の間に、部分的だが火山性噴出物の降下テフラが認められた。Ⅳ層は、Ⅲ層より茶色味の強い黒褐色土で、赤色スコリア・風化礫を小粒子で含む。また、安山岩質の礫を多く含んでいる。Ⅴ層はローム層である。

狭い谷地形のため、全体に不安定な環境にあったと考えられる。あまり淘汰がすすんでいないⅡ層や、岩石を多量に含むⅣ層などは、特に不安定な環境のなかで堆積した土壌だろう。狭い範囲の観察だったがそれぞれの層厚にばらつきが認められることも、常に安定した状態ではなかったことを示している。ただし、降下テフラとⅢ層との層序関係は、下茂内遺跡を始めとする周辺の遺跡にも認められるもので、この時点に限り比較的安定した状態にあったと考えられる。

4　出土遺物（図3）

縄文時代の土器片3点、黒曜石小片1点が出土しただけである。ほかに平安時代の灰釉陶器片1点を表採している。内、土器3点を図示した。

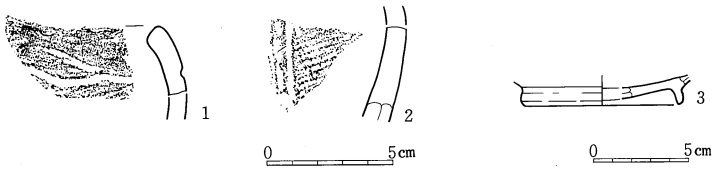


図3　遺構外出土遺物

1と2は、縄文時代中期後葉の加曽利EⅣ式に相当する。3は、10世紀前半に位置づく灰釉陶器碗の底部1/4破片である。高めの三日月高台をもつ。高台は全体に内湾し、外面下方の稜は明瞭でない。光ヶ丘1～大原2号窯式の段階に比定されよう。

5　まとめ

遺跡周辺の香坂川右岸の斜面は、縄文時代中期後葉と平安時代に集落経営の中心が認められる。本遺跡でも該期の遺物を得たが、甚だ乏しい内容であった。狭小な谷間という条件に加えて、湧き水や崩積性の安山岩が多いなど、住居を構えるのに適した環境ではなかったのだろう。路線外の遺跡南半部についても同じような環境にあると考えられ、遺跡全体が居住域から外れた空間の可能性が高い。しかし、極くわずかであっても遺物の出土をみたことは、活発でないが何らかのかたちで利用されていたのは確かである。前記した裏林遺跡は、散布する土器や石器の質と量から、この谷間が利用された時期に営まれた集落と考えられ、両者の関連が予想される。

第７節　干草場遺跡（ひくさば）

１　遺跡の概観

干草場遺跡は、佐久市大字香坂字干草場1659番地を中心とした一帯にある。上信越自動車道建設に伴う分布調査によって、新しく確認された遺跡である。香坂川右岸の八風山山系に接した谷のひとつを遺跡包蔵地としたもので、東隣の谷で発見された塚状のマウンドも便宜的に含ませている。

谷は、標高886～896ｍをはかる南面する緩斜面であるが、左右の尾根がやせ尾根であることから、むしろ浅い谷状の地形としたほうが適している。谷幅30ｍ前後、谷長約100ｍをはかる。水田が営まれる南端部を除き、桑畑として利用されており原地形をよくとどめていた。

塚状のものは、現況で直径約７ｍの円形を呈し、高さは１ｍ弱をはかるものであった。聞き取り調査によると、少なくとも70・80年前には既に存在していたようで、近年の耕作や自然災害によって生じたものではないことが判明した。人為的な「塚」の可能性が高いと考え、遺跡対象としたものである。

２　調査の経過と概要

上信越自動車道は遺跡範囲のほぼ全域を通過し、これによって約1,700 m²が調査の対象域となった。これ以外に塚状の遺構も路線内に位置していた。発掘調査は、昭和62年９月７日から10月８日および同年11月17日から20日にかけ、調査研究員８名・作業員18名の体制で実施した。実働日数29日・延べ作業員数228人である。なお、尾根を挟んで西側に隣接する城の口遺跡Ｂ地点の調査もこの中で行った。

包蔵地部分の調査は、重機の搬入が地理的に困難であったこと、また範囲自体が比較的狭いことからすべて手作業によった。作物の刈り入れが済んでいない南端部を除いて、幅１ｍのトレンチを谷筋中央に１本・それに直交させて３本、計４本を延べ長約90ｍに渡って設定し、その結果をもとに調査を拡大させていくという方法をとった。

このトレンチから検出された遺構は、表土直下で帯状に連なる集石を認めた以外なく、遺物もまばらに出土する程度であった。集石の全容を明らかにするため、トレンチの延長および拡張を行った結果、近代以降の暗渠であることが判明し、また平安時代の土坑１基が新たに検出された。出土遺物は相変わらず散見する程度で、かつ、あちこちで湧水が生じるなどの点から、少なくとも居住域とは考えられず、それ以外の利用のあり方も積極的なものではないと判断し、土坑の調査を以て終了とした。

期間を置いて南端の残件部分の調査に着手した。部分的にトレンチを数本入れた結果、耕作土の直下に砂礫層が堆積している状況であり、遺構の存在が考えられなかったことから、この時点で全調査終了の判断に至った。

塚状のものについては、遺構として認定すること自体に疑いがもたれていたため、現状のコンタ図を作製したのち、幅50 cmほどのトレンチを十字に設定し内容把握を試みた。周囲を取り囲むようにして列状に並ぶ配石を確認したことから、これを人為的なものと判断し、基本的な構築過程および内部構造の詳細をつかむことを主目的として解体をすすめた。中央下部より寛永通寶を伴う土坑状の掘り込みを検出したが、墓坑の可能性が考えられたことからリン・カルシウム分析を実施し、その報告をもとに近世墳墓と断定した。

本格的な整理は平成２年度に行ったが、人事異動の都合で調査担当者と整理担当者とが異ならざるをえなかったことを付記しておく。

調査日誌抄

9月7日　テント設営・器材搬入。調査区内の草刈り。
9月8日　トレンチ掘りを開始。南端部を除き4本設定。
9月9日　帯状に連なる石組みを検出。トレンチの掘削はほぼ終了。
9月10日　石組み状のものに沿ってトレンチの拡張および延長を開始。
9月14日　塚のコンタ図作製後、トレンチ掘りに着手。
9月22日　ベンチマークの移動。あわせてグリッド杭の杭打ちを開始。
9月24日　トレンチの拡張を終了。石組みは暗渠であることが判明。1号土坑を検出。
9月28日　城の口遺跡B地点の調査のため、体制を二分。
10月1日　塚が人為的産物であることが判明。セクション実測後、解体を開始。
10月2日　塚の周囲に巡る配石を全面検出。中央下部に方形の土坑が掘り込まれていることを確認。本日を以て作業員による掘り下げ作業を終了とし、調査研究員4名を残して撤退。
10月6日　塚および1号土坑の調査が終了し、南端部を残し調査終了。
11月17日　南端部の上物が片づき調査を再開。トレンチ掘りを実施。
11月20日　土層の状況から面的調査必要なしと判断し、調査を終了。

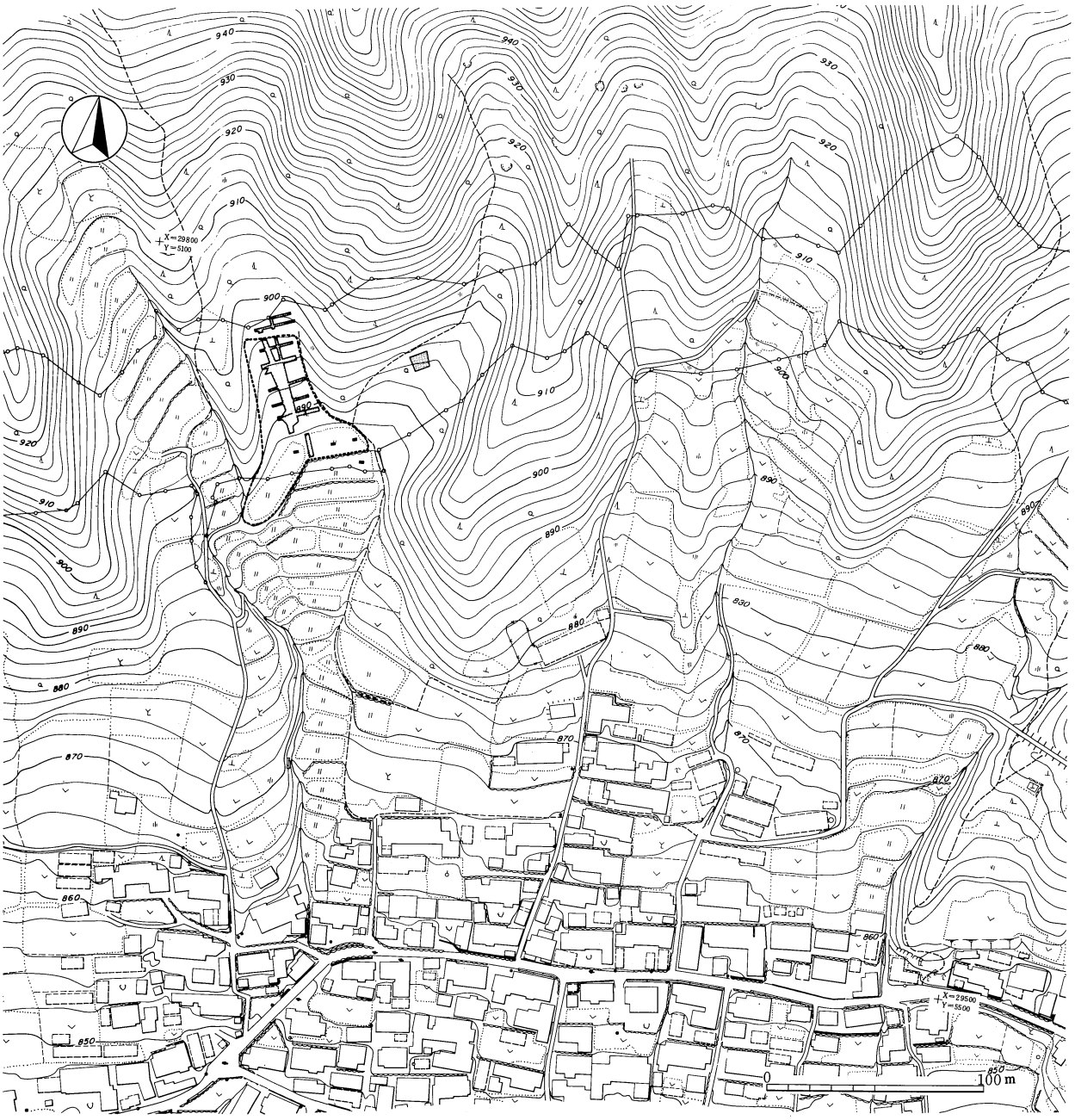


図1　地形および調査範囲（1：3,000）

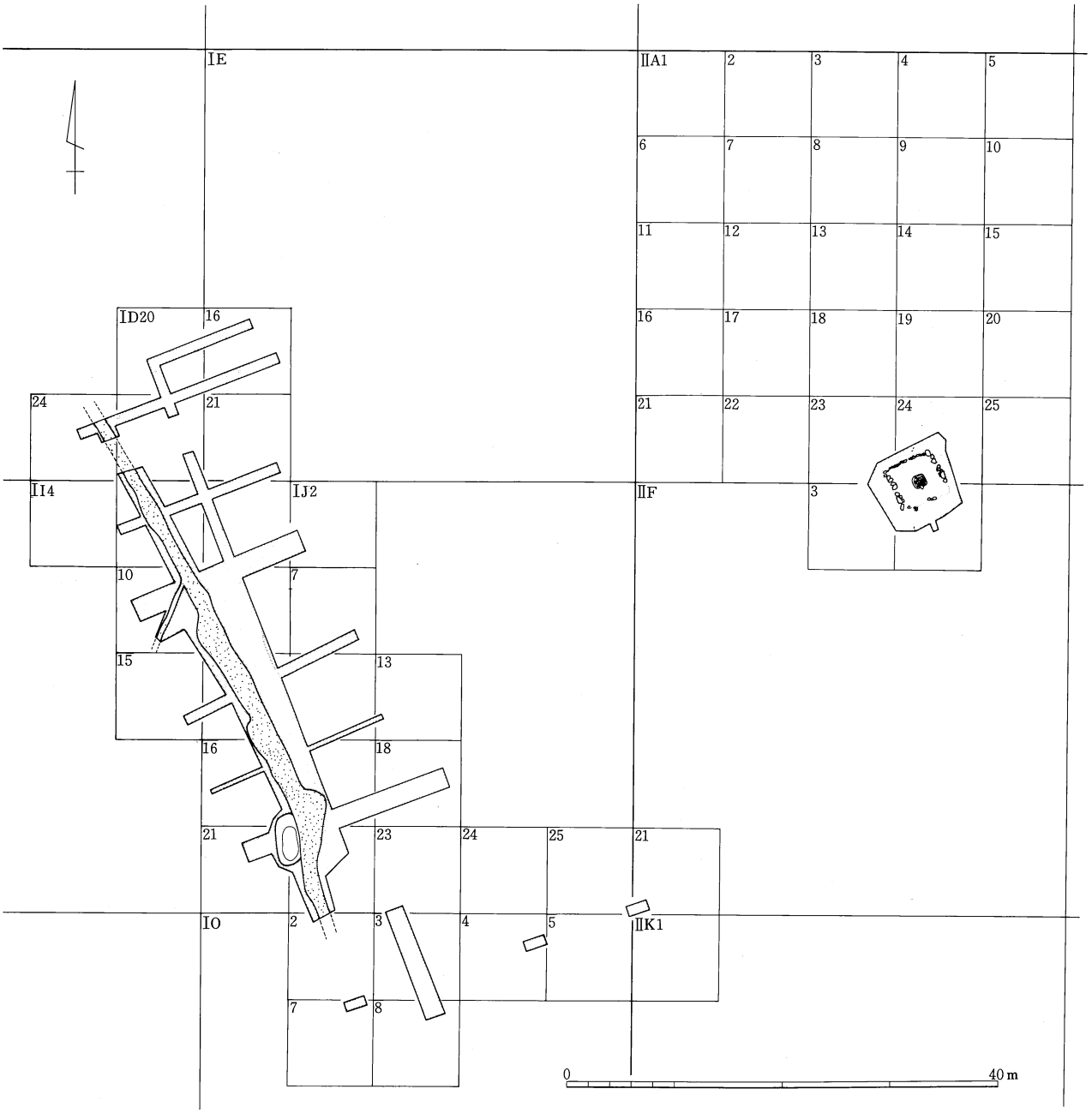


図２　遺構配置図

３　基本土層

幅の狭い谷地形のため、大雨などによる土砂の移動が頻繁に起こったようで、均一な土層堆積を示すものではなかった。図３は、層序関係をわかりやすくするため模式的に表現したものであり、Ⅰ・Ⅵ・Ⅶ層以外の構成は場所によって大きく異なるのが実際である。

基本的な堆積状況は、Ⅵ層のローム漸移層を削るようにして水流とともに砂礫が流れ込み、以後ⅣＡ層まで堆積してから再び水成堆積物であるⅡ・Ⅲ層が流入している。大雨時、谷筋中央付近は水路となっていたらしく、Ⅱ・Ⅲ層で埋められるまでは深く落ち込んでいた様子が観察された。東祢ぶた遺跡（第９節）で得られた文化層の所見を参考にすれば、降下テフラの位置から考えて、少なくとも縄文時代中期までは中央が大きくくぼんだ地形を呈していたものと考えられる。また調査区南端は、Ⅰ層直下に砂礫層が認められ、土砂の流出が顕著であったことを物語っている。

Ⅰ層：現耕作土壌。

Ⅱ層：暗褐色の砂壌土。砂は細砂が主体（水成堆積）。

Ⅲ層：黒褐色の砂壌土。砂は細砂と粗砂（水成堆積）。

Ⅳ層：暗褐色土。安山岩の細礫と白色スコリアを少量含む色調の明暗から、A・Bに二分。

降下テフラ：周辺の調査遺跡でみられたものと同質（風成堆積）。

Ⅴ層：黒褐色土。粘性に富み、風化礫・安山岩の細礫・赤色スコリアを含む。西林遺跡（第6節）Ⅲ層と同質

砂礫層：細砂から人頭大の安山岩までの混層。土石流による成層か（水成堆積）。

Ⅵ層：ローム漸移層。

Ⅶ層：ローム層。

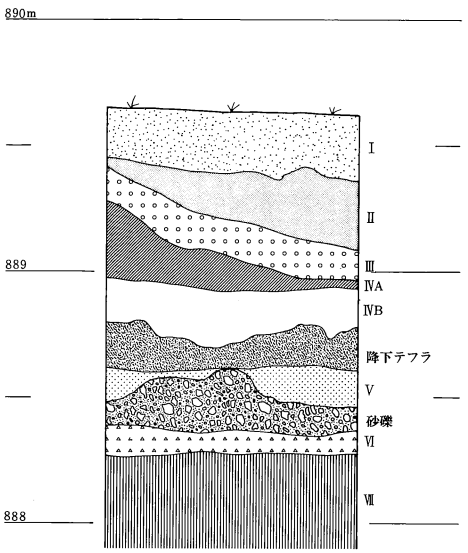


図3　基本土層

4　遺構と遺物

遺構は、平安時代の土坑1基と近世墳墓1基だけである。その他に、Ⅰ層中から縄文時代と平安時代の遺物が若干量出土している。遺構・遺物ともに少ないことから、ここでは時代ごとに扱わず、遺構・遺物単位で記述をすすめる。なお、暗渠については時期的な点から報告の対象としない。

ア　1号土坑（図4、PL56）

ⅠJ—21･22グリッド、遺跡中央やや西寄りに位置し、尾根裾近くに設けられている。Ⅲ層上面で検出したが、土層観察からⅡ層上面より掘り込まれていることが判明している。東壁上端が暗渠によって切られていた。

主軸長約6.8m･副軸長3.2～3.8mにもおよぶ大形のもので、深さは最高55cmをはかる。Ⅱ層上面でなら、さら大規模なものとなるだろう。やや不整な隅丸長方形を呈し、主軸は斜面の傾斜方向に平行している。坑底は、おおむね平坦かつ水平を保つものであった。堅緻面や付属施設は存在しない。壁は、極めて緩やかな立ち上がりをみせ、断面全体が浅い皿状を呈している。

覆土は、黒褐色の砂壌土を主体としており、砂質はほぼⅡ層に等しいものであった。拳大程度の安山岩を混入するほか、赤色スコリア・安山岩質の風化礫が含まれていた。色調を除いて、Ⅱ層と共通するところが多い。大形の遺構にしては単層で構成されていたが、自然埋没か人為的埋没かは不明である。

北東隅を中心に、多量の土器片が折り重なるようにして出土した。大小の安山岩質亜角礫とともに坑底付近から出土しており、埋没開始前に存在していたものと考えられる。土器片は4個体分を数えるが、そのほとんどは須恵器甕の破片であった。1は完形に近い状態に復元できた須恵器甕。底部は丸底を呈し、肩の張りは強い。胴部外面には、左回転の平行タタキが連続して施されている。2は内面黒色処理された土師器碗の1/5破片。内面のミガキは不明瞭である。3はロクロ成形による土師器小形甕。肩部に最大径をもち、口頸部は「く」の字に屈曲する頸部から直線的に口唇部へと至る。胴部外面と口縁部内面は回転ヘラナデされ、不明瞭なカキ目を残している。胴部中位以上はほぼ完存するが、それ以下は破片すら含まれていなかった。ほかに土師器坏の底部破片が出土しているが、実測には至らなかった。

時期は、土師器の特徴から9世紀後半に置ける。土坑自体の機能は不明である。

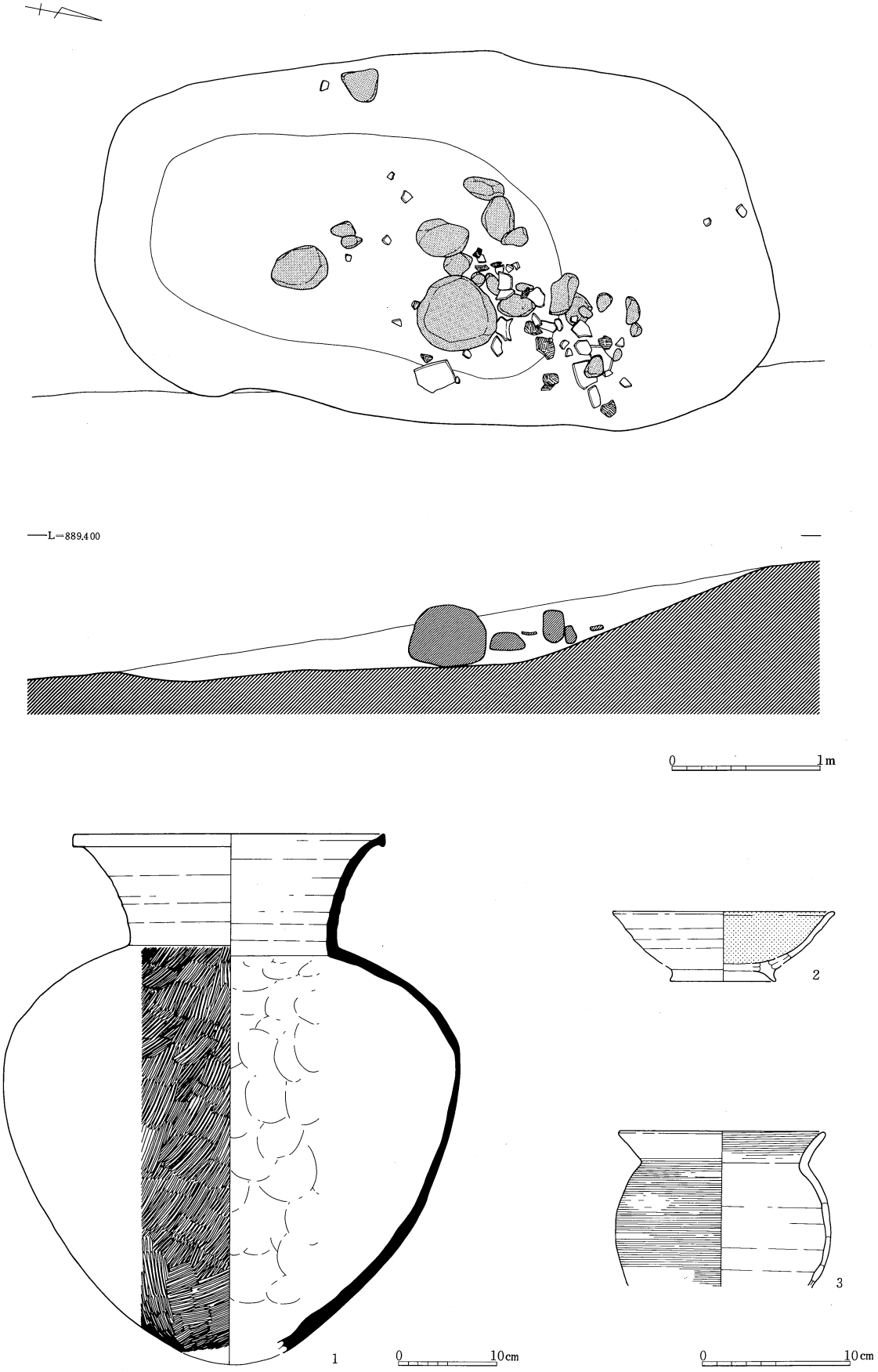


図４　１号土坑

イ　遺構外出土遺物（図５、PL56）

すべてⅠ層からの出土である。縄文時代と平安時代の土器片と石器が少量出土している。

石器類は、残核１点を除きすべて図示した。１・２は黒曜石製の無茎凹基鏃で、２は両脚部を欠損する。３は珪質粘板岩製の石錐で、横断面三角形状の短い錐部を作出し、図右側辺部から剥離調整により整形される。なお使用痕は認められない。４は安山岩製の横形石匙で、つまみ部が偏る。５はチャート製のピエス・エスキーユで、右側辺部に急角度な刃部を作出する。

６・７は縄文時代中期後葉、加曽利ＥⅣ式相当の土器破片。ほかに、同期のものが数点出土している。

８・９は平安時代、９世紀後半を中心とする時期の土器破片。８は内面黒色処理された坏の底部1/3破片で、内面は雑なミガキ、底部外面は手持ちヘラケズリが施される。９は灰釉陶器碗の底部1/4破片。施釉は漬け掛けによる。光ヶ丘窯式に比定される。実測不能だが、ほかに数10点が出土している。

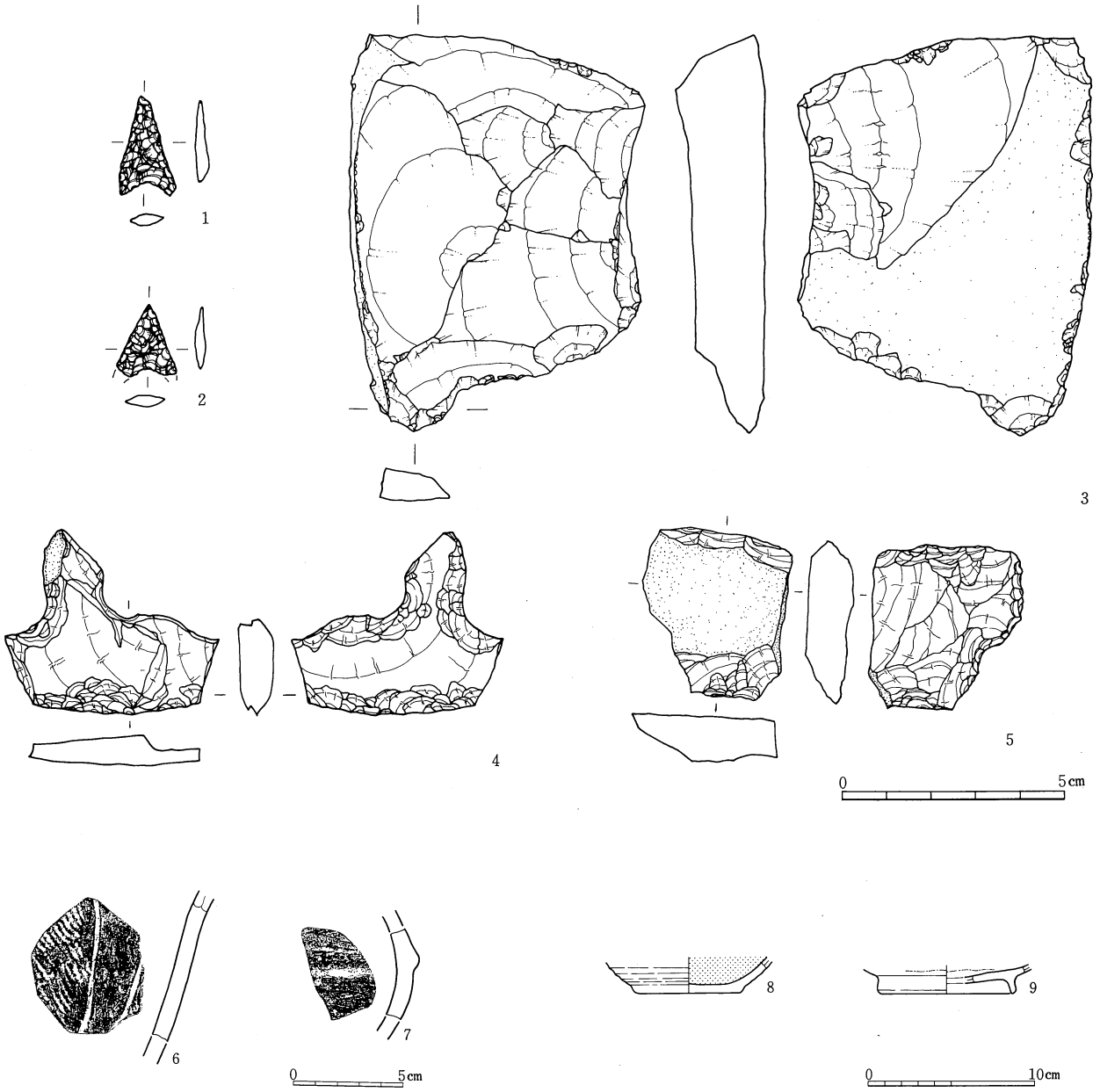


図５　遺構外出土遺物

ウ　1号墳墓（図6、PL55・56）

根拠　墳墓との判断は、墳丘下部に存在する土坑内埋土のリン・カルシウム分析結果によった。パリノ・サーヴェイ社に依頼したものだが、その報告の概要を記し、根拠を明らかにしたい。試料は、土坑外地山1点・墳丘土1点・土坑覆土3点の計5点である。土坑覆土の3点は、上端・中位・坑底から採取している。

分析は、粉砕・篩別した試料について、過塩素酸分解を行った後、リンについてはバナドモリブデン酸により全リン酸（T－P_2O_5）を、またカルシウムについては原子吸光光度法により全カルシウム（T－CaO）を測定することを方法としている。分析工程は以下のとおりである。

1)試料は風乾し、ϕ0.5mmの篩を全通させて供試した。

2)水分は、加熱減量法により測定した。

3)試料の一定量を秤りとり、はじめに硝酸液（HNO_3）により、つぎに過塩素酸液（HClO4）により加熱分解を行った。

4)本分解液の一定量を採取し、発色液を加えて、比色法により全リン酸を測定した。

5)別に分解液の一定量を採取し、干渉抑制剤を加えた後、原子吸光光度法により全カルシウムを測定した。

リンの含量は、土坑外地山0.67（乾土1gあたりのmgを示す。以下同じ。）・墳丘土0.93・土坑覆土上端1.04・同中位1.04・同坑底2.12であり、カルシウムも同様に4.00・4.87・4.24・4.65・5.22との結果を得た。リン・カルシウムともに土坑外地山で低く、坑底土でもっとも高い値を示している。また、坑内土全体をとおして他より高い値を示していることから、所見として、坑底近くにリン・カルシウムの高い内容物の影響が考えられること、坑内土と墳丘も含めた坑外土とでは堆積環境を異にした土壌であることを報告している。

「リン・カルシウムの高い内容物」が人骨とは限らないが、塚の内部ということならそれを検討するまでもない。分析報告を素直に受入れ、この塚を墳墓と断定した次第である。

位置　ⅡA23・24グリッド周辺に位置する。南西に下る谷中にあるが、北側の尾根際に構築されていることから、日当たりは良好である。50m弱で谷を脱する地点にあり、ここでは谷幅約30mをはかる。

墳丘　方形にめぐる配石を墳端と考えると、南北長約3.4m・東西長約3.7mの方形墳墓となる。東西長の方が長いが、南面する側が墳丘前面である可能性が高く、したがって南北軸を主軸方向とする。墳高は最高でも50cmにとどまり、土饅頭に似たなだらかな小封だが、いわゆる「石積み墳墓」のように周囲を固定したものではないから、多かれ少なかれ盛り土の崩落を考えたほうがよいだろう。なお、墳頂やや南寄りから30×20cmの平石を検出しているが、墳頂施設の一部が遺存したものの可能性がある。

斜面を整形し、外周に石を配し、土を封じるという工程で墳丘を築き上げている。斜面は南に向かって傾斜しているため、墳墓正面である南半を基壇状に削り出し、逆に北半は高い部分を掘り下げて基底面のレベル調整を図っている。「半基壇状」という表現が適していようか。外縁の配石は、南側辺を除いて良好に遺存しており、部分的だが二段積みした箇所も認められた。拳大から人頭大の安山岩質亜角礫を用いており、比較的平坦な小口面を外側に向けて配している。北側辺に限って、拳大から小児頭大程度の小振りな礫だけで構成され、かつセクションから地表上に顔を出すものではないことが観察できた。地形整形の様子とあわせて、背面の景観に対してはさほど注意が払われなかったものと考えられる。盛り土は、砂を多く含むがしまりのよい暗褐色土（第3層）と粘性・しまりともに欠ける黒褐色土（第1層）の2層からなり、その他層間の所々に砂壌土(第2層)がブロック状に入り込んでいた。第1層と第3層との層界ラインが明瞭であることから、小封ながらも段階的に土を封じた可能性が高く、基底面直上に、よりしまりのよい第3

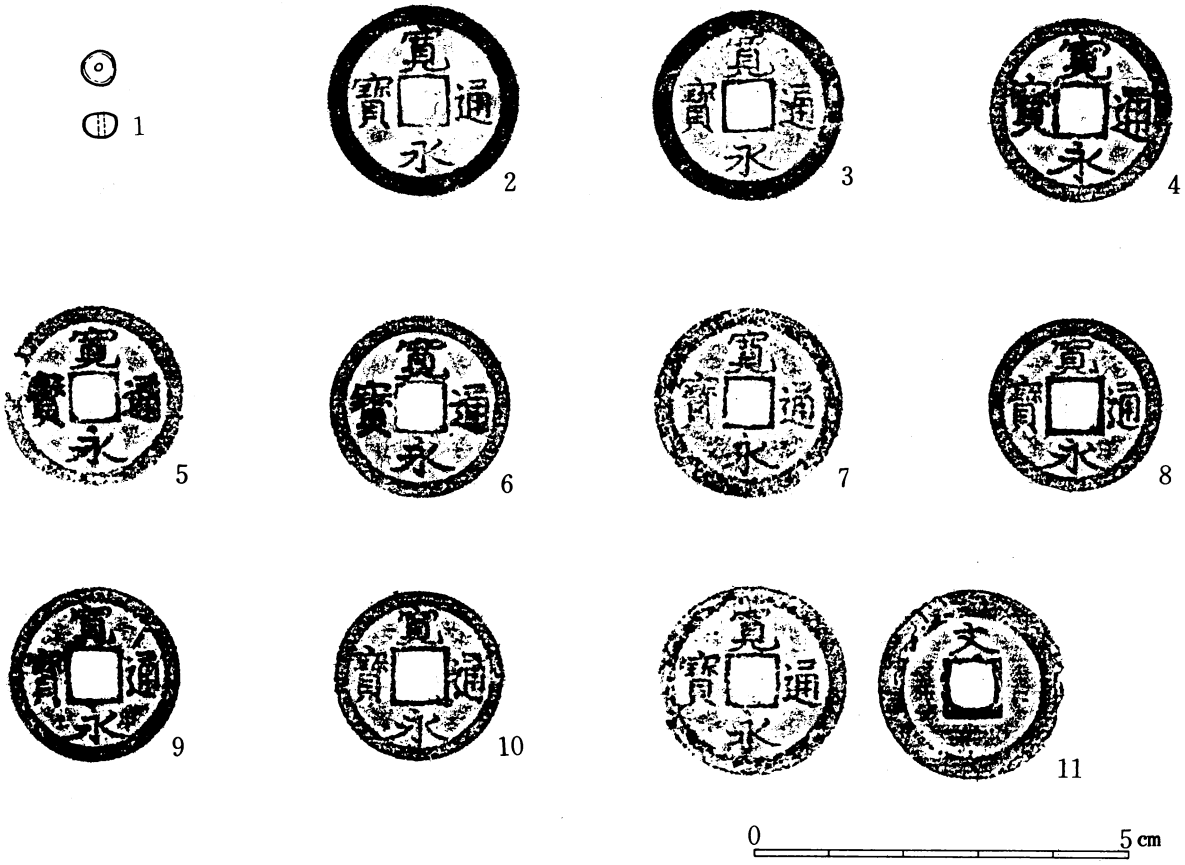


図6　1号墳墓

層が位置することも偶然の結果ではないと考えられる。

墓坑上端より10～20 cmほど浮いて、拳大前後の礫が墓坑を覆うかのように集中出土しているが、特に施設とは考えがたく、また墓坑との関連も不明である。

墓坑　墳丘中央やや東寄りの基底面に設けられている。主軸長約90 cm・副軸長約100 cmの隅丸長方形を呈し、深さは20～30 cmをはかる。坑底は、ほぼ水平かつ平滑に仕上げられていた。規模からすれば、屈葬されたと考えるが、有機物はすべて朽ち果てたらしく、一部の副葬品と覆土上層に散在する拳大の礫が遺存するだけであった。

遺物　坑底付近から、ガラス小玉１点と寛永通寶14枚が出土している。１は、直径４ mm・厚さ３ mmをはかる透明なガラス小玉である。発見が遅れ、埋土をふるいにかける間もなく掘り上げてしまったことから、ほかにも含まれていた可能性が高い。数が揃わなければ何ともいえないが、数珠の記子珠のひとつではないかと考えている。２から11は、出土した寛永通寶の内の10枚である。六道銭として副葬されたものであろう。背に「文」の字を付す、いわゆる「文銭」が１枚含まれている。

時期　銭に対する知見に乏しいため、ここでは「文銭」が鋳造された1668年（寛文８年）以降とだけしておく。

5　まとめ

干草場遺跡では、縄文時代中期後葉と平安時代にだけ活動の痕跡が認められた。集落域とは異なり、しかも短期的かつ臨時的な使われ方をしていたと考えられるが、諸々の点で本書第６節の西林遺跡に類似するところが多い。両遺跡の調査結果は、香坂川右岸沿いに広がる緩斜面から、深く北に退いたいくつもの谷間の利用状況を少なからず概見するものであろう。ただこうした状況の中、須恵器の甕や土師器の甕・坏を伴う平安時代の大形土坑を、居住域外で検出した点は大いに注視される。何を目的としたものか、この時点では答えを用意できないが、一考を要するところである。今後の資料の蓄積と研究の発展に期待したい。

近世墳墓については、調査結果のほかに、もうひとつ貴重な報告がある。調査途中、この谷の奥に「上人さんが住んでいた岩屋がある」という話を地元住民から聞き取り、周辺の現地踏査を実施した。その結果、墳墓から50 mほど谷沿いに登った山腹に、石室上の岩屋を確認した（PL55）。内部には、灯明皿に使ったとみられる瀬戸美濃産本業焼の削り出し高台をもつ皿が置かれており、18世紀には既に構築されていたと考えられる。これが人工的な修行窟であることはいうまでもない。この地に、修験の霊場として知られる閼伽流山が存在することに関連するものであろう。

さて、そこで考えるのが墳墓と修行窟との関係である。接点は、同じ谷の中で近在していること、ともに近世であること、墳墓に数珠の一部とみられるガラス小玉が副葬されていたことにある。ここでは示唆するにとどめるが、そもそもこのような手の込んだ墳墓の被葬者が一般民衆であるわけもなく、したがって特異な階層の人物を想定するのがより自然な方向である。修行窟とのつながりはひとまず置いておくとしても、やはり被葬者が修行僧である可能性がもっとも高いといえる。

第8節　城の口遺跡

1　遺跡の概観

城の口遺跡は、佐久市大字香坂字干草場1633番地ほかに所在する。香坂川右岸に沿った、南面する緩斜面に営まれた遺跡のひとつである。八風山山系から南に分岐した幅100ｍほどの尾根の延長上にあり、尾根の両側に走る二本の谷が、そのまま緩斜面にも浸食を及ぼしていることによって遺跡の東西が画されている。尾根縁辺の比較的緩やかな斜面をも含めると、南北約200ｍ・東西約160ｍ・標高864～894ｍが遺跡範囲となるが、中心部は尾根を完全に脱した標高880ｍ以下にあると考えられ、また範囲そのものが南に広がる可能性がある。一帯は畑として利用されており、原地形をとどめるところが多い。なお、谷を挟んで東側には裏林遺跡が、西側には本報告書所収の東祢ぶた遺跡（第9節）が存在する。

2　調査の経過と概要

尾根両側の谷に差し掛かった遺跡北端部を上信越自動車道が通過することとなった。これにより、距離にして130ｍほど離れた2地点、約700ｍ²の調査が必要であった。調査箇所が遠く離れていたことにもよるが、各調査班の動きをよりスムーズにするため、ふたつの班が別々に各地点の調査を実施した。便宜的に西側の地点をＡ地点、東側の地点をＢ地点と呼ぶことにし、Ａ地点は昭和62年9月10日から9月29日にかけ調査研究員4名・作業員21名の体制で、Ｂ地点は同年9月28日から10月5日にかけ調査研究員4名・作業員18名の体制で調査を行った。実働日数17日、延べ作業員数147人である。両地点とも、重機の搬入が地理的に困難であったことから、掘り下げ作業はすべて人手によった。

Ａ地点は、傾斜のややきつい南西斜面であり、対象面積は約400ｍ²をはかる。その内、南端部分は開墾の際に大きく削られていた。トレンチ調査から開始したが、この段階では薄い耕作土の下からローム層が顔を出す状況であり、遺構・遺物も皆無であった。面積が小さいことから全面調査に移行したものの、結果は、西縁部にだけ残る黒褐色土中より縄文時代後期の土器片が2点出土したのみで、遺構はまったく存在しなかった。念のため、遺跡外である谷部にもトレンチを入れたが、縄文時代後期と弥生時代後期の土器片が数点出土したにとどまった。

Ｂ地点は、尾根東側に沿って帯状に伸びる緩斜面の北端部であり、対象面積は約300ｍ²をはかる。トレンチ調査により、耕作土直下から広範囲に渡る堅緻面を検出したため全面調査に踏み切った。調査区北東外にここだけ大きく迂回する農道が通っているが、堅緻面は農道を直線的に結ぶような状態で伸びており、19世紀代の陶磁器片を含むことも判明した。近年まで使用された旧農道の一部と判断し、下部の調査に移行した。10～20ｃｍの黒褐色土の間層を挟んでローム層に達し、その黒褐色土中より縄文時代・平安時代・中世の土器片および石器が散在して出土したが、遺構は存在しなかった。

調査日誌抄

Ａ地点

9月10日　調査開始。3本のトレンチ掘りに着手。
9月11日　トレンチ掘りが終了し、面調査に移行。
9月17日　並行して、調査対象域外の谷部のトレンチ調査に着手。3本を設定。
9月22日　面調査終了。すべてローム面まで下げたが、遺構は皆無。
9月24日　谷部のトレンチ調査終了。遺構なしと判断。
9月29日　土層および調査範囲を実測し、調査終了。

Ｂ地点

9月28日　トレンチ調査開始。広い範囲にわたる堅緻面を検出。直ちに面調査に移行。
10月1日　堅緻面が近世ないし近代まで利用されていた農道の一部であることが判明し、下部の調査に移行。
10月2日　全掘り下げ作業終了。遺構は皆無。
10月5日　土層および調査範囲を実測し、調査終了。

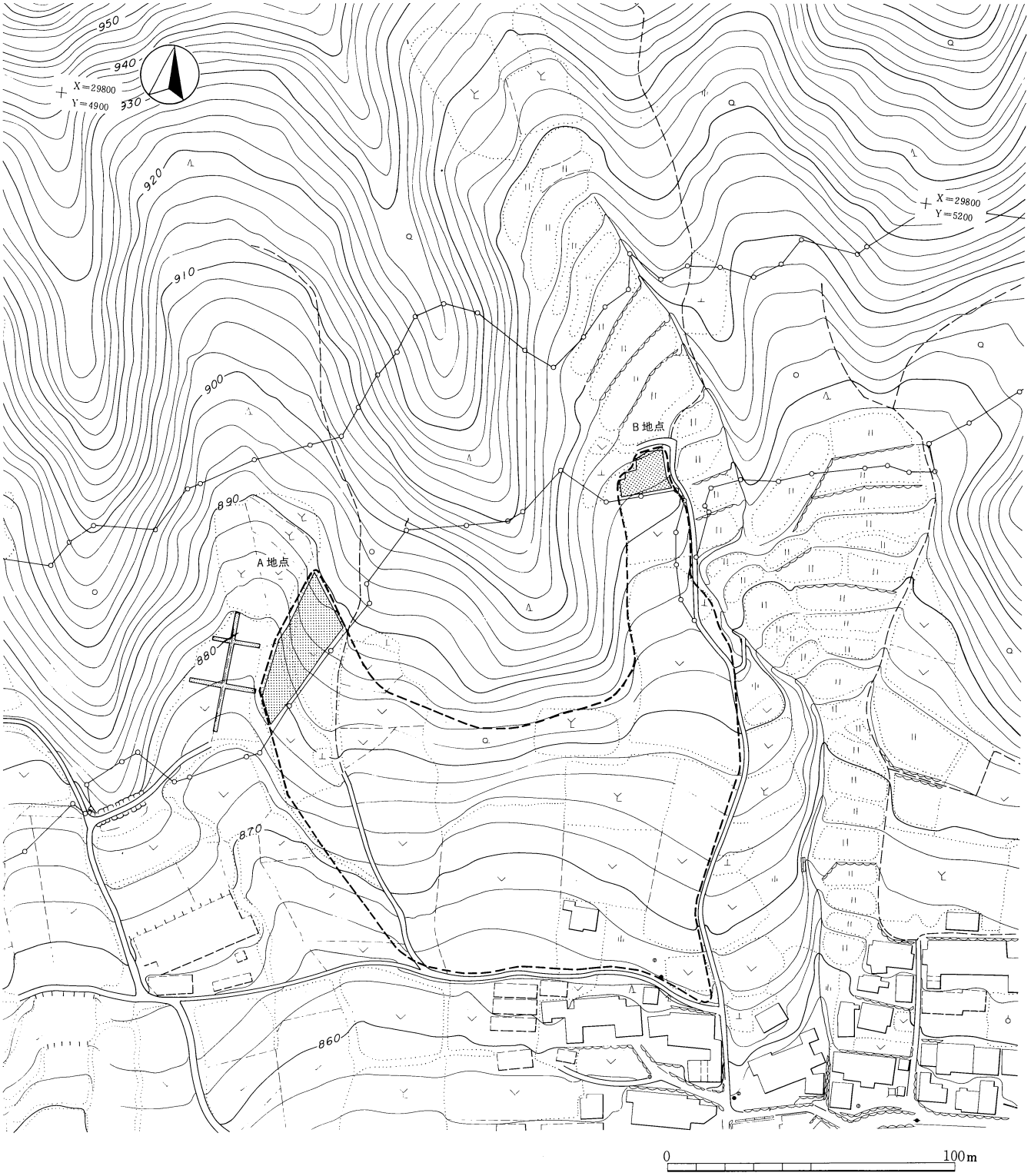


図１　地形および調査範囲（１：2,000）

３　出土遺物（図２、PL57）

Ａ地点では、斜面部より縄文時代後期の土器２片、谷部より同数片および弥生時代後期の土器２片が出土しただけである。Ｂ地点の出土遺物は、中世の内耳土器片が多数を占めるが、ほかに縄文時代早～前期の土器１片、同中期後葉の土器数片、縄文時代の石器４点、平安時代の土器片10数点が出土している。内、石器３点・縄文土器５片・平安時代の土器３片を図化した。内耳土器は１ないし２個体が細片となったも

のだが、接合状況が芳しくなく図化には至らなかった。なお、図２中の６～８がＡ地点出土のもので、ほかはＢ地点から出土した資料である。

１～３は縄文時代の石器である。１は黒曜石製の無茎凹基の剝片鏃。基部から片側辺部に剝離調整が施される。表裏の剝離面剝離軸の振れはなく、バルブ部は脚部に位置する。２は黒曜石製の小剝離痕を有する剝片。鋭角的縁辺部の片面のみに微細な剝離痕が連続する。３は安山岩製の打製石斧。長幅比２対１の横長剝片を素材とし、その形を生かすように全体を整形している。このため刃部は斜刃を呈する。着柄にかかわるものか、基縁部両側縁にノッチ状の抉りが施されている。

４～８は縄文時代の土器片である。４は胎土に微量の植物繊維を含むもの。RL 縄文がややまばらに施文される。早・前期の所産とみられるが、詳細は不明である。５は中期後葉の加曽利Ｅ式、６・７は後期前葉の堀之内式に比定される。８は表裏両面に施文される鉢ないし甕。薄手かつ堅緻であり、無文部はていねいに研磨される。後期中葉の加曽利Ｂ式から高井東式にかけての所産であろう。

９～11は平安時代の土器片である。９・10は内面を黒色処理した土師器坏の底部破片。成形は右回転のロクロナデによるもので、底部外面には放し糸切り痕を認める。内面にはていねいなタテミガキが施されている。ともに９世紀後半に位置づけられよう。11は土師質土器碗の底部破片。高めの高台を付すもので、成形は器部分が右回転・高台部分が左回転によっている。底部外面は全面にロクロナデが施されている。10世紀前半を中心とした時期であろう。

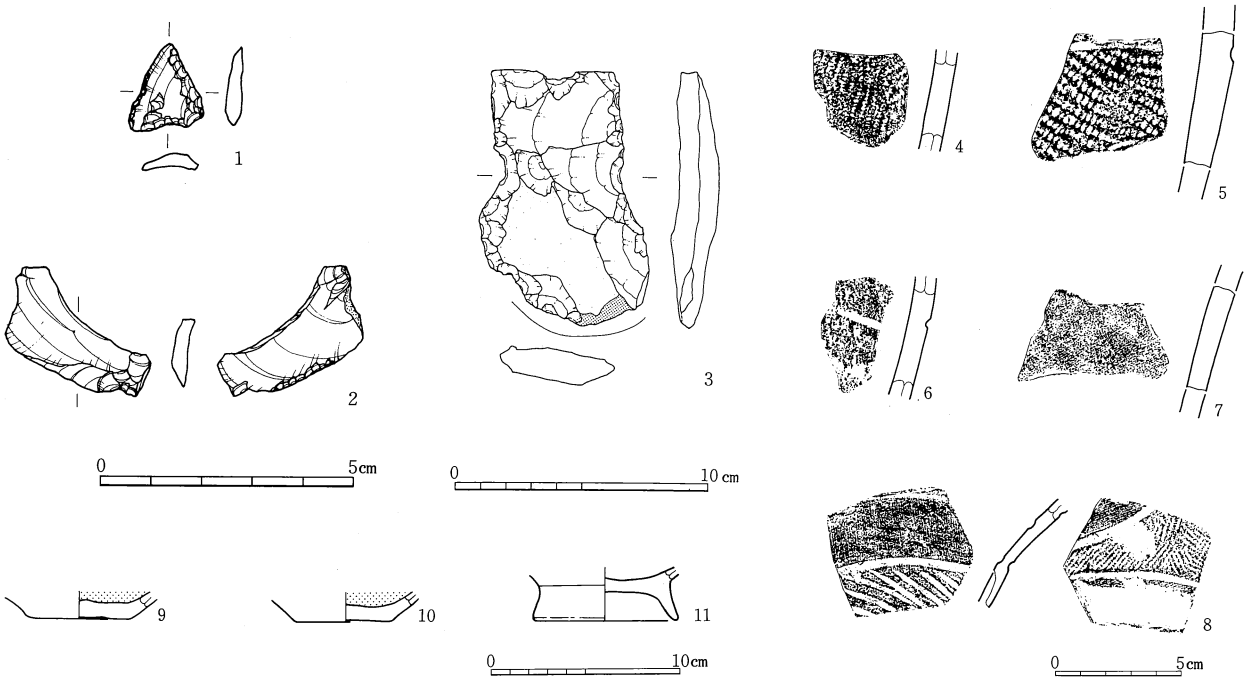


図２　出土遺物

４　まとめ

遺跡の北端付近は、生活の場として積極的に活用されていなかったと言える。しかし、縄文時代早・前期から後期中葉、弥生時代後期、平安時代、中世といったさまざまな時期･時代の遺物がみられたことで、長期にわたる複合遺跡であることが判明した。また、Ａ地点とＢ地点とでは、出土遺物に時期を共有するものがないことから、各時期・時代によって主要な利用空間を違えていたことも確実視される。それぞれの集落規模の差にもよろうが、こと、東と西では遺跡内容が大きく異なる可能性が高いと考えられよう。

第９節　東祢（ひがしね）ぶた遺跡

１　遺跡の概観

東祢ぶた遺跡は佐久市の東部、平尾（ひらお）富士と明巌山とに挟まれた山間に位置する。西流する香坂（こうさか）川によって開折された谷の右岸、閼伽流山（あかるさん）から八風山系に至る山峯より南へのびる尾根間の狭小な谷中傾斜地上に占地している。佐久市教育委員会および長野県教育委員会文化課の分布調査により、縄文時代～平安時代にかけての遺物包蔵地として周知された遺跡である。遺跡としての範囲は谷筋に沿って南北に細長く展開しかなりの広がりをもつ。地籍は佐久市大字香坂字東祢ぶた1790番地ほかである。

本遺跡の西側には痩尾根を狭んで西祢（ね）ぶた遺跡が、また東側には同様に尾根を隔てて城（じょう）の口遺跡がそれぞれ所在する。遺跡およびその周辺を含め香坂地区は寛永元年頃の開拓によって開かれた地区であり、本

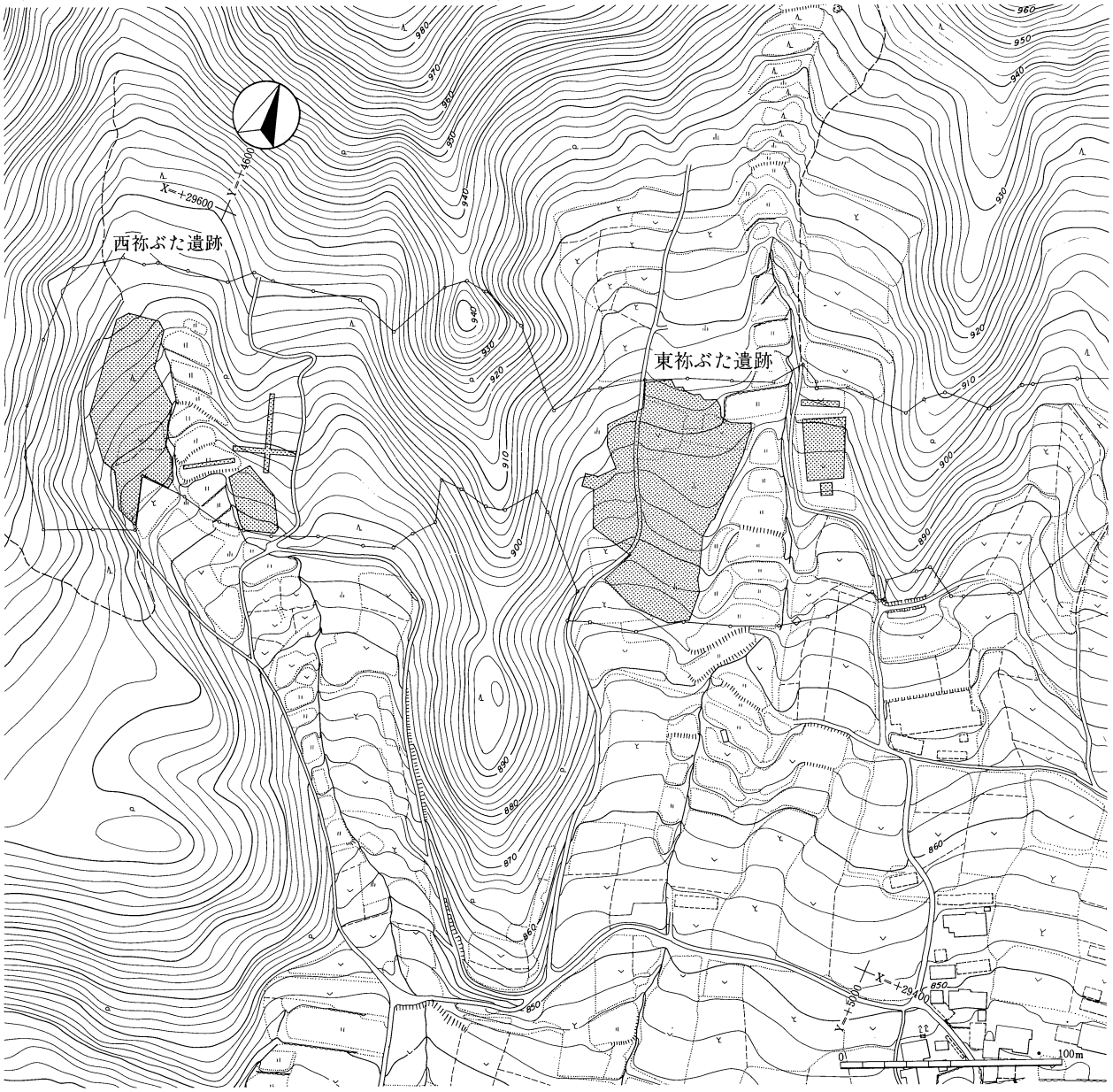


図１　地形および調査範囲（１：3,000）

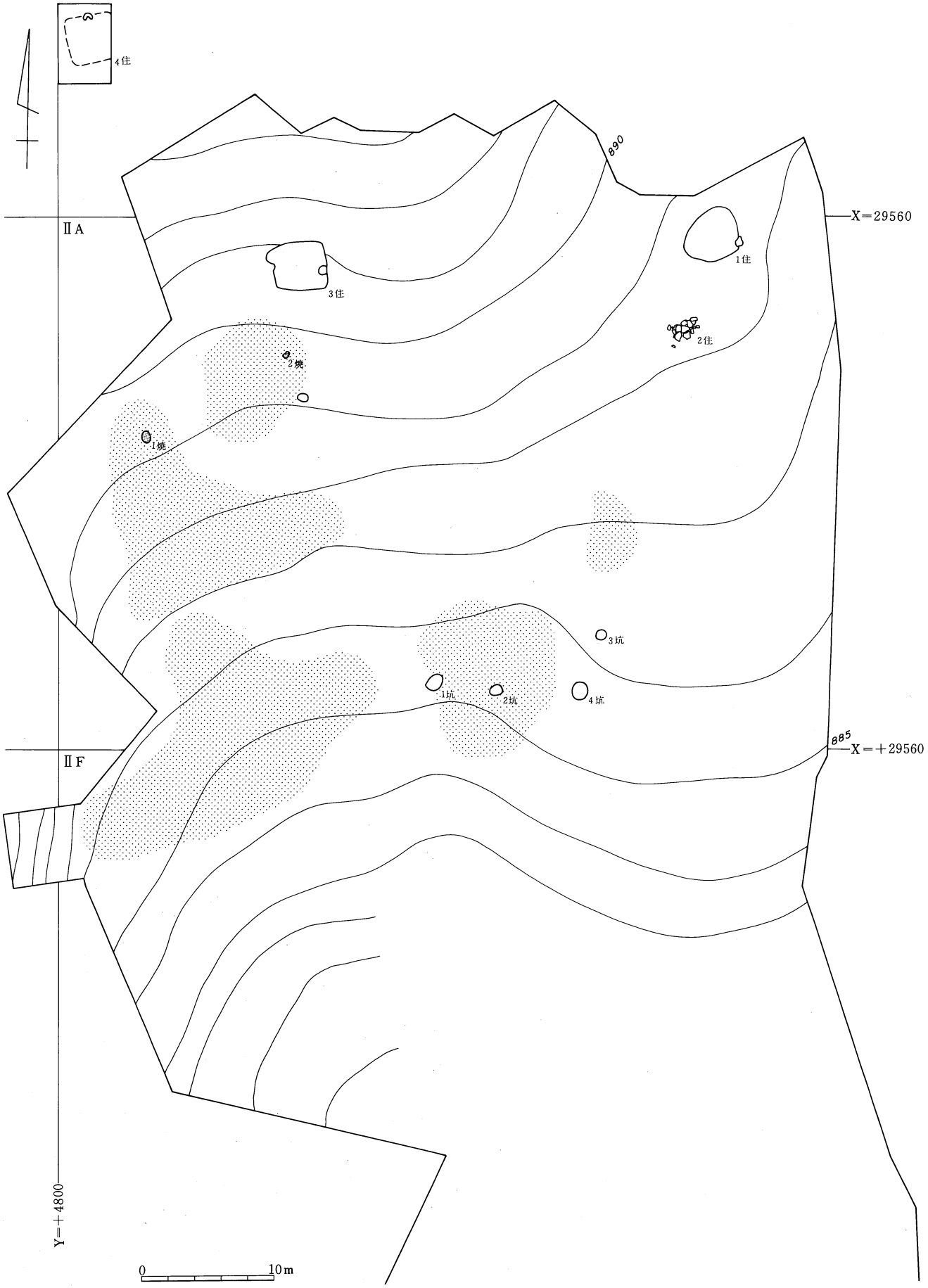

4住
890
X=29560
ⅡA
1住
3住
2住
2焼
1焼
3坑
1坑
2坑
4坑
885
X=+29560
ⅡF
Y=+4800
0
10m

図2　遺構配置

地籍もその後の開田により谷の奥まで水田化されている。一部畑地や果樹園となっているものの、一様に小規模水田が構築され、傾斜地ゆえに柵田状の景観を見せる。

2　調査の経過と概要

今回調査の対象になったのは東祢ぶた遺跡の北端部付近に相当し、標高879 m、面積約8,000 m²範囲である。調査は昭和62年８月４日より開始し、同年10月５日に終了した。調査に要した日数は延べ40日である。

当初調査研究員５名で班を構成し、途中栗毛坂遺跡群調査班からの増員を得て最終的には７名の体制で調査に当った。水田として開墾され原地形をとどめる部分が少なかったことから遺存状態を心配したが、調査はまず削平を被っていない箇所を選定して人力による表土剝ぎから始め、随時重機により表土除去を行った。遺物の出土が認められる部分については出来得る限り広げて調査範囲を決定したが、地形的制約や排土処理の問題から、西側尾根に接する部分については一部拡張し切れない場所を残した。最終的な調査面積は約7,400 m²である。

調査はグリッド法とトレンチ法を併用し、各層の遺物出土状況を検討し、必要に応じて面的調査を行った。特にⅣＡ層より縄文時代中期後葉のまとまった遺物出土を確認した。その結果、調査区北端部において縄文時代と平安時代の住居址各２軒・縄文時代の屋外埋甕１基など、さらに同中央部においては土抗４基をそれぞれ検出するとともに、同西半部に縄文時代の集中的な遺物出土区の存在が明らかとなった。また、グリッドの設定については第Ⅰ章第４節に記された当センター既存の方法に準拠している。

整理作業は昭和62年11月より開始し、図面の確認および修正・遺物の洗浄・注記・接合復元を行った。報告書刊行にむけての遺物実測や図版作成など本格的整理とまとめは、平成元年４月より着手し、途中発掘調査対応などのため長期の中断を経て平成２年度まで行い、本報告に至った。

調査日誌抄

８月４日　調査対象地区内にテント設営。
８月17日　10名余りの作業員により調査開始。器材搬入。
８月18日　作業員を20名に増員し表土除去開始。一部重機による表土剝ぎを並行して始める。
８月19日　調査区北西部において縄文時代中期後葉の遺物包含層を確認する。
８月21日　調査区北東端部付近で縄文時代の住居址を２軒相次いで検出。
８月24日　平安時代の住居址検出。
８月28日　遺物包含層の掘り下げ。10～20cmで無遺物層に達する。新たに焼土址２基を検出。
９月３日　縄文時代早期後葉の遺物集中箇所を確認。
９月７日　住居址の調査を開始。グリッド杭の設定を行う。
９月14日　包含層遺物をドット図に記載。土坑の調査。
９月21日　包含層遺物の取り上げ続行。縄文時代の住居址完掘。航空測量の事前準備を行う。
９月22日　航空測量実施。住居址の床割り・掘り方の調査。
９月24日　屋外埋甕および焼土址の調査。
９月28日　土層転写実施。本日をもって作業員を投入しての調査を完了する。
９月30日　住居址ほか遺構の図化。写真撮影。
10月２日　器材の撤収開始。
10月５日　本遺跡調査のすべてを終了する。

3　基本土層

遺跡内の層序は下記のように分別される。ただし、図示したように遺跡内においてすべての土層が一様に認められるわけではない。とりわけ、両側を沢筋によって切られ中央が微高地状の高まりを見せる西側の主要調査区においては、地形的な要因とともに耕地化の影響もあり、土層の堆積は薄い。

また、各層位中より縄文時代から平安時代にかけての遺物が検出されたが、II層下部に平安時代、III層上面に弥生時代後期、IVA層～IVB層上面に縄文時代中期後葉、V層上面(～IVC？)に縄文時代早期後葉の遺物がそれぞれ包含されていた。

I　層　現耕土。褐色を呈し、土質はII層に類似する。

II　層　褐色土。2～5 mm大の軽石・小礫を含む。崖錐性の二次堆積物。

III　層　暗褐色土。砂・小礫を若干量含む。小支谷状をなすか所にのみ認められ、腐植化が顕著。

IV　層　黒褐色土。スコリア質軽石を均一に含むほか、下部を中心に小～中礫大の風化した石英安山岩片を塊状に含む。基質に異質物が多く混ざることから、二次堆積物とみられる。

IVB層　黒褐色土。小礫大のスコリア質軽石を多く含む。部分的に塊状・層状に入るが、淘汰悪く角礫状を呈すことから降化堆積とみられる。また、その下部に最大1 cm程の厚さに青灰色の火山灰の堆積を伴う。

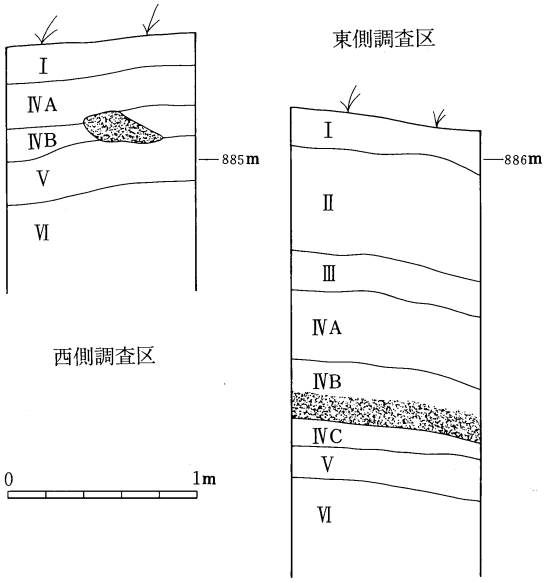


図3　基本土層

IVC層　黒褐色土。スコリア質軽石を含まない点をのぞきIVB層に似る。比較的強い粘性をもつ。

V　層　暗褐色土。ややオリーブ系の色調を呈す。小～中礫大の風化した石英安山岩片を塊状に含むほか全体に大形礫など異質物を多く混入する。風化による粘土化が著しい。

VI　層　混礫二次堆積ローム土層。

4　遺構と遺物

東祢ぶた遺跡北端付近を対象とした今回の調査によつて確認された遺構と遺物は、縄文時代住居址2軒、同屋外埋甕1基、同焼土址2基、同土坑1基、平安時代住居址2軒、同土坑3基、さらに総数1700点を超える縄文時代の遺物などである。それらは各時代各時期によって遺跡内での占有のあり方をさまざまに変えながら存在していたことが確認された。以下、本節では縄文時代から平安時代まで時代を追って個別具体的な説明を行う。

(1)　縄文時代の遺構と遺物

ア　住居址

1号住居址（図4・5、PL60）

調査区北東端付近IVBE－01グリッドを中心に確認された。検出層位は大礫が多数露出するV層～VI層にかけてである。長径4.2 m、短径3.8 mの不整楕円形を呈するものの、東壁が失われており全体の形状については推測の域を出ない。埋甕埋設部が若干張り出していることや帰属時期から、柄鏡形住居であった

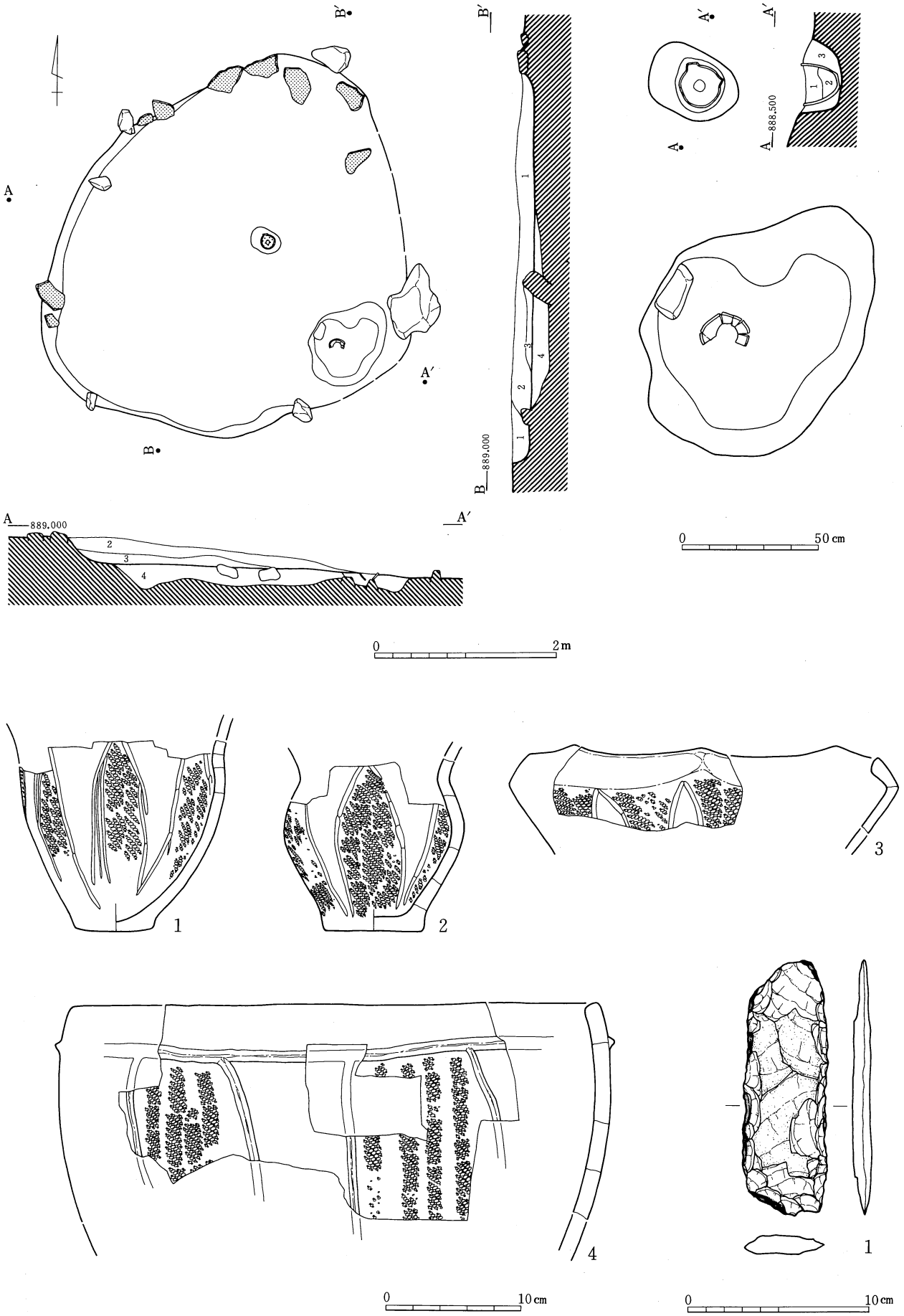

A
A′
B
B′
A
A′
B
B′
A
A′
889.000
888.500
889.000
0
2m
0
50cm
1
2
3
4
0
10cm
0
10cm

図４　１号住居址（１）

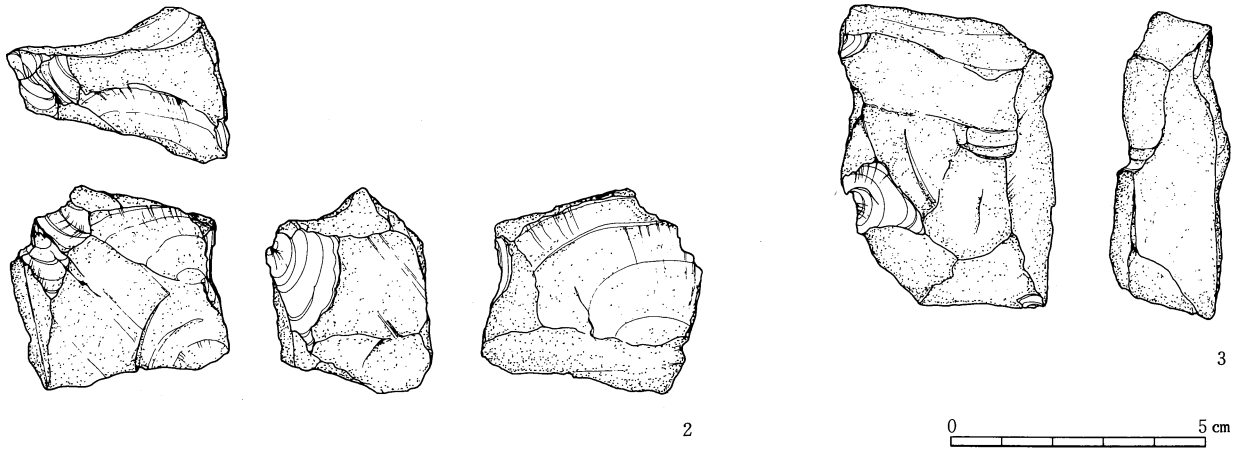


図5　1号住居址（2）

ことも充分に考えられる。覆土は3層に分けられ、1層：暗褐色土、2層：黒褐色土(風化礫多含)、3層：黒褐色土であった。おおむね基本土層のⅣA層およびⅢ層土に対比される。また、覆土中には土器破片が多数遺存していた。総数69片・6,160ｇをはかる。

床面は深さ10～15cmほどの掘り方を黒褐色土により埋め戻している。北壁より中央にかけて若干傾斜をもち所々地山礫が露出するものの、全体的には平坦に整えられ比較的硬くしまる。北壁下を中心に散在的に扁平な石が敷かれ、一部は壁に沿って立てかけられる。住居中央には埋甕炉が、南東部のやや張り出す位置には埋甕がそれぞれ埋置される。埋甕炉は深鉢形土器の胴下半を用いており、炉内・掘り方ともに黒褐色土が充満していた。焼土・炭化物などは検出されていない。埋甕は深鉢とみられる土器の底を抜いて、底部付近のみ埋設している。地山礫を除去したためか不整形の大きな掘り方をもつ。覆土はスコリア質軽石を含む黒褐色土。位置・形態などから出入口部埋甕と考えられる。柱穴・周溝などは検出されなかった。

遺物　本址からは埋設土器も含め73片・7,320ｇの土器が出土した。すべて縄文を地文とする一群である。1は埋甕炉に用いられていた土器。2は床面に遺存していた土器で、それぞれ胴下半に逆「V」字状の区画文を有する。3・4は覆土中より出土した土器。3は「く」の字状に内傾して無文帯となる口縁部に「W」字状の区画文を有するとみられる。4は隆帯によって区画された縦位の縄文帯と無文帯とが交互に繰り返される大形の深鉢形土器。石器類は図示したものがすべてである。1は安山岩製の打製石斧。短冊形で扁平なつくりであり、側縁部から刃部に両面加工が施される。2・3は黒曜石の原石。ともに夾雑物を含まない良質な石材であり、3は60ｇと最大なものである。

時期　出土遺物より、本址は中期後葉、加曽利ＥⅣ式期に構築・廃棄された住居と判断される。

2号住居址（図6、PL61）

1号住居址より南南西に5ｍほど離れたⅣＢ－Ｄ05グリッドを中心に位置する。Ⅳ層下部において検出されたが耕作による攪乱のため残存状況はきわめて悪く、敷石の一部が確認されたにすぎない。南東部をすべて失っており、また壁・柱穴なども検出されなかったことから、当初の規模・形状については不明である。ただし、残存する敷石面周囲の地山礫が抜かれて整地された状況を呈すことから、抜去されなかった大礫に囲まれた方形状の範囲が本址プランの一部と捉えられよう。炉址・埋甕などは残っていないが、敷石の状態や想定される時期から、本来は柄鏡形の敷石住居址であったとも考えられる。

遺物　加曽利ＥⅣ式土器の小破片1点が出土したのみである。

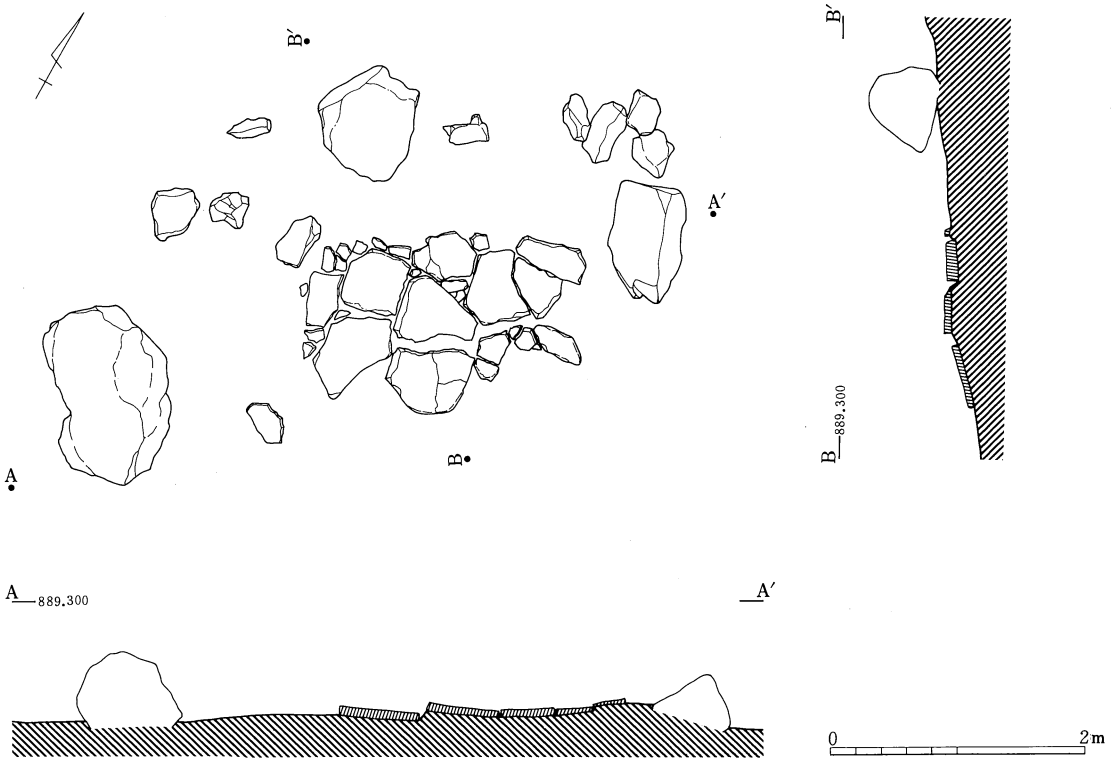


図６　２号住居址

時期　遺構・遺物の属性から、本址は中期後葉、加曽利ＥⅣ式期の所産とみられる。

イ　屋外埋甕

１号単独埋甕（図７、PL61）

調査区北西寄り、遺物集中出土箇所の東に接して位置する。検出層位はⅣＡ層上部～上面であり、一部はⅢ層に覆われていた。当初住居址に伴う埋甕とも考え周囲を精査したが、炉址や柱穴が存在しなかったことから、屋外埋甕と認定し調査を行った。径86×60cm・深さ25cm をはかる不整形の掘り込み内に、深鉢形土器を正位に埋設する。土器は東南方向(斜面下方)に向かって若干の傾斜をもち、底部は掘り込み底にほぼ接する。土器内に充満していた土は基本土層のⅣＡ層に近似し、自然流入土と観察された。掘り込み内覆土は同ⅣＡ～Ｖ層土を基調として埋め戻されたとみられる混合した土であった。このことから土器は掘り方内に埋設されたものの、完全に被覆されつくされることなく開口状態に置かれていったことが推定され、これはまた検出層位が遺構外遺物の出土状態から考えられる当時の生活面と一致することからも間接的ながら裏付けられる。

本址に対しては全リン酸・全カルシウム分析を行った。リン酸については埋設土器内部と掘り方覆土最上部とが高い値を示し、カルシウムについては埋設土器内下部と埋設土器直下の坑底および地山とが高い値を示した。とりわけ、埋設土器内下部（２層）の土壌はすべてについて最高値を示す。

遺物　埋設土器は、内湾する口縁下に最大径をもち、胴中位のくびれを介してゆるやかに底部へ移行する。口縁下に沈線を一条めぐらし、以下曲線的な「W」字状・「V」字状の区画内にＬＲ単節縄文が充塡施文される。推定高27cm をはかる。

時期　埋設土器から、本址の時期は中期後葉、加曽利ＥⅣ式期に求められる。

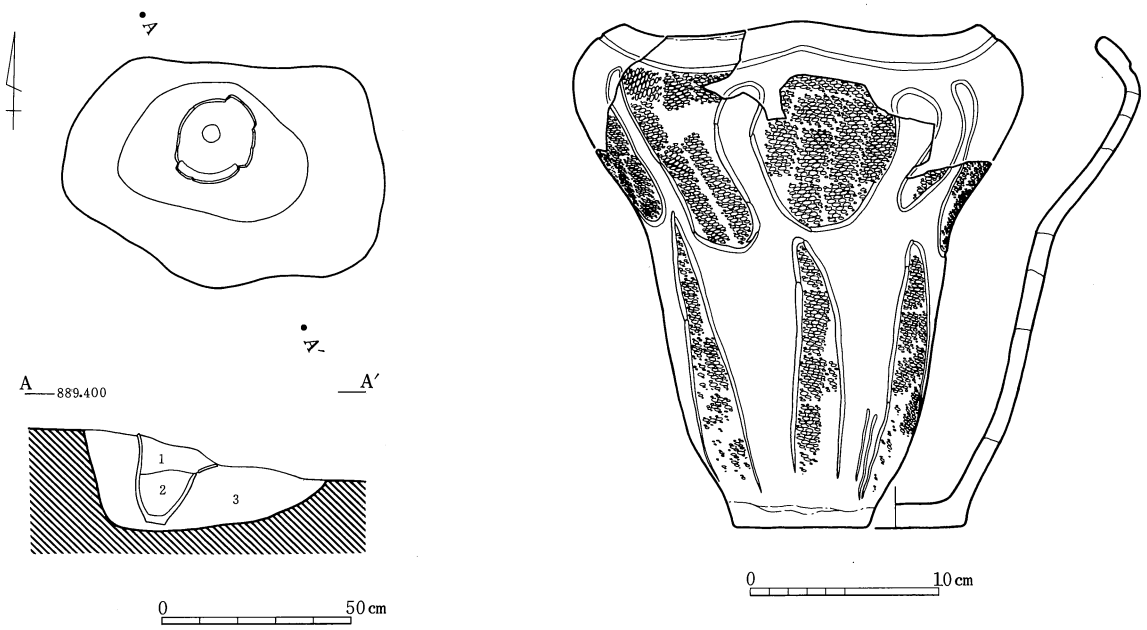


図7　1号単独埋甕

ウ　焼土址

1号焼土址（図8・9）

ⅣA－D09グリッドに位置し、遺物集中箇所Ⅲbの中に存在する。検出層位はⅣA層上部。95×70 cmほどの範囲に不整形に焼土の広がりが認められた。地山との境は明確ではなく、平面形は焼土の広がりによってのみ捉えられる。周辺部ほどぼやけた状況を呈し、断面においても掘り込みをもたず地山が焼土化した様子がうかがえる。焼土化した厚さは検出面より10 cmほどをはかる。屋外炉的なもの、あるいは祭祀的な性格が考えられるが、いずれにしても、遺物集中箇所の内部に取り込まれて確認された点が注意されよう。

遺物　検出面において、中期後葉の土器片が出土した(5～7)。5は波状をなす口縁部破片。6・7は細い沈線によるモチーフが描かれた同一個体の胴部破片。二次的な焼成を受けた痕跡は認められない。

時期　検出状況および出土土器より、中期後葉、加曽利EⅣ式期に帰属すると考えられる。

2号焼土址（図8）

遺物集中箇所Ⅲa内、ⅣA－I06グリッドに位置する。検出層位はⅣA層上部である。60×45 cmほどの範囲に不整形な焼土の広がりとして認められた。中心部ほど焼土化が著しく、断面も中心部が14 cmほどと厚いレンズ状をなす。1号焼土址同様掘り込みを持たず、地山が被熱を受けることにより焼土化したものとみられる。検出面周辺より中期後葉の土器が多数出土した。

時期　検出状況ならびに周辺出土土器から、中期後葉、加曽利EⅣ式期の所産と考えられる。

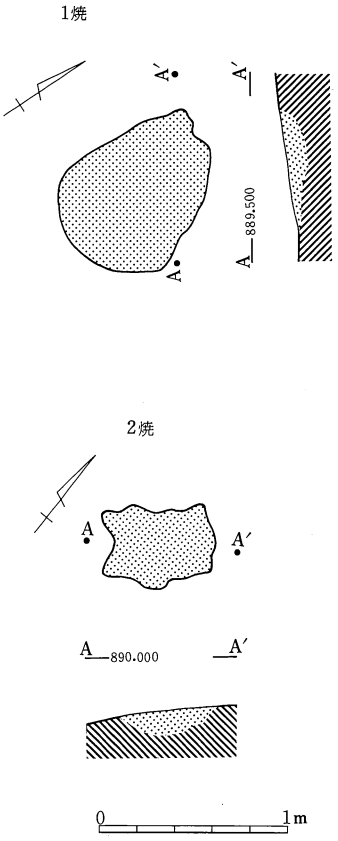


図8　1・2号焼土址

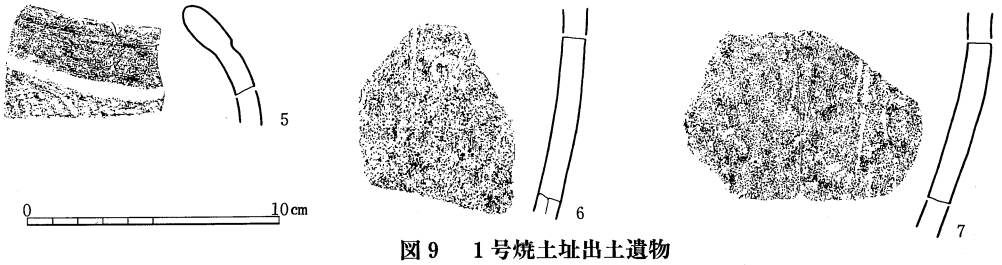


図９　１号焼土址出土遺物

エ　土坑

３号土坑（図10）

ⅣＢ―A16グリッドに位置し、南側半分を土層観察用トレンチによって切られる。掘り込み面はⅤ層上面。径70 cm 余りの円形を呈するとみられ、深さは50 cm をはかる。覆土は２層に分けられる。１・２層とともにⅤ層に対比される暗褐色土であり、１層にはロームブロックがやや多く含まれる。壁は急傾斜で立ち上がり、断面形は円筒状に近い。遺物の出土は皆無であった。時期については推定の域を出ないものの、掘り込み面および覆土の状況から、早期後葉の所産と考えられる。

また、本址の北方には４ｍ余り離れて、早期後葉、鵜ガ島台式期の遺物集中箇所が検出されている。ほぼ同時期に帰属するとみられ、両者の密接な関係が推測される。

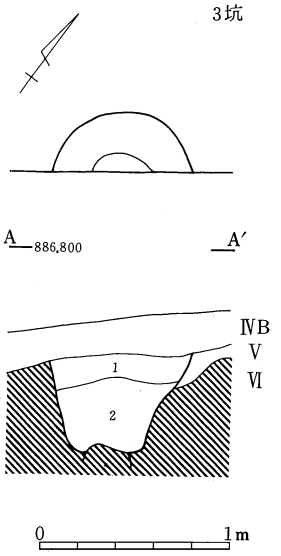


図10　３号土坑

オ　遺構外出土遺物

１）遺物出土状況（図11）

今回の調査では、検出遺構数が住居址２軒・焼土址２基・土坑１基・屋外埋甕１基という限られたものであったにもかかわらず、総数1,614片・総重量41,730ｇに達する土器と70点の石器・剥片類とが出土した。これらは7,400 m²ほどの調査範囲中、中央やや西寄りにそれぞれいくつかのまとまりを形成しながら、集中して遺存していた。時期的には早期後葉と中期後葉とに大別されるが、ここではそれぞれのまとまりを遺物集中箇所として捉え、個別的にそれらの特徴・性格について記す。

遺物集中箇所Ⅰ

調査区中央やや北東よりに位置する。本調査区の中で最も傾斜の緩い地点に占地している。Ⅴ層上面およびⅣ層最下部より、早期後葉の遺物が４×５ｍほどの南北に広がる範囲内にまとまって出土した。土器片79点（960ｇ）と石器・剥片類30点を数える。出土土器は小破片のみで器形をうかがいえるような資料は含まれないが、時期的には早期後葉、鵜ガ島台式土器によって占められ、プライマリーな出土状況を呈している。同土器は本集中箇所以外ではまったく出土しておらず、きわめて限定された範囲内にのみ遺存していたことが理解される。

石器・剥片類は土器の分布にほぼ重なるように出土し、その分布密度は他に比べ著しく濃いものであった。とりわけ、黒曜石製の絶対数量は29点（101.3ｇ）と多く、全調査区より出土したそれの70％ほどを占めている。器種としては石鏃２点、スクレイパー１点、小剥離を有する剥片６点があり、ほか剥片12点(6.6ｇ)・石核６点（37.0ｇ）・原石２点（33.1ｇ）も伴出した。石核と原石が相対的にも絶対的にも多出する傾向がうかがえ、石核については小形で不整形なものが主で３～４ cm 前後の原材に推定復元できる。小形石器以外で

図11　遺構外出土遺物分布

は安山岩製の打製石斧１点が伴う。礫面を大きく残した剝片を素材とし、やや身厚のつくりである。石核や原石が多出することや剝片類の観察結果などから、これら石器類の特性を考えるならば、黒曜石製小形石器の製作・加工の場としての可能性が指摘できる。

また、土器を含め遺物集中箇所としての性格を考えるならば、その規模および遺物のあり方から、早期後葉、鵜ガ島台式期におけるキャンプ・サイト的な要素がみてとれる。石鏃やスクレイパーなどの存在やそれらの製作址としての可能性を考え合わせると、キャンプあるいは狩猟小屋的な場を中心として、狩猟を主な対象とした活動がなされたことが推測される。さらに、打製石斧や地点を異にしていたとはいえ特殊磨石が出土したことから、この遺物集中箇所として捉えられた空間が、一過的もしくは短期の生活拠点―生産と消費の場―として機能したことが理解される。

遺物集中箇所Ⅱ・Ⅲ

ともに中期後葉の土器を主体とする遺物集中箇所（以下集中と略す）であり、一括して記述する。集中Ⅱは調査区のほぼ中央に、同Ⅲは調査区西寄りに南北に連なってそれぞれ分布する。検出層位はⅣＡ層上部～同下部である。

前者は上記した集中Ⅰの検出された緩斜面が急激に落ち込んでゆく地形変換点下方に位置する。微地形的にはやや窪んだ鞍部に当たり、分布的にも地形的にも独立したあり方を呈する。出土土器は中期後葉、加曽利ＥⅣ式土器を主体とするが、わずかに同Ⅲ式土器を含み、また後期の土器も散在する。石器としては打製石斧・磨製石斧をはじめ、一点のみ出土した浮子状石製品がある。また、他遺構との関連という点では当然１号住居址や２号住居址との関連が想定されるものの、直接的な相関関係をもつという意味では他址との関係は相対的に希薄といえる。一元的な土器・石器廃棄の場との解釈もできよう。

後者は沢によって開折され谷状となった部分が埋没して若干窪地状となった地区に位置し、前述したように斜面に沿って南北方向に長く展開する。分布状況から３地区に分割することが可能である。斜面最上部に位置する集中Ⅲａは１号屋外埋甕の西に接し、２号焼土址を取り込む形で認められる。出土遺物は加曽利ＥⅣ式土器によって占められ、石器類をまったく含まない点が指摘しうる。集中Ⅲｂは本集中箇所の中で最も濃密な分布を示す箇所である。時期的には後期初頭の土器をわずかに含むものの、ほぼ加曽利ＥⅣ式期に限定される。北寄りに１号焼土址があり、その周囲および下方に主体的な分布域をもつ。土器のほとんどは小破片であり、図上復元しえるものも数少ない。また、遺構外出土土器の過半数以上が本所から出土したにもかかわらず、石器はきわめて少なく、石鏃１点・打製石斧６点（うち4点欠損品）・磨石１点など数えるほどにすぎない。集中Ⅲｃは同Ⅲｂの斜面下方に散漫な分布をもつ。集中区として認定する積極的な根拠に乏しいが、一定の広がりをもつという点から一応設定した。主体的なあり方を呈すとは言い難く、地形に沿って扇状に広がることからも集中Ⅲｂからの流失によって形成された可能性が高い。早期後葉に帰属するとみられる特殊磨石１点が本区から出土している。

以上のように、集中ⅡおよびⅢについては、先述した集中Ⅰとは時期のみならずその性格を大きく異にする。Ⅰが生活の直接的な痕跡を色濃くとどめるのに対し、Ⅱ・Ⅲは先述したように廃棄の場としての機能が推察される。とりわけ、集中Ⅱについてはそうした場としての蓋然性が地形的な面からも帰納される。しかしながら、集中ⅢについてはⅢａ・Ⅲｂに認められたようにそれぞれ焼土址を伴い、さらに屋外埋甕を境として居住の場を考えられる調査区北東部と対峙する位置関係を保っていることからすれば、一元的な廃棄の場とのみ規定することはできないと思われる。焼土址が調理施設か祭祀施設かは考えの分かれるところであるが、屋外の単独埋甕というきわめて祭祀的な遺構と密接な関係とうかがえることからすれば、土器の消費を主とした行為とそれに伴う廃棄行為に儀礼的な側面を付加することは可能のように思われ

る。また、屋外の単独埋甕をそうした儀礼を伴う空間と日常的な住居空間とを分かつ境界標的な象徴と捉えれば、中期後葉に位置づけられる遺構群を秩序立てるため鍵となろう。

2）土器（図12～17）

前記したように、遺構外より出土した土器は総数1,614片を数え、総重量41,730ｇをはかる。時期的には中期後葉のものを中心として、早期後葉の土器や後期初頭から前葉にかけての土器がある。ここではそれらを時期ごとに大別して、個別的な説明を行いたい。

早期後葉の土器（図12－８～37）

総数79片・総重量960ｇが出土した。すべて集中Ｉからの出土である。

８～24は文様が施されたもの。共通して細沈線による曲線的なモチーフと太沈線による充塡文とによって文様が構成される。細沈線上にはところどころ竹管状工具による刺突文が加えられ、また、充塡文の端部も部分的に刺突状をなす。８・10～12・15は連続刺突文が施された断面三角形の細い隆起線が垂下する口縁下の破片であろう。９・13・14・17～19は「く」の字状に折れる段を有し、屈曲部には細隆起線がめぐる。文様はこの段により横帯区画され、13などのように無文帯をはさんで文様帯を形成する。器面は内面に条痕あるいは擦痕をとどめるものの、外面はナデ調整されるものが多い。13は内面の屈曲部を境として上半には横位の条痕文を有し、下半にはナデ調整が加えられる。

25～37は８～24など文様を有する土器の胴部破片もしくは粗製的な土器の一部とみられるもの。25～28は表裏に横方向を中心とする条痕文が、29は外面にのみ、30～32は内面にのみに条痕文がそれぞれ施される。33～37は無文の胴部破片であるが、35には横位～斜位の擦痕が認められる。

総じて、色調はくすんだ褐色ないし赤褐色を呈し、胎土に植物繊維と砂粒・小石・石英などを含む。

中期後葉の土器（図13－38～41，図14～17－44～153、PL66・67）

遺物集中箇所を中心として、総数1,588片・総重量47,520ｇの土器が出土した。器種別では深鉢形土器が主体を占め、口縁144片、胴部1,412片、底部28片の出土があり、その他広口壺の口縁が４片出土している。文様および文様要素から、縄文を地文とするもの・沈線文を地文とするもの・条線文を地文とするものの３者に大別することができる。３者の出土数量はそれぞれ、721片・29,960ｇ、57片・2520ｇ、18片・610ｇである。

以下それらおのおのについて、必要に応じて細分を加えながら概略を記す。

Ｉ　縄文を地文とするもの（38～41・44～119）

器形および文様・モチーフにより、ａ～ｇに細分される。

ａ．口縁が強く内湾するキャリパー状の器形を呈し、体部上半に「Ｖ」字状・「Ｗ」字状のモチーフを沈線によって表現するもの（44～60）。

口縁下に１条の沈線をめぐらし、以下「Ｖ」字状・「Ｗ」字状のモチーフが施される。口縁部を幅の狭い無文帯とし、文様内に縄文を充塡施文する。47・51・52は横位にめぐる沈線下のみ施文方向・施文原体を変え、文様帯としての意識を残す。小破片が多く確認には至らないが、波状口縁をなすものが主体的とみられる。口唇部形態は54など丸頭状を呈するものもあるが、ほとんどは端部がやや肥厚した角頭状を呈す。50・51は上端部が外反ぎみに直立する。60は極細の鋭い沈線によりモチーフを描くが、縄文施文が欠落して沈線文のみとなる。

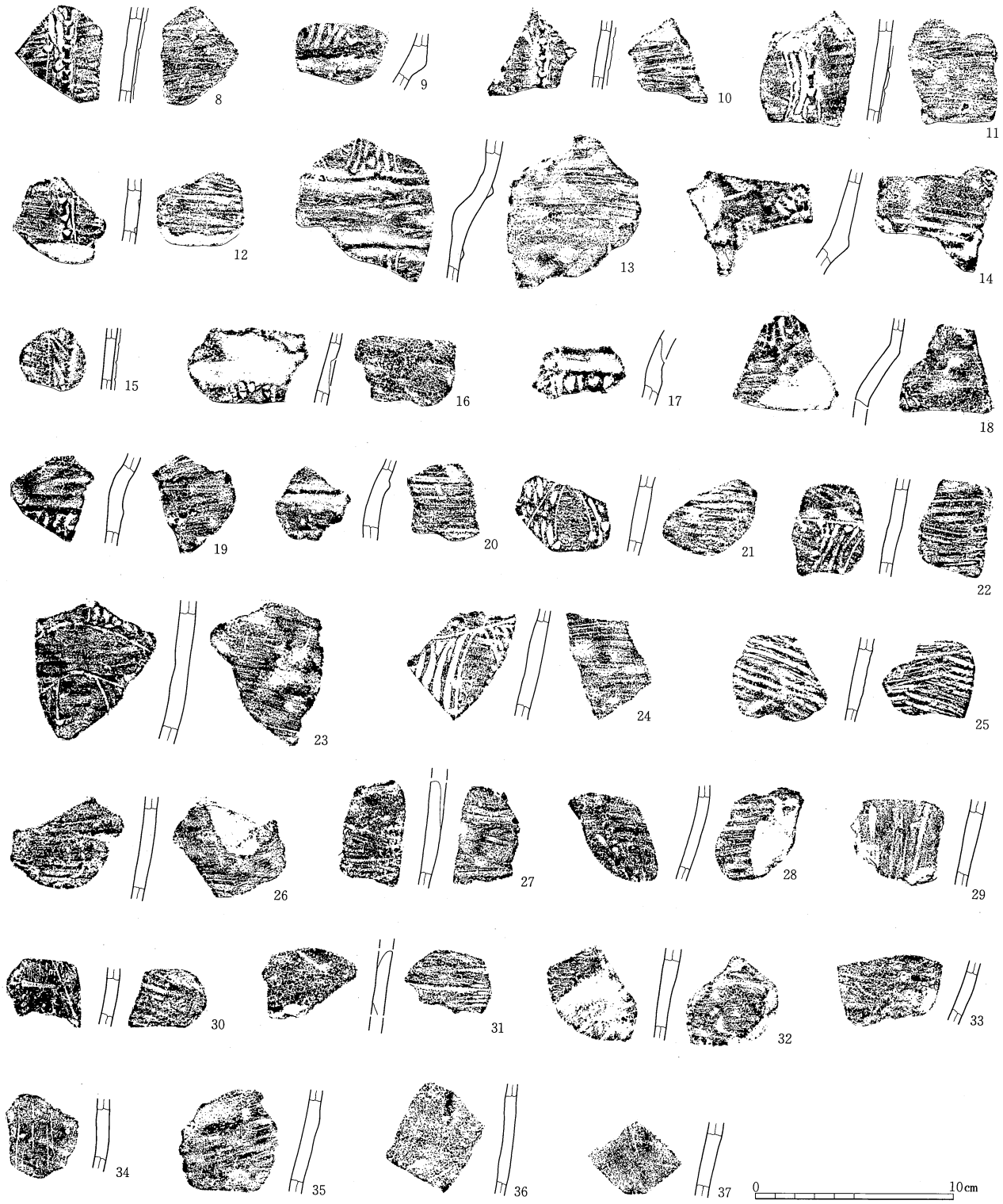


図12　遺構外出土土器（１）

ｂ．口縁下に隆線を１条めぐらし、以下「W」字状・逆「U」字状などのモチーフが沈線により施文されるもの（61～68）。

44～60に比べやや大形の土器によって構成され、器形的にも口縁の内湾が弱く平縁のものが多い。口唇部形態も丸頭状や尖頭状に近いものによって占められる。また66～68のように108～110など隆起線文によって文様を構成する一群に近いものもあり、これらは胴部モチーフも逆「U」字状・縦位区画文を呈し、他とは趣きを異にする。

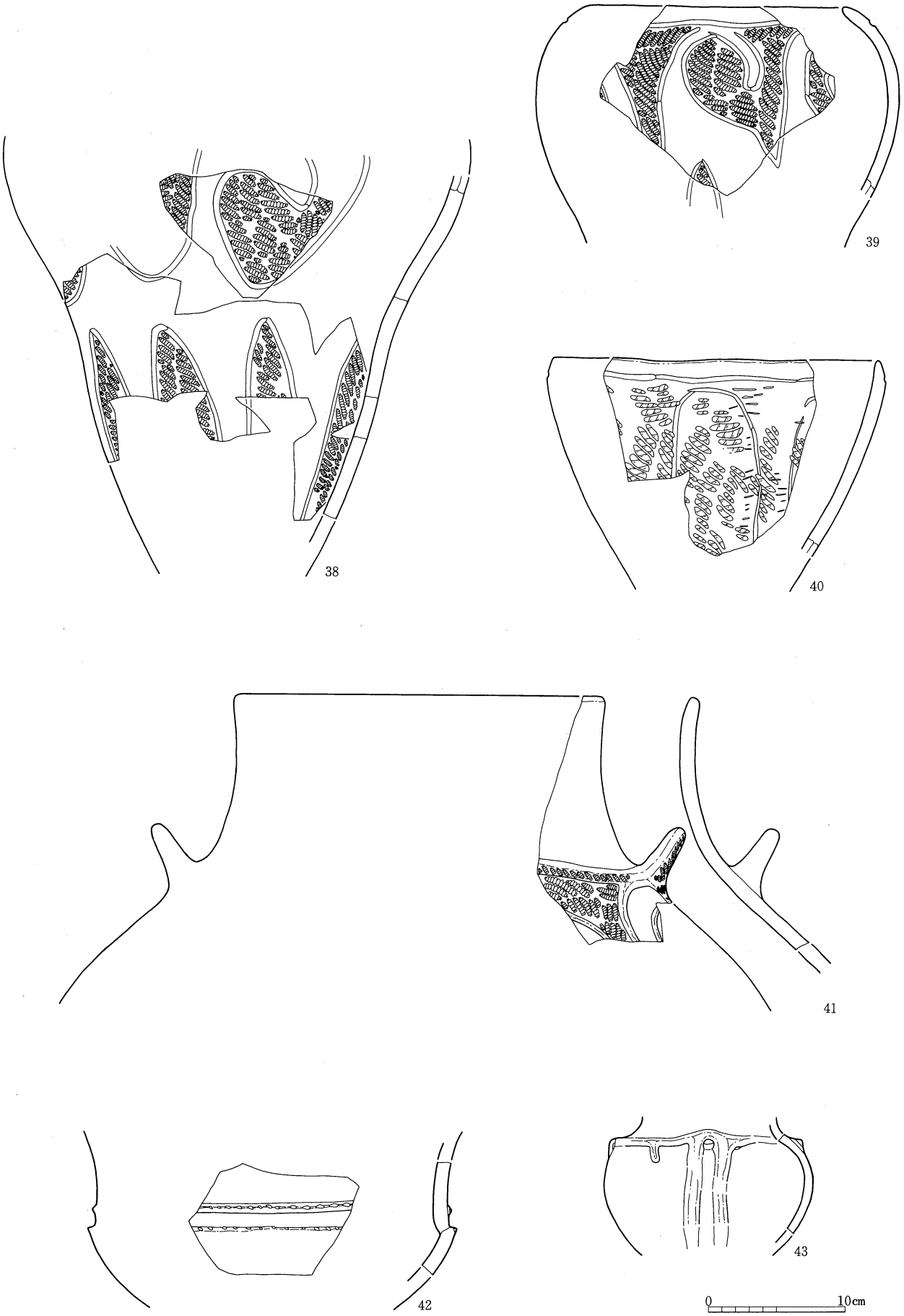


図13　遺構外出土土器（2）

ｃ．口縁が内湾するキャリパー状の器形を呈し、体部上半に「V」字状モチーフとともに、あるいは独立して渦巻状のモチーフが沈線によって表現されるもの（38・39,69～93）。

38･39は体部上半に端部がふくらむ特徴的な渦巻き状モチーフを連ね、下半には逆「V」字状のモチーフが連続するもの。39は口縁下のみ充塡する縄文の施文方向を変えている。69・70は波頂部に橋状の把手を有する個体であり、70は方向を変えて多段化する。70･71など口縁下に沈線をめぐらすものとともに、72～75のようにモチーフの単位が独立するものも認められる。72は胴下半までのびる逆「V」字状の区画文をもつかもしれない。78は口縁下に１条の沈線をはさんで連続刺突文を２条めぐらすもの。波頂下には橋状把手をもつとみられる。81～83・90～93は大柄な渦巻状モチーフをもつ。やや大形の深鉢形土器の胴部とみられるが、90･93などモチーフの描き方が稚拙で弱々しい個体を含み、時間的に後出的な要素もみてとれる。

ｄ．ａ～ｃの胴部破片とみられるもの（94～105）。

94～97は体部上半、98～105は同下半の破片。胴部のくびれを境として、上下２段にモチーフが分割施文される。体部下半のモチーフはおおむね逆「V」字状を呈するものの、105などは粗雑でやや乱れた観を受ける。

ｅ．沈線による逆「U」字状のモチーフを連続的に施すのみのもの（40）。

40は口縁から胴部へゆるやかに移行する深鉢形土器。口径推定24cmをはかる。口縁下に一条の沈線をめぐらし、体部に粗雑な逆「U」字状モチーフを連ねる。地文となる無節縄文は沈線施文後、口縁下を除く器面全体に施文される。

ｆ．短沈線による充塡文が併用されるもの（106）。

図示した１片のみの出土である。106は縄文を地文として、曲線的な沈線区画文の内に短沈線文が充塡される。

ｇ．隆起線により文様・モチーフを描くもの（44・107～119）。

44は口径推定26cmほどをはかる広口壺。球胴状にふくらむ体部に直立ぎみにつぼまる口縁部がつく。肩部に隆起線をめぐらし、以下同様な隆起線により曲線的なモチーフが描かれる。また、耳たぶ状の突起も付加される。

108～110は口縁下に隆起線文をめぐらすもの。108・109は波状口縁をなし、隆起線は波頂下で弧状に口端へ接する。器形は口縁上部がゆるく内湾ぎみに立ち上がることから、キャリパー状の形態をなすと思われる。111～119は直立する口縁から直線的に底部へ移行する大形の深鉢形土器。口縁下に幅の広い無文部を帯状に残して隆帯をめぐらす。体部には同様の隆帯を間隔をおいて垂下し、隆帯文間の交互に縄文を充塡する。幅広な無文部と縄文部とを交互にもつが、113のように隆帯を起えて縄文施文されるものも存在する。

II　主として沈線文を地文とするもの（120～147）

120は楕円区画文および渦巻文による口縁部文様帯を有する。図示した１片がすべてである。区画内には斜行する短沈線文が充塡される。121～123は「冂」状あるいは「U」字状をなす沈線区画文が施されるもので、121・122の区画内には綾杉状短沈線文が充塡される。また、121・122は口縁下が肥厚する。124・125・129は口縁下にやや幅広の無文部を残して隆帯がめぐり、121～128は口縁下に沈線をめぐらす。体部には沈線による区画文と粗雑な綾杉状短沈線文とが施文される。

130～145は同様の胴部破片。口縁から垂下する沈線区画の中に、綾杉状ないしそれが乱れた「ハ」の字状などの充塡文が加えられる。140・141は細く弱々しい沈線により文様が描かれる。146・147はいわゆる「雨垂」状文が施された胴部破片。147には太い沈線文が垂下する。

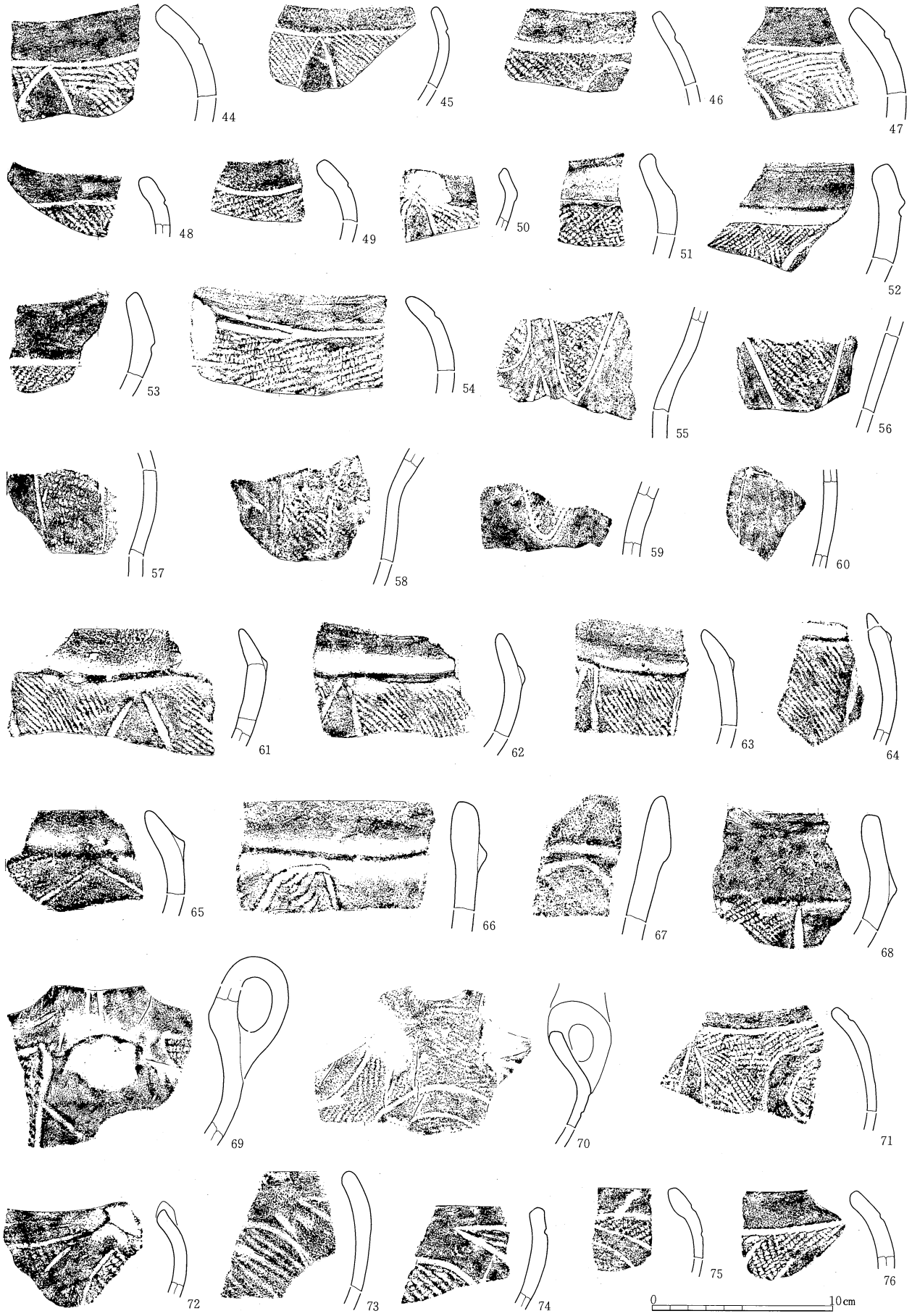


図14　遺構外出土土器（3）

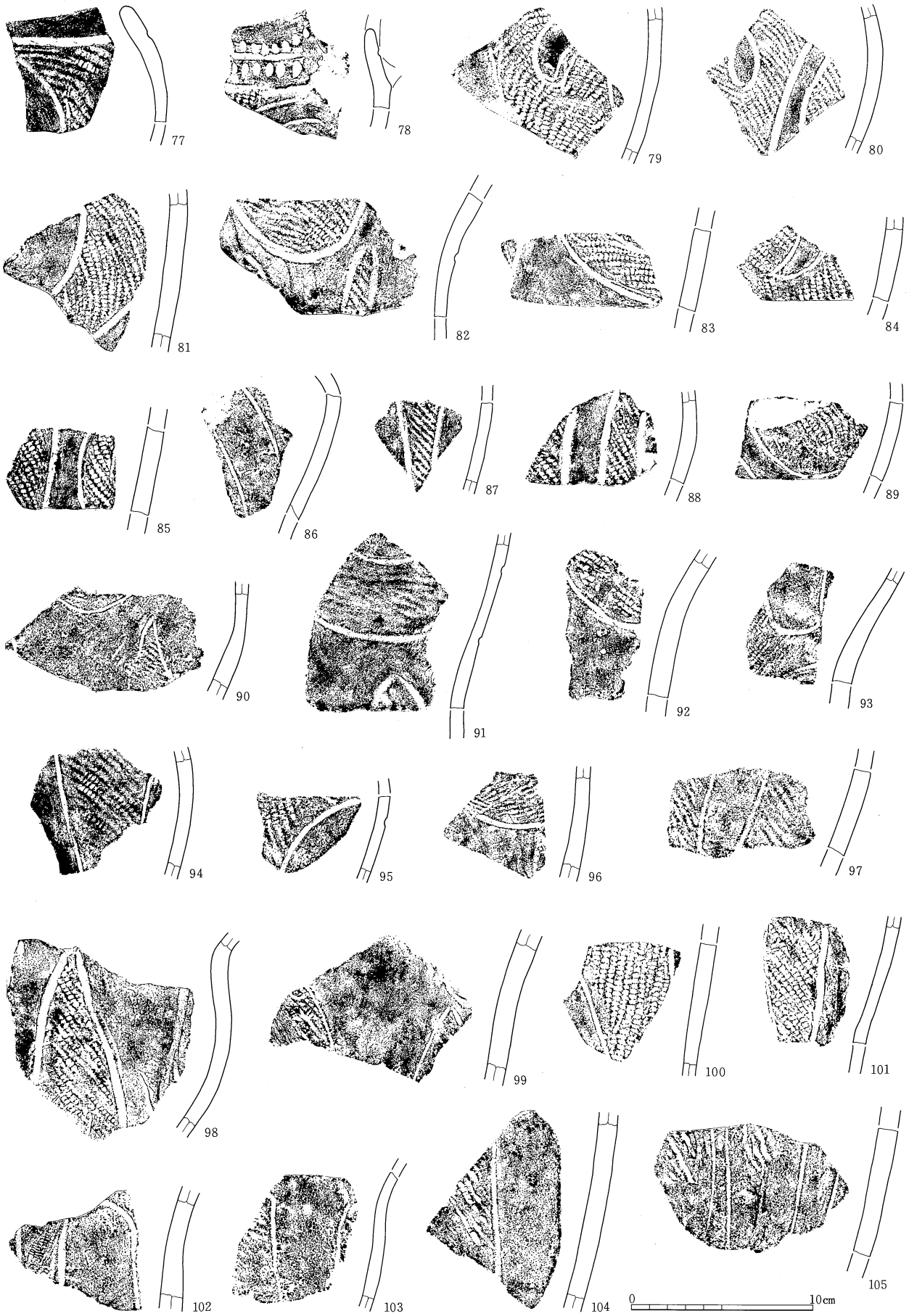


図15　遺構外出土土器（４）

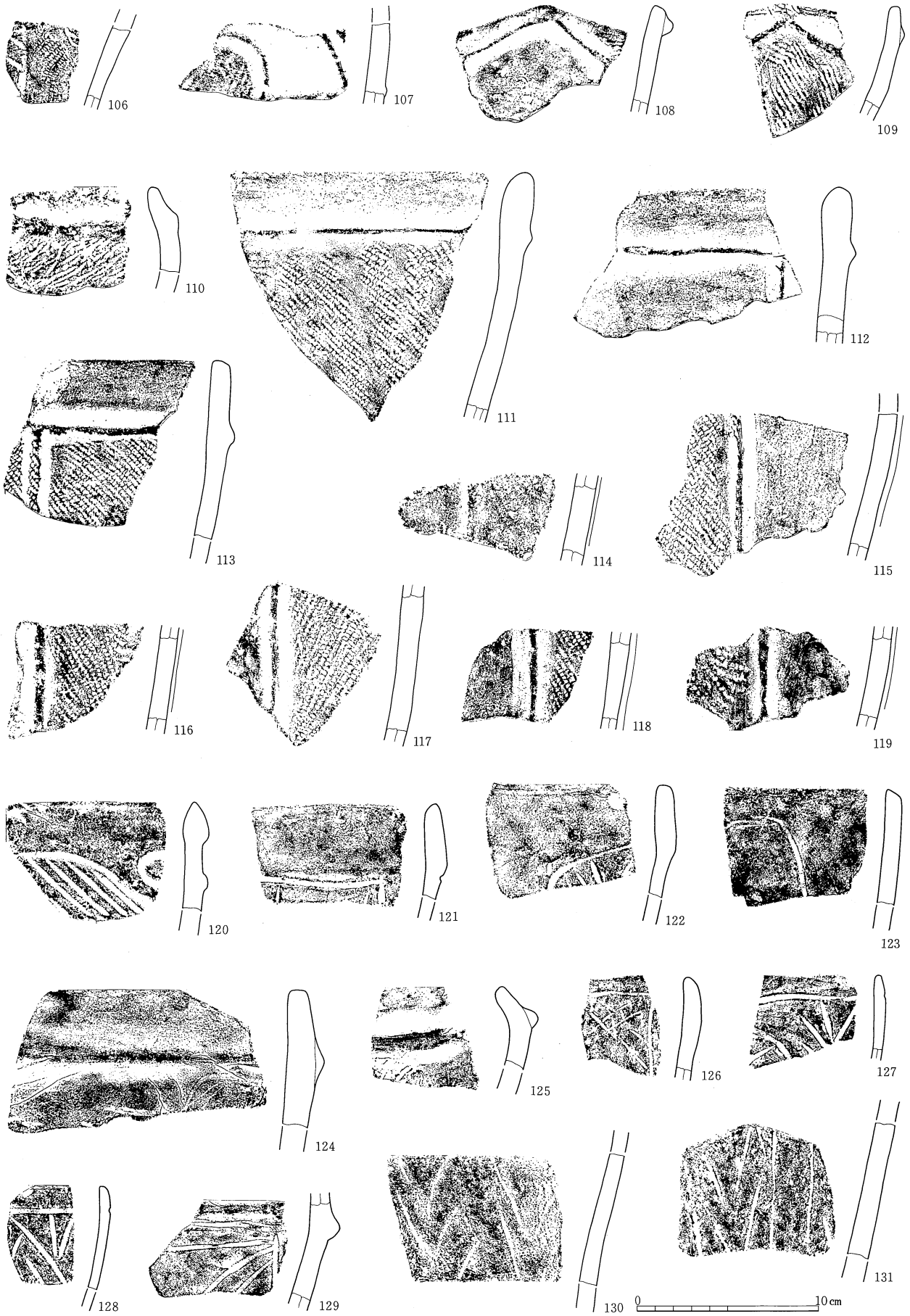


図16　遺構外出土土器（5）

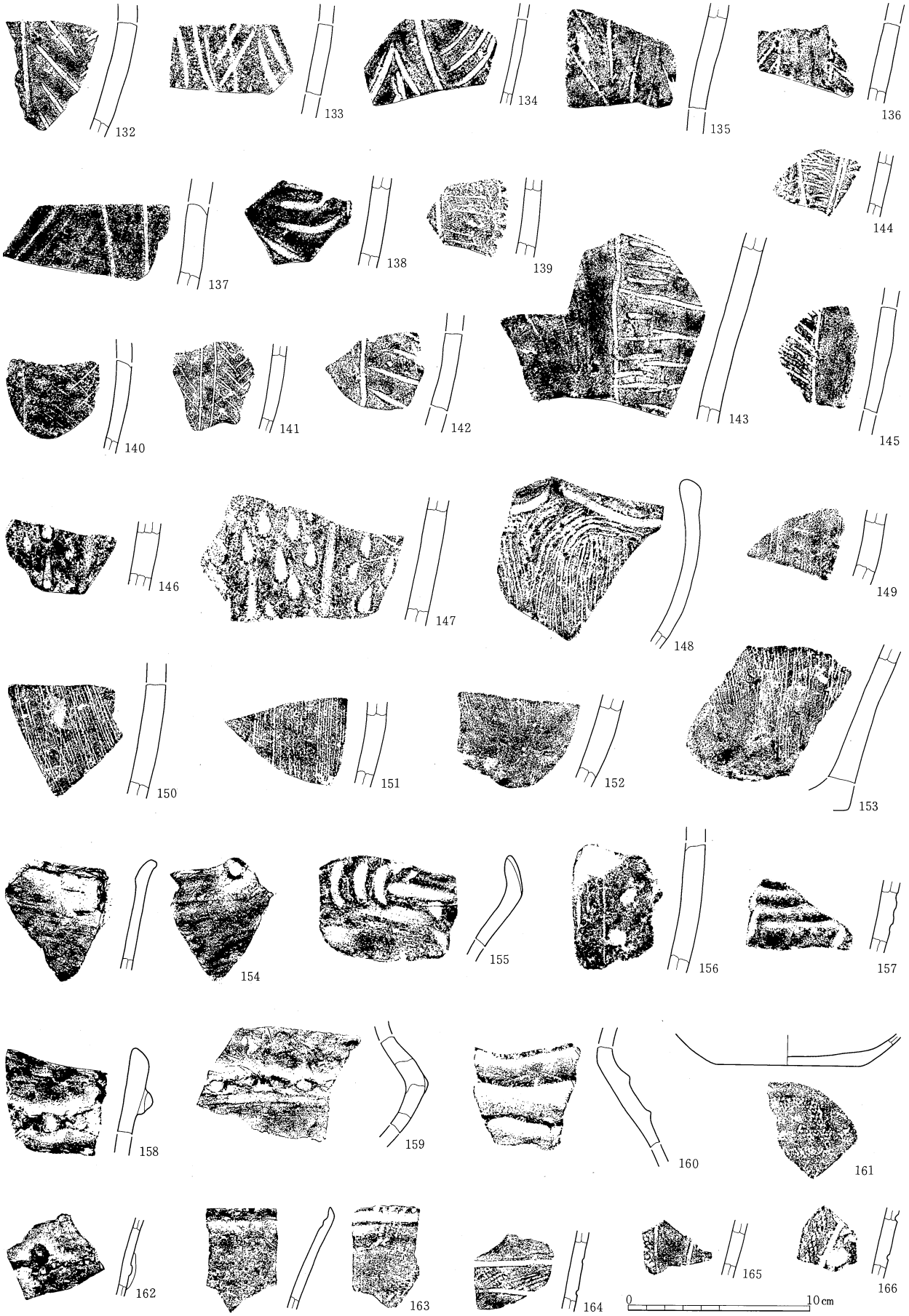


図17　遺構外出土土器（６）

III　条線文を地文とするもの（148～153）

148は波状をなす口縁部破片。波状下を若干肥厚させ、口縁下には沈線を１条めぐらす。条線は多截竹管により引かれ、逆「U」字状の区画文を意識した構図をもつ。キャリパー状の器形であろうか。149～153は胴～底部付近の破片であり、多截竹管を束ねたとみられる工具を用いて、条線を密に施文する。

後期初頭の土器

小破片のため図示しえないが、平行沈線間に縄文を充填する資料２点が出土している。称名寺Ｉ式とみられるが、小片でもあり詳細は明確にしえない。中期後葉、加曽利Ｅ式に含まれる可能性も残す。

後期前葉の土器（図13―42・43，図17―154～166、PL67）

42は特異な器形の土器であり、キザミ状の細かな連続圧痕が付された細い紐線文がめぐる。屈曲部にも同様な連続圧痕が加えられる。明褐色を呈し、胎土に川砂を多く含む。ていねいな器面調整が行われ、内外面ともに平滑である。43は球状の体部をなす小形土器。肩部に隆起線をめぐらし、一部橋状をなす部分から２条の平行する隆帯を垂下させる。肩部からは非実用的とも思える小さな橋状把手がのび、また一部隆起線内には体部に沿って穿孔が行われる。器厚５～６ mm と薄手のつくりであり、器面は研磨される。

154は外面に短かい棒状、内面にボタン状の貼り付けをそれぞれ付加された口縁部破片。内外面ともに横方向の研磨が加えられる。155は甕形土器の口縁部破片。「く」の字状に内傾する口縁下に１条の沈線をめぐらし、山形状の突起下には孤状の短沈線文が加わる。156・157は縦位・横位の沈線文によりモチーフを描くもの。156には10×６ mm をはかる堅果類の脱痕が認められる。158は口縁下に指頭状連続圧痕が加えられた太い紐帯文を有するもの。調整を含め粗雑なつくりである。159は算盤玉状の体部にだらしない紐線文を貼り付けたもの、160は隆起線文を現存２条めぐらすものであり、ともに注口土器もしくはそれに類する土器の胴部破片であろう。162は「8」の字状の貼り付け文を伴う細い紐線文をめぐらす。163はラッパ状に大きく開く深鉢形土器。内面の口縁直下に沈線を１条めぐらし、口唇部には部分的にキザミが加えられる。162・163はともに薄手・堅緻なつくりである。164～166は平行沈線間に縄文を充填するもので、幾何学的なモチーフを構成するとみられる。

154～161は堀之内Ｉ式に、162～166は同II式に相当しよう。

３）石器（図18、PL68）

表１に示すとおり、遺構外から39点の石器類と、その他剥片・石核などの出土があった。そのほとんどが遺物集中箇所として捉えた地点よりの出土であるが、共伴した土器の量に比べその数はきわめて少ないといえる。

表１　出土石器・石片類一覧

器種／数量	石鏃	石錐	石匙	スクレ	ピエス	小剥離	打石斧	大剥片	磨石斧	磨石類	石皿等	多孔石	石製品	その他	剥片　点／g	石核　点／g	原石　点／g
遺構内（点）							1										2／117.4
遺構外（点）	5			2		11	13	2	1	2			2	1	22／18.6	7／96.2	2／33.1
総重量（g）	2.5			10.4		23.1	1,414	166	112	1,657			530	3.2	22／18.6	7／96.2	4／150.5

石鏃（図18－４～７、PL68）

すべて黒曜石製の、無茎凹基鏃である。全面に剥離調整が施され、素材面を大きく残すものは皆無である。完形品１点のみで他の３点は欠損品である。

４は鏃身長14 mm と最小で脚部が丸みをもつ。５は基部への抉りが浅く、微細な仕上げ痕が認められる。６は側辺部が直状で、両脚部は鋭く仕上げられる。先端の折れ面はステップ状である。７は両側辺部がやや内湾し、微細な剥離調整が施される。ほか１点は片側辺部のみの欠損品で、厚さ２ mm ほどの扁平な剥片を素材とする。なお６は集中Ｉからの出土。

スクレイパー（図18－８・９、PL68）

８・９はともに黒曜石製で、集中Ｉから出土した。８は背面に自然面を有し、バルブの発達した剥片を素材とする。ほぼ全周縁に両面剥離調整が施されるが、平面円形状の刃部のみ表裏交互剥離調整である。また、周縁部には微細な突起が観察される。９は板状礫から得た剥片を素材とする。両面剥離調整により、急角度の刃部を作出する。左側辺部に刃こぼれ的な微細な剥離痕が認められる。

小剥離痕を有する剥片

小剥離痕を有する剥片はすべて黒曜石製である。規則的な剥離痕が連続するＩ類が１点。ほかは背面の先行する剥離面と主要剥離面がつくりだす縁辺部に、10～15 mm の微細な剥離痕が認められるもので、II類に属す。概して自然面を打点部とした薄手の剥片や砕片を素材とする。またコーン部を明瞭に残し、同心円状にリングが広がる剥片を素材とするものが多い。集中Ｉを中心として出土した。

石核・残核（図18－10）

10など黒曜石製５点が集中Ｉから出土した。また、茶色チャートと明褐色ガラス質石材とが混入する小岩塊１点が出土した。集中Ｉ出土のものは、剥離面がすべてネガティブな作業面で、その数は２～３面と少ない。また自然面が覆う割合は大きく、ほぼ３～４ cm の原材に推定復元できる。また、両極に剥離痕が観察される縦長のものがあるが、破砕かピエス・エスキーユか判別できない。

原　石

集中Ｉ出土で、ともに黒曜石である。角礫と板状のもので、27 g・28g と小形である。

打製石斧（図18－11～16、PL68）

すべて安山岩製である。素材の礫面や主要剥離面を大きく残し、調整加工が側辺部と刃部に集中的に施される。分厚い素材に粗い整形がなされるもの（16）と、板状節理の薄手な素材に簡便な調整を施す５点（12～14）とがある。11・14は側辺の中央部に顕著な敲打痕が観察される。形態的には短冊形と撥形との中間的な形であるが、基部と刃部との幅に大差なく短冊形といえる。14は中央がややくびれる。欠損品が６割を占め、接合する資料はない。器体に直交した横方向の折れである。部位別では刃部５点・胴部２点・基部２点を数える。使用痕は刃部を主に７点認められるが、片面側に集中するものが多い（114・16）。集中Ｉより出土した16には右側辺に片寄る磨耗痕が観察され、運動方向にほかとの差異が認められる。

大形剥片石器（図18－17）

17は安山岩製で、薄い板状の剥片を素材とし、粗い両面調整加工により刃部を作出する。

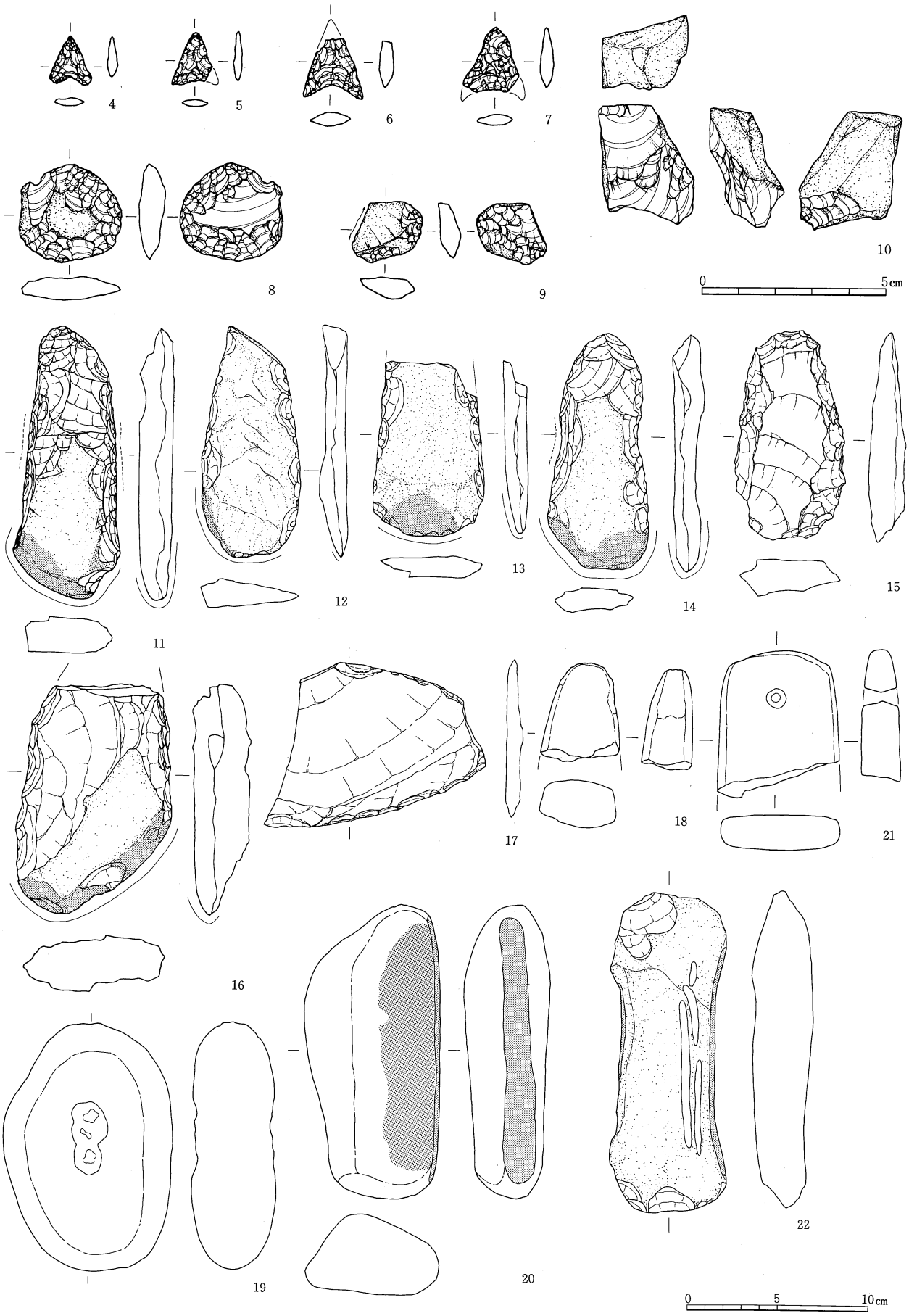


図18　遺構外出土石器

磨製石斧（図18—18）

18は輝緑凝灰岩製で、胴部から刃部を欠損する。全体に研磨されるが、基部の側面に敲打による整形痕が残る。

磨石類（図18—19・20）

19は粗面な安山岩製の凹石。両面に浅い凹みを有し、磨り面や敲打痕は認められない。20は安山岩製の特殊磨石。機能面の磨耗は著しく、表裏両面に磨り面が観察される。

その他、軽石製の浮子(21)と特殊な棒状石器(22)がある。21は扁平で長方形状に整形され、径10mmの孔が両面より穿たれる。22は粗面な安山岩製で、両側面は研磨されている。“握り”として適度な厚さである。上下両端の表裏に大きな剝落痕が認められ、また片面には深さ4 mmほどの溝が長軸に沿って認められる。

(2)　弥生時代の遺物

弥生時代に帰属する遺構は検出されなかったが、縄文時代の遺構・遺物が顕著に認められた西側の主要調査区と沢を隔てた、東側の調査区よりまとまった遺物が出土した。出土層位はIII層上面である。

器高70 cmを優に越えようかという大形の壺形土器の破片が多数出土しているが、接合状況が芳しくなく図化には至らなかった。

無文の胴部破片がほとんどで、わずかに口縁部1片・頸部2片が含まれているにすぎない。胴部下半に鋭い屈曲を有し、また無文の単口縁を呈すようだが、全体の器形は不明である。頸部破片には横線文状の櫛描文の一部が認められる。外面および口縁部内面はていねいに研磨されているものの赤色塗彩を欠く。不明な点が多いが、胴部下半の形態的特徴から弥生時代後期後半に位置づく可能性が高いと考えられよう。

同時期と思われるものに、櫛描波状文を施した甕の頸部破片1、赤色塗彩された壺の胴部破片3（ただし同一個体）を認める。

この他該期の遺物と思われるものに磨製の石製品がある(図19—23)。厚さ2 mm程と薄手のつくりであり、粘板岩質の石片を利用している。表裏に横方向の研磨痕を明瞭にとどめ、鋭い刃部を作出する。刃部は直交する研磨により研ぎ出されており、無数の細密な線条痕が観察される。弥生時代に特徴的な磨製石鏃にしては大柄で基部の穿孔をもっておらず、また同時代の石包丁としては身が薄すぎる。類例を知らず、ここでは刃部をもつ磨製の石製品とのみしておきたい。

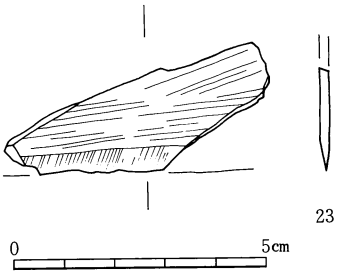


図19　弥生時代の石器

(3)　平安時代の遺構と遺物

平安時代の遺構としては、住居址2軒・土坑3基が検出された。住居址はともに調査区の北西端付近に分布する。土坑は縄文時代の遺物集中箇所が検出された調査区のほぼ中央付近にあり、一定の間隔を置いて東西に並ぶように分布する。

ア　住居址

3号住居址（図20、PL63）

調査区の北西寄り、IVA—I 02グリッドに位置する。かなりの傾斜地である。V～VI層面においてII層

土の落ち込みとして検出された。開墾および耕作に伴う削平などにより、上部は既に相当の攪乱を受けていた。

平面形態は北西コーナーに不定形な張り出しが付属するものの、ほぼ方形を呈す。規模は3.92×3.44 m、面積13.2 m²をはかり、主軸はN-85°-Eを指す。覆土にはII層土を基調とした褐色土の堆積が認められた。床面は軟弱で明確な硬化面をもたない。壁は急傾斜で立ち上がり、北壁では30 cm程の壁高をもつ。柱穴はP1～P4が相当すると思われる。径25～30 cm、深さ20～30 cmをはかる。カマドは東壁下の中央やや南寄りに確認されたが、残存状況はきわめて悪い。火床部の北寄りには袖石とみられる礫や遺物が散乱していた。

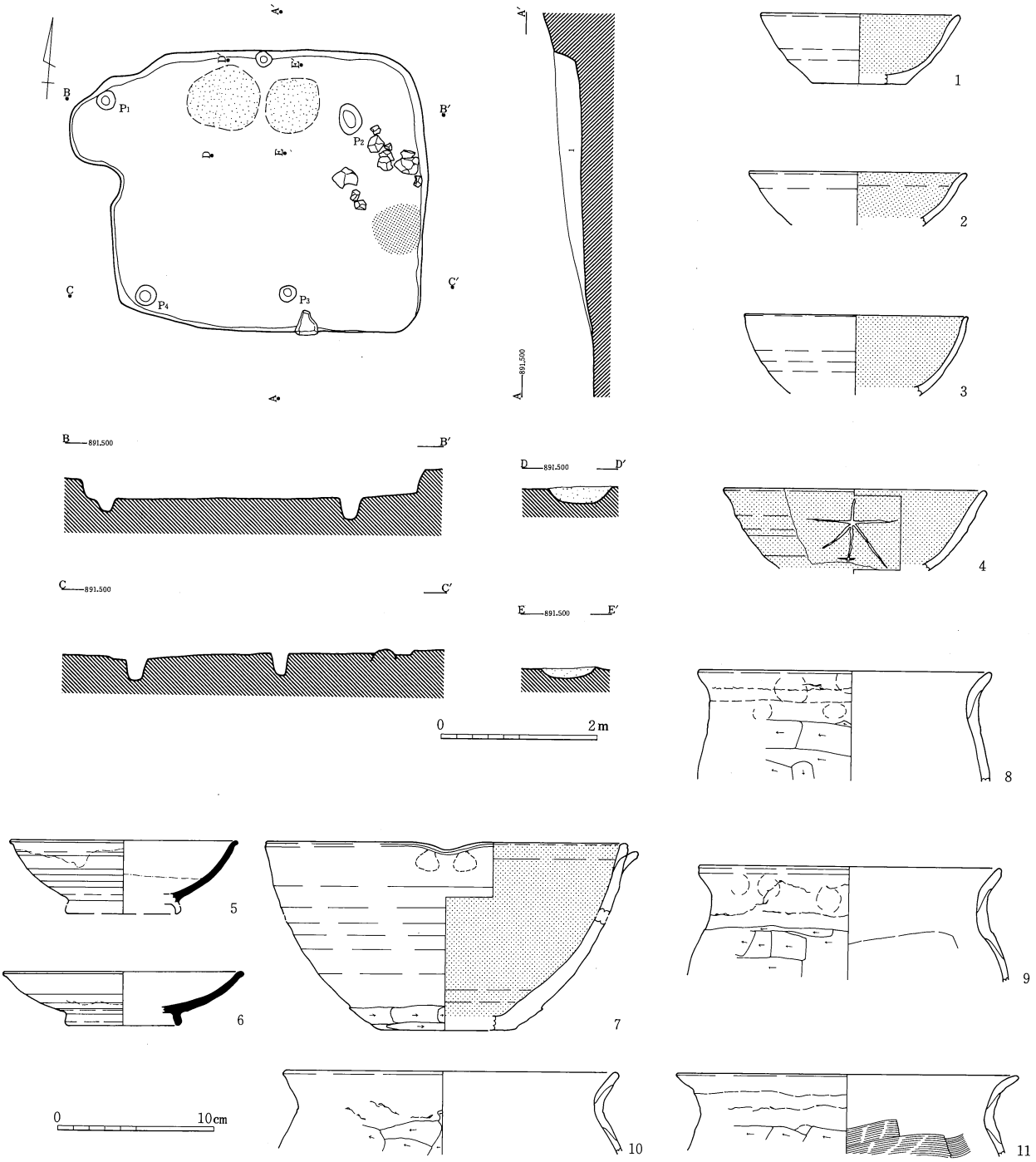


図20　3号住居址

北壁寄りの床面下には、ブロック状をなす焼土の堆積が２か所認められた。性格は不明。

遺物　出土土器の全体量は土師器甕４～５（８～10）、内面黒色坏・碗10（1～4）、片鉢１（7）、灰釉陶器碗１（5）、皿１（6）個体分が出土し、須恵器坏が２片出土している。内面黒色坏・碗・鉢は、雑でまばらなミガキが施されているが暗文状の縦ミガキは認められない。黒色処理は一部に完全でないものが見られる。甕は、頸部が短いものと無くなったものとがある。灰釉（5・6）は箆削りされ、釉薬は漬け掛けされている。

時期　甕・食器類の変化から９～10段階に相当すると考えられる。

４号住居址（図21、PL63）

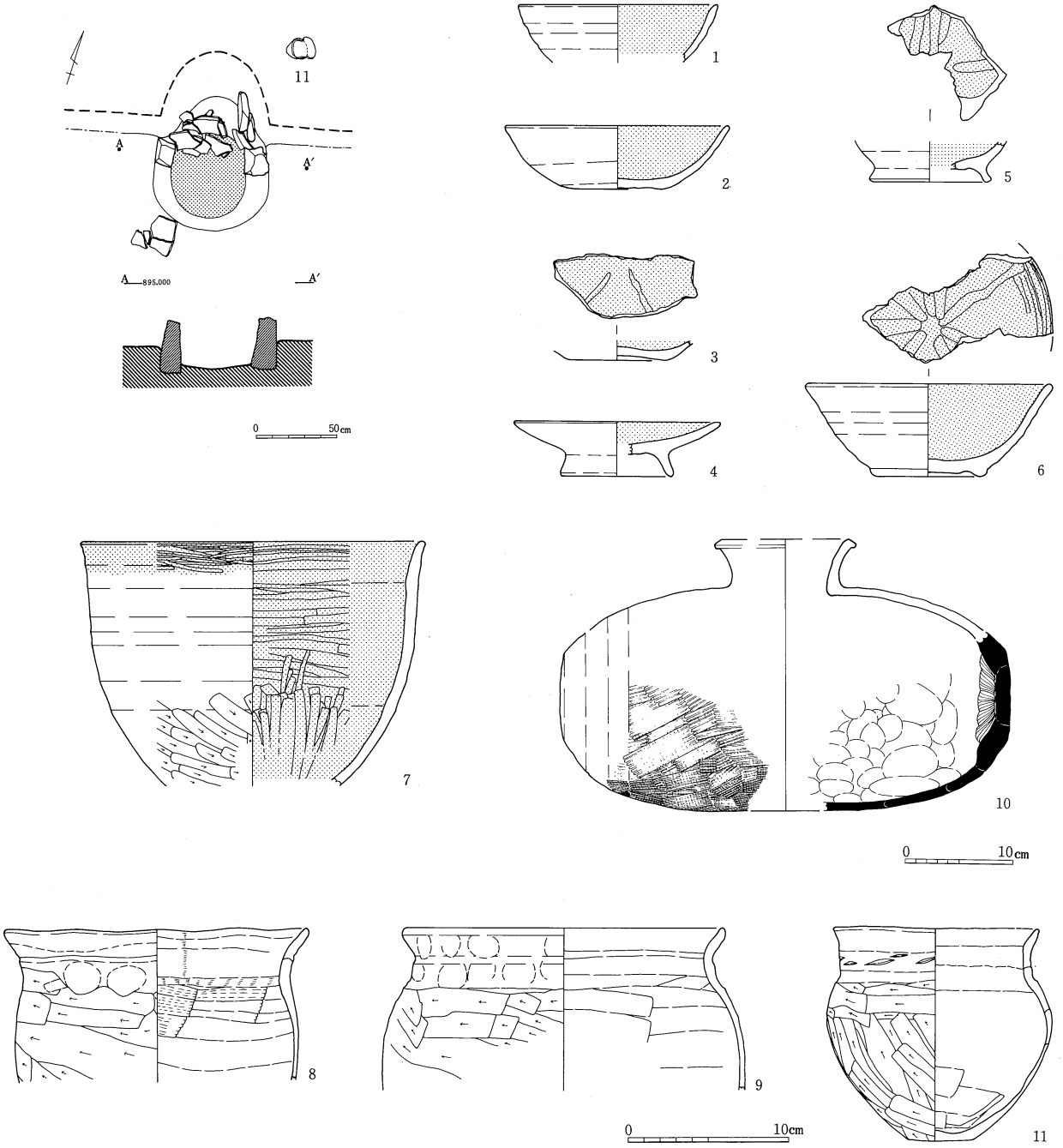


図21　４号住居址

調査区北西端部にやや離れて位置する。Ⅳ層中においてカマドのみ検出された。周辺を綿密に精査したが、壁・床など他の施設はまったく確認できなかった。規模・形状は不明と言わざるをえないが、カマドの状況からN—13°—Wに主軸をもつ北カマドの住居址と推測される。

カマドは石組みカマドであり、両袖に角柱状の石を立てる。火床部は若干掘り窪められており、一面赤橙色に焼土化していた。また、燃焼部奥寄りには火床よりやや浮いた状態で、土師器の坏と甕・須恵器の横瓶の破片が折り重なるように遺存していた。

住居プラン外と思われるカマド北側より、小形の土師器甕(11)が出土した。カマド内出土土器とほぼ同期の所産とみられることや、周囲に他の遺構が認められなかったことから、本址とかかわりのある遺物である可能性が高い。

遺物　出土土器の全体量は須恵器の横瓶1(10)・甕1、土師器甕4（8・9）・台付甕小形1、内面黒色坏5（1～3）・碗4（5・6）・皿2（4）・鉢1（7）が、住居址付近から土師器小形甕1（11）個体分が出土している。須恵器は横瓶のみで坏類は出土していない。内面黒色坏・碗・皿は1・7を除き、黒色処理されるものの痕跡のみで茶色またはくすんだ褐色を呈す。ミガキは雑なものがあり、3・4のように縦ミガキが暗文状に施されるものがある。

時期　甕・食器類の変化から9段階に相当すると思われる。

イ　土坑

1号土坑（図22）

ⅣA—O18グリッドに位置する。ⅣA層上面において検出された。プランは不整楕円形を呈し、規模は1.45×1.08 m、深さ30 cm余りをはかる。覆土はⅡ層に類似する暗褐色土であり、径20 cmほどの礫が2個坑底およびやや浮いて遺存していた。覆土中より、土師器甕の小破片が1片出土。

2号土坑（図22）

ⅣA—Q18グリッドに位置する。南半分をトレンチに切られるが、径1 mほどの略円形を呈すとみられる。ⅣA層を掘り込んで作られ、覆土はⅡ層に対比される。

4号土坑（図22）

ⅣA—Y18グリッドに位置する。不整円形を呈し、規模は1.38×1.29 m、深さ15 cmをはかる。坑底からゆるやかに湾曲しながら壁へ移行する。覆土はⅡ層対比。覆土中より、土師器甕の破片が2点出土した。

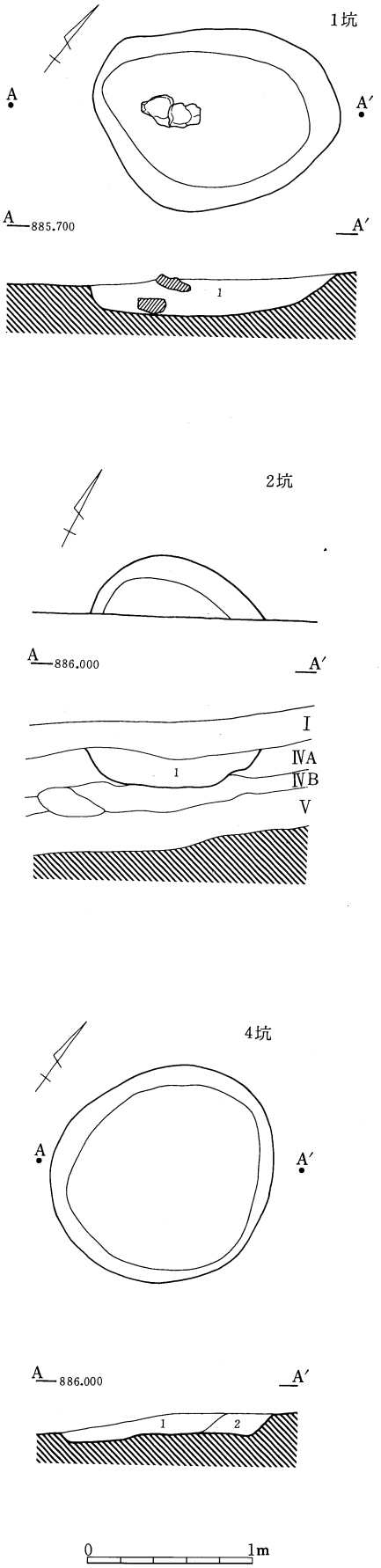


図22　1号・2号・4号土坑

5　まとめ

今回の調査をとおして、東祢ぶた遺跡北端部に相当する谷奥の傾斜地において、縄文時代から平安時代にわたる人々の営為が繰り返されてきたことが明らかになった。また、それらがきわめて断続的な営為の痕跡を残すのみであつたことは、前記してきたとおりである。しかしながら、そうした断続的な営みの姿こそが、この地に生活の拠り所たる糧を求め、また求めざるをえなかった人々の時代的・社会的な背景を端的に示すものと捉えることもできよう。

まず、縄文時代について見れば、早期後葉に生活の痕跡がはじめて認められる。遺物集中箇所Ｉとして捉えられた地区がそれであり、遺物の内容と出土状況から狩猟活動をおもな目的としたキャンプ地的性格が考えられた。鵜ガ島台式期の中でもより小期に限定されるきわめて短期的なあり方を示し、機能的にも長期にわたる集落址とはおのずからその性格を異にしている。該期における集落址の調査例は県の内外を問わずいまだ少なく、炉穴(群)などの存在を除けば、事例のほとんどが包含層からの遺物出土にとどまることが知られている。そうした中にあって、本遺跡に認められた遺物出土のあり方とそこから推測される機能的性格は、早期後葉という時代性・社会性を探求していく上で、地域的にも大変貴重な資料であるといえよう。

中期後葉になるとその終末段階において、住居址２軒とともに焼土址や屋外埋甕が構築される。また、それらと相まって遺物集中箇所として捉えられた、遺物の廃棄空間も認められるようになる。この中期終末期における遺構群も、ほぼ一土器型式の時間幅に限定される短期的な集落様相を呈することが特徴的といえる。また、それゆえにこれら遺構群が該期における集落構造の単位的なあり方を呈していると解することも可能となる。いま一度遺構群の位置関係に目を向けるならば、調査区北東端部に２軒の住居址が営まれ、それらと対峙するかのように一定の間隔をはさんで、焼土址と遺物集中箇所とが占地する。そして、後者と無遺構・無遺物の空間との境付近には、屋外単独埋甕が埋置される。２軒の住居址が検出された調査区北東部付近については、両住居址が同時に併存していたか否かは別にして、居住の場として強く意識されていたことがうかがわれる。さらに、遺物集中箇所として捉えられた範囲については、先述したとおり、それが単なる廃棄の場としてのみならず、儀礼空間としての性格をも共有する点を指摘しうる。ここできわめて重要な位置を占めるのが屋外単独埋甕の存在であり、これを介することによって一連の遺構および遺物出土のあり方を体系的に把握できると思われる。つまり、住居域を中心

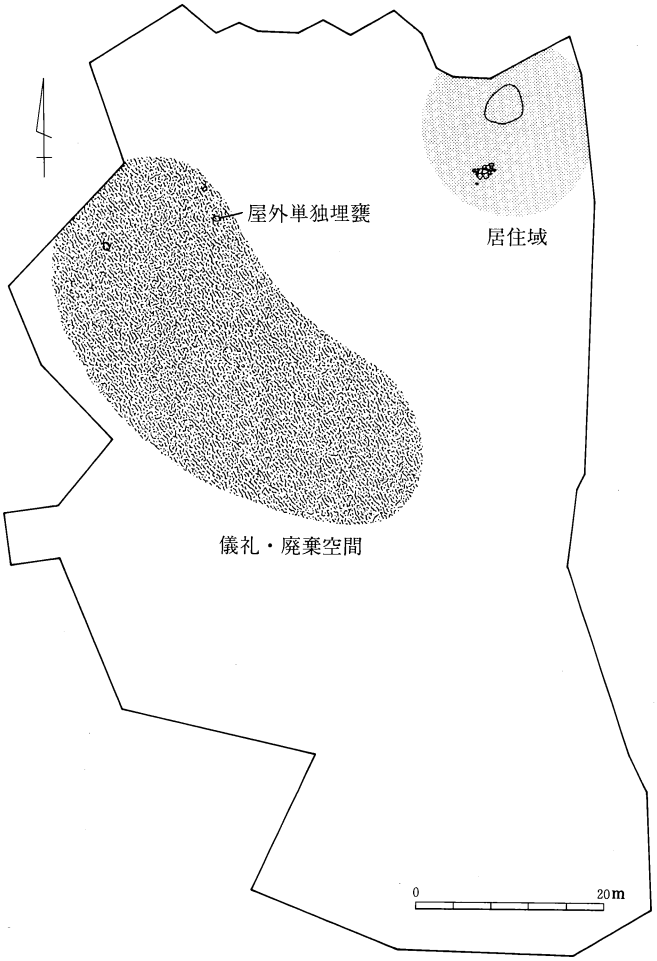


図23　縄文時代中期末遺構分布模式図

として、廃棄および儀礼的な色彩を帯びた空間(土器の消耗とその結果としての廃棄を伴う)が、広場的な意味あいをもつ空白地帯―緩衝帯―をはさんで対峙するという構造が浮かび上がってくる(図23)。その時、屋外単独埋甕は、その位置関係や調査所見から、儀礼空間と日常的な居住空間とを分かち、なおかつその関係を保障するシンボルとしての境界標として意図されていたことが推察される。集落にみられるこうした内部構造を現象化させた原理的な側面についてはここで触れることができないものの、上述のようなあり方が中期終末期における当地域の集落構造の単位的な一姿相を示していると考えられ、また、その成立要件として認知されていた空間領域を示すものと解釈される。

中期終末に比定される同時期の集落は本報告書所収の吹付遺跡からも検出されている。本遺跡例同様、加曽利EⅣ式期に相当する時期に、同遺跡では前代までの集落内占地を継承しつつも、柄鏡形敷石住居址にみられる住居構造や祭祀形態の変化、さらに場の使われ方の変化など新たな展開をみせる。東祢ぶた遺跡において認められた中期終末段階の短期的な集落消長のあり方も、そうした新たな展開と軌を一にした動きと理解される。中期終末期にみられるこのような変貌は、本遺跡・本地域に限定されるものではなく、より広汎な視点からの認識が要求されよう。

弥生時代のことについては多くに触れる資料を持ち合わせていない。しかしながら、当時水稲栽培を中心とした弥生的生産基盤の維持が困難であったと見られるこの山間の谷部で遺物の出土をみたことは、生業の問題や平地部の集落との関係を探る上で興味深いものがある。

平安時代の遺構として2軒の住居址と3基の土坑が確認されたことは既に述べたが、それらはおおむね平安時代中頃の所産とみられる。住居址はともに調査区の北西端部に位置するものの、出土遺物の比較から3号住居址の方が若干先行することが考えられる。しかし該期においてはカマドの設置場所が北壁から東壁に移行する傾向が一般に知られつつあり、住居址形態からみると、東壁下にカマドをもつ3号住居址の方が後出的といえる。また、出土遺物のうち土師器甕に限っては、3号住居址出土のものに口頸部が「コ」の字状から「く」の字状へ変化する過程での新しい要素が認められるなど、一概に住居址の新旧を決定することはできない。若干の時間差を持って構築されたとしても、両住居址は併存していた可能性が高いであろう。一方、土坑は住居址とはその占地を大きく異にし、調査区の中央付近に3基が一定の間隔で東西に並ぶように分布する。土坑それ自体の性格がいかなるものか不明であり、住居址との関係などについては同時存在が想定されること以外指摘しえない。また、土坑相互のつながりについても、その位置関係から、それぞれの存在が強く意識されながら同時にあるいは相次いで構築されたことが判断されるにとどまる。これら遺構群は、出土遺物および遺構形態などから、ほぼ9世紀後半なら10世紀前半にかけて存続したと考えられるが、この時期は山間部への集落展開が活発化する段階に相当し、佐久地方の山間集落の性格を知る上で今後貴重な資料となろう。

参考文献

斉藤幸恵　1987　『樋沢押型文遺跡調査研究報告書』岡谷市教育委員会
桜井弘人　1986　『恒川遺跡群』飯田市教育委員会
高村博文　1987　『西祢ぶた』佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター
谷井　彪ほか　1982　「縄文中期土器の再編」『研究紀要』(財)埼玉県埋蔵文化財事業団
長野県埋蔵文化財センター　1987　『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書1』
〃　1988　『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2』
百瀬忠幸ほか　1987　『殿村遺跡』山形村教育委員会
百瀬忠幸　1987　「埋甕と境界性について」『長野県埋蔵文化財センター紀要1』
綿田弘実　1989　「長野県東北信地方の中期末葉縄文土器群」『縄文中期の諸問題』群馬県考古学研究所ほか

第10節　西祢（にしね）ぶた遺跡

1　遺跡の概観

西祢ぶた遺跡は佐久市大字香坂字東地西祢ぶたに所在する。長野県・群馬県境に屹立する佐久・関東山地のひとつ、八風山から閼伽流山（あかるさん）に連なる山系の南側尾根の狭小な谷中に占地している。遺跡の範囲は南東方向に開く幅の狭い谷の谷頭部から開口部にかけて、南北約250ｍ東西約60ｍで、標高は825～890ｍをはかる。山に向かうにつれ、谷が西側に折れるため谷頭部は閼伽流山南東尾根のやや陰に隠れるかたちとなる。「佐久市遺跡詳細分布調査報告書」によれば、縄文時代、平安時代の遺物が採集されている。さらに昭和62年佐久埋蔵文化財調査センターにより、谷中の狭い範囲で発掘調査が実施され、平安時代の住居址１軒などが報告されている。また、本遺跡東側尾根上に祢ぶた城跡、さらにそれを挟んで東に東祢ぶた遺跡（第３章第９節）がある（図１）。

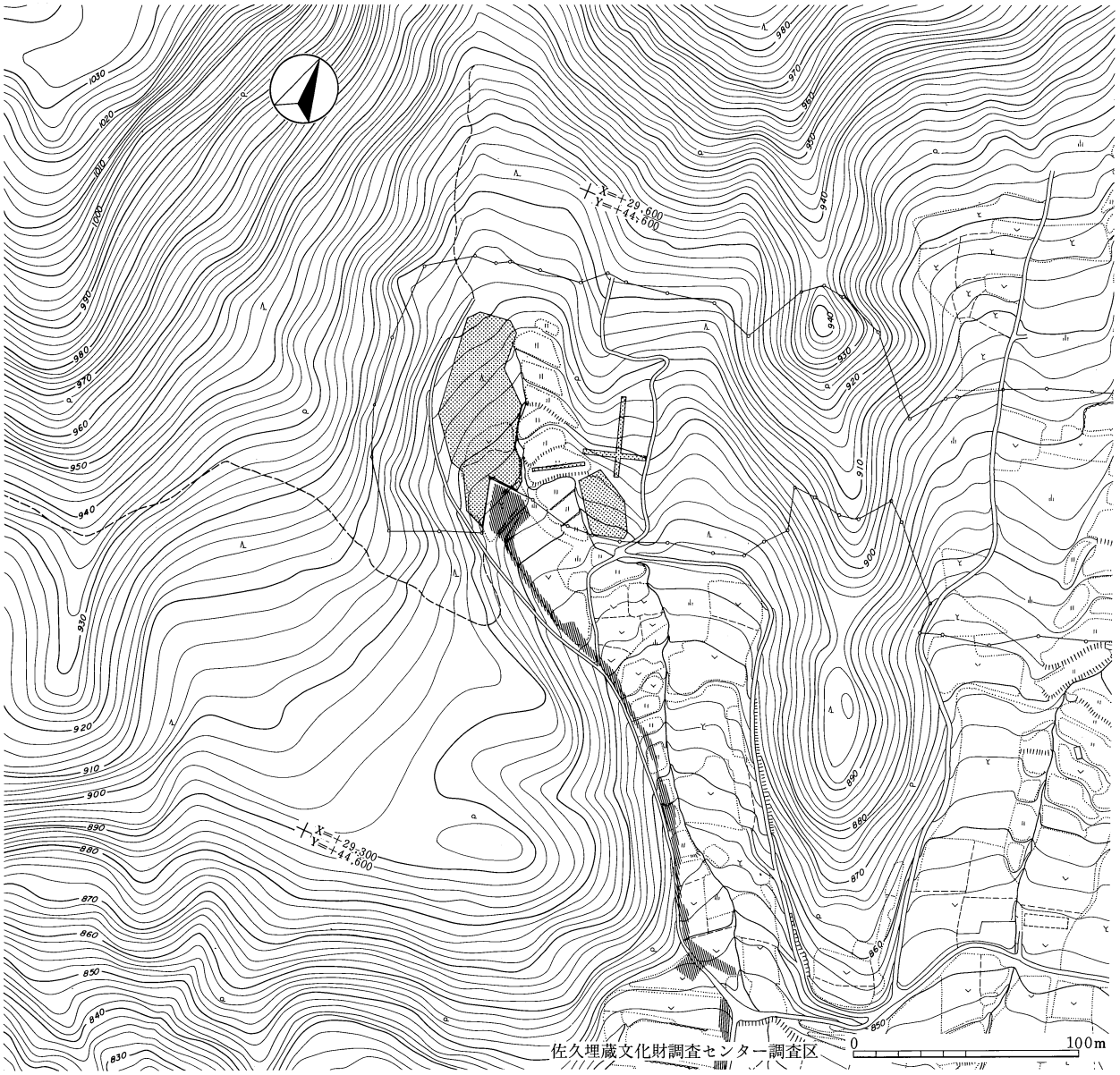


図１　地形および調査範囲（１：3,000）

2　調査の経過と概要

調査対象区域は関越自動車道上信越線建設に際し、新たに西祢ぶた遺跡として追加されたもので、遺跡の北端部、谷の谷頭部にあたる。谷の中央には沢が流れ、沢の東側に比べればやや傾斜が緩やかな西側、先に述べたように尾根の陰になった一帯が調査区となった。標高は892～878 mである。現況は東側に水田が作られ、西側は畑であった。調査対象面積は2,500 m²である。

調査期間は昭和62年８月17日～10月13日である。調査研究員５名がこれにあたった。佐久埋蔵文化財調査センターが行なった調査の結果を考慮しつつ、遺跡の概要把握を目的として、トレンチ調査から開始した。その結果、調査区南側の尾根よりで平安時代の土器片を伴う落ち込みを確認した。このため調査区全域を対象に面的調査を行う判断をし、調査区南側一帯で平安時代の住居址６軒、掘立柱建物址１棟、土坑３基を検出した。なお、北側は耕作土を剝ぐと石英安山岩の巨礫がいたるところ顔を出すといった状況で、遺構は見られなかった。そのほか、検出面で縄文時代の土器片などが若干採取された。

遺構調査終了後、検出面下の状況を確認するためⅤ層・Ⅵ層面での調査を調査区中央部で行なったが遺構・遺物とも皆無であった。さらに、遺跡範囲外にあたる、用地内にもトレンチによる試掘を行なったが新たな所見は得られなかった。

調査日誌抄

８月17日　草刈り。テント設営。器材搬入。
18日　トレンチ設定。重機による掘り下げ開始。
19日　トレンチ内精査。１号住居址をトレンチ断面で確認。
20日　１号住居址周辺をⅢ層上面で面的拡張。
21日　Ⅳ層上面を検出面とし、Ⅲ層中位まで重機による表土除去開始。
22日　遺構検出。
31日　遺構調査開始。基本土層のサンプル剝取り。
９月１日　遺跡範囲外にあたる東側用地内に確認トレンチを設定。重機により掘り下げ。
22日　航空測量、写真撮影。
24日　全体図作成。
28日　Ⅴ層、およびⅥ層まで調査区南半部重機による掘り下げ。遺構調査。
10月１日　作業員全員丸山Ⅱ遺跡に合流。
13日　器材撤収にて調査終了。

3　基本土層

本調査区が谷底部にあたることから、基本的には背後の山地からの土砂の供給により層序が形成されたと思われる。また、傾斜のきつくなる調査区北側は石英安山岩の巨礫が散在している。

基本層序は以下のとおりである。

Ⅰ層：耕作土。

Ⅱ層：黒色の砂壌土。小～中礫大の風化した石英安山岩片・スコリアを含む。しまりが悪い。沢付近の狭い範囲に認められる。

Ⅲ層：暗褐色の砂壌土。小～中礫大の風化した石英安山岩片・スコリアを含む。しまりが悪い。基質に異質物が多量に混入し、二次堆積物と思われる。なお、平安時代の遺構の立ち上がりはこの層上面まで確認される。（東祢ぶた遺跡における基本土層のⅣA層と対比される。）

Ⅳ層：暗褐色の砂壌土。下部で径３～４ mmの中性火砕物からなるスコリア質軽石をブロック状に含む。上部で砂を多少含み腐食化が認められる。おもな遺構の検出面である。

Ⅴ層：暗褐色の砂壌土。中礫大の風化した石英安山岩片を含む。粘性が強い。

Ⅵ層：明褐色土。小～中礫大の風化した石英安山岩片を含む。異質物が多量に混入し、風化による粘土化が著しい。

Ⅶ層：暗褐色砂壌土。小～中礫大の風化した石英安山岩片を含む。粘性が強い。

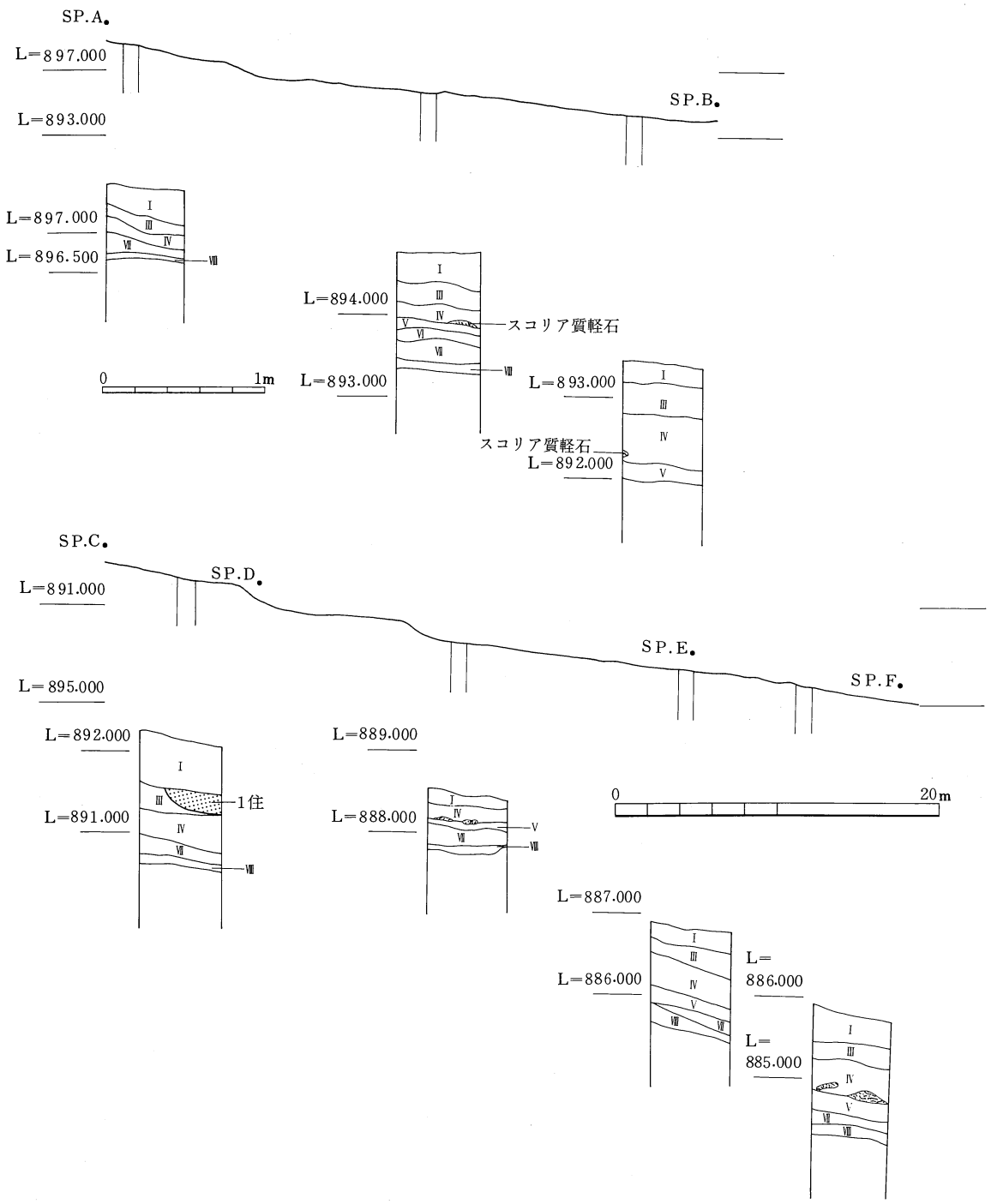


図２　基本土層

４　遺構と遺物

検出された遺構は平安時代の住居址６軒、掘立柱建物址１棟、土坑３基である。その分布は谷の中でも比較的傾斜の緩やかな調査区の南に偏ってみられた。検出面は土層堆積状況によりII～IV層となった。

そのほか、遺構検出時に縄文時代早期前葉押型文土器片２点と中期後葉の土器片が若干得られるとともに、打製石斧などの石器も出土している。

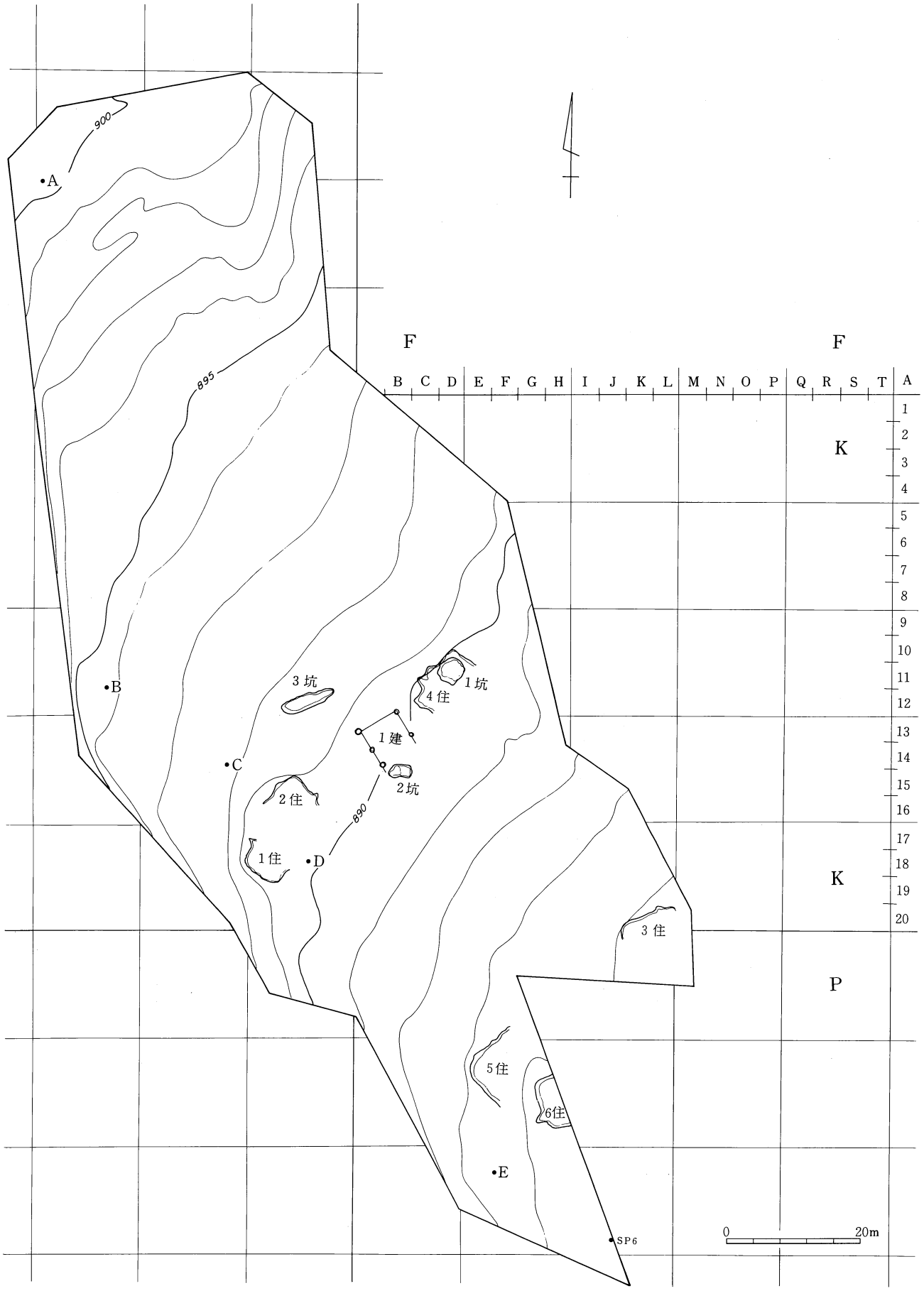

900
895
890
A
B
C
D
E
F
F
B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T A
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20
K
K
P
3坑
1坑
4住
1建
2坑
2住
1住
3住
5住
6住
SP6
0
20m

図3　遺構配置

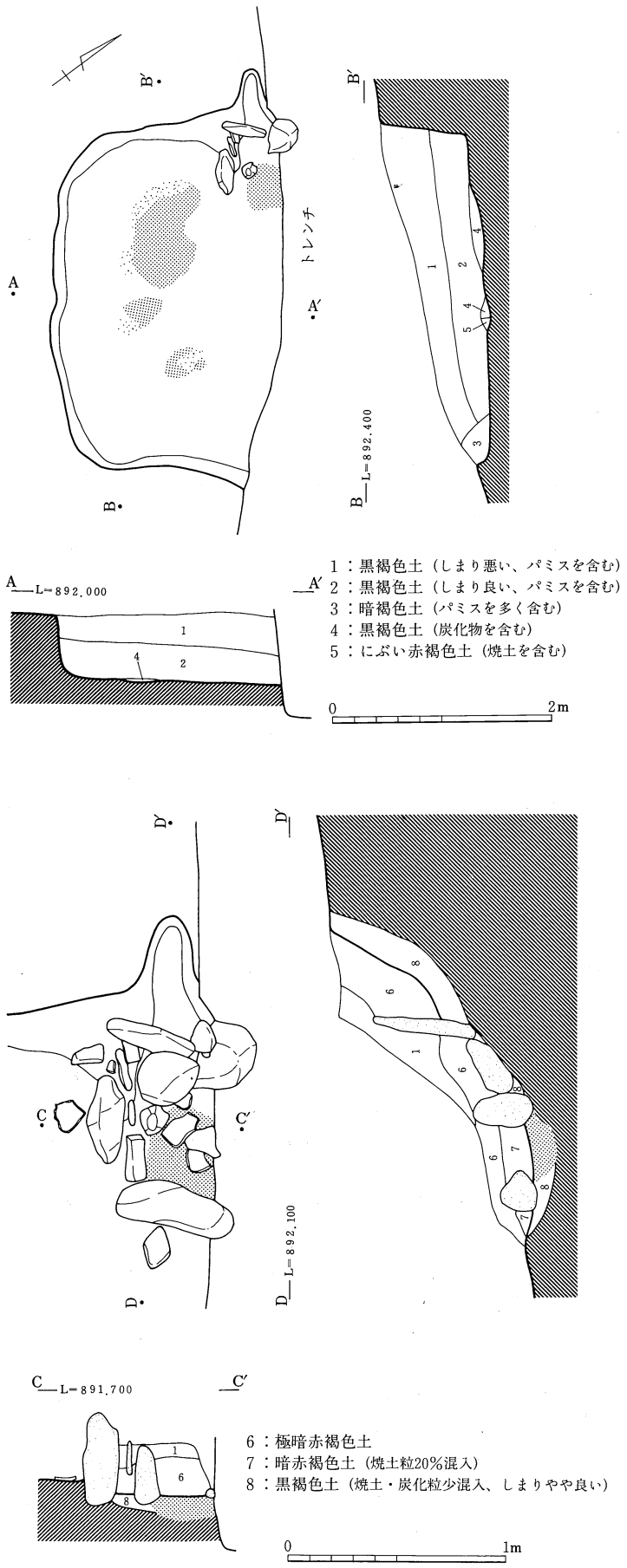


図４　１号住居址（１）

ア　住居址

１号住居址（図４・５、PL70・73）

本址はＩＯ―Q18グリッドを中心に位置する。Ⅲ～Ⅳ層で検出した。トレンチ調査によって東側を消失したため全容は不明である。形状は推定で方形を呈すと思われる。現状では南北2.9ｍ、東西1.9ｍ、床面積5.6ｍ²をはかる。主軸はＮ―50°―Ｗを指す。覆土は淘汰のよい暗褐色土を主体とし、Ⅲ層に類似していた。遺物はカマド周辺からのものがほとんどである。床面は特に堅緻なところはなく不明瞭で、Ⅳ層地床であり、地形なりに多少傾斜する。また焼土・炭が床面に所々みられた。壁高は地形なりに南側で12ｃｍと浅く、北側で78ｃｍをはかる。

カマドは北壁に設けられた石組カマドである。燃焼部は壁ラインより内側に位置し、左袖に寄って支脚石がある。火床は約21ｃｍと厚く利用度の高さをうかがわせる。

遺物　出土遺物の全体量は須恵器甕１、土師器甕５（9･10･11･12）、内面黒色坏17・碗１、土師質坏５（１～３）・碗１（４）・皿１（５）、灰釉陶器碗10・皿１個体分が出土している。須恵器甕は２片。土師甕はすべてロクロ整形によるもので、大形（10･11･12）・中形（９）・小形に分けられる。大形は胴部の張りが弱く寸胴、頸部は不明瞭で胴部から口縁部に至る。最大径は口唇部にある。中形は頸部のくびれがはっきりしている。胴部は寸胴で下半より急激に底部へつぼまる。内面内黒坏はその大半が小片で、復元できるものは土師質の坏・碗である。内面黒色坏は約半数が比較的ていねいにみがかれ、半数は5本の縦ミガキと数本の横ミガキが施される。土師質坏類は焼成良好で明赤褐色を呈する。形状は内面黒色坏・碗に相似するが、１は口唇部が内湾し、３は胴部が張る。

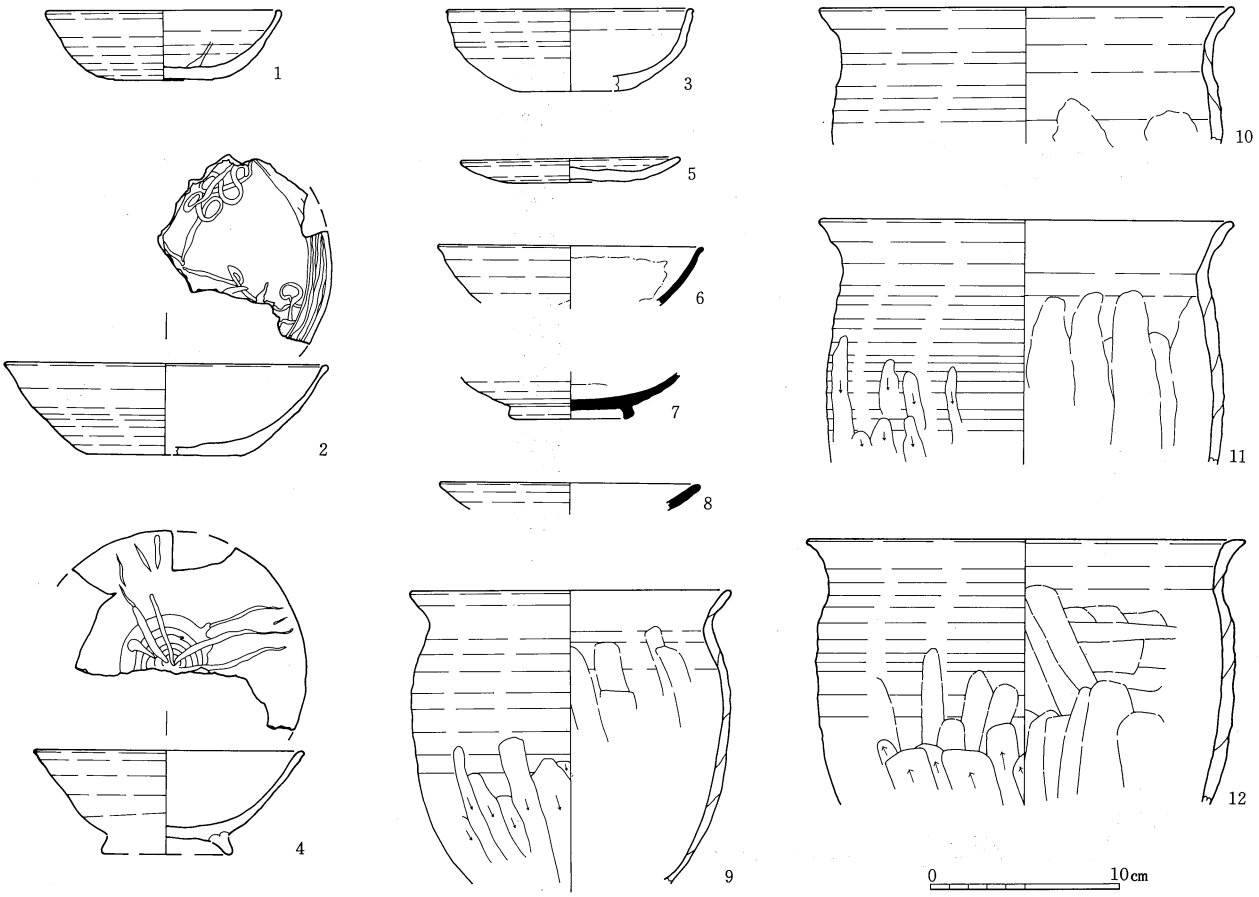


図5　1号住居址（2）

1～4は4本の縦ミガキ、数本の横ミガキが施されるが、2のように暗文状を呈するものがある。5は、無高台の皿である。数本の縦ミガキ、2～3本の横ミガキが施される。6～7は灰釉陶器の碗で、釉は漬け掛けである。8は皿で口唇部は外反しない。

時期　須恵器の食器はなく土師質が共伴する。土師器甕の特徴から10段階に相当する。

2号住居址（図6、PL70・73）

本址はＩ O—R15グリッドを中心に位置する。Ⅳ層上面で検出した。傾斜地であるため南東壁は確認できず、南西壁はトレンチにより消失した。現状では南北3.9 m、東西2.3 m、床面積10.7 m²をはかる。主軸はN－47°－Eを指す。覆土はⅢ層類似の暗褐色土を主体とする。床面は掘り抜いた地山をそのまま利用したらしく、不明瞭でとくに堅緻なところはみられない。壁高は北側で42 cmをはかるが地形なりに減少していく。カマドは火床部が残存したのみであった。

遺物　出土遺物の全体量は須恵器短頸壺1、土師器甕2、内面黒色碗1（1）・坏碗類2、土師質坏3（2）・皿1（3）・耳皿1、灰釉陶器2個体分が出土している。小片ばかりで図化できるものは少ない。須恵器短頸壺は口縁部の小片のみである。土師器甕はすべてロクロ成形によるもので、やはり小片ばかりである。大・小形が1個体づつである。1は深碗形で、内面がていねいにみがかれている。土師質は焼成の良好なものと不良なものとがある。2は良好な坏で、明赤褐色を呈し、4～5本の縦ミガキと3本の横ミガキが施される。4は焼成不良の皿で、ミガキは施されない。灰釉陶器は碗・皿の小片が出土している。

時期　11段階頃と思われる。

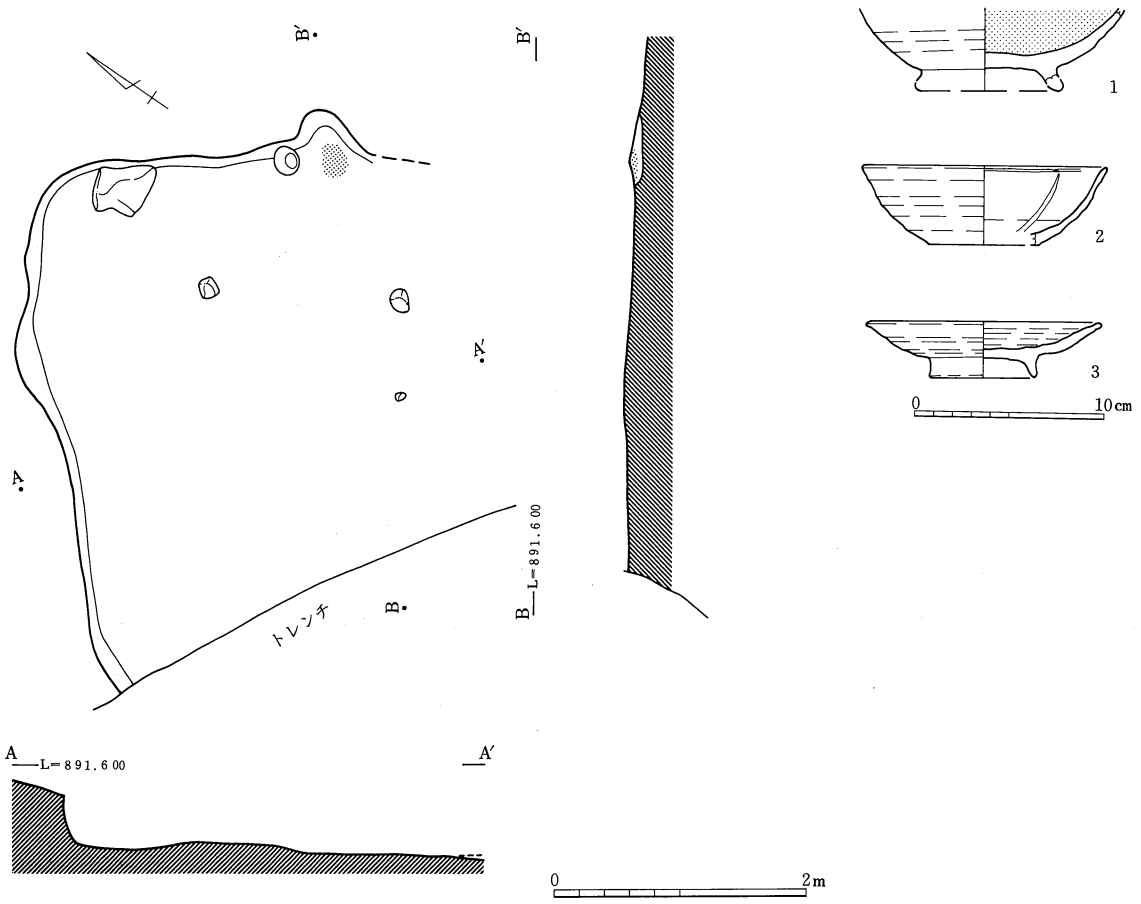


図６　２号住居址

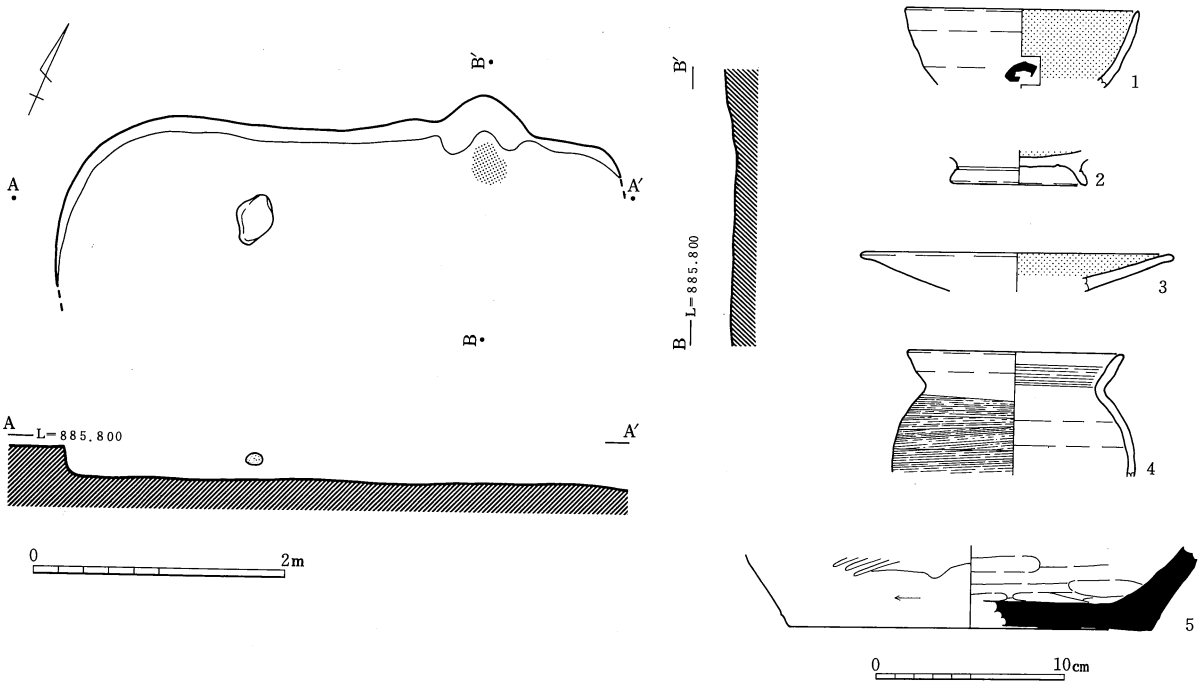


図７　３号住居址

3号住居址（図7、PL70・73）

本址はII P－L01グリッドを中心に位置する。IV層上面で検出した。検出時にカマドの火床部焼土が露呈していた。傾斜地であるため南壁部、東壁部は確認できなかった。現状では南北1.3 m、東西4.3 m、床面積5.6 m²をはかる。主軸はN－20°－Wを指す。覆土はIII層類似の暗褐色土を主体とする。床は地山を利用したと思われ、明瞭でない。壁高は西側で深く約24 cmをはかる。カマドは北壁部に火床と思われる焼土が見られたのみである。

遺物　出土遺物の全体量は須恵器甕1（5）、土師器甕3（4）、内面黒色坏4・碗1（1）・皿3（2・3）、灰釉陶器碗1・皿1・長頸瓶2個体分が出土している。小片ばかりで全体の形を推測できるものはない。土師器甕は在地の甕とロクロ整形の甕の2種類がある。前者は小片で全体像は不明、後者は中形1・小形1（4）がある。4はカキ目を施す。内面黒色坏は暗文状のミガキを施すものが大半である。皿はていねいにみがかれている。1は丁寧なミガキが施され、外面には墨書が書されるが判読できない。灰釉陶器は小片ばかりである。中には1号土坑出土のものと同一個体が見られた。

時期　9段階頃と思われる。

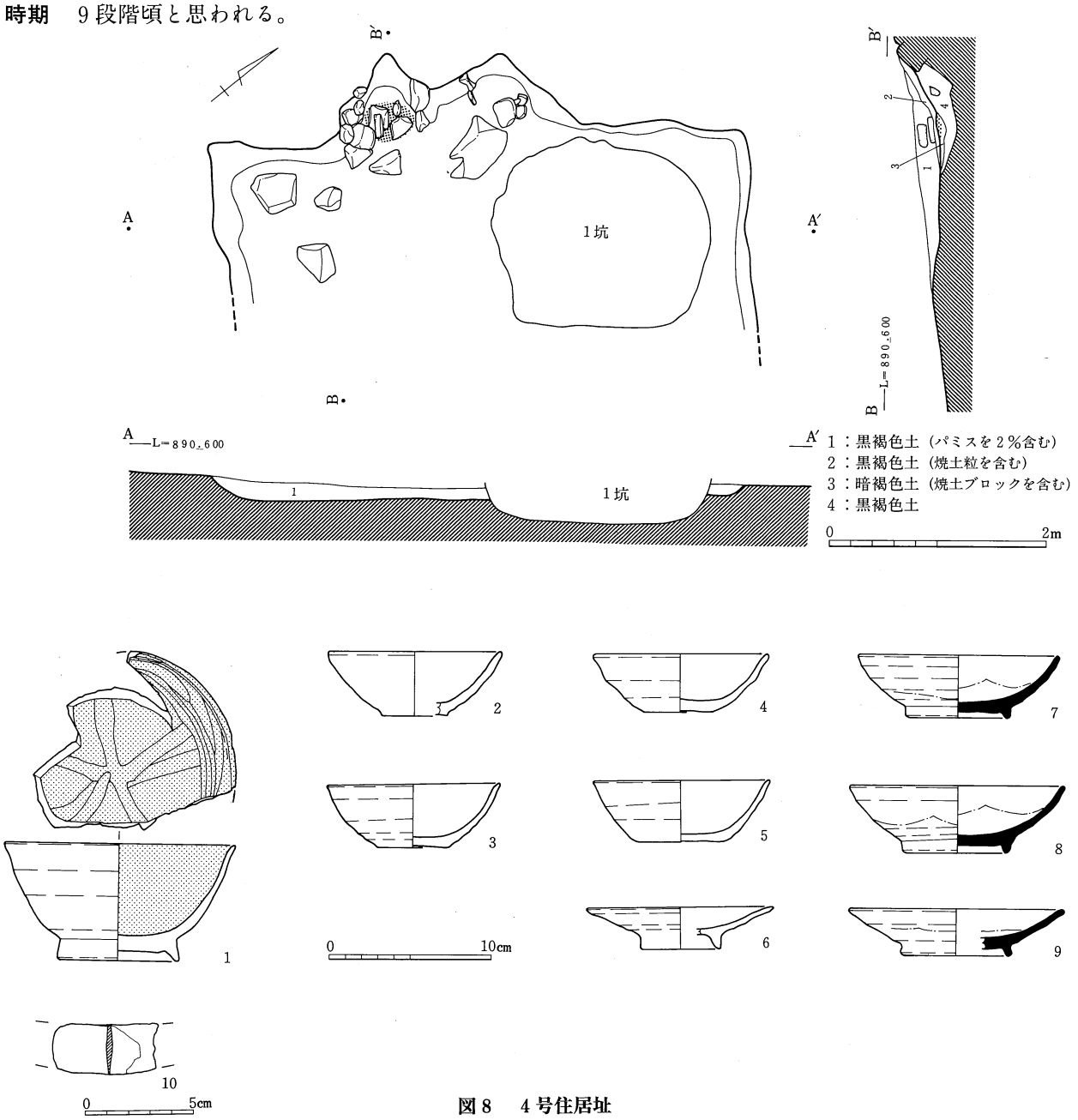


図8　4号住居址

４号住居址（図８、PL71・73・74）

本址はⅡＫ－Ｄ12グリッドを中心に位置する。Ⅱ層で検出した。１号土坑に切られる。周辺は石英安山岩の巨礫が随所に顔をだし検出状況はよくなく、傾斜地であるため南西壁は確認できなかった。現状では南北1.9ｍ、東西4.6ｍ、床面積7.6ｍ²をはかる。主軸はＮ－54°－Ｗを指す。覆土はⅢ層類似の暗褐色土を主体とする。床は地山を利用し、ところどころに礫が顔を出している状況で、特に堅緻な場所は認められない。壁高は北側で深く36ｃｍをはかる。カマドは袖部、煙道部に礫を並べた石組カマドで、礫の隙間には黒褐色土を詰めた様子がうかがえたが、住居址内覆土と類似しているため明瞭に分け難かった。

遺物　出土遺物の全体量は、須恵器甕２、土師器甕２、内面黒色碗１（1）、土師質坏11（２～５）・碗２・皿１（6）、灰釉陶器５（７・８）・皿１（９）個体分と刀子１（10）本が出土している。須恵器甕は胴部破片のみで、１号土坑出土のものと同一個体が出土している。１は内面黒色の深碗で、５方向に７本の縦ミガキ、

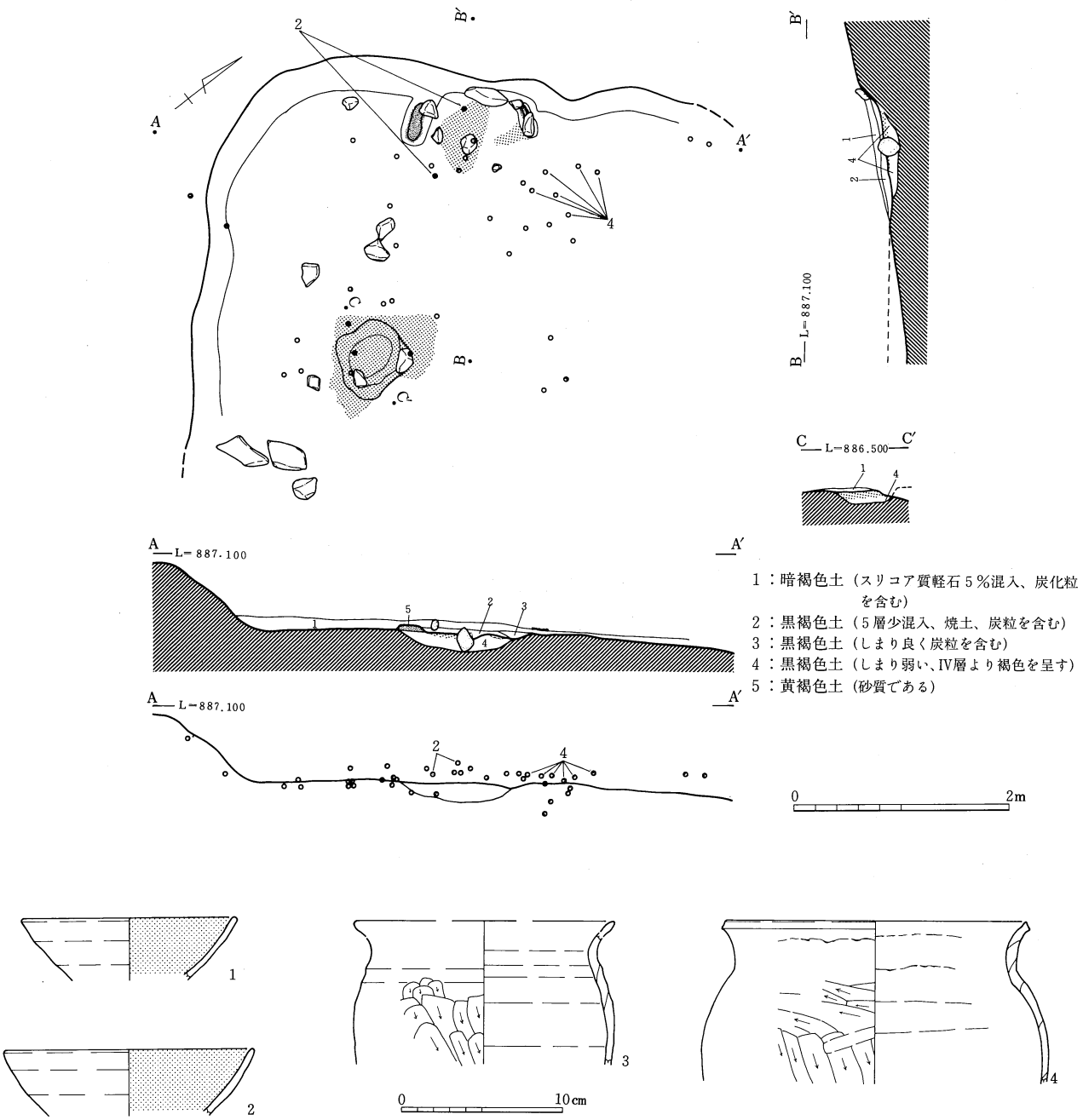


図９　５号住居址

５～６本の横ミガキが施される。土師質坏（２～５）は口径10.5～11.0 cm、器高3.6～4.1 cmである。ミガキは施されない。６は皿である。灰釉陶器碗（７・８）の体部はわずかに丸みを持ち、口縁端部の外反は見られない。外底部から体部下方は回転ヘラ削りはされず、釉は漬け掛けである。９の皿は、口縁端部の外反はほとんどみられず、外底部から体部下方は回転ヘラ削りもなく、回転ナデが施される。釉は漬け掛けである。10は刀子で刃部の一部のみ残存する。刃幅は2.3 cmである。

時期　土師質坏の法量、灰釉陶器は虎渓山１号窯式に比定されることから、12段階と考えられる。

５号住居址（図９、PL71）

本址はⅡＰ－F06グリッドを中心に位置する。Ⅲ層中に土師器片が数点集中して見られたため、検出を行なったがプランの確定に至らず、Ⅳ層上面まで下げ再検出を行なった。しかしながら、Ⅳ層上面でも遺物のある程度のまとまりは捉えられたものの、プランは不明瞭であったため、掘り下げについてはプランの推定復元を考慮して、出土遺物を全点取り上げた（図９白抜き点）。

傾斜地であるため南壁、東壁は確認されていない。現状では、南北3.2 m、東西3.8 m、床面積7.4 m²をはかる。主軸はＮ－48°－Ｗを指す。床は明瞭に捉えられなかった。壁は、西側でⅣ層が急激に立ち上がるため当初は本址の西壁部の可能性も考えたが、周囲に同じような状況が見られたため地形的なものと判断した。壁高は北側で24 cmをはかる。カマドは北壁にあり、袖の芯材と思われる礫と黄褐色粘質土を確認した。構築に際してはカマド掘り方埋土に類似した土を袖として数cm盛ったあと礫で構築していることが観察できた。その他付属施設として焼土を伴ったP1がある。

遺物　出土遺物の全体量は須恵器甕２、土師器甕６（３・４）、内面黒色坏10（１・２）・碗３、灰釉陶器碗４個体分が出土している。土師器甕は在地の輪積み成形によるもの（４）とロクロ整形によるもの（３）で、前者は３個体、後者は大形２・中形１個体である。前者は「コ」の字状の口頸部が退化し、不明瞭になっているものと、４のように「コ」の字を呈さずゆるやかに外反し口縁端部に至るものとがある。４の口縁端部は面取りされている。灰釉陶器は外底部から体部下方にかけての回転ヘラ削りされ、釉はハケ塗りされる。内面黒色坏・碗は大半がていねいなミガキが施されるが、内、５個体は暗文状の縦ミガキが施される。

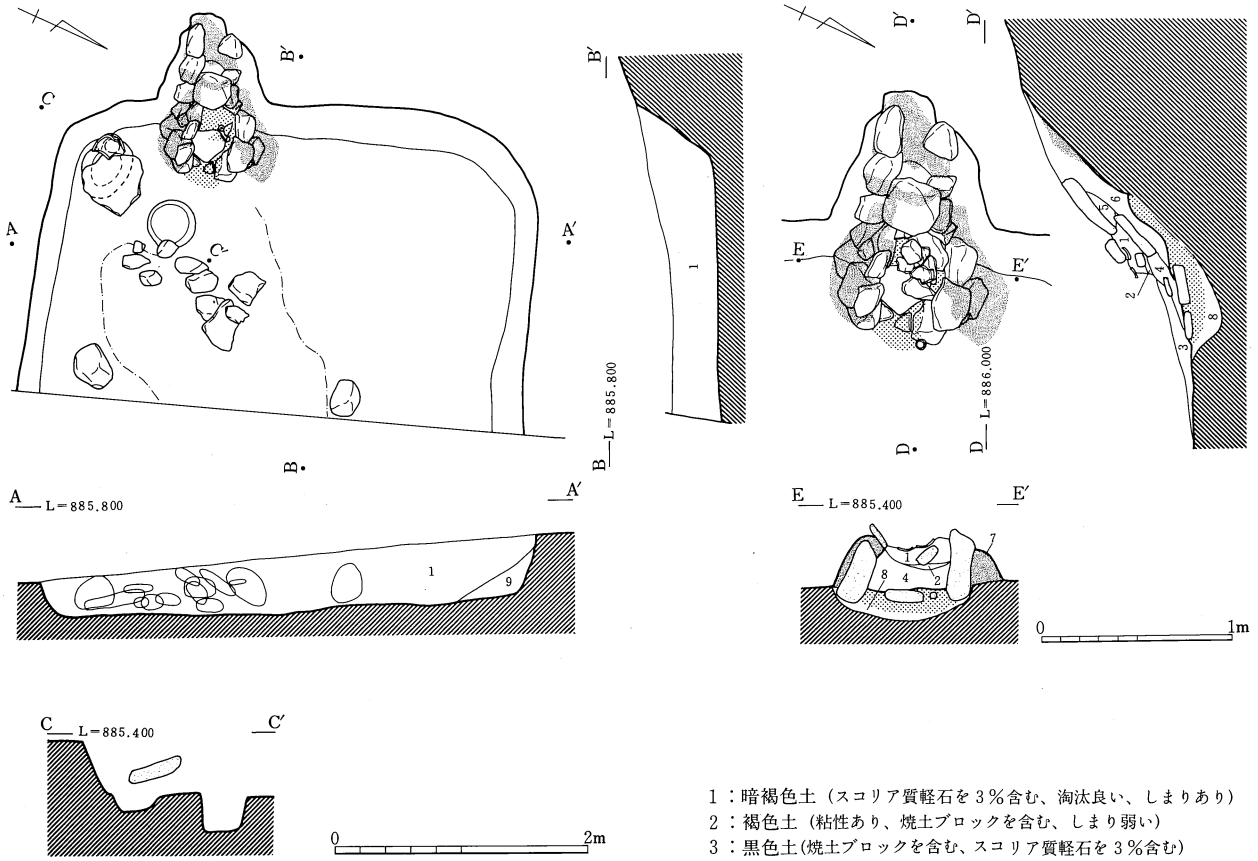
時期　土師質の甕、ロクロ甕の特徴から10段階に相当すると思われる。

６号住居址（図10・11、PL72・74）

本址はⅡＩ－H12グリッドを中心に位置する。Ⅳ層中で検出した。東壁は用地外にかかるため調査に至っていない（注１）。現状では南北2.9 m、東西3.4 m、床面積7.6 m²をはかる。主軸はＮ－106°－Ｗを指す。床は中央部に黄褐色土による２ cmほどの貼床が見られたほかは地山利用であった。遺物はカマド周辺に偏ってみられた。カマドは石組カマドで残存状況は良い。袖石・天井石は原位置をとどめていた。構築に際しては掘り方を掘ったあと、黄褐色の粘土をその底に薄く敷き、石英安山岩の礫を配置し、さらに火床部にも平石を置くなどかたちを整え、その隙間を埋める、もしくは被うように黄褐色の粘土を再度利用し成形するといった過程が観察できる。火床部の焼土は厚さ10 cm以上あり、頻繁に使用されたことを物語るものであろう。

その他の施設としてP1・２がみられ、両者とも覆土は住居址覆土と大した差異はなかった。P2は平石と甕の底が重なって出土していることから、貯蔵穴などの機能が考えられようか。

遺物　出土遺物の全体量は須恵器甕２（７）、土師器甕３（８）、内面黒色坏２（１・２）、土師質坏３・碗１（４）、灰釉陶器碗2（５）、緑釉陶器段皿１（６）個体分が出土している。１は外底部から体部下方の部分のみ残存する。成形は叩き後回転ナデが施され、底部立ち上がり部分は回転ヘラ削りされている。土師器甕は、小片



1：暗褐色土（スコリア質軽石を３％含む、淘汰良い、しまりあり）
2：褐色土（粘性あり、焼土ブロックを含む、しまり弱い）
3：黒色土(焼土ブロックを含む、スコリア質軽石を３％含む)
4：極暗褐色土（焼土粒を含む、７層崩落土）
5：黒褐色土（焼土粒を若干含む）
6：黒色土（炭化粒を多量に含む、しまり弱い）
7：褐色土（粘性あり、カマド袖土）
8：暗褐色土（焼土粒、炭粒を少混する）
9：黒褐色土（スコリア質軽石を10％含む、Ⅳ層の崩落土）

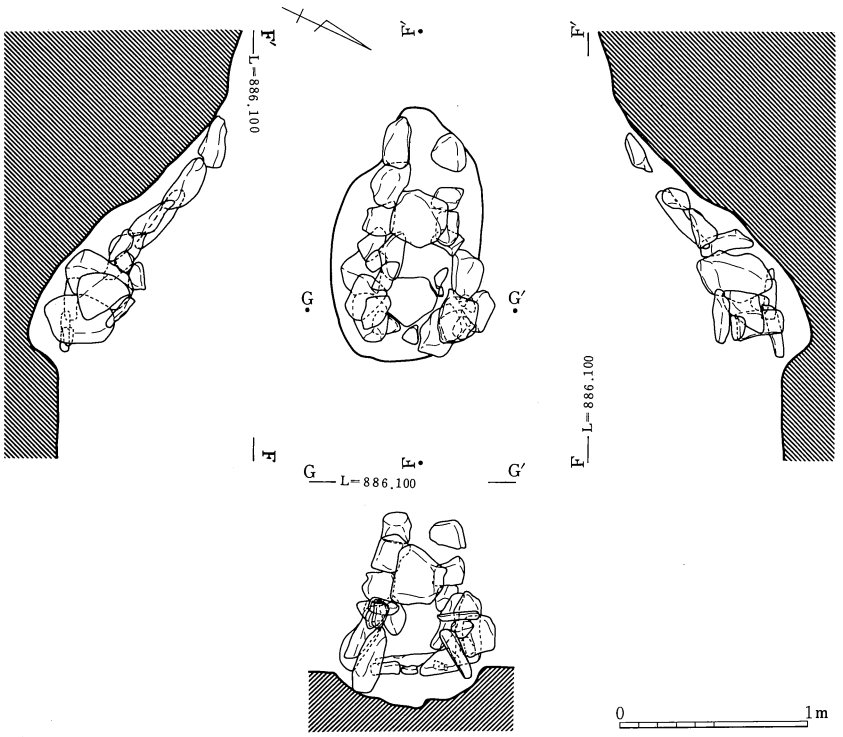


図10　６号住居址（１）

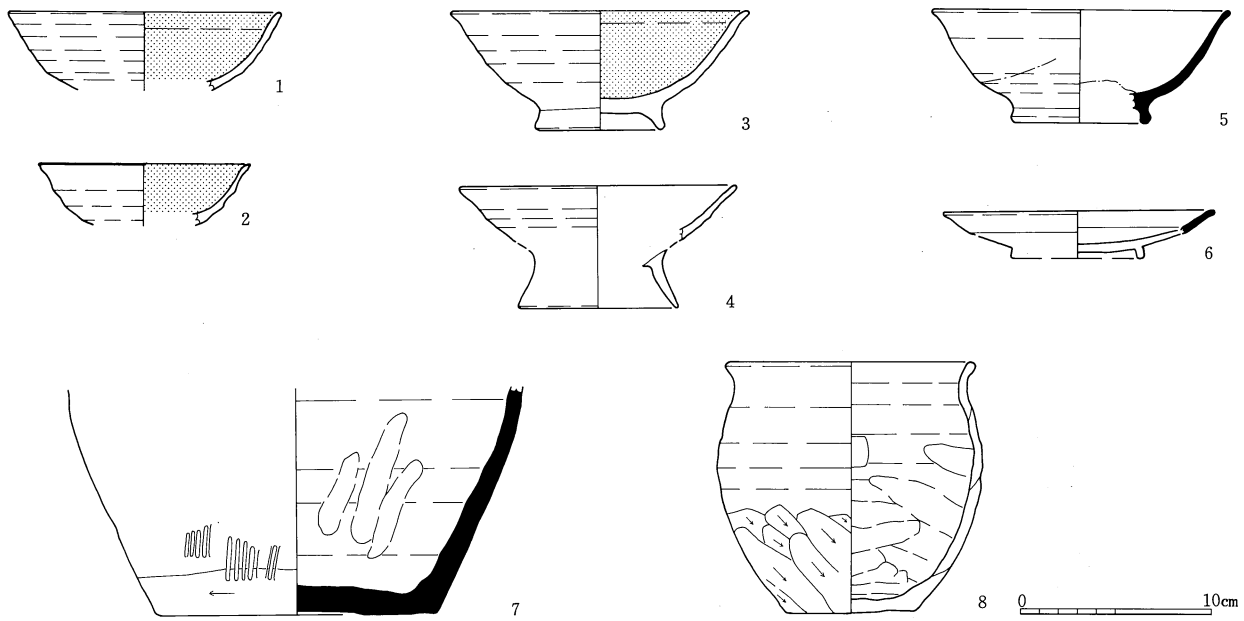


図11　6号住居址（2）

ばかりで形態は不明である。8はロクロ整形された小形甕で、頸部はゆるやかに外反して口縁端部に至る。もう1点カキ目が施された小形甕が出土している。内面黒色の坏・碗は、ていねいにみがかれるもの（1）、暗文状に施されるもの、黒色処理のみでミガキを施さないもの（2）がある。3は器面が荒れているためミガキが施されたか不明である。5は口縁部がわずかに外反する。外底部から体部下方にかけ回転ヘラケズリが施され、高台は三日月高台である。釉は漬け掛けである。6は緑釉陶器で狭縁の段皿である。胎土は白色で釉調は淡緑色を呈する。東海産であろう。

時期　9～10段階頃と思われる。

イ　掘立柱建物址

1号掘立柱建物址（図13、PL72）

本址はⅡK—B14グリッドを中心に位置する。Ⅳ層上面で検出した。傾斜面であるため南東側は確認できず全容は明らかでないが、側柱式であると想定される。規模は桁行3.2m、梁行3.2mをはかる。主軸はN—30°—Wを指す。柱痕はP3～P5にみられいずれも掘り方より沈み込む。柱痕形は約16cmをはかる。遺物はみられなかった。

ウ　土坑

1号土坑（図12・13、PL72・74）

本址はⅡK—D14グリッドに位置する。Ⅳ層上面で検出した。4号住居址を切る。2.3×1.6mの楕円形を呈し、深さ42cmをはかる。断面は鍋底状を呈し西側で緩やかに下がり、底に礫が集中してみられた。性格は不明である。

遺物　須恵器甕3片、灰釉陶器皿1（1）・碗1（2）、刀子1（3）・鉄鏃1（4）が出土している。須恵器甕は3号住居址と、1の灰釉陶器皿は6号住居址4と同一個体が認められる。3は切先のみ残存。4は鏃先と茎尻は欠損している。箆被部7×5mm、茎部4×3mmをはかる。

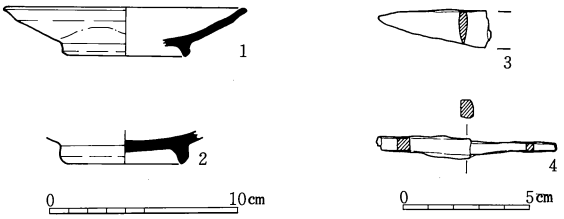


図12　1号土坑出土遺物

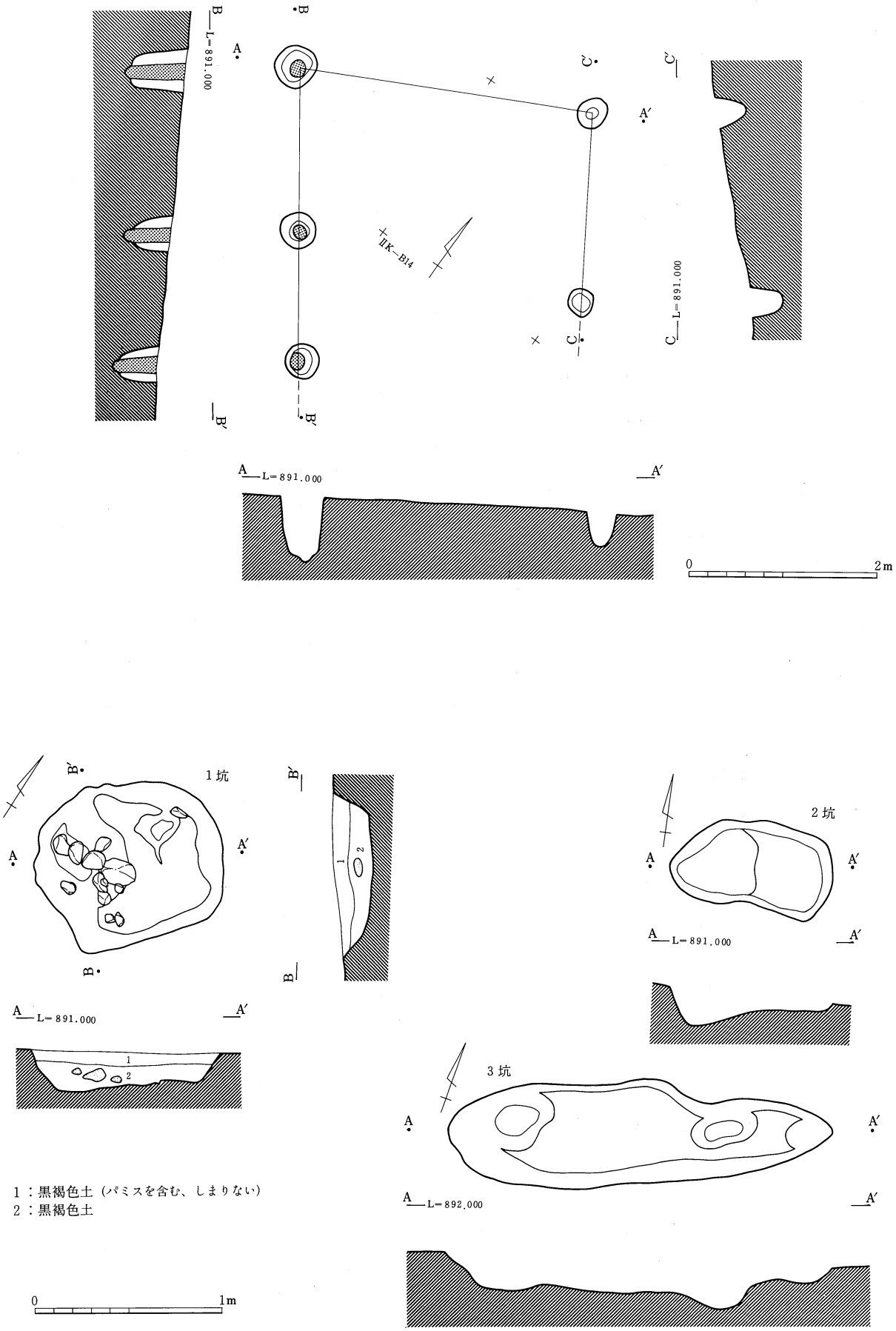


図13　掘立柱建物址・土坑

2号土坑（図13）

本址はII K—B15グリッドに位置する。IV層上面で検出した。1.7×0.8 m の不整形を呈し、深さ38 cm を

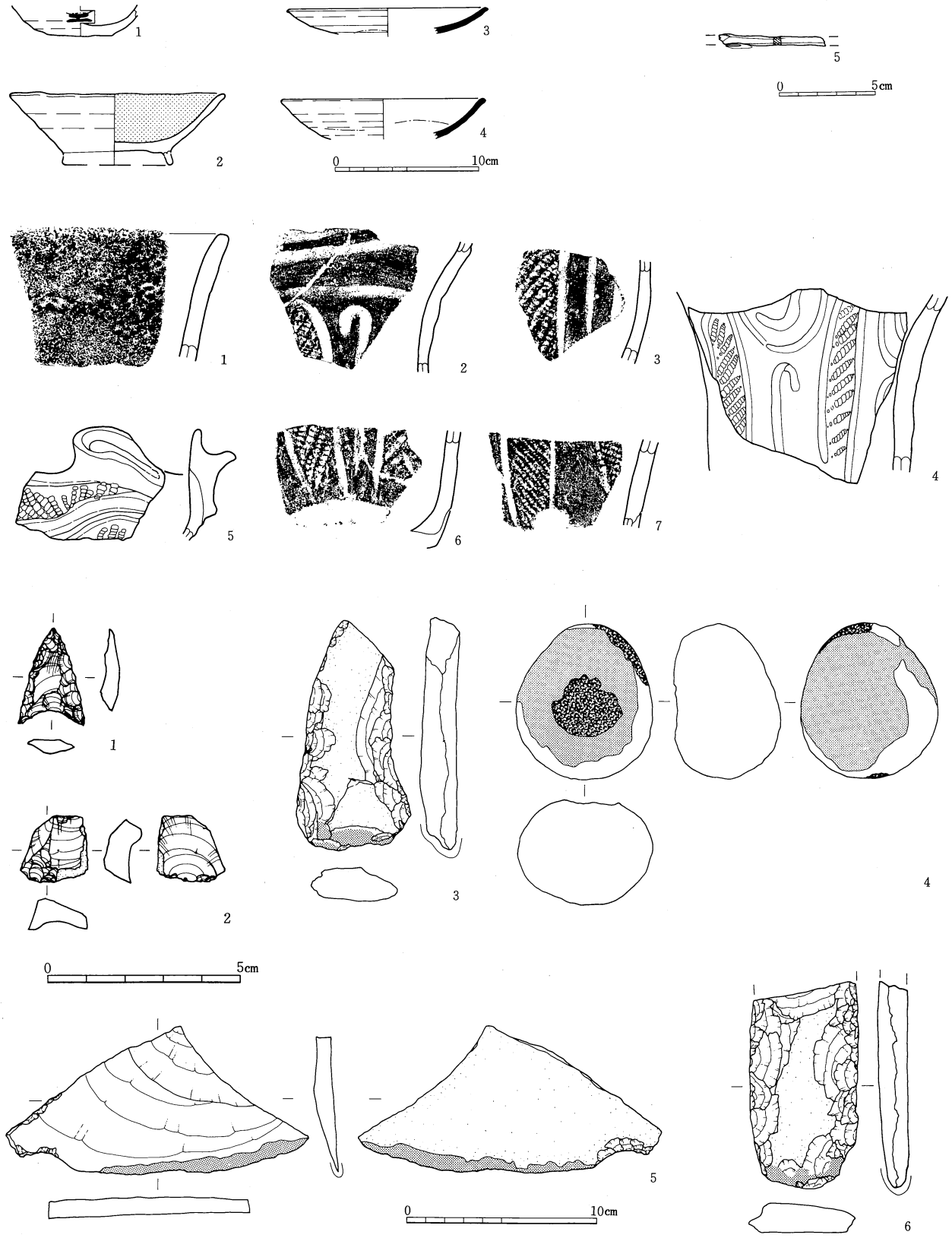


図14　遺構外出土遺物

はかる。断面は西側で擂り鉢状を呈し東側でテラス状になる。覆土はⅣ層を基調とした黒褐色土であった。遺物はみられなかった。性格、時期ともに不明である。

３号土坑（図13、PL72）

本址はＩＯ―S12グリッドに位置する。Ⅳ層上面で検出した。4.5×1.2ｍの不整楕円形を呈し、深さ38cmをはかる。断面は凹凸がみられるが全体として弓状である。覆土はⅣ層を基調とした黒褐色土であった。遺物はみられなかった。性格、時期ともに不明である。

エ　遺構外出土遺物（図14、PL74）

遺構外からは平安時代の須恵器・土師器などの土器片を主に、そのほか僅少であるが縄文時代の土器・石器も得られている。

平安時代の遺物はプラン確定が困難であった５号住居址周辺一帯からのもので占められ、そのほかほとんど調査区内からは得られていない。本来ならば、５号住居址の遺物とするべきであろうが本報告では遺構外として扱った。金属器も含め５点図示した。１は小形化している内面黒色の坏であるが、ミガキは施されていない。２は同じく内面黒色の碗である。３・４は灰釉陶器の皿。５は棒状の金属器で、種別は不明である。

縄文時代の遺物のうち土器はすべてⅡK16・21グリッド・Ⅳ層からの出土で、摩滅の著しい早期押型文土器片２点（1）、中期後葉加曽利Ｅ式土器片10数点（2～7）がみられている。石器は黒曜石製の石鏃（1）、スクレイパー（2）、安山岩製の打製石斧（3・6）、磨石（4）、大形剥片石器（5）が得られた。このうち、６は板状節理の安山岩剥片の縁辺部に顕著な磨耗が見られ、剥片先端片側には両側縁からの調整が入り柄を作出したように観察される。

5　まとめ

本遺跡の特徴は平安時代における山間地の小規模集落という点にある。以下、この点につき若干の所見を記し、まとめとしたい。

検出された６軒の住居址は出土した土器より10世紀代に比定・限定され、４段階区分される。３・６号（９段階）、１・５号（10段階）、２号（11段階）、４号（12段階）がそれであり、同時期と考えられる隣接する佐久埋蔵文化財調査センターの１軒を加えても１・２軒程度の小規模な集落であったらしい。該期におけるこのような小規模な集落は、香坂東地だけで隣接する東ねぶた遺跡（３章９節）、曲尾Ⅲ遺跡（佐久埋蔵文化財調査センター1987）などで確認されている。

文献資料からみると、本遺跡の所在する香坂東地が開拓され水田化されたのが寛永元年ごろでそれ以前は「荒地」となっていた（菊地1988）。また香坂地区は、12世紀初頭に成立していたといわれる佐久を代表する中世荘園「大井庄」の一郷として「香坂郷」があったことで知られている。この「香坂郷」の中心は現在の香坂西地にあったと思われるが、中世領主の山林所有の傾向とあいまって、東地もその範囲内であったのかもしれない。さかのぼって律令制下においての当地は開拓対象とはならずその地名は認められず、「大井庄」の前身と考えられている佐久の八郷の一つである「大井郷」の推定範囲外でもある。律令政府が水田の開墾を奨励する中で、本遺跡周辺が地形的に緩やかなＵ字状を成すとはいえ、標高が高いこともあって開墾に適さない場所として認識されていたことは想像に難くない。一方、100ｍほど谷を下った西地は中世に入って開墾の対象になったのであろう。

このように本遺跡の周辺は、水田の開墾といった意味では江戸時代まで開拓の及ばなかった地域であっ

た。これを裏付ける状況証拠は縄文時代の遺跡が多数発見されるが、弥生～奈良時代までの遺構が現段階では明確に認められないこと、さらに本遺跡のような小規模な集落では水田を造成するだけの能力はないと判断もされるなどである。

このように開墾（水田）が実施されたと思われない山間地で縄文時代・平安時代の遺物が散布する状況は、山を挟んで南側の志賀谷・もう一つのむこうの内山谷の谷間一帯でも表採資料などから捉えることができる（佐久市教育委員会1984）。さらに、地域は異なるが南佐久郡南部（小海町以南）の山間地も同様で、菊地清人氏によれば、地名・考古資料・文献資料の分析からその開拓も10世紀頃からと考察されている（注2）。とくに文献資料からみて、奈良・平安時代の農業は「水田本位の農業にだんだんと畑作が加わ」り、「九世紀に入ると陸稲・麦・粟などの雑穀の栽培が盛んに政府によってすすめられた」と述べ、12世紀ごろから「畑作の普及を示す資料がかなり多く見られるようになる」ことから畑作がさらに盛んになったとまとめている（菊地1988）。ここで興味深いのは、10世紀の頃はこのような社会的背景をもって、山間地に開拓の手が入っていったということである。

さて、話を遺跡に戻す。社会的背景として触れておかねばならないことに、香坂の谷は古くから東山道の脇道「女道」として利用されてきたことがある。この交通・流通によるものと思われる資料に6号住居址出土の緑釉陶器片があるが、居住者が流通関係にかかわったというような所見は得られていない。また鍛冶を行なったような痕跡も認められなかった。また1・6号住居址にみられるカマドのあり方などは、単に季節的に利用するためというより、定住を意識したものと捉えてもよかろう。

本遺跡では畑作を明確化させる遺構・遺物ともなかったが、隣接する東ねぶた遺跡で検出された3基の平安時代の所産とされる土坑はなだらかな傾斜をみせる調査区中央にあり、東京都多摩丘陵における畑作にともなう遺構として指摘された「円形土坑」と形態が似たような感がある（鶴間1986）。比較資料もなく即断は出来ないが、前述したように、該期に山間地開発の手が入ったことや住居址にみられる定住傾向を考えると畑作が行なわれた可能性も考えられなくはない。あくまでも推測であるがこの場合、本遺跡においては遺構の認められた地域の南側、谷の開口部の広がりの中に畑が求められようか。

古代史における畠・畑作の見直し・再評価（畑井1981）にともなって、山間地の生業などについての視点からの研究もなされてきている（能登1985、橋口1985、鶴間1986）。いずれの論考にも律令体制から中世荘園体制に移行する平安時代後半期における社会構造の変化を背景に考察され、とくに畑作に重点を置き、その主体者を律令制下の規制から逃散・独立したものと捉え、生活基盤として畑作を行なうその独立自営農民の広がりに中世へと移行する過渡期の状況を読み取ろうとしている。今まで見てきたかぎりでは本遺跡もおおかたこの流れの中にいると判断したい。1世紀で消滅した本遺跡の居住者は、畑作の拡大による政治的権力介入をもたらし、強化され安定化する政治権力体制内に組み込まれていったのであろう。

注1　用地外での遺構のつづきは、確認されなかった（佐久埋蔵文化財調査センター1987）。
注2　地名「くね」・「かいと」についての分析である（菊地1988）。
注3　畠・畑の用語については、厳密に言えば「畑」は焼き畑を意味するのであろうが、本文中ではそこまで触れていないので「畑」を用いた。

参考文献

菊地清人　1988　『佐久の開拓史』
佐久市教育委員会　1984　『佐久市遺跡分布詳細報告書』
畑井弘　1981　『律令・荘園体制と農民の研究』
佐久市埋蔵文化財調査センター　1987　『西祢ぶた』『淡淵・屋敷前・西片ケ丘・曲尾Ⅲ・曲尾Ⅰ』
能登健ほか　1985　「山棲み集落の出現とその背景」『信濃』37―4
鶴間正昭　1986　「古代末期の丘陵地域開発について」『研究論集Ⅳ』（財）東京都埋蔵文化財センター
橋口定志　1985　「平安期における小規模遺跡出現の意義」『物質文化』44

第11節　大星尻古墳群（おおぼしじり）

1　遺跡の概観

大星尻古墳群は、平尾富士山麓に発達した低い尾根にはさまれるゆるやかな谷中斜面にある。南面する崖錐性のテラス状傾斜地であり、標高760～800ｍをはかる。長野県教育委員会文化課による分布調査で積石塚もしくはその可能性のある石積みが８基確認され、大星尻古墳群として命名された遺跡である。所在地籍は、佐久市大字下平尾（しもひらお）字大星尻2776番地ほかである。当該地は陽当りが良く、古くから桑園などの畑地利用が行われてきた様子がうかがわれた。しかし、調査を始める時点では、一部でモモが栽培されていたほかは、カラマツや雑木の林野地となっていた。本遺跡の西側尾根上には丸山古墳群と丸山Ⅱ遺跡がさらにその西方谷部には丸山遺跡がそれぞれ隣接し、これらも発掘調査を行った。

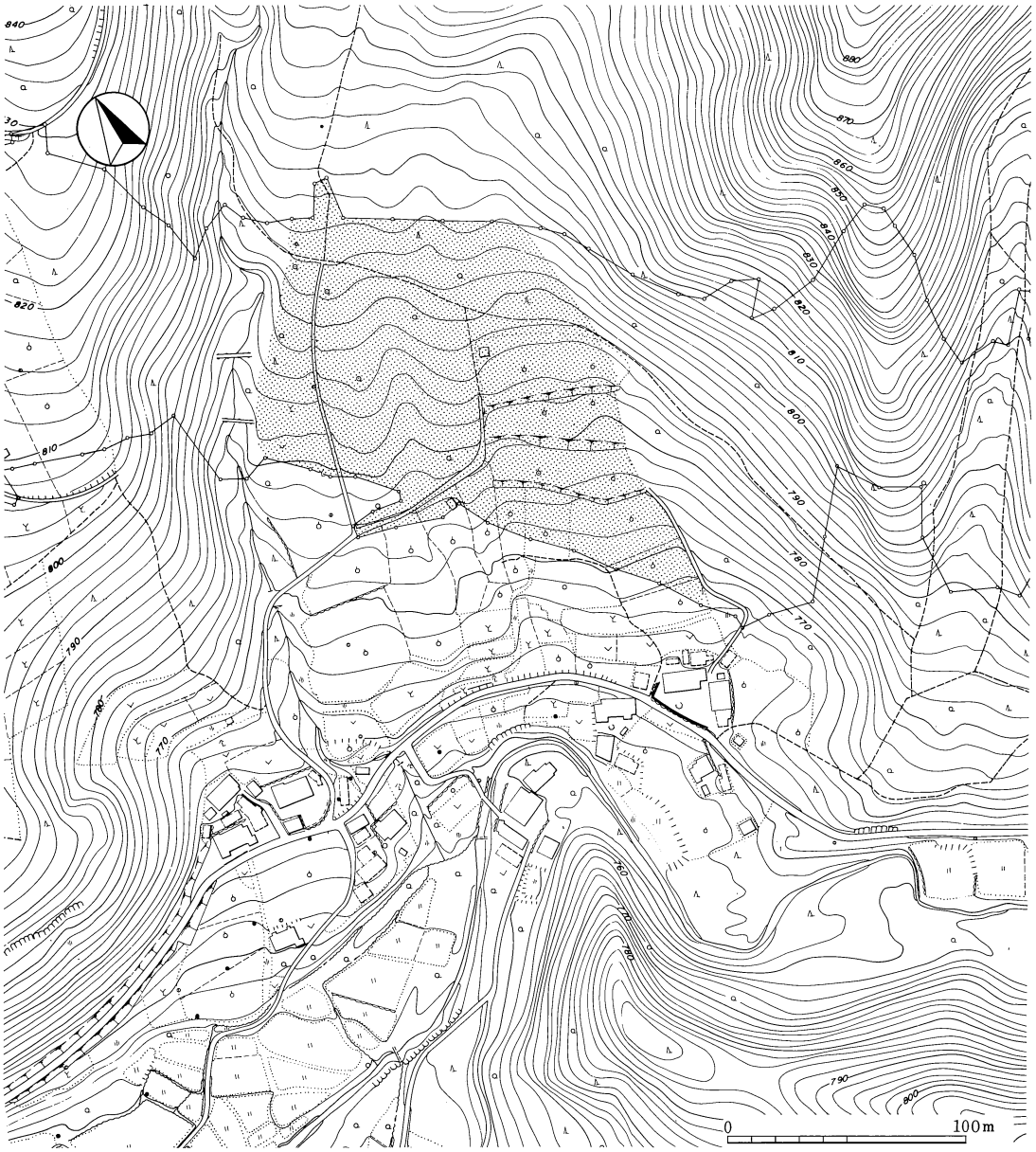


図１　地形および調査範囲（１：3,000）

2　調査の経過と概要

今回、上信越自動車道建設計画によって調査の対象となったのは、大星尻古墳群の遺跡地北半部に相当する約20,000 m²の範囲である。調査は、前記した8基の石積みの断ち割りと精査を行うとともに、それと並行して墳丘を削平された古墳の有無、さらには遺物包含層の存否を確認すべく、調査対象全域にトレンチを設定し掘り下げを行った(図2)。その結果、8基の石積みのうち2基が古墳および近世墳墓であることが判明したほか、さらに、トレンチ調査によつて縄文時代から弥生時代にかけての遺物包蔵地点の存在が明らかとなった。遺物包蔵地点は、調査区中央付近の小規模な尾根状地形部分からその東側谷状部にかけて認められ、トレンチを面的に拡張して調査を行ったところ、大きく2か所に分かれて焼土址や土坑群が検出された(図3)。調査期間は昭和63年4月11日から同年9月14日までの間、延べ106日を要した。調査した遺構の総数と出土遺物の概要は、以下のとおりである。

縄文時代	焼土址1基・土坑27基・中期初頭～前葉の土器・石器類
弥生時代	土坑1基・後期の土器
奈良時代	古墳1基・鉄鏃
近世	墳墓2基・仏具・キセル・銭貨

また、調査用のグリッド設定は、第Ⅰ章第4節に記した当埋文センター既存の方法に準拠して行った。基準点は日本道路公団の既設引照点より算出し、大々地区を設定した。

整理作業は昭和64年1月より始め、図面類の確認と修正、出土遺物の洗浄・注記・接合などの諸作業から進めた。遺物実測なども含めた報告書作成に向けての本格的な整理も平成元年度より引き続き行い、途中発掘調査実施のために長期の中断をはさみ、平成2年度末に完了した。

調査日誌抄

4月11日　器材搬入とプレハブの整理。
4月18日　調査開始式を行う。本日より調査研究員4名、作業員14名によって発掘調査を開始。
4月20日　遺跡の現状を航空写真に収めるため、調査範囲全域にわたり立ち木の除去を始める。
5月13日　グリッド杭の設定。
5月17日　大星尻古墳の石室掘り下げを始める。そのほかの石積みについても調査を開始。
5月24日　航空写真の撮影および航空測量を実施。
5月25日　各石積みの断ち割り・精査と並行して、調査対象区域内のトレンチ調査を始める。
6月8日　1号近世墓の調査に入る。
6月14日　國學院大学教授小林達雄氏現場見学。
7月1日　大星尻古墳の墳丘実測。
7月11日　1号近世墓の断ち割りおよび断面実測。墳丘中央の上面下約30 cmに方形石組を検出。
7月13日　重機による表土剥ぎを行い、遺物包含層の面的調査に着手する。
7月18日　重機により拡張した地点の精査を行う。縄文時代中期初頭から前葉の土器片多数出土。
7月20日　1号近世墓の墳丘下部の精査に入る。
7月22日　拡張区の精査。縄文時代の土器片多数とともに土坑状の落ち込みを検出。

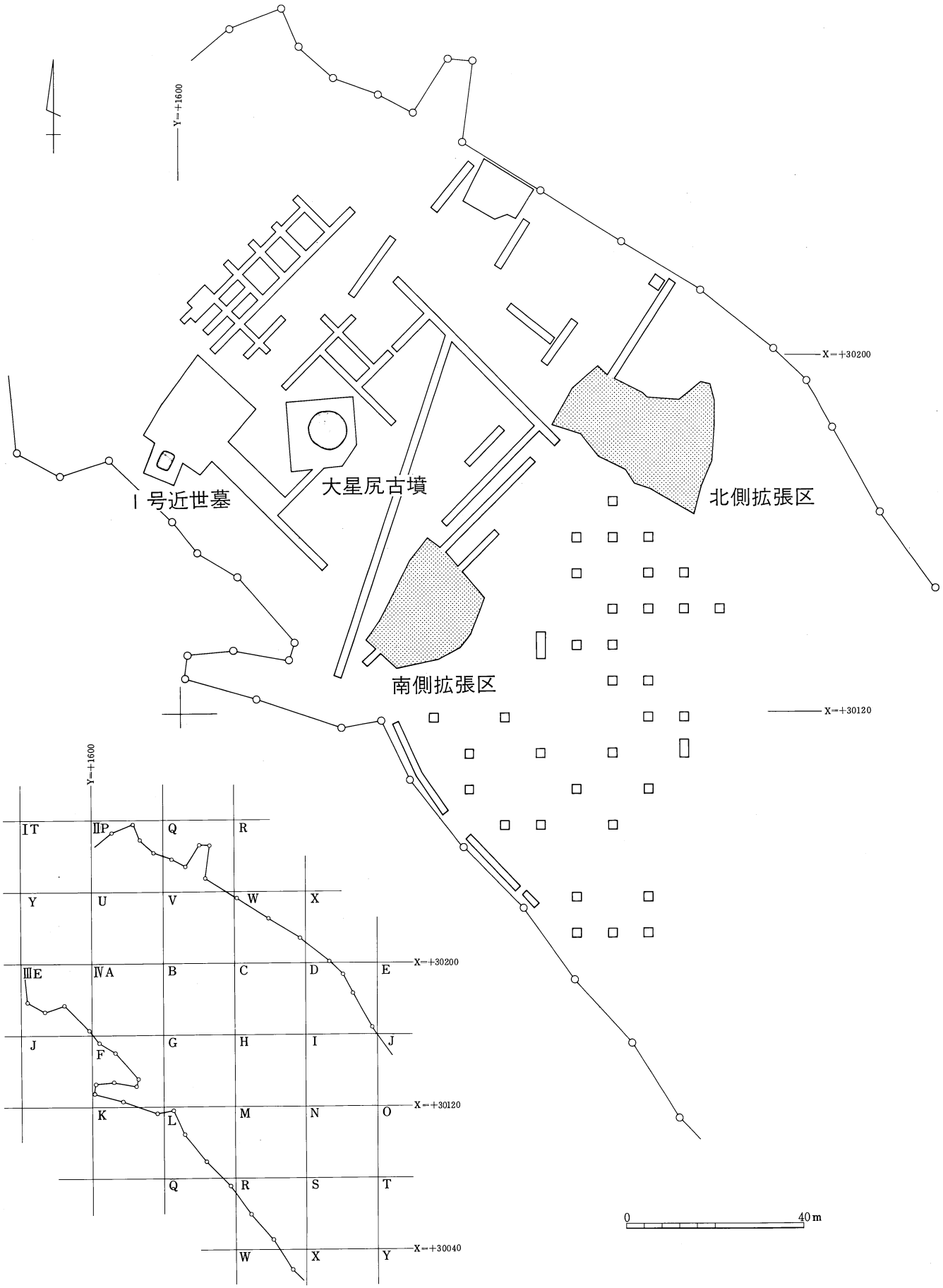
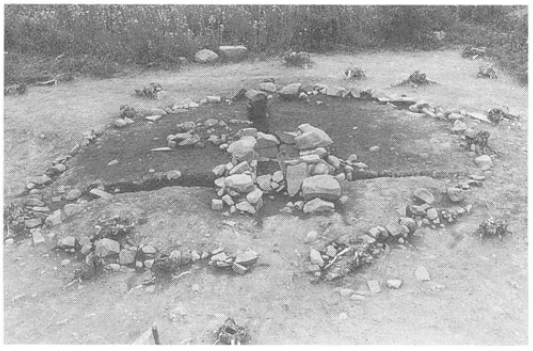


図２　トレンチ配置・グリッド概念図

8月2日　遺物包含層拡張区の写真撮影と遺物の取り上げを行う。縄文時代中期前葉の好資料出土。
8月3日　1号近世墓の墳丘下部を精査。人骨および銅製仏具を確認。
8月4日　1号近世墓において、さらに銭・数珠・キセルが相次いで出土。
8月18日　1号近世墓出土の人骨を、西沢寿晃信州大学医学部助手立ち会いのもとに取り上げ、合わせて人骨の鑑定も依頼した。
8月23日　基本土層の図取り。拡張区で検出された土坑の調査を開始。
8月25日　大星尻古墳の墳丘断ち割りと断面実測。1号土坑の遺物出土状態を写真撮影。
9月5日　大星尻古墳の石室および根石の写真撮影。
9月7日　大星尻古墳石室の平・断面・見通し図の作成。土坑群の掘り下げと実測を進める。
9月13日　大星尻古墳の根石を実測するとともに、墳丘内の近世2号墓を調査。拡張区コンタ図の作成。
9月14日　器材の撤収。本日をもって調査を終了した。



3　基本土層

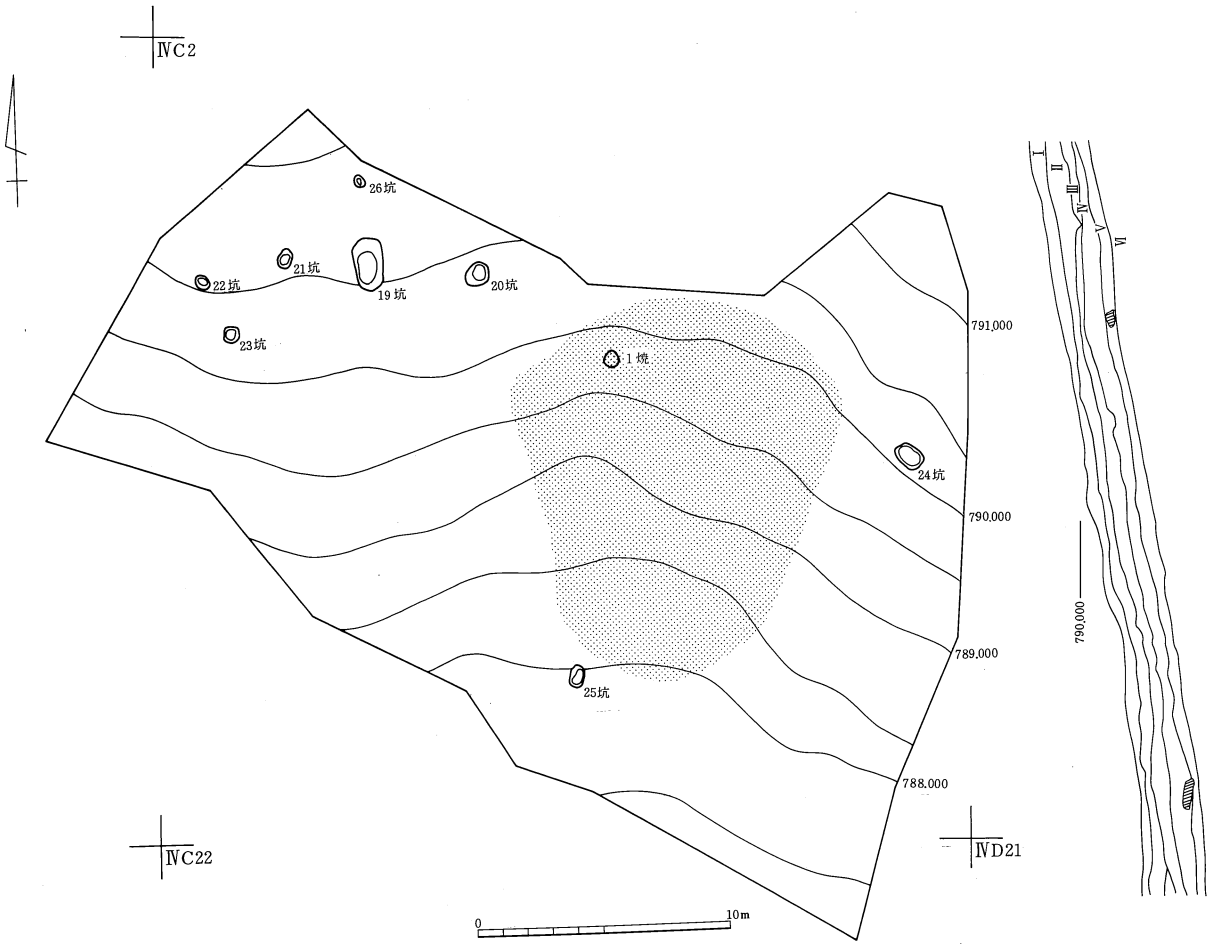
調査区内の基本土層は、遺物包含層の調査を目的とした2か所の拡張区に設けた土層観察用ベルトを基にして決定した。両地点ともにその堆積状況を異にしており、それぞれを基本土層として捉えたが、遺跡地全体に共通する土層は南側拡張区の土層である。以下、本文中では特記しない限り、同層序を基本土層として記述する。

北側拡張区（谷状窪地部）

Ⅰ層　表土層。褐色砂壌土。比較的よく締り、粘性には乏しい。
Ⅱ層　暗褐色土。粗粒砂を多く含むほか、2～10 mm大の礫を少量含む。Ⅲ層土およびⅣ層土を霜降り状に含む。比較的強い粘性をもつが、全体に締りを欠く。
Ⅲ層　黒褐色土。埴壌土。人頭大および3～10 cm大の礫を含む。全体によく締り、強い粘性をもつ。縄文時代中期の土器とともに、弥生時代後期の土器も包含する。
Ⅳ層　暗褐色土。2 cm～拳大の礫多数混入。しまり弱く粗粒砂を含むが、比較的強い粘性をもつ。本層上部～上面にかけて、縄文時代中期初頭～前葉の遺物を多く包含する。
Ⅴ層　オリーブ褐色土。30～80 cmの大礫を多く含む。硬く締る。
Ⅵ層　明黄褐色土。崖錐性の二次堆積混礫ローム。Ⅴ層同様硬く締る。

南側拡張区（尾根状微高地部）

Ⅰ層　表土層。オリーブ褐色を呈す。締りなく、粘性にも乏しい。3～8 cm大の礫を多く含む。
Ⅱ層　褐色土。Ⅰ層に似るが、包含する礫の量と大きさはともに貧弱である。縄文時代中期初頭～前葉の土器を含む。
Ⅲ層　黄褐色土。ローム漸移層。5 cm～拳大の礫を多く含む。締り・粘性ともに弱い。
Ⅳ層　明黄褐色土。混礫二次堆積ローム。締り強く粘性をもつ。



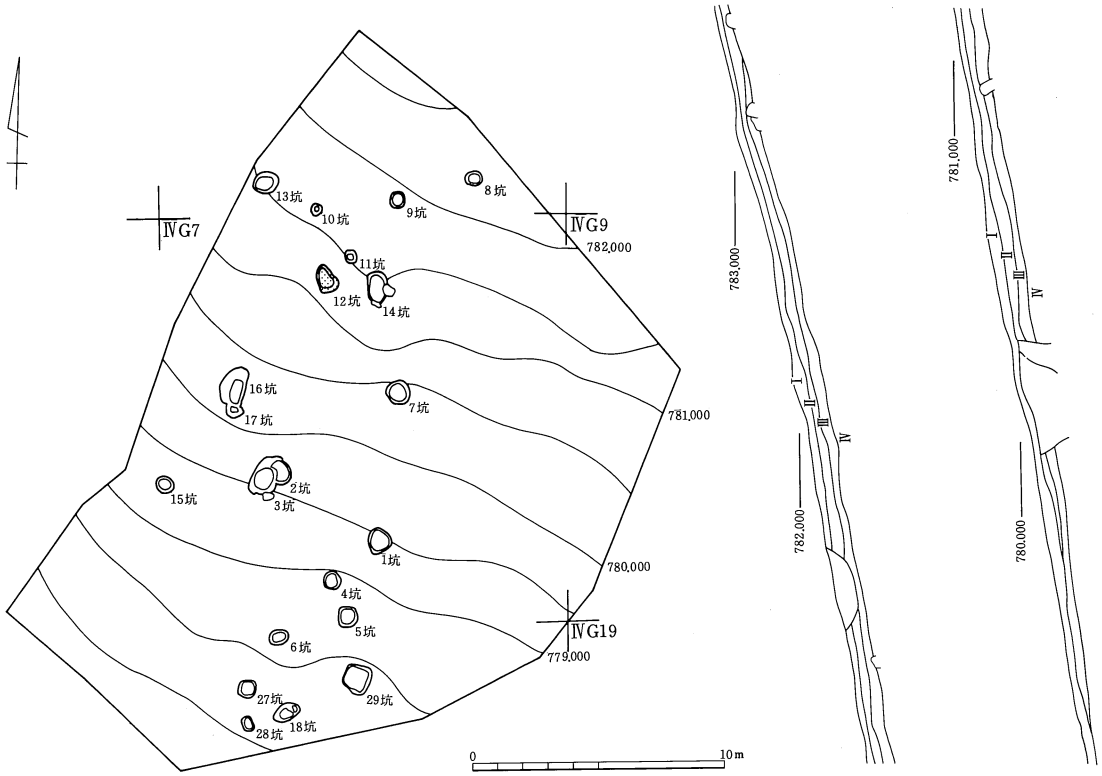


図３　拡張区遺構分布および基本土層

4　遺構と遺物

前記したように、古墳群を対象とした今回の調査では、終末期古墳１基を確認し調査するとともに、当初古墳とみられていた石積みのうち１基が近世墳基であることが判明した。残るほかの石積みについては断ち割りなど詳細な調査を行った結果、開墾時もしくはその後の耕作過程における石の集積であり、墳墓などの人為的な構造物ではないことが確認された。また、調査の過程で、縄文時代から弥生時代にかけての遺物包含層および土坑群の存在も合わせて明らかとなったことは既に記したとおりである。

以下、検出された遺構と遺物の詳細について、縄文時代から近世まで順次年代を追って記す。

(1)　縄文時代の遺構と遺物

ア　焼土址

１号焼土址（図７・10－４～６）

北側拡張区としたⅣC—N07グリッドに位置する。同区Ⅳ層上部で検出。128×120 cm の不整円形を呈す範囲に、焼土と炭化物が認められた。焼土は厚さ10 cm 程の断面レンズ状をなすが、掘り込みを持たず地山が焼土化した様相を呈す。周辺より中期前葉の土器（図10－４～６）が出土した。

イ　土坑

１号土坑（図４、PL78）

南側拡張区、ⅣG—Ⅰ11グリッドに位置する。90×90 cm の不整形なプランを呈し、深さは現存13 cm ほ

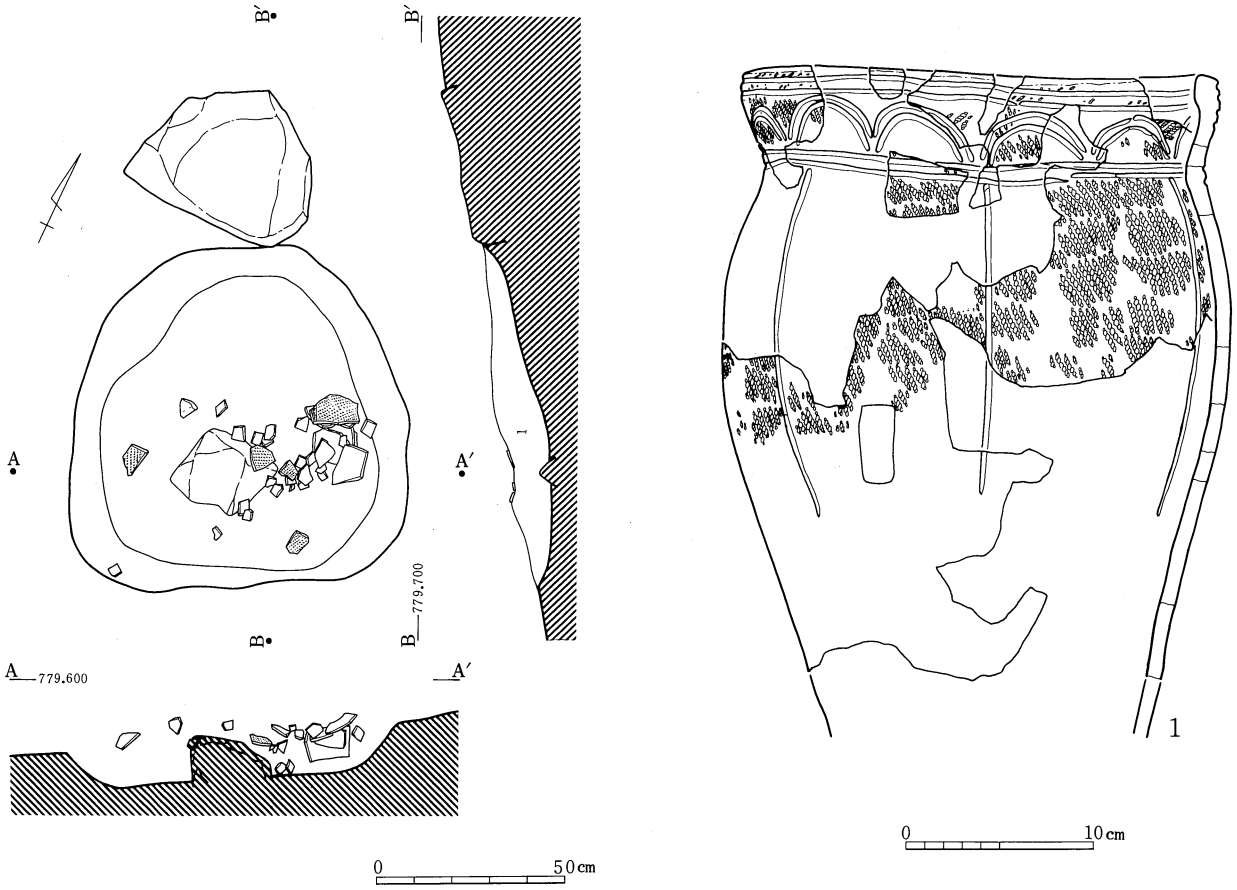


図４　１号土坑

どをはかる。Ⅳ層を掘り込んだ坑底ほぼ中央には地山礫が露出し、その周囲に同一個体の土器片が多数割り入れられたように遺存していた。覆土はⅡ層とⅢ層とが混合した土であり、前者はブロック状に入る。

１は口径23 cm、現存高32.5 cm をはかる深鉢形土器。頸部をめぐる２条の沈線によって区画された口縁部文様帯には、連続する孤状の沈線文が描かれ、また、胴部には縦位沈線文が垂下する。口縁から胴中位にかけては、地文としてＲＬ単節縄文が施文される。胎土に粗砂のほか、石英粗粒・雲母などを多く含む。

出土遺物より、本址は縄文時代中期初頭後半の所産と考えられる。

２号土坑（図５・10―７～11、PL78・80）

南側拡張区、Ⅳ G―G09グリッドに位置し、３号土坑に切られる。掘り込み面はⅡ層中にある。坑底径86×70 cm 程の楕円形プランを呈し、深さは40 cm 余りをはかる。壁は急傾斜に掘り込まれ、坑底は地山礫が露出するものの、全体に平坦である。北西寄りには人頭大の礫が、また、ほぼ中央には打製石斧と土器破片とが、それぞれ坑底より若干浮いた状態で出土した。覆土は、１層：褐色土、２層：Ⅲ層の指頭大ブロックを含む褐色土、３層：明褐色土、４層：褐色土、５層：Ⅲ層土をわずかに含む褐色土であった。

出土遺物には上述した土器（２）と石器（１・２）などがある。２は体部に「人」を思わせる大柄な隆帯文の付く深鉢形土器。くすんだ灰褐色を呈し、胎土に粗砂や白色粒子を含む。このほか、中期初頭から同前葉にかけての土器片が覆土中より出土している(図10―７～11)。石器は基部のみ残存の安山岩製打製石斧(1)と黒曜石製石鏃(2)である。１は側辺にツブシが認められ、２は抉りが深めで大きく開脚する。

出土遺物より、本址は縄文時代中期前葉のの所産と考えられる。

３号土坑（図５・10―12・13、PL78・80・85）

Ⅳ G―F09グリッドに位置し、２号土坑を切る。同土坑同様に楕円形のプランを呈し、坑底径92×73 cm 深さ75 cm 以上をはかる。坑底はほぼ平らに整えられる。壁はほぼ垂直に立ち上がるものの、上半部は大きく開き、長軸が160 cm を越える。覆土は４層に分かれ、１層：Ⅱ層類似の褐色土、２層：褐色土(暗褐色土・拳大礫含)、３層：暗褐色土（炭粒若干量含）、４層：暗褐色土（炭粒・炭化材含）であった。また、覆土中層の北壁寄りには、一抱えほどもある大礫が遺在していた。

遺物としては、若干量の土器片と石器類２点（３・４）が出土したにすぎない。すべて覆土の中・下層よりの出土であった。土器（図10―12・13）はすべて中期前葉に帰属するもので、文様・モチーフなど28号土坑出土土器に類似する。石器は小剝離痕を有する剝片(3)がある。ほか、ほぼ拳大の黒曜石塊(4)がある。不規則な剝離面は風化し、原石に近い状態といえる。

出土遺物および切り合い関係から、本址は縄文時代中期前葉の所産と考えられる。

７号土坑（図６、PL85）

南側拡張区、Ⅳ G―Ⅰ08グリッドに位置する。プランは径97×86 cm の不整円形を呈し、深さ23 cm をはかる。坑底から壁にかけては、地山礫が多数露出する。覆土はローム粒や拳大の礫を含む褐色土であった。

覆土中より、安山岩製の打製石斧（５）が出土した。基部を欠損し、刃部の磨耗は認められない。

27号土坑（図６・10―23・24、PL79・80・85）

南側拡張区、Ⅳ G―F14グリッドに位置する。径66×64 cm をはかるほぼ方形のプランを呈す。深さは最大で35 cm。土坑内には柱状の角礫２個が揃えられるように遺存しており、その下から剝片石器１点(６)が坑底より若干浮いた状態で出土した。覆土はローム粒・ロームブロックを多く含む暗褐色土であった。ま

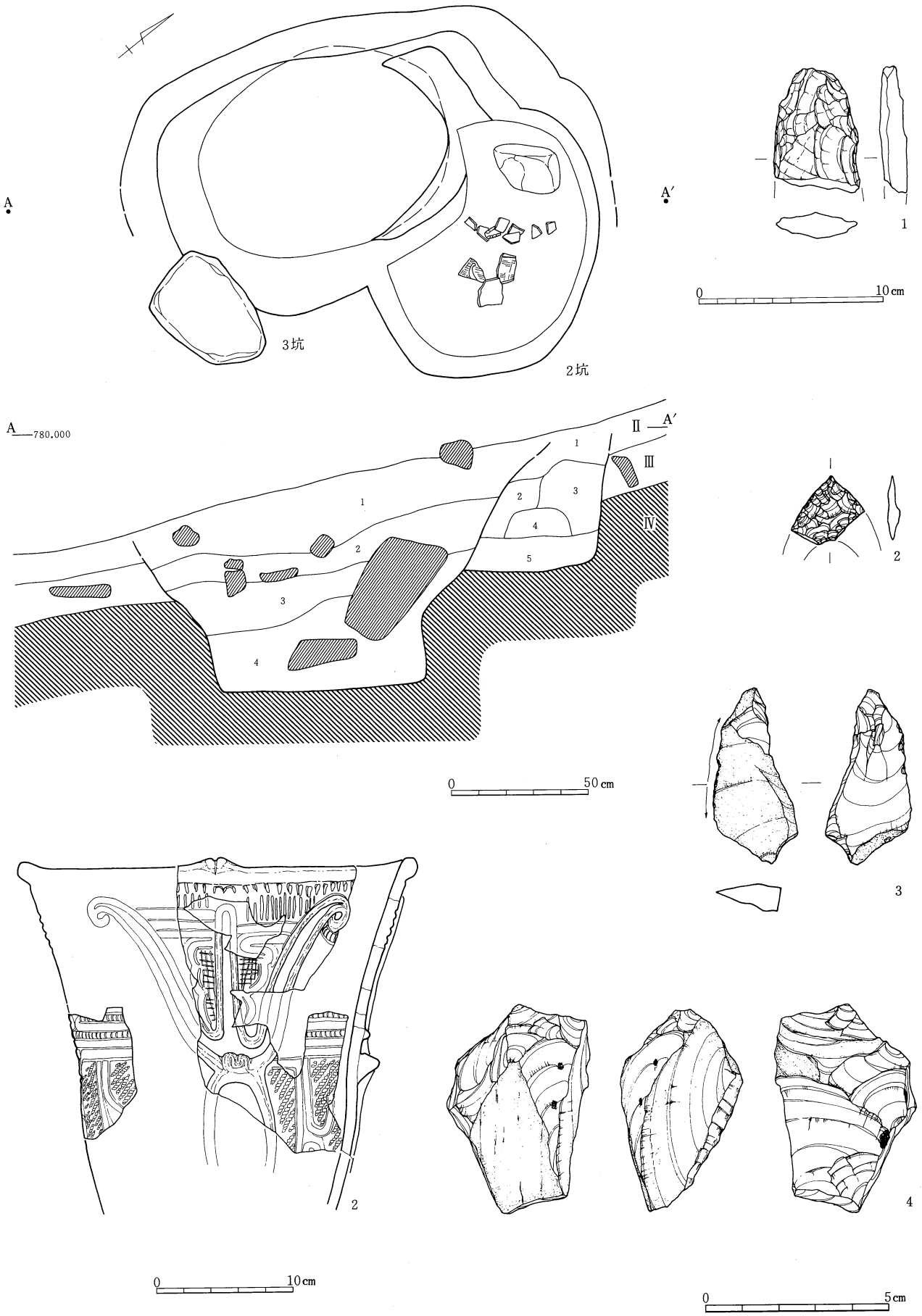


図5　2・3号土坑

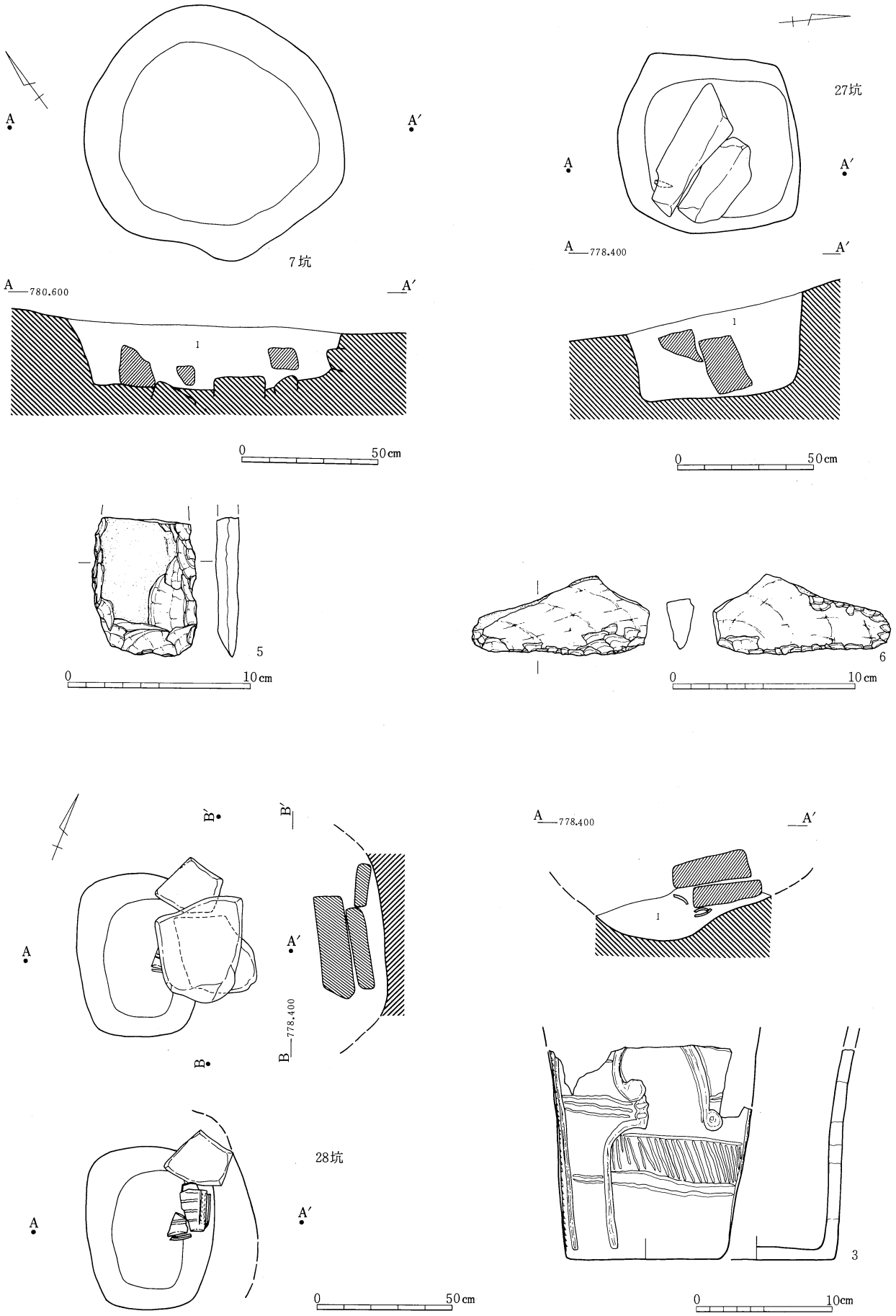


図６　７号・27号・28号土坑

た、炭粒もわずかながら検出された。

6は安山岩製の大形剝片石器である。素材の長辺に当たる縁辺部を利用している。表裏の剝離面剝離軸は対抗する。横位楕円形区画文と斜行沈線文を特徴とする土器（図10—23・24）も出土した。

出土遺物より、本址は縄文時代中期前葉の所産と考えられよう。

28号土坑（図6、PL79）

南側拡張区、Ⅳ G—F15グリッドに位置する。径20～40 cm、厚さ5～12 cmの扁平な礫3枚を並べ重ねるとともに、礫下に深鉢形土器の胴下半を埋置する。土坑は60×40 cmの楕円形プランを確認しえたのみであるが、本来は90×80 cm以上の規模を有していたと考えられる。また、深さも30～40 cmはあったとみられる。覆土は土坑下部のみの所見であるが、ローム粒をやや多く含む暗褐色土であった。

3は平石下に遺存していた土器。胴下半のみであるが、断面三角形ないしカマボコ状の低い隆線文を伴い、器面を蛇行沈線文や斜行沈線文で埋める。茶褐色を呈し、胎土に粗砂・石英粒・雲母を多く含む。

出土遺物より、本址は縄文時代中期前葉の所産と認められよう。

4号土坑（図7）

南側拡張区、Ⅳ G—H12グリッドに位置する。径70 cmの略円形プランを呈し、深さ45 cmをはかる。壁は急傾斜で立ち上がり、断面円筒状をなす。覆土はローム粒を多く含む褐色土で、小～中礫を含む。

5号土坑（図7）

南側拡張区、Ⅳ G—H12グリッドに位置する。径80×77 cmの隅丸方形プランを呈し、深さは最大25 cmをはかる。断面はタライ状。覆土は2層に分けられ、上半には暗褐色土が、下半には炭粒を微量含む褐色土が認められた。また、北寄りの坑底付近には礫3個が存在した。

6号土坑（図7・10—14、PL80）

南側拡張区、Ⅳ G—G13グリッドに位置する。楕円形プランを呈し、規模は81×60 cm、深さ13 cmをはかる。覆土は暗褐色土。中期初頭の土器片が1点出土している（図10—14）。14は縄文を地文として、横位の沈線区画内に竹管状工具による刺突文が充塡される。胎土に石英・雲母を多量に含む。

出土遺物より、本址は縄文時代中期初頭の所産である可能性が高い。

8号土坑（図7）

南側拡張区、Ⅳ G—K04グリッドに位置する。径72×56 cmの楕円形を呈し、深さ15～18 cmをはかる。断面鍋底状をなし、覆土は3～5 cm大の礫を含んだ褐色土であった。

9号土坑（図7）

南側拡張区、Ⅳ G—I04グリッドに位置する。径66×60 cmをはかる楕円形プランを呈し、深さは12 cmとやや浅い。断面は鍋底状。覆土は小礫を含む暗褐色土であった。

10号土坑（図7）

南側拡張区、Ⅳ G—G04グリッドに位置する。径40 cm余りの不整円形を呈し、深さ20 cmをはかる。壁はゆるやかに立ち上がり、上部がやや開く。覆土は5 cm大の礫を含む暗褐色土。

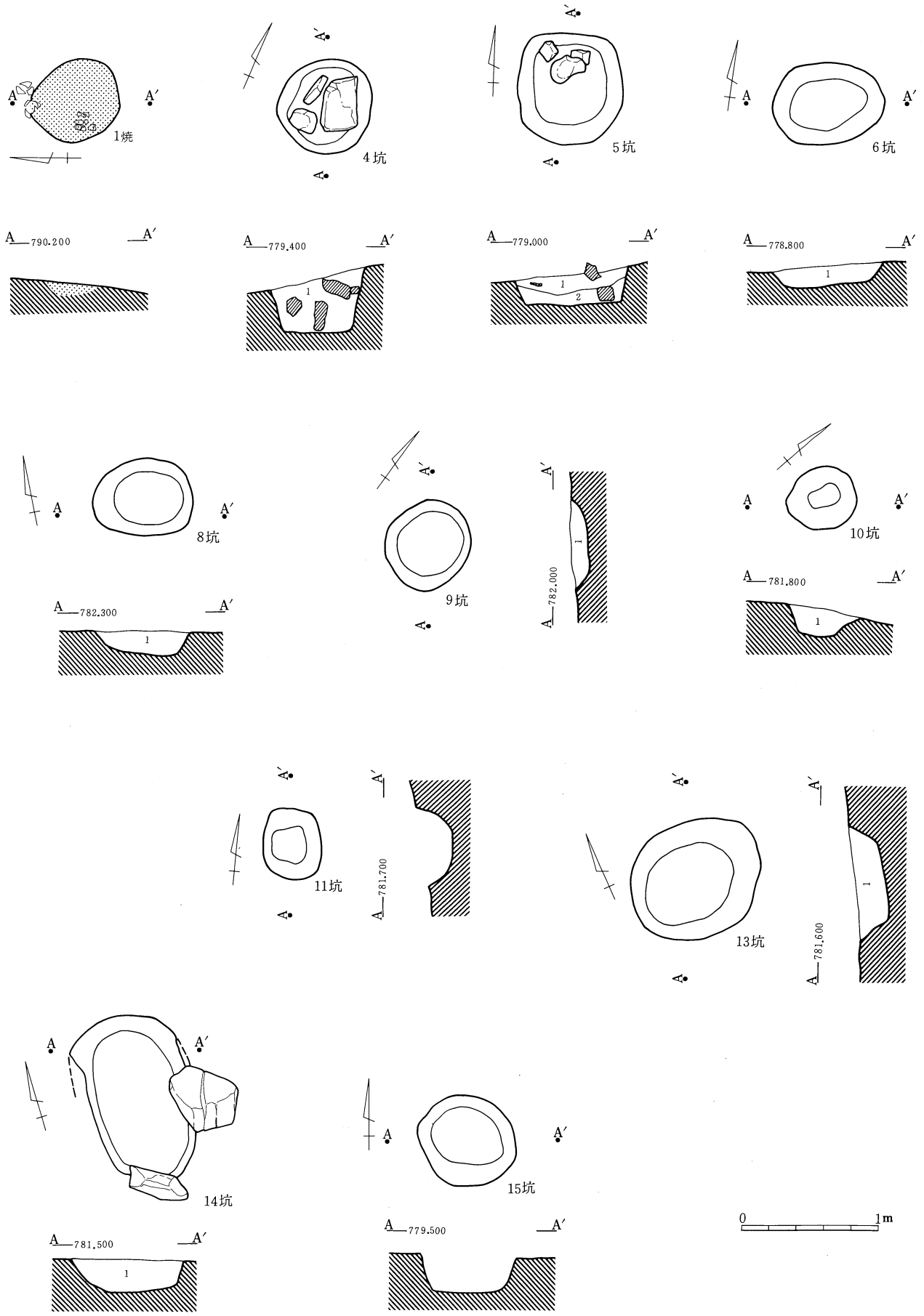

1焼
4坑
5坑
6坑
8坑
9坑
10坑
11坑
13坑
14坑
15坑
A 790.200 A′
A 779.400 A′
A 779.000 A′
A 778.800 A′
A 782.300 A′
A 782.000
A 781.800 A′
A 781.700
A 781.600
A 781.500 A′
A 779.500 A′
0 1m

図７　焼土址・土坑（１）

11号土坑（図7）

南側拡張区、IV G—H05グリッドに位置する。径55×43 cm の楕円形を呈す。断面鍋底状をなし、深さ20 cm 余りをはかる。覆土は暗褐色土。

13号土坑（図7）

南側拡張区、IV G—G04グリッドに位置する。径100×70 cm の不整円形を呈し、深さ22 cm をはかる。3～5 cm 大の礫を含む暗褐色土を覆土とし、断面は上部が開く鍋底状をなす。

14号土坑（図7）

南側拡張区、IV G—I07グリッドに位置する。長軸130 cm・短軸78 cm 程の長楕円形を呈す。断面は鍋底状をなし、深さ24 cm をはかる。覆土はローム粒を若干量含む暗褐色土であった。

15号土坑（図7）

南側拡張区、IV G—E10グリッドを中心に位置する。径75 cm の不整円形を呈し、深さ26 cm をはかる。暗褐色土を覆土とし、断面タライ状をなす。

16号土坑（図8・10—15・16、PL80）

南側拡張区、IV G—F08グリッドに位置し、17号土坑を切る。上面は長軸160 cm・短軸104 cm をはかる。不整楕円形を呈するものの、平坦に整えられた坑底は97×45 cm の均整な小判形を呈す。深さは80cm。覆土は褐色土や炭粒を含む黒褐色土であった。

覆土中より、中期前葉の土器片と土製円板が出土した(図10—15・16)。15は断面三角形の細い隆帯が付けられる胴部破片であり、一部に横位の蛇行沈線文を伴う。16は31×28 mm、重量7.5 g をはかる土製円板。中期前葉とみられる胴部破片の周縁を研磨して、略円形の形状に作り出している。

出土遺物より、本址の帰属時期は縄文時代中期前葉に求められよう。

17号土坑（図8）

南側拡張区、IV G—H08グリッドに位置する。北側を16号土坑により切られるが、長軸70 cm をはかる不整楕円形を呈すと思われる。深さは30 cm 余り。

18号土坑（図8・10—17、PL79・80）

南側拡張区、IV G—G14グリッドに位置する。径111×70 cm の不整楕円形を呈し、深さは30 cm 余りをはかる。断面は西側壁がゆるやかに立ち上がるほかは、比較的急傾斜に掘り込まれる。東壁にはテラス状の段をもつ。また、西壁下には板状の礫が立位に遺存していた。覆土は2層に分けられ、1層：暗褐色土、2層：ローム粒・ロームブロックを多く含む暗褐色土であった。覆土中より、中期前葉の土器（図10—17）が出土した。口縁下に細い隆帯区画文と竹管状工具による刺突文とが施される。

出土遺物より、本址は縄文時代中期前葉の所産と考えられる。

19号土坑（図8・10—18、PL80）

北側拡張区、IV C—I 05グリッドに位置する。長軸240 cm・短軸130 cm をはかる不整楕円形を呈す。断面はおおむね鍋底状をなすが、南壁下は深く北壁下は浅い。覆土は礫混じりの黒褐色土。覆土中より中期

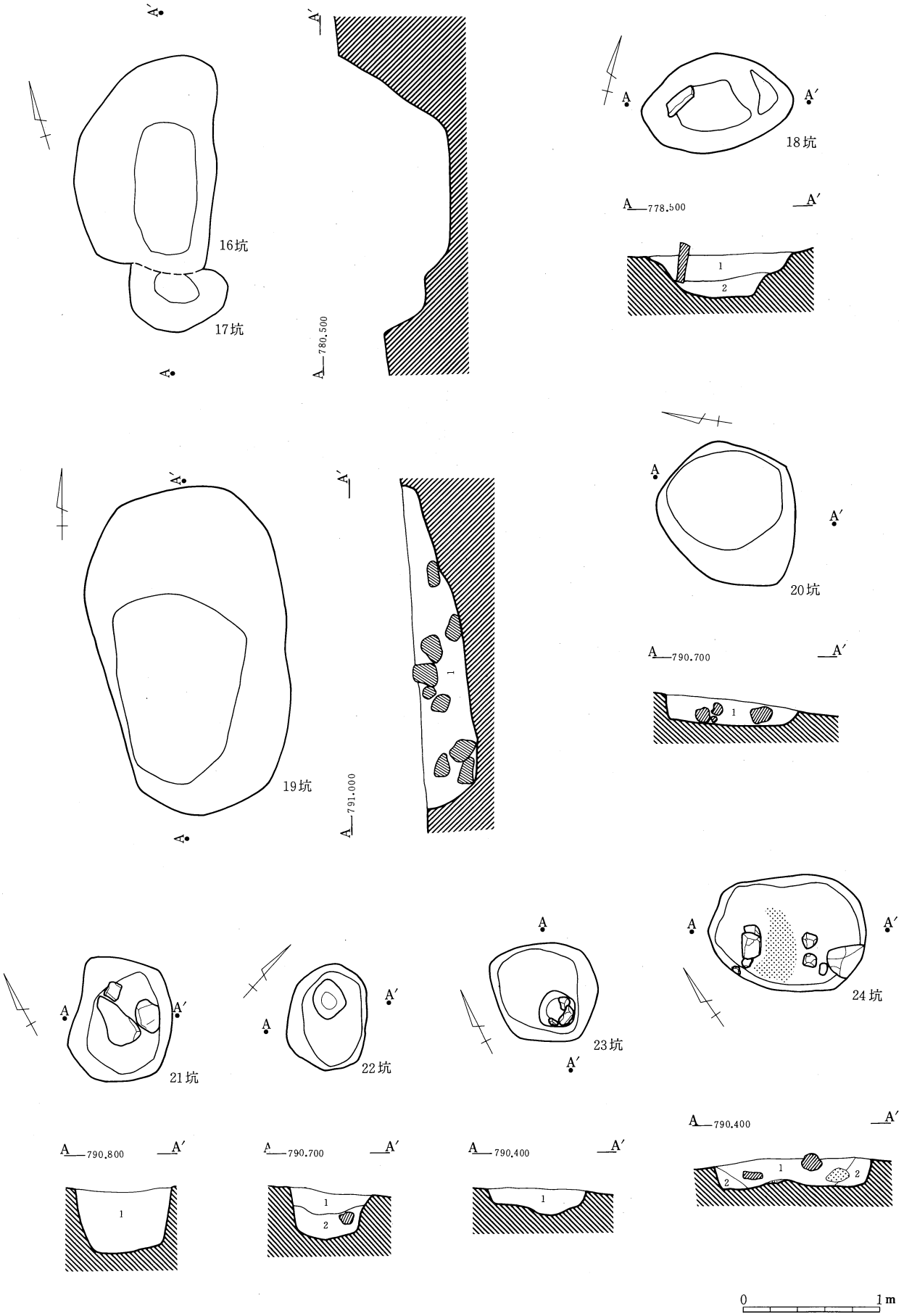

16坑
17坑
18坑
19坑
20坑
21坑
22坑
23坑
24坑
A 780.500
A 778.500
A 791.000
A 790.700
A 790.800
A 790.400
0
1 m

図８　土坑（２）

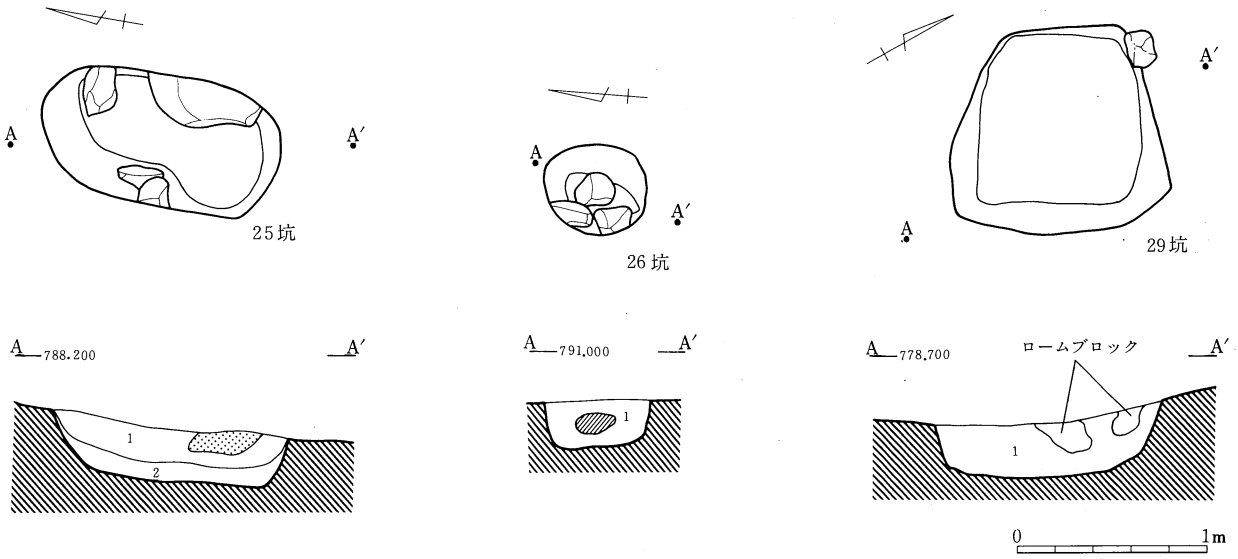


図9　土坑（3）

初頭の土器片1点が出土した（図10—18）。

出土土器より、本址は縄文時代中期初頭の所産であった可能性が考えられる。

20号土坑（図8）

北側拡張区、Ⅳ C—K05グリッドに位置する。径100 cm 余りの不整形プランを呈す。断面はタライ状をなし、覆土は小～中礫を多く含む黒褐色土であった。

21号土坑（図8・10—24、PL80）

北側拡張区、Ⅳ C—G05グリッドに位置する。径88×70 cm の不整形プランを呈す。深さ45 cm をはかり、断面形は円筒形をなす。覆土は炭粒を含む黒褐色土。中期初頭から同前葉にかけての土器が、覆土中より出土した（図10—24）。

出土土器より、本址の帰属時期は縄文時代中期前葉と考えられる。

22号土坑（図8）

北側拡張区、Ⅳ C—F05グリッドに位置する。径77×57 cm、深さ34 cm をはかり、坑底の北西寄りには径25 cm 程の小ピットが穿たれる。覆土は2層に分けられ、1層：黒褐色土、2層：明褐色土であった。

23号土坑（図8）

北側拡張区、Ⅳ C—F06グリッドに位置する。径75×70 cm の不整方形を呈し、深さ13 cm をはかる。南東コーナーの壁下には22号土坑と同様な浅い小ピットが掘り込まれる。覆土は礫混じりの黒褐色土。

24号土坑（図8）

北側拡張区、Ⅳ C—S09グリッドに位置し、他の土坑とはやや異った占地を示す。長軸114 cm、短軸86 cm の楕円形プランを呈し、断面タライ状をなす。覆土は2層に分かれ、1層にはロームブロックを含んだ黒褐色土が、2層には黒褐色土がそれぞれ認められた。また、1層下部には多量の炭化物が遺存し、北西壁付近には焼土も存在した。本址はほかの土坑とはその性格を異にすると思われるが、詳細は不明である。

25号土坑（図９）

北側拡張区、Ⅳ C―M13グリッドに位置する。径128×70 cm の長楕円形を呈す。深さ30 cm 程をはかり、壁は比較的ゆるやかに立ち上がる。覆土は２層に分かれ、１層：礫を多く含む黒褐色土、２層：黒褐色土である。また、１層上部には焼土と炭化物がまとまって遺存していた。

26号土坑（図９）

北側拡張区、Ⅳ C―I04グリッドに位置する。径50 cm 程の略円形を呈し、深さ25 cm をはかる。壁は急傾斜に掘り込まれる。覆土は礫混じりの黒褐色土。

29号土坑（図９）

南側拡張区、Ⅳ G―H14グリッドに位置する。一辺108 cm の不整方形を呈す。坑底はやや丸みをもって壁に移行する。深さは約35 cm で、覆土には小礫を含む暗褐色土が認められた。

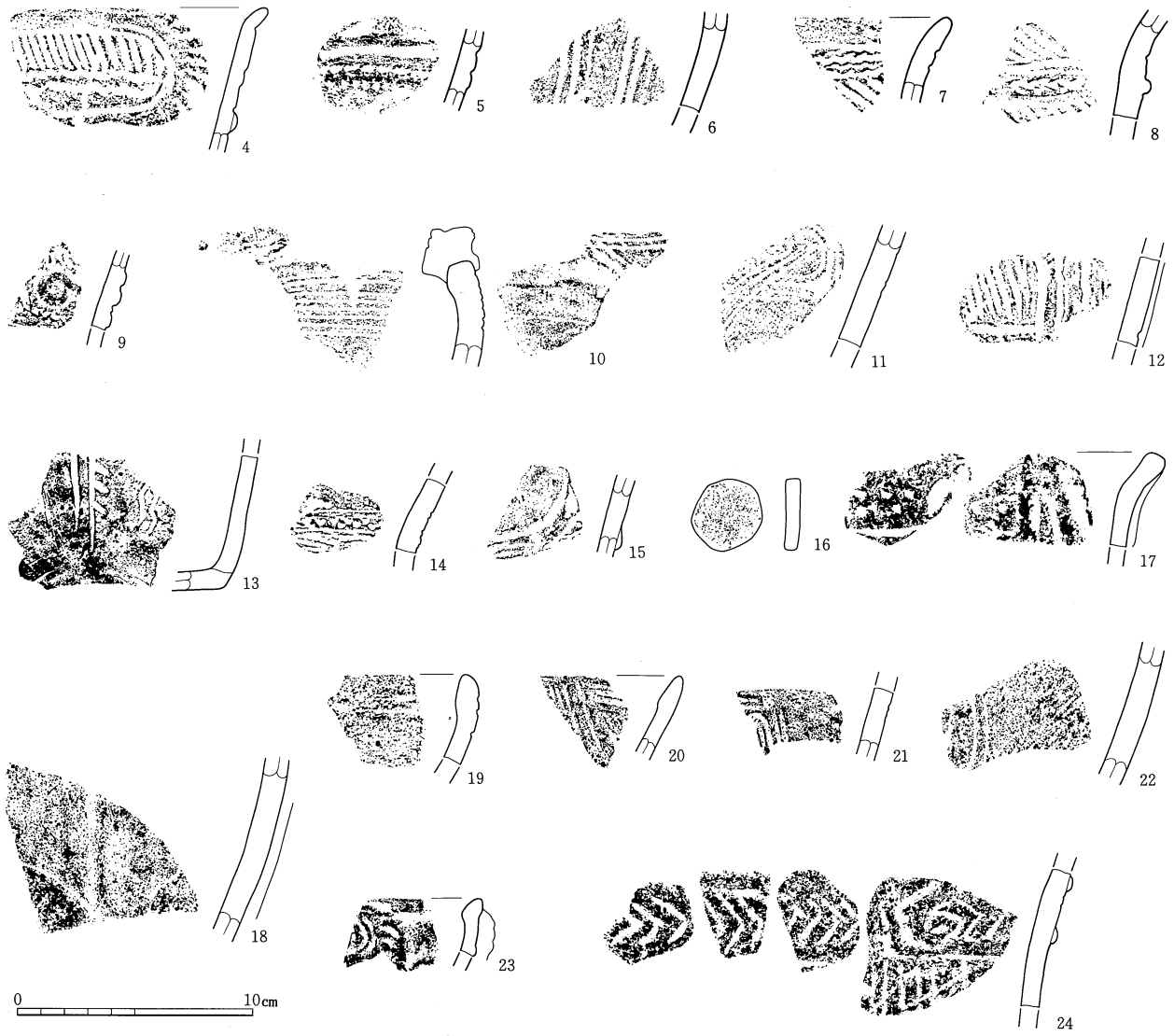


図10　焼土址・土坑出土土器

ウ　遺構外遺物

遺構外遺物としては、北側拡張区東寄りの窪地を中心として、前期末葉から後期中葉にかけての土器・石器類の出土をみた。時期的には比較的長期におよぶものの、前期末葉・中期初頭・中期前葉・中期後葉・後期中葉の5期に限定される内容であった。また、量的には、中期初頭～同前葉にかけての遺物が主体を占め、他時期の遺物は数えるほどの出土であったにすぎない。以下、この5時期の大別をふまえ、遺物を土器・土製品・石器の３者に分けて、それぞれの概要を述べることとする。

１）土器

前期末葉の土器（図11―25、PL81）

図示した1点のみ出土。25は半截竹管状工具により横位平行沈線を施し、半隆起状をなす沈線間に結節状の連続押引き文を加えたもの。外面茶褐色、内面黒褐色を呈し、胎土に粗砂・石英・雲母などを含む。

中期初頭の土器（図11・12―26～92、PL81・82）

26～34は沈線文および隆帯文により文様が描かれる一群。26～28は口縁下の破片とみられ、横位沈線文を主体として、細い隆帯文が垂下する。32は横位・縦位の隆帯文を貼付し、器面を棒状工具ないし竹管の背を用いた条痕様の平行沈線で埋める。胎土に粗砂や白色粒子を多く含み、ほかとは異質な趣きを呈す。33は口縁下に渦巻状の沈線文と三叉文をもつ深鉢形土器。頸部には横位平行沈線文と列点状の連続刺突文とがめぐる。胎土に石英粗粒を多く含む。

35～66は縄文を地文として、隆帯文や沈線文が施される一群。ふくらみをもって開く口縁部から円筒状の胴部へ移行する深鉢形土器によって構成される。35は口縁下に半截竹管状の工具による平行沈線文と「コ」の字状の交互刺突文をめぐらす。36～38・41～44は円弧状をなすとみられる隆帯文とそれに平行する多重沈線文により、口縁部文様帯を構成する。37・41・43には三叉文が認められる。47は中心に三叉状の印刻をもつ「Y」字状モチーフが垂下する胴部破片。34～42は縦位に垂下する隆帯文を中心として沈線文が施されるもの。36～44などに伴う胴部破片であろう。59・60は半截竹管状工具による平行沈線で曲線的なモチーフを描くとともに、抉り状の三叉文を要所に配す。66は隆帯貼付後に縄文施文される。

67～77は連続押引き文によりモチーフを描く一群。67は小突起のつく口縁部破片であり、肥厚する口縁上部がやや開く。70～75は縄文を地文として、連続押引き文により種々のモチーフが施される胴部破片。70は隆帯文を伴う。76・77は連続押引き文による蛇行懸垂文をとどめる。全体にやや薄手のつくりのものが多く、胎土に粗砂のほか、雲母などを多く含む。

78～86は縄文施文を主体とするもの。78は波状、79～81は平縁の口縁部破片。79は口縁端部が折り返し状をなして肥厚する。80は薄手・堅緻なつくりであり、67～77と色調・胎土などが類似する。また、80～84は結節縄文が用いられ、沈線による蛇行懸垂文が併用される84と同様の施文効果を生んでいる。

87～86は浅鉢形土器を一括した。内面の口縁下を若干肥厚させ、連続押引き文ないし連続爪形文を数条めぐらす。87は縦位および渦巻状のモチーフをもつ。90は一部に「コ」の字状交互刺突文が施され、また、口唇部には棒状工具によるキザミが加えられる。それぞれ内面を中心にていねいな器面調整が行われ、平滑に仕上げられる。

中期前葉の土器（図12～17―91～208、PL82～84）

93は有孔鍔付土器。断面三角形を呈す凸帯状の鍔から、４個の橋状把手が派生する。鍔上部に小孔をめぐらし、口縁は把手上部で山形状となる。色調は暗茶褐色～茶褐色を呈し、胎土に粗砂・石英粗粒・雲母

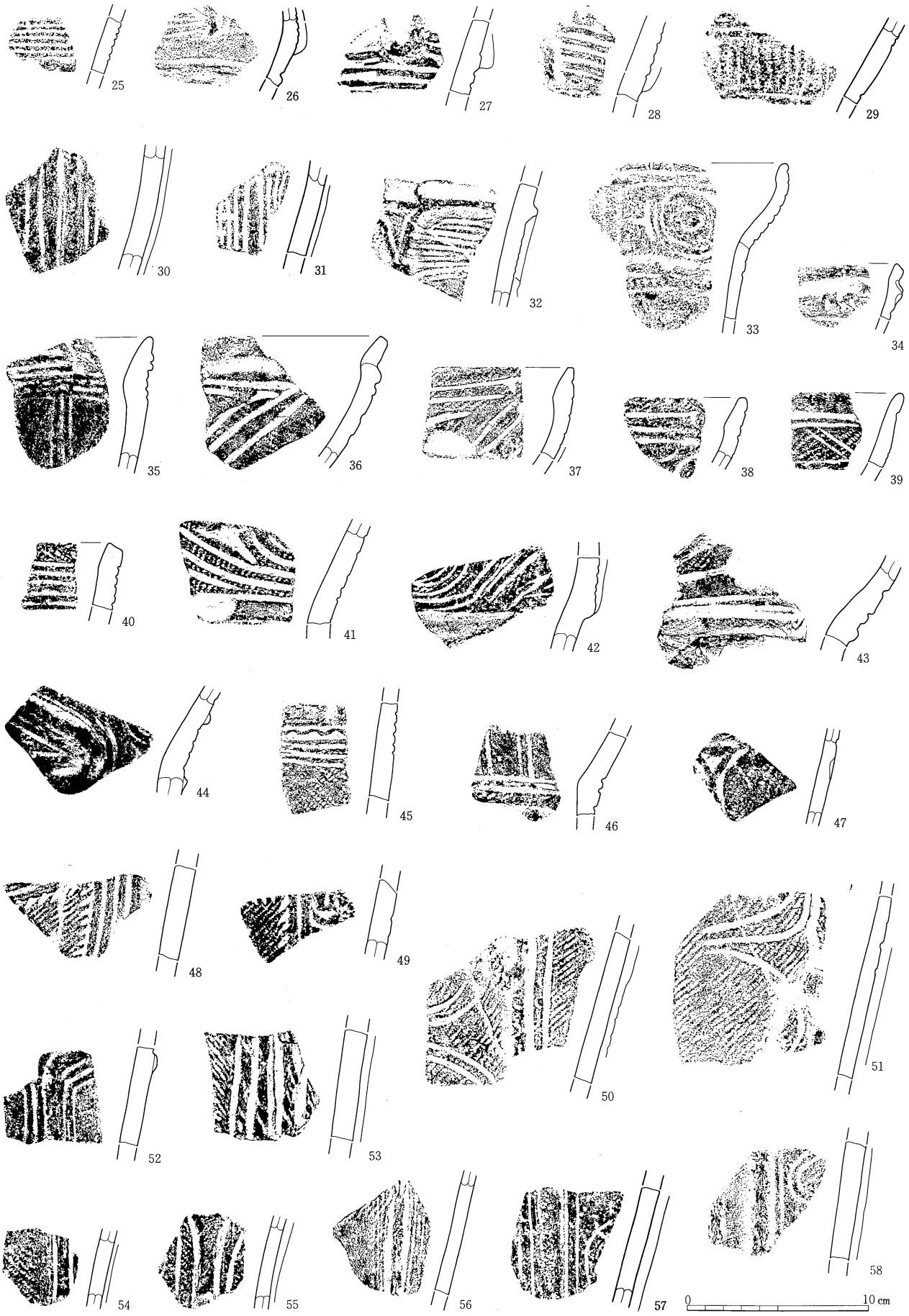


図11　遺構外出土土器（１）

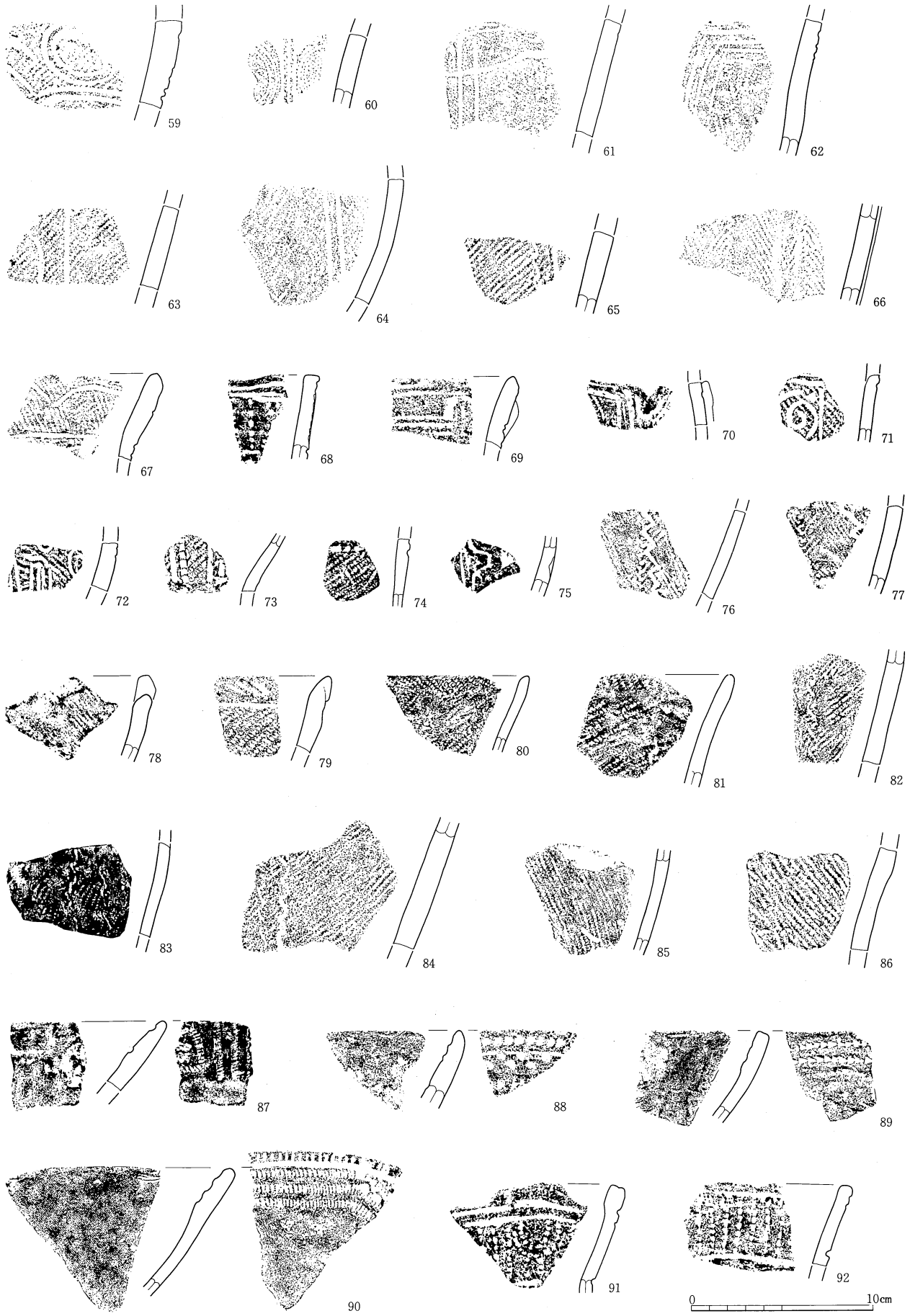


図12　遺構外出土土器（2）

などを多く含む。口径15 cm、推定高29 cm をはかる。94は推定口径33 cm をはかる無文の浅鉢形土器。大きく開く体部に、内側にくびれて直立する短い口縁部がつく。外面黒褐色、内面くすんだ茶褐色を呈す。

91・92・98～112は角押文を特徴とする一群。台形状の小突起をもつ91や口縁下に「コ」の字状交互刺突文をめぐらす92は、前代の名残りをとどめ過渡的な様相を呈す。98～111は楕円区画などを構成する隆帯文とともに角押文が用いられる。103はクランク状の隆帯を垂下させるもので、器面には押圧による連続圧痕を残す。104～110は角押文によって種々のモチーフを構成する。色調はおおむね茶褐色を呈すものの、108・110などはやや赤味を帯びる。胎土には、粗砂のほか石英・白色砂粒などを含むものが多い。

113～126は斜行沈線文を特徴とする一群。横位に連続し、また多段化する楕円区画文内に斜行沈線文を充填する。119・120・122・123には区画文の内外に横位の波状沈線文が加わる。126は横帯する細い隆帯区画文とともに、幾何学状に組み合わされた多条の斜行沈線と刺突文とが施される。文様・モチーフのみならず、胎土に石英粒や雲母を多く含む点など、他とは趣きを異にする。図示した１点のみ出土。そのほかの個体は、おおむね28号土坑出土に類似する。

127～162は千曲川流域にその分布が知られる一群。明確な時期比定の困難なものを含むが、きわめて在地性の強い土器として一括される。127は内湾する口縁部破片で、口端および口縁下にキザミが加えられる。キザミの加えられた曲線的な隆帯文と三叉状沈線文とが認められる。胎土に石英粗粒を多く含み、全体に古相を示す。128～132は口縁下に隆帯による加飾をもつ。渦巻など曲線的なモチーフを構成するほか、130は人面を模したとみられるハート状の文様を呈す。口縁端部が「内削げ」状に細まる133は、波状沈線文や曲線的な平行沈線文、さらに刺突文とが組み合わされる。器厚５ mm と薄手のつくりである。

135は円弧状の隆帯文と半截竹管状工具による平行沈線文とが施された口縁部破片。137も曲線的な隆帯とそれに平行する沈線とにより文様を構成するもので、さらに短沈線文や連続刺突文がこれに加わる。138は胎土に白色砂粒や軽石粒などを特徴的に含むやや異質な土器。139～142は渦巻状の隆帯文、143～149は棒状工具もしくは半截竹管状工具による曲線的な沈線文が、それぞれ施される胴部破片。149～162は中期初頭の土器とした一群との識別が困難な個体を少なからず含むが、総じて縄文施文を欠き、隆帯文および平行沈線文を中心に文様が構成される。また、胎土には粗砂・雲母を含み、全体に粗い。

95～97・163～168は角押状の押引き沈線文および隆線による枠状区画を特徴とする一群。総じて、堅緻なつくりの土器であり、胎土に雲母・石英粒を多く含む。関東地方の霞ケ浦周辺を中心に分布することが知られている、阿玉台式土器に系統を発する土器である。

95は推定口径23.5cm をはかる深鉢形土器。内湾する口縁下に「眼鏡」状のモチーフが描かれ、以下胴部の器面は押圧によるヒダで埋められる。96は波状の小突起下に短い隆線文を有するもので、内湾する口縁下には１条の押引き沈線文によるモチーフを描く。頸部に沈線をめぐらし、突起下ではさらに縦位沈線文が垂下する。胴部にはまばらながら、押圧によるヒダが連続する。97は上部が「漏斗」状に開く橋状把手をもつ口縁部破片。把手部および口縁下には、２条を単位とする角押状の押引き沈線文が施される。

163は口唇部および肥厚する口縁下のみに角押文をめぐらす。胎土に混入される雲母の量が取り立てて多く、モチーフの上でも95などとともにより古い属性を示す。165は口縁端部が「く」の字状に外傾し、内湾する口縁下には楕円状の区画文と角押文が施される。また、口唇部にも角押文とそれに直交するキザミが加えられる。くすんだ灰白色を呈し、胎土に雲母のほか石英粗粒・小石などを多く含む。166～170は種々の口縁部破片。すべて内湾ぎみに立ち上がり、口縁下には横位構成の隆線文とそれに沿って押引き沈線文が施される。くすんだ褐色を呈す168を除き、赤味を帯びた茶褐色を呈すものが多く、また、後者の胎土中に混入される雲母の度合いは概して少ない。

171～194はこれらに伴う胴部破片。171は刺突状の押引き文を斜方向に多条施文するもので、図示した個

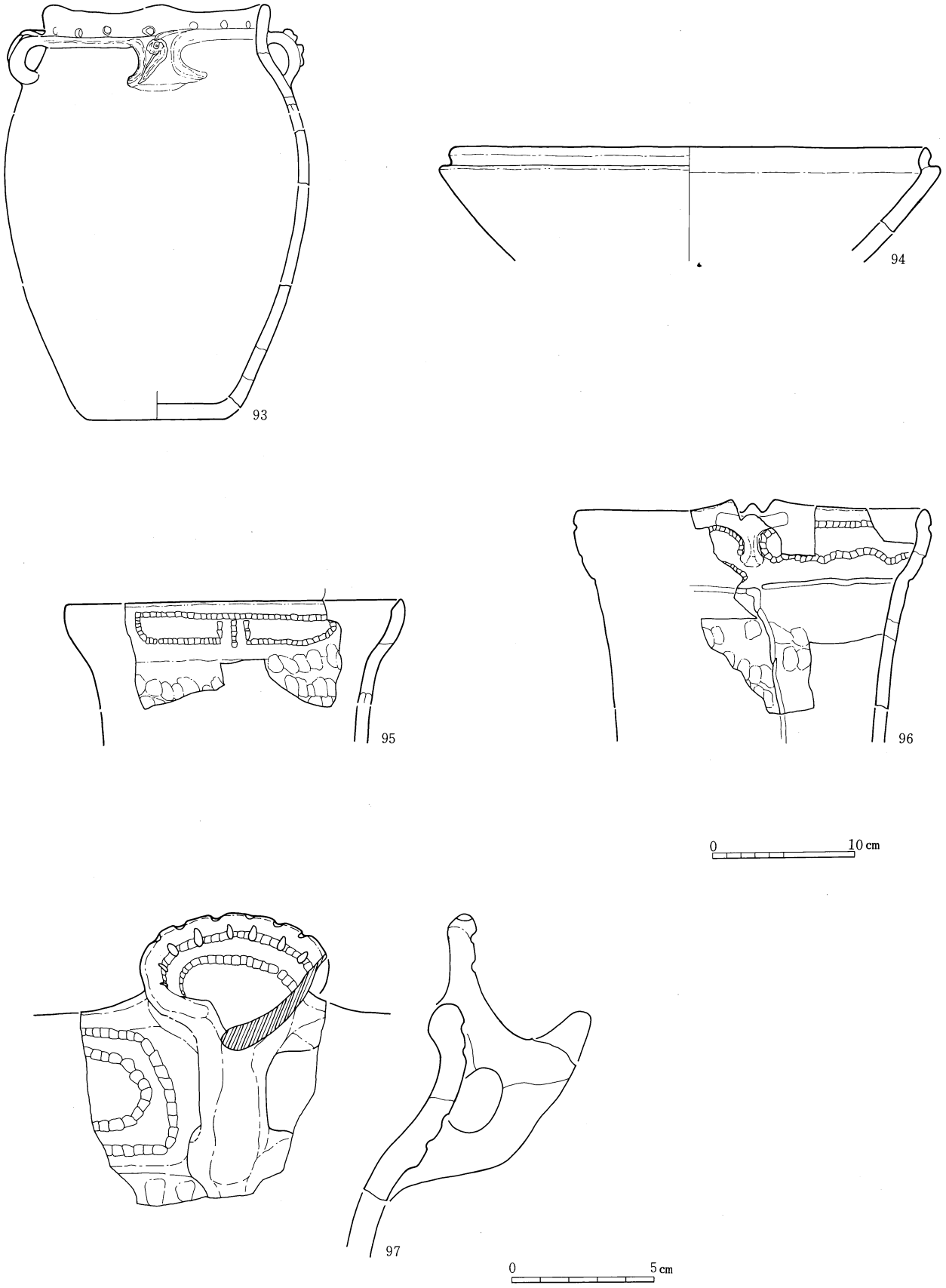


図13　遺構外出土土器（3）

図14　遺構外出土土器（４）

図15　遺構外出土土器（5）

体を含め出土数は少ない。172～175は横位構成のモチーフを、176～185はさらに縦位方向へもモチーフを展開する。隆線文の脇にはそれぞれ波状沈線文や角押状の押引き沈線文が施され、172･175～180の隆線文には耳たぶ状もしくは突起状の貼り付けが付加される。186～194は器面にヒダ状の規則的な押圧痕を残す。186や190～192のように痕跡程度の弱いものと、施文効果を意図したとみられる187～189などがある。とりわけ、188・189は横位の波状沈線文と組み合わせ、帯状に施文される。

195～198は98～112など角押文を多用する一群との折衷的な土器。胎土･調整などに上記土器群と共通する要素をもちながらも、施文技法や施文効果において若干の相違が認められる。

199～200は北陸から新潟にかけての日本海沿岸方面の土器を一括した。199～201は同一個体。ややくびれて外反する頸部に、連続爪形文を加えた半隆起線を３条めぐらし(199)、以下、縦位の半隆起線区画と格子目状のヘラ切り充塡文が施される(201)。茶褐色を呈し、胎土に粗砂を多く含む。203･205は縄文を地文として、半截竹管による半隆起平行線文が施される。また、要所には抉り状の三叉状文が印刻される。207･208は明褐色を呈し、縄文を地文として多条の平行線文によるモチーフが描かれる。

中期後葉の土器（図17―209～214、PL84）

縦位に垂下する平行沈線文間に縄文を充塡施文するもの。幅の狭い縄文帯と無文帯とが交互に繰り返される。図示したものを含め、10片程が出土したのみである。充塡される縄文の原体はすべてＬＲ単節。器厚８～11 mm と厚手のつくりであり、比較的大形の土器によって占められる。加曽利ＥⅢ式に比定される。

後期中葉の土器（図17―215、PL84）

図示した１点がすべてであり、南側拡張区より出土した。215は鉢形土器とみられ、口縁下に無文部を残し、以下丸みをもつ体部にはキザミの加えられた扁平な紐線文をはさんで、粗い斜格子状の沈線文が施される。口唇部先端には棒状工具によるキザミ目が連続する。器面はていねいに研磨されるが、口縁下の無文部はとりわけ平滑で光沢をもつ。胎土に川砂を多く混入しており、色調は明褐色を呈す。

２）土製品（図18―１～７、PL80・84）

遺構外からは、土偶２点と土製円板５点が出土した(図18)。ほとんどが北側拡張区からの出土であり、土製円板１点(4)のみが南側拡張区より出土した。なお、土製円板は16号土坑からも１点出土している。

１は左肩から胸部にかけての土偶片。表裏に沈線による文様が描出される。図示したように、粘土塊を接合して製作している。２は土偶の右脚部。足首に沈線文が施されるほか、つま先部に焼成前の小孔が貫通する。１とは別の個体である。３～７は土製円板。計測値などは下表に示すとおりであるが、きわだって大形の３については、土製円板として一括はしたものの、ほかとは異なる性格をもつ可能性が高い。

表１　土製品一覧

番号	出土区	利用部位	長さ・幅・厚さ・重量	周縁加工	形態	時期	備考
1	ⅣC－N07					中期初頭	土偶肩部
2	ⅣC 8					中期初頭？	土偶脚部
3	ⅣC14	胴部	9.0　7.6　0.9　95.5	磨耗	楕円形	中期初頭	Ⅳ層出土
4	ⅣG17	胴部	4.1　3.7　1.1　20.2	打割・一部磨耗	円形	中期初頭	
5	ⅣC 9	胴部	3.2　3.1　0.9　9.5	磨耗	円形	中期初頭	Ⅲ層出土
6	ⅣC19	胴部	3.4　3.1　0.9　11.3	磨耗	円形	中期初頭	Ⅲ層出土
7	ⅣC14	底部付近	4.0　3.9　1.3　26.9	磨耗	円形	中期初頭	Ⅲ層出土

〔単位は cm・g〕

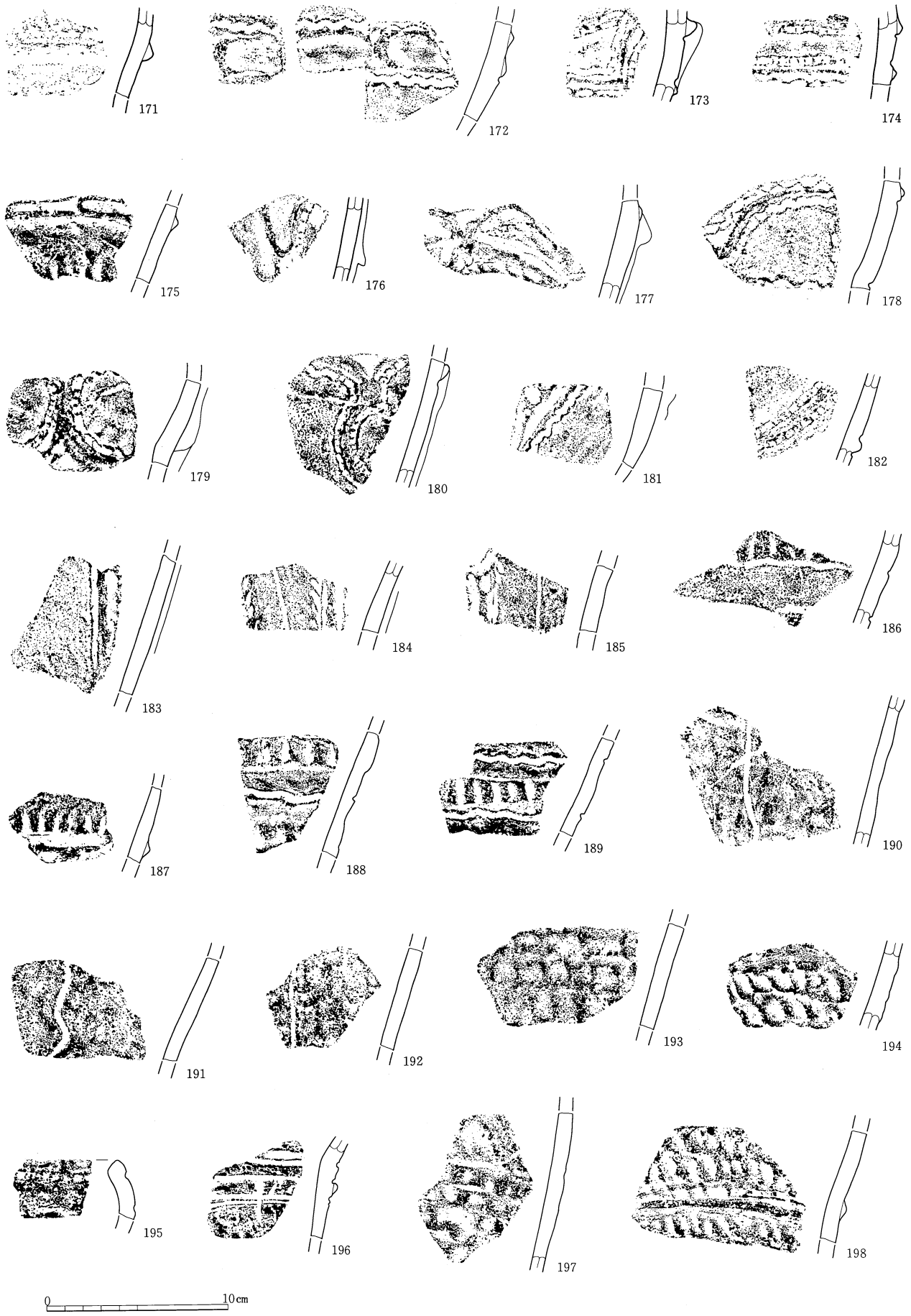


図16　遺構外出土土器（6）

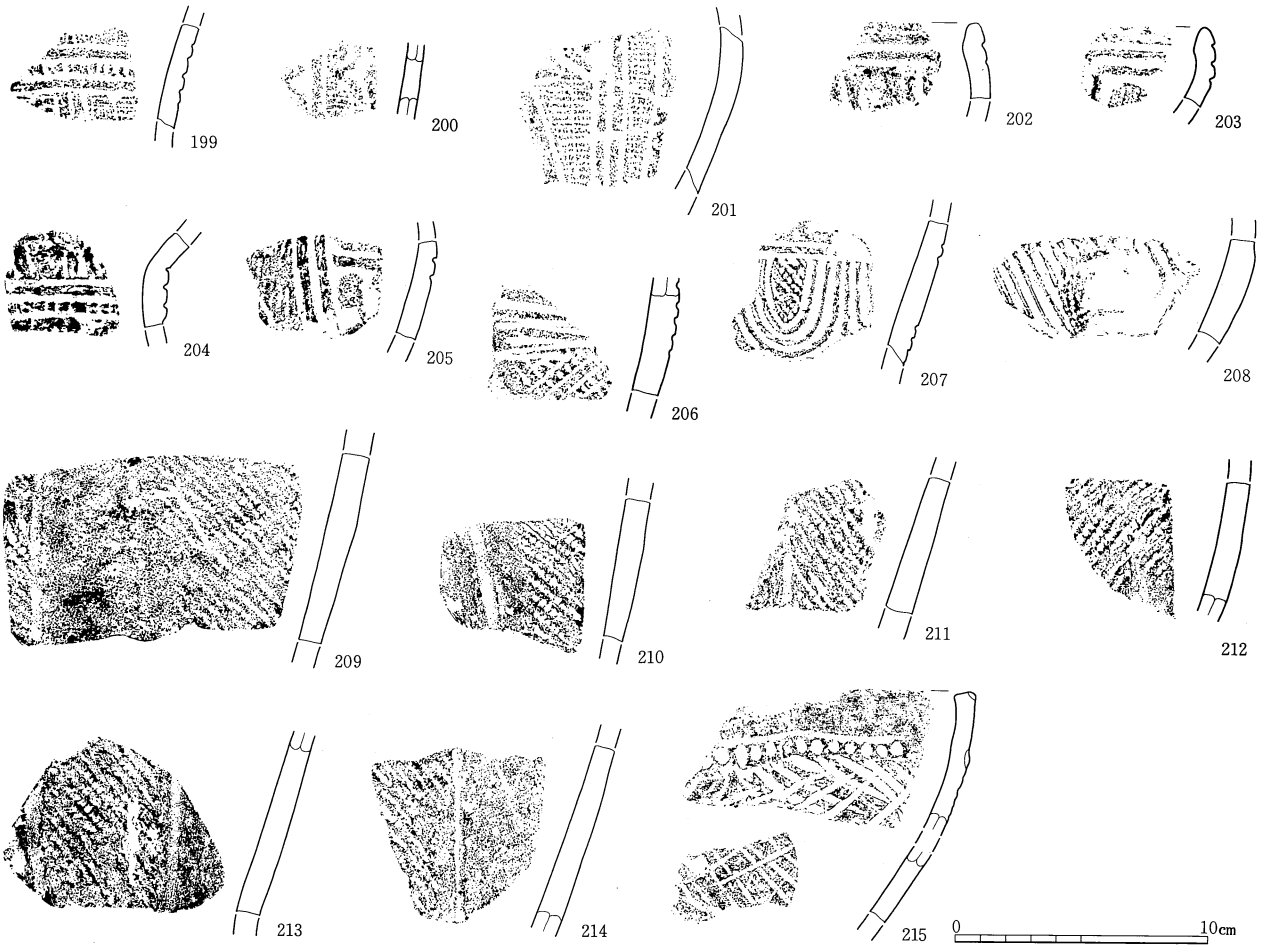


図17　遺構外出土土器（７）

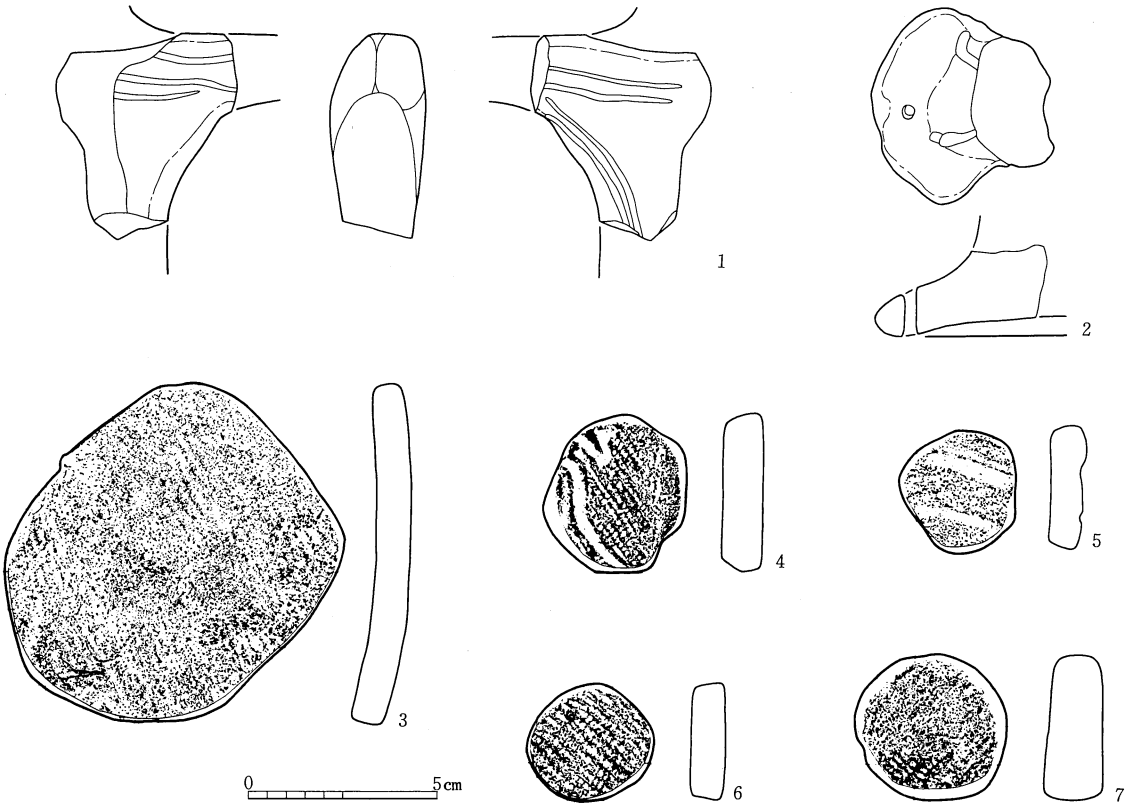


図18　土製品

3）石器

道具としての石器のあり方は、その時代性や地域性などの様相を映しだす。石器はその形態的特徴より狩猟活動にかかわる道具、植物質食料の採集などにかかわる道具、生産・加工にかかわる道具、漁労活動にかかわる道具などに大別できる。器種組成を時期的・地域的に比較検討して、自然環境と結びついた個々の遺跡の位置づけも可能となる。有形物の多くは、廃棄行為と関連してその使用価値を漸次費消する。石器もその多くは製作当初の形状が変化し、法量的にも低減する。それらが再加工や転用などの段階を経たにしろ、保管・廃棄・遺棄・紛失の結果として我々が石器を手にすることとなる。そのとき使用価値の基準をどこにまたどのように設定するかが、いわゆる完成品か未製品か、また完形品か欠損品かの判断を左右することになる。なお、本書では外形的特徴に主眼を置いた器種分類を行っており、あわせて個々の特徴や相関性などについて報告する。欠損については定形的な石器についてのみ考察する。

石器や石片類の出土数量を表２に、またその分布状況を図35に示した。北側拡張区での出土が主で、特にＮ９グリッドを中心とした範囲に欠損した石鏃が多出することは特徴的である。また刃部や胴部のみを残す打製石斧がやや異なった分布を示すが、その詳細については後述する。共伴する土器群より、時期は主として縄文時代中期初頭から前葉と思われる。

石鏃（図19－7～33、PL85）

石鏃は、チャート製（17, 22）・緻密な安山岩製（10, 11, 16）のほかすべて黒曜石製である。

17は表裏にていねいな剥離調整が施され、先端部にステップ状の剥落が認められる。10・16は横断面Ｄ字形状で厚く、扁平な主要剥離面から調整される。これら安山岩系の石材は近隣で採取でき、黒曜石や良質なチャートなどのように搬入されるものではない。生活の基盤が変化し狩猟具のウエイトが低下していく中期以降、この便宜的で簡易的とも思われる石材選択についての総合的な検討が必要であろう。香坂川流域の今後の調査が待たれる。

黒曜石の色彩は、濃淡さまざまである。器面が白濁化した26、斑に被膜化している24がある。素材面を大きく残すものが11点と必ずしも全面調整のものばかりでなく、うち自然面を有するもの（9, 23など）が５点ある。ほぼ半数が欠損品でその部位はさまざまだが、主に横方向に欠損する。なお、周縁部の剥離痕がのびて末端を欠落させた、製作時欠損の可能性がある２点を含む。

栗毛坂遺跡群Ａ地区の形態分類に準じて、分類別比率、鏃身長と抉り部・側辺部状況との相関を図21に示した。Ⅰ・Ⅱ類の無茎凹基鏃が大半を占める。概して基部は逆Ｖ字状に深く抉られ、脚部は鋭く仕上げられる。また、側辺部が外湾して先端部を先鋭化したものや直状のものが多く、対象動物への殺傷力は大きいと考えられる。以下の長幅相関に基づき、素材の性状や調整状況などを示す。

ａ類：長幅比が1.5以上で、縦長なもの（7～13, 28）

ｂ類：数値的に1.0＜長幅比＜1.5で、ａ類・ｃ類以外のもの（14～23, 29, 30）

ｃ類：長幅比が1.0前後で、基本形が三角形状なもの（24～26）

表２　出土石器・石片類一覧

器種／数量	石鏃	石錐	石匙	スクレ	ピエス	小剥離	打石斧	大剥片	磨石斧	磨石類	石皿等	多孔石	石製品	その他	剥片 点／g	石核 点／g	原石 点／g
遺構内（点）	2			1	1	3	2	1							15／12.0	3／8.5	1／6.8
遺構外（点）	39	20		24	23	54	12	12		2			1		313／349.1	56／282.5	3／119.4
総重量（g）	47.0	46.0		47.4	51.5	92.1	837	398		785			195		328／361.1	59／291.0	4／126.2

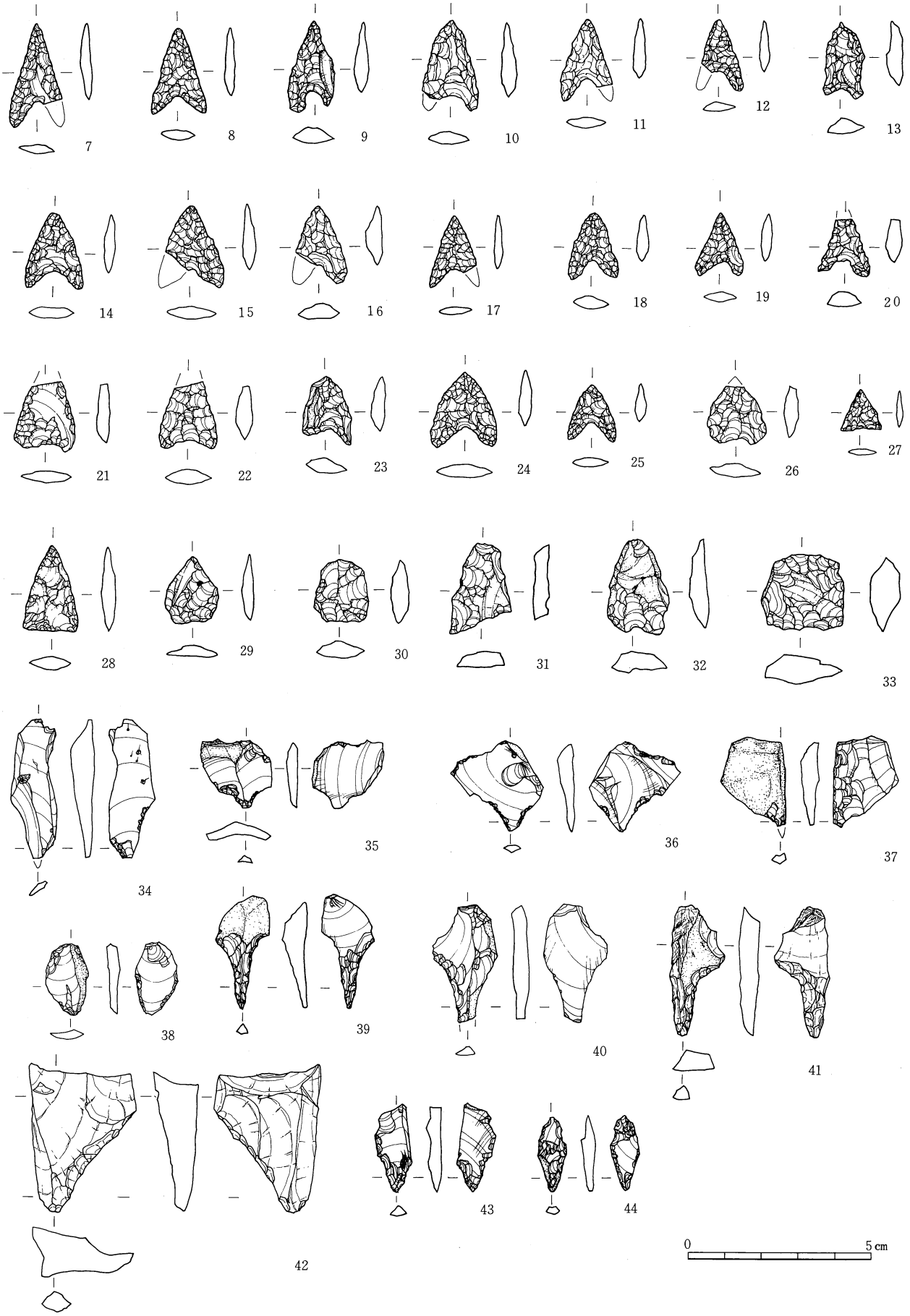


図19　遺構外出土石器（１）

d類：長さ15mm以下の小形なもの (27)

近隣の丸山遺跡(第13節所収)に比べ、鏃身の長いa類が多い。最大厚の部位は、基本形三角形の頂部とその中央部とに大別できる。前者の場合、扁平(7, 19)か厚さに偏りがある薄手のもの(21, 23, 29)が主であり、周縁部調整のみで素材面を大きく残す。概して主要剥離面のバルブ部が最大厚部にあたり、素材の大きさとそれほど大差がない。バルブ(あるいは打点部)の大きさや位置が、石鏃製作におけるひとつの規制になるのだろうか。a類とb類に認められ、c類にはない。

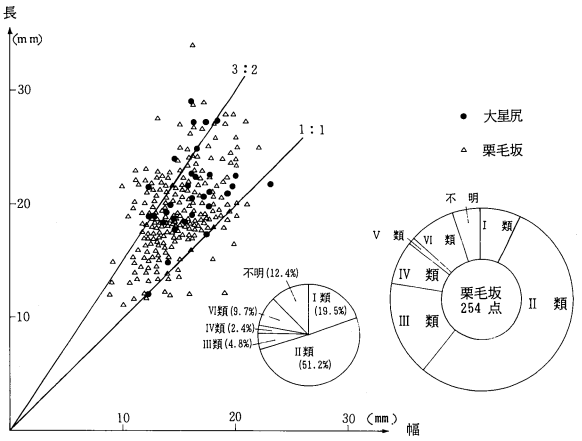


図20　石鏃の長幅相関・分類別比率

後者に該当するものは、全面に剥離痕がおよぶものが多く、縦断面が紡錘形状(8, 17, 30)と寸づまり(18, 24, 21)とに細分される。素材面を残すものがなく、その最大厚は剥離調整の結果最終的に残された厚さといえる。相対的に厚めのもの(25など)は開脚するc類に認められ、基部への抉りも深い。長幅ともに17～20mm程度ものが多く、比較的厚めの素材を用いている。

それぞれの特徴を、以下に示す。

13は先端が第一次剥離打点部で丸みを帯びる。主要剥離面からの片面調整でやや反る。

27は最小で表裏ともていねいな剥離調整が施される。

31は表裏に自然面を有した未製品。板状礫を素材とする。

32は厚手の剥片を素材とし表裏とも基部のみに調整が施された未製品。

33はスクレイパーとしては剥離調整が粗く石鏃未製品とした。

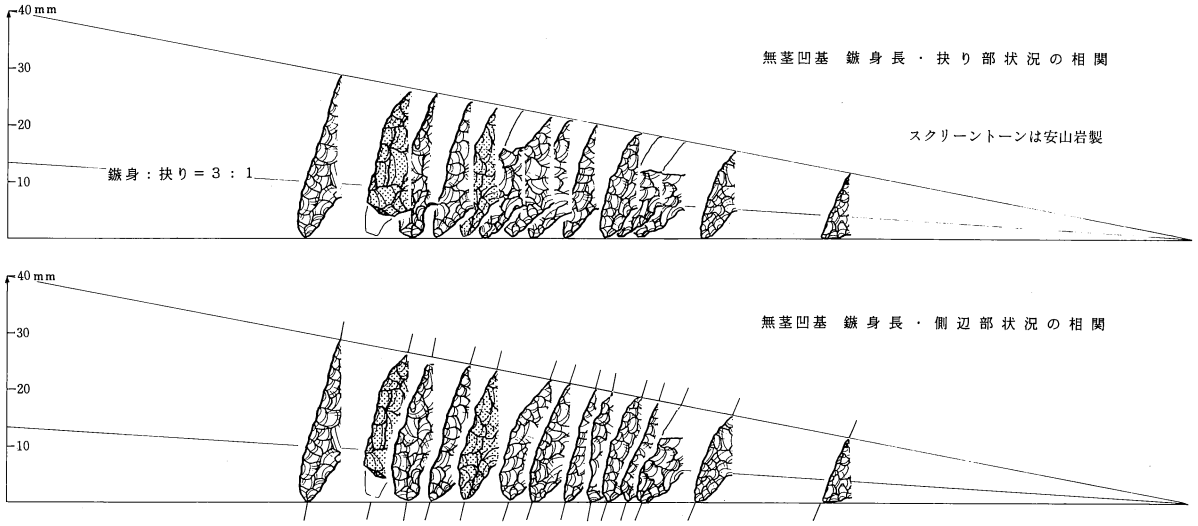


図21　石鏃の鏃身と抉り部・側辺部状況の相関

石錐 (図19—34～44、PL85)

石錐は、緻密な安山岩製(39, 40, 42)のほかは、すべて黒曜石製である。主に自然面を有す剥片を素材とするものが多く、板状礫や不整な残核をも用いている。つまみ部の有無と錐部の長短より形態分類する。

I－a類：つまみ部を有し錐部が短い (34～38, 43) 10点。

I－b類：つまみ部を有し錐部が長い (39～42) 7点。

II　　類：棒状のもので2点、44は先端より5mmほどの部位が著しく磨耗する。

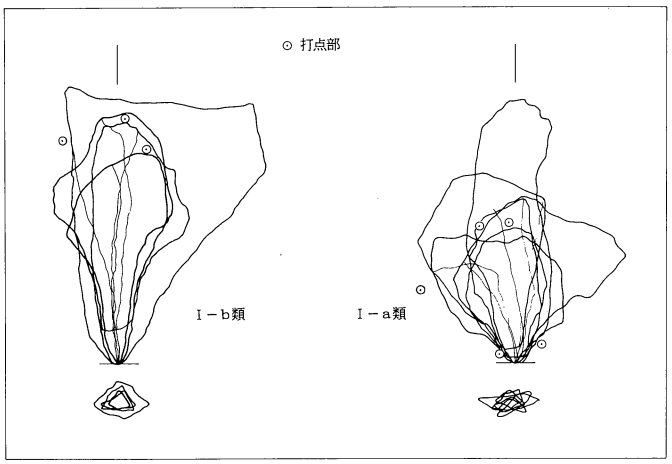


図22　石錐の第一次剥離打点部

錐部の横断面形は、三角形状・凸レンズ状・菱形状とさまざまだが、素材の性状をそのまま引き継いでいる。Ⅰ－ａ類は、薄手の剥片の縁辺部に簡便な剥離調整を施し、短い尖端部を作出する。自然面を有す割合は小さく、表裏の剥離面剥離軸はさまざまに振れ、あまり規則性は認められない。Ⅰ－ｂ類は縦長剥片を素材とし、中心軸に平行した稜が介在して横断面形が三角形状となる。その稜は、原材自体が有する39、41と先行する剥離により作出された40とがある。これらの素材は早い段階の剥離作業で獲得されたもので、第一次剥離打点部はつまみ側にあり、中心軸と剥離軸との振れは小さい(図22)。横断面三角形で縦長の素材を得るうえで合理的と考える。

スクレイパー（図24―45～56、PL85）

スクレイパーの認定にあたっては、報告書編集方法に記した器種の定義に基づき刃部剥離痕と刃部角に着眼した。小剥離痕を有する剥片との識別について記述する。46と63はともに剥片を素材とし、その縁辺部に規則的な剥離調整が施されるが、46は急角度な刃部を作出し63は鋭角的であって、前者をスクレイパー、後者を小剥離痕Ⅰ類とする。また64と65は、鈍角的な縁辺部に不揃いな剥離痕が連続するが、ここでは器種の定義を優先し、小剥離痕Ⅱ類とする。

スクレイパーは、チャート製(50)と緻密な安山岩製(53)のほかすべて黒曜石製である。素材の形状はバラエティに富み、刃部の形状もさまざまかつ複合的である。素材の性状と刃部の調整状況を比較して、以下に形態分類する。

Ⅰ－ａ類：素材の性状を利用し急角度な刃部を作出する。簡便な片面調整（45～49，51，52）６点。

Ⅰ－ｂ類：素材の性状を利用し急角度な刃部を作出する。簡便な両面調整１点。

Ⅱ－ａ類：素材縁辺部より深く片面調整を施し刃部を作出する（53）３点。

Ⅱ－ｂ類：素材縁辺部より深く両面調整を施し刃部を作出する（54～56）７点。

主に剥片を素材とするが、不整な残核の稜部に調整を施すものもある。なお使用痕は認められない。剥離痕のうち剥離痕（狭義）か剥落痕については、栗毛坂遺跡群Ａ地区の記述を参照されたい。

ピエス・エスキーユ（図24―57～60、PL85）

ピエス・エスキーユはすべて黒曜石製である。表裏に剥離痕がおよぶものが多く、主に断面三角形状の厚手の小岩塊である。フリーフレイキングの特徴を有する剥片や薄手の縦長剥片の両極に剥離痕が認められるものなどはない。自然面を有すもの(57～60)はほぼ８割を占め、ほとんどが両極の剥離痕近くに残っている。資料的にわずかだが、主として３～４ cm ほどの小礫などを原材として早い段階で両極打法による敲打がなされたと思われる。ところで、ピエス・エスキーユは両縁辺部や尖端部の剥離痕や、階段状剥離痕・ツブレなどの性状により識別できる。そこで両剥離痕部を刃部として捉え、その刃部の形状を面・点・線とに分けると、「線―線」(57、58)、「面―点」(59)、「線―点」(60)などの組合せとなる。上下両端が尖り、断面紡錘形状の「点―点」構成のものはない。両刃部が必ずしも対になるとは限らず、軸が振れるもの(59)やねじれの位置となるもの（58）がある。

57の刃部は横位で、図の両側辺部にツブレが認められる。表面の斜行する剥離痕には傷みのないコーンが残り、右側辺部の剥離痕に先行する。○で示した部分のみ鋭く突出し、また裏面の貝殻状剥離痕と下端にのびる剥離痕とは、キンクした同一面か先後関係がある二面であるかは判別できない。観察可能な範囲で加工順を示すと――縦横斜行する整形痕→両縁辺のツブレた剥離痕→下端を欠落させた裏面の剥離痕――先端部を欠損した石鏃の可能性がある。

58は斜行する剥離痕がなく、すべて両端からの剥離痕で構成されている。図の左下部は欠損と思われるが、ツブレがさらにおよんでおり継続使用されたと考えられる。

59の刃部は縦位である。左側辺部の傷みは著しく、その対辺はやや内湾し鋭角的な縁辺部に刃こぼれ状の剥離痕が認められる。裏面の扇状な剥離は早い段階のもので、欠損後90°転移したものであろう。

60の上端は内屈し、その中央部にツブレが認められる。

小剥離痕を有する剥片（図24―61～67、PL85）

小剥離痕を有する剥片はすべて黒曜石製である。従来から使用痕のある剥片や二次加工のある剥片と称せられるものを一括した。ネガティブな面で構成される残核に小剥離痕が認められる３点を除く。スクレイパーとの識別にあたっては、素材の性状と刃部角を判断基準とした。

Ⅰ類：剥離痕の大きさ一定で規則的（62，63）４点。

Ⅱ類：剥離痕が不揃いで不連続（61，64，65）32点。

連続する微細剥離痕（67）14点。

形状はバラエティに富み、素材縁辺部の平面形はさまざまかつ複合的で規則性は認められず、相対的に小形なものが多い。刃部の横断面形は薄手の扁平形状（61，62など）、不整な三角形状（63,65）、厚手の台形状（64，65）などがある。例えば後者はscrapeに適した刃部角と考える。

剥片分類＼刃部断面形	薄手の扁平形状	三角形状	厚手の台形状	小計
A	○ ○	○ ○ ○	／	5
B－1	● ● ○	● ● ○	○	7
B－2	● ○	○ ○ ○	● ● ○	8
B－3	○	● ●	●	4
B－4	／	● ● ● ● ●	○	6
C－1	● ● ● ●	● ● ● ● ● ● ●	／	10
C－2	●	／	／	1
C－3	／	● ●	／	2
C－4	●	●	／	2
小　計	14	25	6	45

● 背面の先行剥離面と主要剥離面とがつくる縁辺に小剥離痕
○ 上記以外の部位に小剥離痕

図23　小剥離痕を有する剥片の背面状況

原材が小形なこと、石鏃などの素材剥片を選択した後の残余部分を用いた可能性などを指摘できる。

背面の先行する剥離面と主要剥離面の剥離軸とを比較し、また両者がつくりだす縁辺部に小剥離痕が認められるか否かを図23に示した。背面状況は栗毛坂遺跡群Ａ地区の剥片分類を準じ、以下に留意点を示す。

①背面に自然面を有し、初期の剥離作業で獲得されたＡ類をも用いている。

②鋭角的な縁辺部が作出された扁平や三角形状のものは剥離軸の振れが小さい（Ｃ－１類，Ｂ－１類）。

③Ｃ類系には厚手なものはない。

④バイポーラーフレイキングの特徴がある剥片（61）は１点のみである。

⑤多寡はあるものが、さまざまな剥片を用いている。

石核・残核（図24―68～71、PL85）

石核・残核はすべて黒曜石である。ネガティブな剥離面で構成されている小岩塊のうち、概して前者は法量的に大きなもの、後者は小さなものを指し破砕状のものを含む。全体の９割以上に自然面が認められ、個々についても２面以上に残るものが多い。原材の形状を推定復元すると、多くが３～４ cm ほどの板状や柱状の角礫で、ローリングを受けた転石はなく円礫もわずかである。概して剥離作業面数は少ない。

ただし、破砕状なものにはツブレや階段状剥離痕が観察できるものもあり、はたして欠損したピエス・

図24　遺構外出土石器（２）

エスキーユか、徹底的に剝片素材を得るための両極技法によるものかを判別することが難しい。

68は柱状の角礫を原材とし、先行する剝離面を打面として利用するがその剝離作業面数は少ない。

69は角礫を原材とし、剝離面が偏りその剝離軸の振れは小さい。

70は平坦な面の側辺部に貝殻状剝離痕や縦長の剝離痕が並び、scrapeの機能も考えられ、また何らかの未製品の可能性もある。石核G類に属す。

71は最大ですべてネガティブな剝離面で構成され、中央に夾雑物を含む。

原石（図24―72、PL85）

黒曜石2点で、72は角礫で稜が磨滅しておらず、他の1点は厚さ8 mmほどの円盤状の黒曜石。チャート1点は三角柱状で親指大である。

大形剝片石器（図25―73～84、PL85）

大形剝片石器はすべて緻密な安山岩製で、手頃な大きさの剝片を素材とする。定義上やや流動的な横刃形石器に形態的に類似したものをも含む。

自然面を有すものは7点。その素材は薄手な剝片が多く、表裏ともに一枚剝ぎ（74，75など）や第一次剝離の打点部を欠いた砕片などがある。

平面形は、三角形状（74，79）――表裏の剝離面剝離軸がやや振れる。
　　円形状（73，76）　――自然面を残し大きめなものが多い。
　　長方形状（81～84）――素材長辺部の性状を生かす。

刃部は直刃が主である。外湾するものは両面調整により作出されるのに対し、直刃には素材縁辺の性状を生かすものと、主要剝離面側より剝離調整するものとがある。磨耗痕は認められない。

打製石斧（図25―85～92、PL85）

打製石斧はすべて安山岩製である。板状節理面を有す扁平なもの（87，89など）5点ある。厚手で歪みのある素材も用いている（86，92）。8割が横方向の折れによる欠損品である。特に板状節理安山岩製は割れが入りやすく耐久的にやや難があるが、こうして素材として用いられるのは、産地が近く入手しやすいことに起因すると思われる。

85は規則的で貝殻状の剝離痕が片面のみに認められる。刃部には磨耗などの使用痕は認められない。側辺部に削器的機能を求める方が適しているか。

86は胴部のみで分銅形に近い形態を呈すと思われる。

87は短冊形で右側辺を中心に整形している。下部左右の剝離調整は器厚を薄くするもので、刃部の剝離が最終調整である。直刃で磨耗痕などは認められない。

88・89は撥形を呈すると思われる。

91は薄手の板状礫を素材とした小形なものである。刃部が最厚で片面のみに磨耗痕が認められる。

敲石（図25―93、PL85）

敲石は粗面な安山岩製である。手で持つのに適した卵大である。ザラザラした器面の頂端部に敲打痕がある。

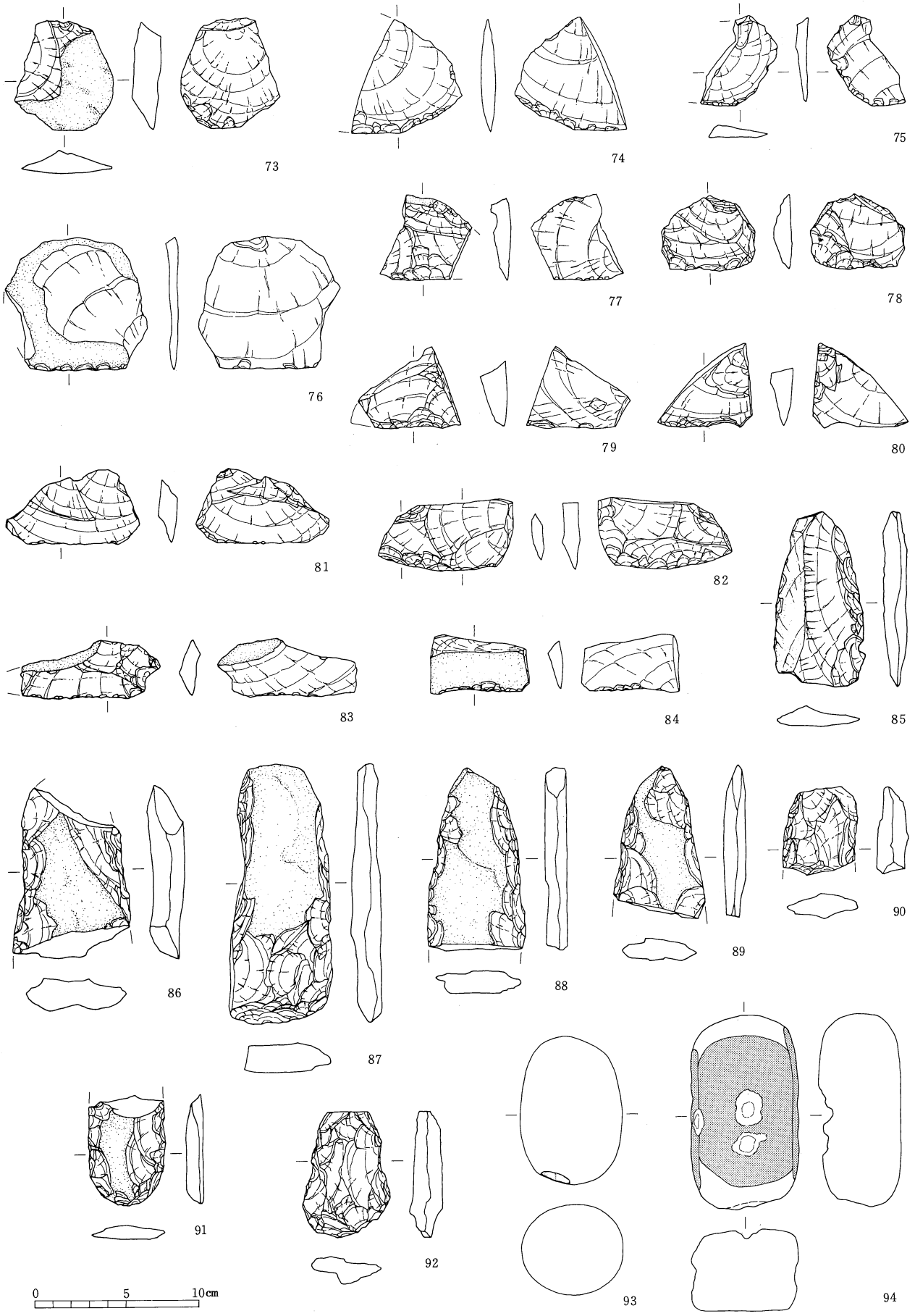


図25　遺構外出土石器（３）

磨石・凹石（図25－94、PL85）

磨石は浮き石に近い安山岩製。直方体状で面取り様な整形痕であろうか、４面が磨耗する。うち３面にはアバタ状の凹みが連続する。

砥石

図示してないが、凝灰岩製の砥石１点が出土した。10×３ cm の柱状で長方形１面のみが研磨され、中砥程度の粒子感である。他面にはおおむね長軸に沿って１ mm 間隔に規則的で直線的な細溝が認められる。木口面にも同様な細溝があるが整形痕であろうか。時期は不明である。

(2)　弥生時代の遺構と遺物

弥生時代に帰属する遺構は、南側拡張区において土坑１基が検出されたのみである。また、遺構外遺物も北側拡張区において若干量の出土があったにすぎず、きわめて稀薄であった。

ア　遺構

12号土坑（図26）

南側拡張区、Ⅳ G—H06グリッドに位置する。長軸114 cm、短軸75 cm をはかる不整楕円形を呈す。壁は比較的急傾斜に掘り込まれ、壁高26 cm を残す。坑底は平坦に整えられ、覆土は黒褐色土であつた。

覆土中より壺形土器の胴部破片１点が出土した。胴中位屈曲部の小破片であり、明瞭な稜を形成する。外面は顕著なミガキが行われ、内面はハケ調整される。外面には赤色塗彩を認めないが、内面に赤色顔料の痕跡をとどめる。意図的な塗彩なのか否かは不明である。

出土遺物から、本址は弥生時代後期後半の所産と考えられる

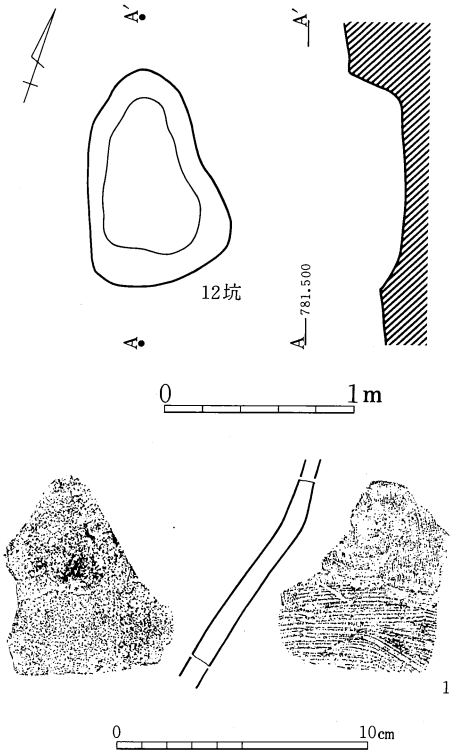


図26　12号土坑

イ　遺構外出土遺物

２点のみ図示する(図27)。２は大形の壺形土器の頸部破片。施文幅の狭い櫛描横線文下に同波状文を施す。横線文は広間隔の簾状文であることも考えられるが、「T」字文構成とはならない可能性が高い。赤色塗彩が行われておらず、また、一般的な文様構成をとっていないことから、細かな時期比定は困難である。弥生時代後期前半から古墳時代前期初頭という時間幅の中で捉えざるを得ない。南側拡張区、Ⅳ G7グリッドからの出土である。３（PL84）は櫛描波状文を施した甕形土器の胴部破片。２と同時期の所産であろう。

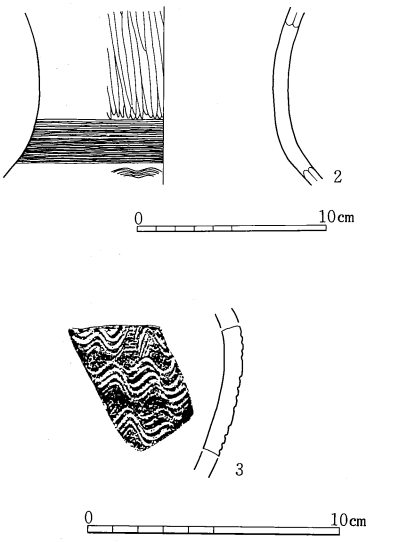


図27　遺構外出土土器

(3)　大星尻古墳（図28～29、PL86～87）

本古墳は、谷の斜面に築かれた横穴式石室墳である。同斜面内に現存する古墳はほかに見当たらず、単独墳の可能性が高い。古墳群として登録されていることから、本来なら「大星尻１号墳」と扱うべきだが、この点を踏まえて「大星尻古墳」と呼称することにする。

付近一帯はかつて畑地として利用されたが、古墳近辺に限れば切・盛土することなく土地利用が行われており、加えて現在では山林と化していることから、古墳が遺存するための条件は比較的整っていたといえよう。しかし盗掘者の手から逃れることができず、墳頂に大穴が開けられ、天井石を失った横穴式石室が完全に露呈している状況であった。石室内およびその周辺には天井石や側壁の一部と思われる大形の礫が散在しており、また天井石の多くはどこかに持ち去られているらしかった。

この古墳は径９ｍ程の小円墳に過ぎないが、一見してその墳丘構造に特徴を見出すことができる。それは、野石として豊富にみられる小児頭大前後の安山岩質の角礫ないし亜角礫をもって墳丘全面を覆い、あたかも「積石塚」たる様相を呈していることにある。したがって、従来の如く石室の調査ばかりに重点を置く方法では不充分と判断し、視点を築造工程に向け、石室と墳丘を一体視して構築順序の復元的な考察が行えるよう配慮しながら調査を進めた。具体的には、セクションを観察したうえで構築過程のおおむねを想定し、検証のため順序に逆行しながら古墳を解体していき、最終的に第１工程である整地面の調査を行うという方法である。以下、調査結果を項目ごとに記すが、得た所見については別項をもって記す。

占地　日当たり良好な南に面した緩斜面に位置している。押し出し地形のためか、調査対象地点付近は谷筋中央にさらに谷状の窪みが走り、谷を東西に二分しており、また、西側の尾根際に沢が流下することで、わずかな起伏だが谷西半は尾根状を呈している。古墳はその尾根筋上に占地している。

墳丘　盗掘によって墳頂が荒らされ、かつ自然の働きによる転石も若干認められることから、墳丘内外のそれら浮き石を取り払い、旧状把握を試みた。その結果、地表に密着して列状に並ぶ礫を現墳裾付近から検出し、それを墳端と考え、主･副軸長とも9.0ｍをはかる円墳であると判断した。外縁列石は根石と呼べるほど頑固なものでなく、しかも全周せず正円形ともならないが、礫平坦面を整地面に密着させ、かつおおむね人頭大程度のものを利用しているという共通性が認められる。さらに北東部では平滑な小口面を外に揃えるようにして並べており、外縁列石としての妥当性を明示している。墳高は最高で1.5ｍまで追えるが、推定される天井石のレベルから察して1.8ｍ前後が想定できよう。なお、南東側外縁部は崩落が著しく外縁列石さえも確認できなかった。

墳丘を築く以前に整地作業が行われている。墳丘の範囲内に限られるものだが、尾根筋上の高まり部分を削平し、平坦に整えようとする努力が看取できる。しかしほぼ水平に保たれるのは石室付近のみで、主軸方向である南北で約1.0ｍ、東西で約0.65ｍの比高差が認められた。

墳丘は、場所によるそれぞれの層厚に違いを認めるものの、一様に層界の明瞭な３層構造からなる。整地後、礫をほとんど含まない暗褐色粘質土（3層）を使って基礎固めを行い、次に基本土層第Ⅲ層を母材とした黄褐色土と人頭大前後のやや大振りの礫をもって墳丘の1/2～2/3を築き上げる（2層）。最終的には、土を用いることなく大小さまざまな礫を乱雑に積み上げて墳丘を完成させている（1層）。

石室　天井石および側壁上段を欠くことを除けば遺存状況は比較的良好であった。尾根の走行方向に若干逆らって主軸を正確に南北に取る横穴式石室であるが、石室本体は墳丘の中心から大きく東にずれ、また奥壁はわずかながら奥寄りに位置している。床は墳丘内に設けられるものであった。側壁東側に袖様の柱状の石を２個配すことから片袖式に似るが、側壁に組み込まれたものでなく、無袖状に構築されたのち玄室と羨道とを分かつかのように立てられたもので、むしろ玄門的性格が強いと考えられる。時期的な問題も勘案して、佐久地方に通例としてみられる玄門付両袖式横穴式石室の退化した姿とも取れよう。いず

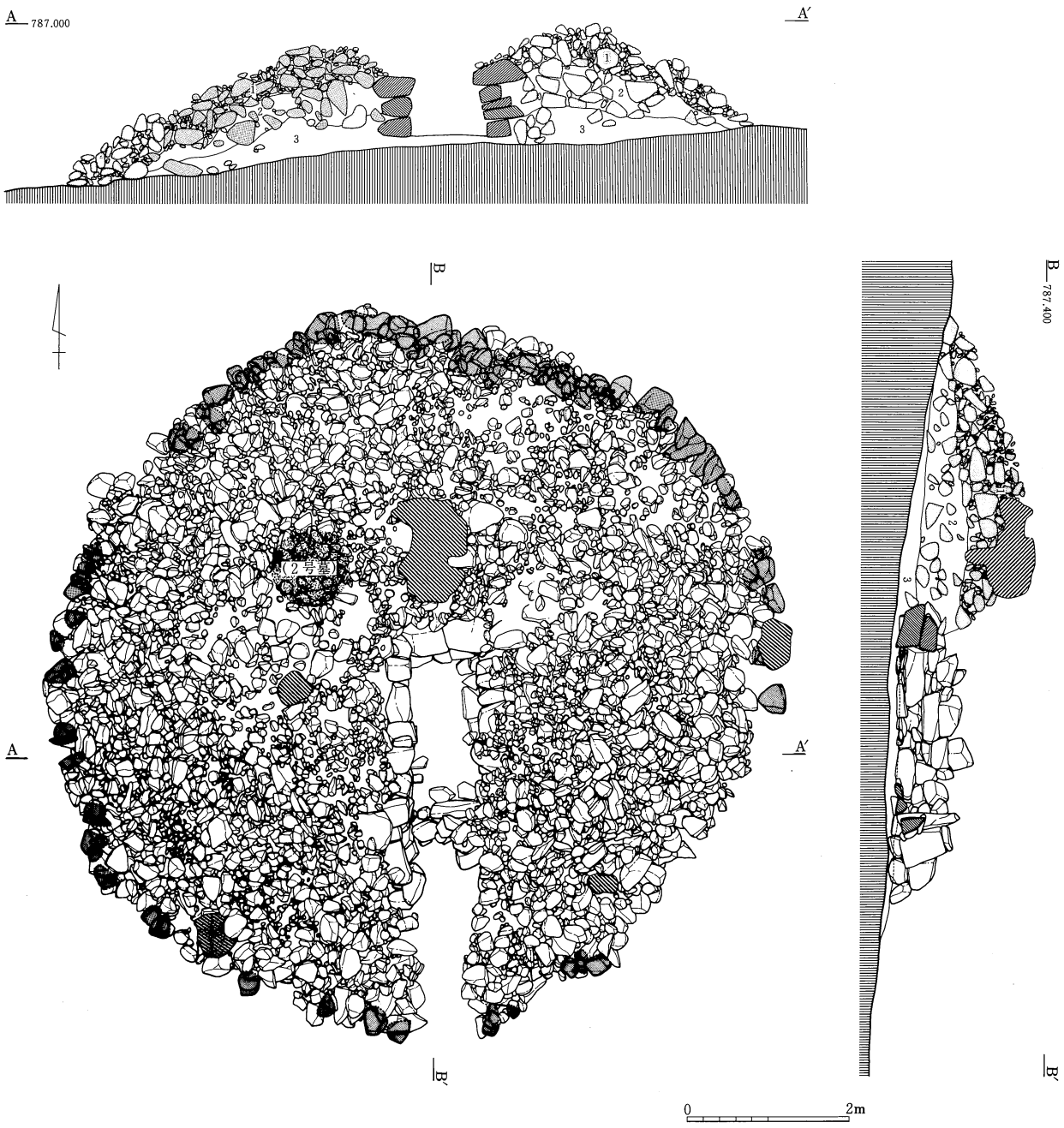


図28　墳丘

れにせよ、通常の型式枠に収めるわけにはいかない形態を呈する。規模は、全長3.8 m、玄室幅ほぼ1.2 m、同長2.45 m、遺存高で最高0.95 m をはかるにとどまり、極めて小形の部類に入ろう。前庭部らしき施設は存在しないが、ごく短い羨道から続く墓道的な空白部分が認められている。ほかに閉塞施設が一部残存していた。利用石材は、墳丘同様すべて安山岩質の角礫である。

壁面は自然石乱石積で構築されているが、平坦な自然面を内側に揃えるようにして積んでいることから、石室内は比較的整然としている。しかし、意識的に目地を揃えるようなことはない。根石は、特に掘り方をもたず床面とほぼ同レベルに据えられており、また奥壁付近にやや大形の礫を使用しているものの、奥壁を含めて際立つ大きさではない。当該期にあって、このような小規模石室であっても小口積みで奥壁が構成されている点は注視する必要があろう。側壁は、羨道の先端まで一連の作業工程として無袖状に積まれており、玄室と羨道の境に縦目地は認められなかった。

玄室は、狭小な長方形を呈する。東側の側壁が持ち送り状に内傾しているが、西側ではそれが認められないため、基本的には垂直に立ち上がる壁体を想定すべきで、東側のそれについては、天井石撤去後に起こった変形と考えた方がよい。羨道とは先の玄門様の礫によって画されるが、その内側に３個の礫を列状に埋め込み、框石としている。床は、平坦かつ水平に整えられた第３層直上に偏平な割り石を一面に敷いたようだが、盗掘による攪乱が床面全域に及んでいるため、礫床の一部が残存しているに過ぎなかった。頻繁に認められる二重構造を呈していた可能性も考えられよう。当然ながら、追葬の有無は確認できなかった。

玄門ないし袖様の２石は、礫そのものの幅の違いから基底面での幅を大きく違える結果となっている。玄室寄りのところでは基底面幅を84 cmほどに保つが、外側の礫の箇所では最小52 cmにまで狭まっており、木棺を想定した場合には納棺が至難な状況である。閉塞石が内側の礫の位置に架けられていること、加えて外側の礫の底面が本来の石室基底面から浮いていることも考慮に入れれば、納棺後、あるいは閉塞終了後、はたまた追葬後に何らかの目的で外側に礫を付け足したと考えた方がより自然である。とすれば、本来の石室の姿を思い浮かべ、先の問題にたちかえるならば、当初から存在した玄室寄りの柱状礫が玄門的役割を担うようにして立てられていた可能性がなおいっそう高まる。

閉塞は、拳大～小児頭大の自然礫によって行われている。基底面から35 cmほどのところまで遺存していた。状況からすれば、粘質土を混用したと思われるが、それを確認するまでには至らなかった。

裏込め石が周囲を囲んでいるが、特に東側の３層中に多数認められた。しかし、全体にはまばらであり、かつ人頭大の礫が多く使われている。掘り方状ともならず、必要な時にだけ裏込め工法を取り入れたのであろう。

遺物　石室内・墳頂・墳丘内より若干量得られた。１～４が墳丘南西側の２層直上、５～16が石室の床面から散在して出土したものである。図化しえなかったが、ほかに石室内で内面黒色処理の坏口縁部小片、墳頂で須恵器坏口縁部破片、２層直上で土師器坏・甕胴部破片および須恵器坏・坏蓋・甕胴部破片が出土している。石室内堆積土はもれなく洗浄にかけたが、玉類の副葬は確認できなかった。

１は推定口径16.0 cmをはかる須恵器坏蓋1/3破片。偏平で中央がわずかに窪むボタン状ツマミを有し、天井から口縁部へゆるやかな丸みをもって下る。口縁部の屈曲は鋭く、また外面中央に沈線状のくぼみが認められる。２は推定口径15.0 cmをはかる須恵器高台坏1/3破片。体部はわずかに丸みをもって開く。底部から体部への屈曲は比較的ゆるやかである。高台は大きく、断面台形を呈し端部中央が沈線状にくぼんでいる。３・４は同じく須恵器高台坏の底部1/4破片。高台形が微妙に違うが、同一個体の可能性がある。ともに15～16 cmの口径が推定され、高台形も２に等しい。高台貼り付け時にナデが行われているため、底部の切り離し技法は不明である。

５～16はすべて鉄鏃破片と考えられる。５～８は頸部から鏃身部にかけての破片。１を除いて刃部を欠くが、同一型式の可能性が高い。鏃身外形は片刃形、刃部は端刃造りとなるか。９～11は関部付近から頸部にかけての破片。退化の著しい棘状関が認められる。12は頸部の破片であろう。13～16は茎部破片と考えた。みな破片となっているが、それぞれの部位で４本の存在が確認できたことは偶然とは思えず、つまりこれらが余すことなく組み合う可能性が高いと考えられる。盗掘を受けているが、鉄鏃の副葬本数を示すものかもしれない。

時期　本墳が終末期古墳に含まれることは、古墳本体の構造からも明白である。さらに石室の形態からすれば、最終末に位置づけることもけっして無謀なことでない。それを肯定し、しかも造墓期を決定づけることが２層上面から出土した須恵器をもって成しえる。これらの土器は、墳丘南西側、石室寄りの比較的狭い範囲に散在していた。破片と化しているものの、築造途中になんらかの祭祀行為が執り行われたこと

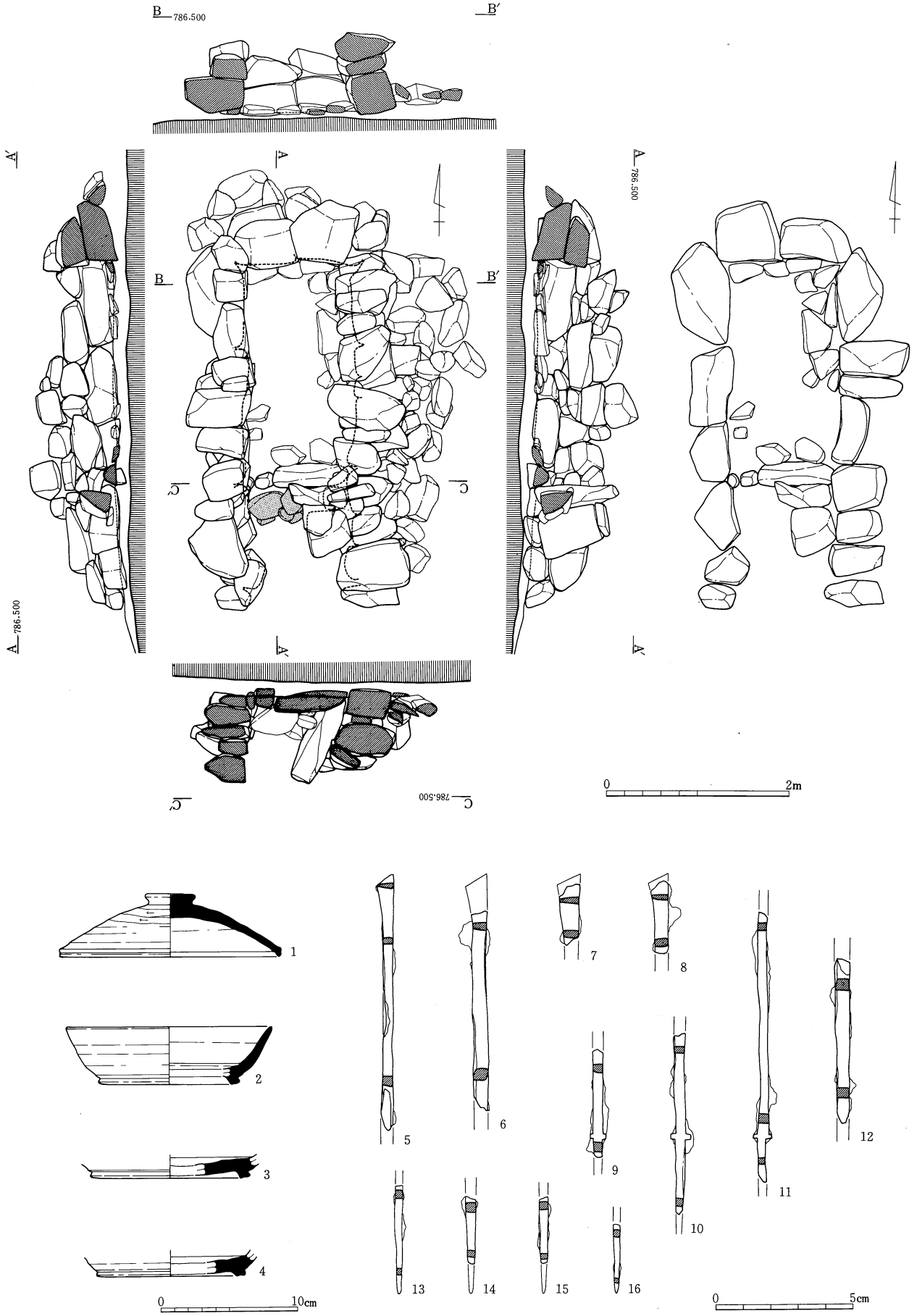


図29　石室・出土遺物

を彷彿とさせるが、いずれにせよ時期を決定するためには最適の材料といえよう。

これらの須恵器が奈良時代の所産であることは確かである。しかも、坏蓋にはカエリが消滅しており、また坏身も含めて口径が15 cm 内外にまで縮小した段階のものであるから、少なくとも８世紀第１四半期にまで遡らせるわけにはいかない。さらに、坏体部や坏蓋口縁部形状に新しい様相が看取されるため、８世紀中葉としてもけっして早い段階に位置づくことはないだろう。８世紀第３四半期に下ることも考えられるが、当該地方における該期須恵器の今後の研究に期待しつつ、この時点では８世紀中葉という大枠の中で捉えておきたい。なお、石室から出土した鉄鏃の型式もこれを裏切るものではない。

(4)　近世の遺構と遺物

１号墓（図30～32、PL88～91）

無縫塔を造立させた長方形の石積み墳墓である。西側の尾根際に流下する沢近い緩斜面に位置する。付近は現在棚畑となっているが、本址を避けて切・盛土されているため遺存状況は良好であった。開墾の折りか、むしろ修復・補強が行われているようで、墳丘北側および階段状施設東側には石積み外縁に沿って雑ながらも石組みが補足され、また墳丘上には新たに土を盛って（第１層）転び落ちていたであろう石塔を再度立石させたらしい。

石塔本体は塔高50 cm をはかる単制無縫塔である。頂部にわずかな突起を有し、基部は上げ底状となる。当地方の石工たちが好んで使用した「香坂石」とも称される安山岩を用いている。前記したように、原位置を維持するものではない。

旧墳丘面である２層直上より、台座部分を検出した。墳丘中央やや北寄りに据えられており、偏平な礫で四方を囲んでいる。一辺33～34 cm、高さ15 cm の直方体を呈すもので、上面に請けのための円形の彫り込みを有している。請花が見当たらないが、台座の彫り込み径と石塔の基部径が合致することから、当初よりこれを欠いていた可能性も考えられる。

塔・台座ともに、一般的なものに比べてかなり小振りで、また仕上げは全体に雑である。

墳丘　南北長約3.6 m、東西長約3.0 m の長方形を呈し、高さは２層上面で最高80 cm をはかる。１尺30.3 cm とすれば、南北で12尺、東西で10尺という完数が得られ、平面企画については物差しを使用したと考えたほうがよいだろう。主軸はＮ－24°－Ｅをとる。整地作業が行われているものの、斜面に構築されていることから、南北で65 cm、東西で24 cm の比高差が存在した。

安山岩質の角礫状自然石を乱層乱石積みし、墳丘外郭としている。おおむね間知積みをもってなし、崩落を避けようとする努力が看取されるが、上段付近の内傾ないし崩落は防ぎきれず、また南西隅の根石は完全に落脱していた。墳丘内の構造は単純なもので、墓坑を覆うかのように粘性に富んだ暗黄褐色土（３層）を全体に薄く盛り、あとは礫の単層（２層）で盛り上げられているに過ぎない。礫は拳大のものが主体であり、あわせて裏込めの役割も担っている。墓坑上に大形の礫が集中するが、墓坑に対するなんらかの思慮があってのことだろう。

付属施設　墳丘の東に外縁石積みの基壇状施設を付している。周辺を削り取ることによって形をなしているが、レベル的に低い南側では第３層を足して高さを調整している。南面する側は階段状となり、その下段下の両端にも石積みを加えこれを区画しているらしい。供養の場としての性格が強いと考えるが、これに伴う遺物は周辺を含め皆無であった。

墓坑　北に奥まった位置の基底面に穿たれている。1.55×1.45 m 不整方形をなし、深さは最高で60 cm をはかる。坑底は平坦かつほぼ水平を保つものであった。石槨とも取れる礫が三方を囲むが、石組み状となるのは南と西側のみであるから、むしろ棺ないし遺体との隙間に礫を充塡した結果とみたほうがいいだ

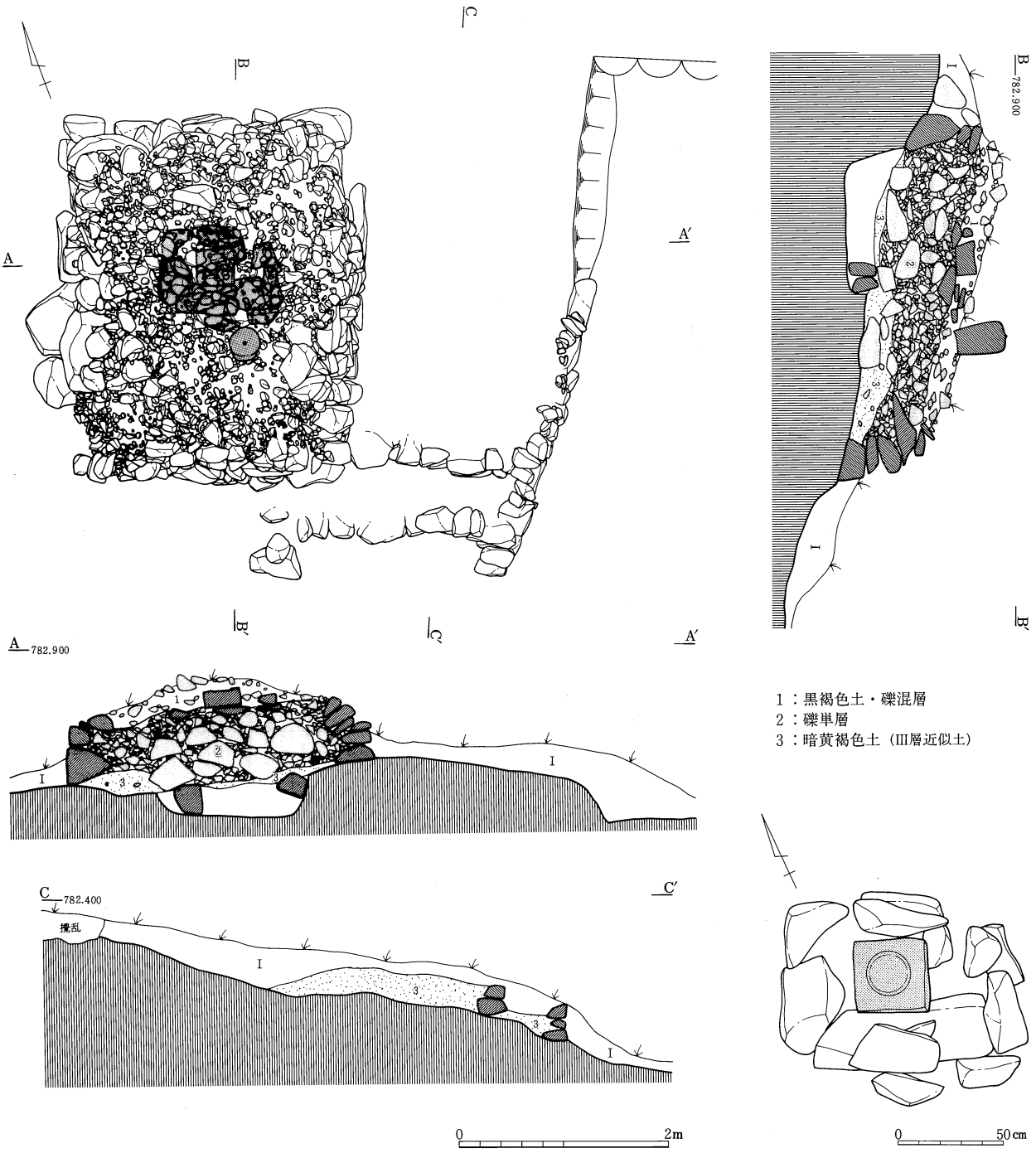


図30　1号墓（1）

ろう。

坑内には人骨・副葬品そのほかが良好に遺存していた。人骨は、頭位を北に取り顔を西に向ける右側臥屈葬を示すものである。下半身の状況からすれば、かなり強引に詰め込んだようだ。数珠を握って合掌していたか、掌と想定される部分周辺に数珠玉が散っていた。成人男性骨であることは既に判明しているが、鑑定報告を原稿執筆段階に用意できなかったことから、不本意ながらもその報告を別稿に回し、考察の項においても構うことなく執筆したことを断り、ここでの記述を終えたい。

遺物　坑内埋土はすべて洗浄にかけている。したがって、得た無機質遺物についてはほぼ総量を示すものと考えていいだろう。

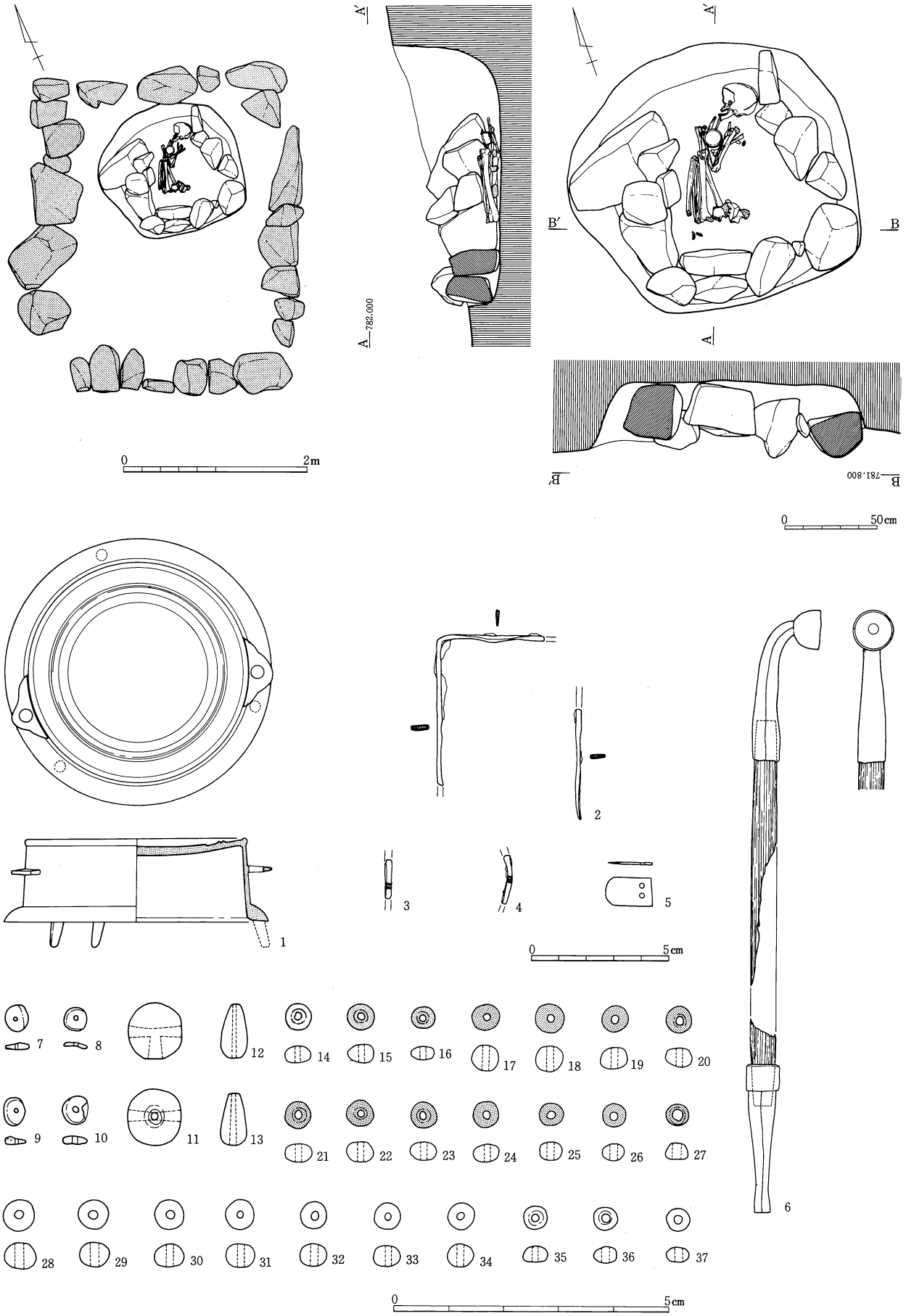

A
A′
782.000
B
B′
781.800
0
2m
50cm
5cm
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37

図31　１号墓墓坑（２）

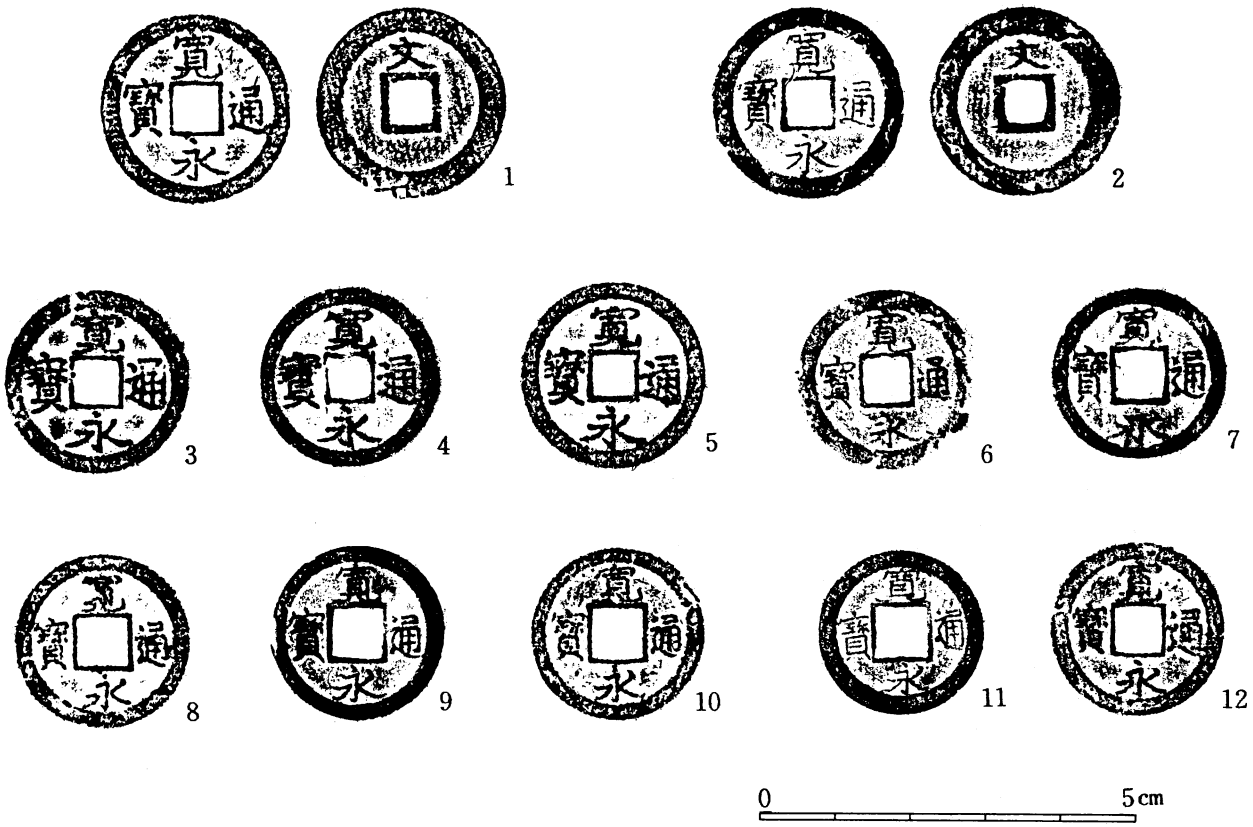


図32　1号墓（3）

1は、梵音具の一種である鉦鼓から派生した伏鉦。銅製鋳造品である。天井径8.0 cm、口縁径9.6 cm、高さ3.9 cmをはかる。天井に3重の圏線、素面の側縁に耳紐一対、口縁下に脚3本を付している。胸部上面から逆位で出土し、後述する蛤の貝殻が内面に収められていた。

2～4は、いずれも切損した用途不明の鉄製品。2は断面長方形を呈し、「く」の字状に折れたもの。両端を切損するが、同一個体と思われる。平たく尖る一端を認める。肩付近から出土した。3・4は両端を欠く断面方形の棒状製品で、同一個体の可能性もある。臀部南から出土した。

5は、長さ1.7 cm・幅1.0 cmの鼈甲製品で、厚さは1 mmにも満たない。一端を弧状に平たく尖らせ、対する側に2孔を穿っている。なにかの留め具か。坑底上の木片に付着していた。

6は竹製のラウを残す煙管。雁首は長さ5.5 cm、火皿径1.4 cm、ラウ接合部径1.0 cmをはかる。脂返しは「河骨形」をとどめるものの、湾曲が弱く、補強帯も省略されている。首部は銅板を巻いたものである。吸口は長さ5.4 cmをはかり、やはり銅板を巻いて筒状にしているが、ラウ接合部に肩を有している。ラウは中途を欠くが、ほぼ左右対称に作られているようで、接合部径7 mm、推定中央部径10 mmをはかり、また孔径は同じく2 mm、4 mmをはかる。左上腕骨に沿って、雁首を頭に向け出土した。

7～37は数珠の一部である。7～10が木製、ほかはみなガラス製である。7～10は成珠と考えられ、原形を保つものではないが、遺存状態から察して平形を呈していた可能性もあろう。11は直径10 mmの母珠。記子に繋がる孔の周囲のみが面取りされている。12・13は記子留。長さ10 mm・最大幅4 mm・孔径1 mmをはかり、下部に面取りを認める。母珠・記子留ともに無色透明である。14～37は記子だが、内14～16が緑色・17～27が青色・28～37が無色となる。母珠1顆、記子留2顆ならば記子は一か所だけに下げられたのだろうが、記子珠を5顆づつ二段に連ねたタイプを想定したとしても、4顆の余りがでる。規格品ばか

りではないものの、内４顆を四天珠と考えることも可能である。

六道銭は寛永通寶21枚が出土し、その内、背に「文」の字を付すものが２枚含まれる。胸部に集中しており、恐らく首から吊り下げられたものであろう。

ほかに蛤の貝殻・木綿・絹・紐・木片（PL91）・大麦の籾殻を検出している。貝殻は口を閉じた状態で伏鉦内に遺存していた。中は空の状態であるが、容器のかわりとして近年までこれに薬剤を収める風習が残っていたことを想起すれば、即、直結させるわけにはいかないとしても、食すためだけに利用されたものでないことは確かである。民俗例からの検討が必要になろう。木綿は、貝殻の下に付着していたものであり、これを包んでいたものかもしれない。紐はこれに密着し、絹は木綿下および伏鉦外面に接した部分が遺存している。木片は人骨に密着して坑底面から出土しており、本来板状を呈していたらしい。木棺の棺床が残ったものか。樹種は同定不能である。大麦の籾殻は２粒だけが辛うじて遺存していた。六道銭と同じように、旅の必需品のひとつに数えられるものである。

時期　伏鉦は耳紐を残すものであるから型式的には古相を示すようだが、時期を断定できるものではない。また、寛永通寶にはいわゆる「文銭」を認めるから、少なくとも1668年（寛文８年）以降に埋葬が行われたことは間違いなさそうだ。時期を最も下らせるのは煙管の型式である。大まかには18世紀前半を主体にした年代が与えられるが、吸口に肩部を残している点、その中にあってより古い様相を帯びている。以上を踏まえて、造墓期を18世紀前葉およびその直前・後の範囲とする。

２号墓（図33、PL89）

大星尻古墳の墳丘内を葬地に選んだ土坑墓である（位置は図28を参照されたい）。墳丘第２層上面を坑底とし、掘り込んだ墳丘第１層（礫単層）をもって坑内を充塡していることから、墓坑は確認できなかった。人骨の遺存状況はあまり良好でなく、また散乱した状態であるが、およそ頭を北に向けた右側臥屈葬であったことを看取する。寛永通寶５枚が臀部近くから出土した。江戸時代のいつに埋葬されたかは不明である。

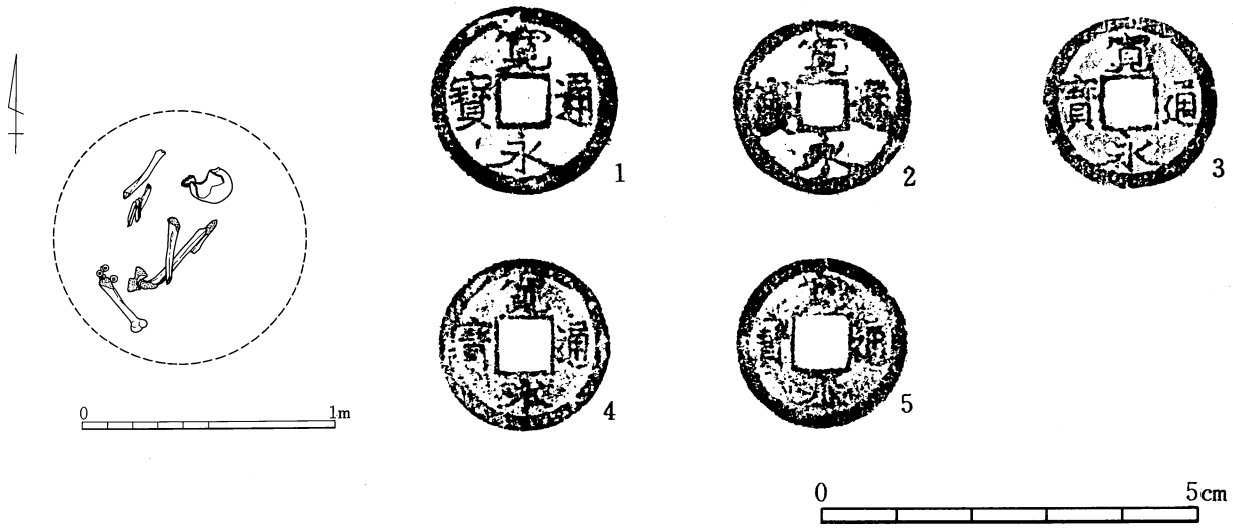


図33　２号墓

(5)　人骨

近世墓から２体の人骨が出土している。これらは、脆弱な部分に限ってParaloid B-72で処理した後、取り上げを信州大学助手の西沢寿晃氏に依頼し、あわせて鑑定をお願いした。以下、その鑑定報告の概要を記す。

１号墓人骨

全身が右側（西側）方を向く横臥屈葬位の状態で出土した。骨格の保存状態は比較的良好であった。頭部は右側方を向き、下顎は連結しながらやや開口する。脊椎のほとんどは欠失し、骨盤部分もわずかに残るのみである。脊椎部分に重なって左上肢、その前方に右上肢が存在する。側方を向く体幹に対して、左肩部と同上肢がやや後方に引れた位置となる。両上肢ともに前腕部が肘関節で強く屈曲し、手指とともに胸部に揃えられた合掌の形をとる。骨盤の寛骨臼に陥入する両側の大腿骨は、胸、腹部に強く引きつけられている。下腿も膝関節から屈曲して、足骨は腰部近くに位置する。なお、右寛骨の内面に右肩甲骨の一部が密着しているが、軟部組織の腐食にともなう移動であろう。

頭骨――脳頭蓋の保存は良好であるが、ほかの部位はほとんど欠失する。上顎骨歯槽の小部分、下顎骨の骨体（右下顎枝や歯槽）などは残る。頭頂骨の骨壁はさほど厚くない。冠状・矢状縫合は内板で痕跡的、外板でわずかな線状に残る。乳様突起は３角錘状で鋭い。外後頭隆起は膨隆し、突起も大きい。下顎（左）P1～M1間の歯槽は脱落により閉鎖している。切歯の切縁、臼歯の各咬頭に咬耗が生じ、特に臼歯で帯状・面状に進行し、象牙質に点状に及ぶ箇所もみられる。脊椎骨――環椎・軸椎の小部分のほか、腰椎片２個などが残存するのみで、腰椎の椎体辺縁には骨棘の発現は認められない。鎖骨――小片のみ。肩甲骨――右、小部分。上腕骨――右・左、近・遠位関節部分を欠くが、骨体は比較的形状を保つ。橈骨・尺骨――左がともに完存（最大長、22.4 cm、24.1 cm）、右は近・遠位端を欠く。寛骨――右・左、寛骨臼と腸骨体の一部が残る程度である。大坐骨切痕は深くＬ字形を示す。大腿骨――右、小転子を除き完存。左、骨体下半で切損、小転子のほか関節部分が崩壊する。骨体はややきゃしゃで関節もさほど大きくない。骨壁も厚くない。粗線の発達は弱度、殿筋粗面は多少粗く、恥骨筋線もやや顕著な程度である。膝蓋骨――断片状で残る。脛骨――右・左、近・関節を欠失、骨体はほぼ残存。ヒラメ筋線はやや顕著であるが、各稜とも発達は強くない。腓骨――右・左、近・遠位端を欠失。指骨――手・足指骨とも小数片。

被葬者の性別は男性とみなされるが、通常ないしきゃしゃな体型が推定される。大腿骨の長さから換算した身長は約158 cmとなる。頭骨の縫合や歯の咬耗の程度から推定できる年齢は壮年期（40歳代？）と考えられる。

（残存歯の歯式）

M_2M_1	$C\ I_1$	P_2	
$M_3M_2M_1P_2$	$C\ I_2$	$I_1\ I_2$	M_2M_3

（右大腿骨の計測値）

最大長〔１〕	40.8（cm）
骨幹中央周〔８〕	77.0
中央矢状径〔６〕	24.1
中央横径〔７〕	25.6
中央横断示数〔６：７〕	94.14

上部最大径〔９’〕　　32.1（cm）
上部最小径〔10’〕　　22.1
上部横断示数〔10’：９’〕68.85（超広型）

（右脛骨の計測値）
中央矢状径〔８〕　　26.2（cm）
中央横径〔９〕　　19.3
中央横断示数〔９：８〕73.66

２号墓人骨

右側（西側）方を向く横臥屈葬位の状態で出土したが、保存状態はあまり良好でなく一部が残存しているにすぎない。また、軟部組織の腐食や土圧などによる骨の移動が認められた。

頭部は下顎が共存し、またこれに混在して脊椎骨・鎖骨・肩甲骨（右）に密着して手指骨が認められる。頭部の下方約30 cmの位置に骨盤部分が存在し、その間に不規則に脊椎骨や肋骨の破片が散乱する。頭部の右側で上腕骨（右・左不明）に前腕骨の一部が近接している。左側には上腕骨の一部がみられる。骨盤に接して大腿骨(左)が遠位端を逆方向に胴部に沿う位置をとり、これに脛骨がややずれてＶ字状に交叉している。大腿骨（右）は骨盤付近から左側に対してやや下方を向く。

頭骨――頭頂骨、右側頭骨の一部などが、やや大きな破片として残るが、かなり脆弱な骨質で形状のほとんどは不明である。下顎骨の骨体の一部（右、左）とP_1・M_1・M_2が植立する。骨壁は厚くない。矢状縫合が離脱している。乳様突起は大きくないが３角錐状である。残存歯の各咬頭にはエナメル質に限局されて点状・面状の咬耗が生じているが、わずかに点状の象牙質の露出も認められる。肩甲骨――右、肩峰と関節窩の一部。上腕骨――右・左、骨体の一部（現長12.5 cm、17.5 cm）。骨体は太く頑丈であるが、３角筋粗面などの発達は中程度。尺骨――左、骨体中央部(約10 cm)。各稜は鋭く、強壮である。手指骨――基節骨１本が完存。寛骨――左、寛骨臼部のみ。大腿骨――右・左、近・遠位関節部の一部を欠くが骨体の保存はよい(各34 cm、30 cm)。骨壁はかなり厚く、粗線もやや強く発達する。骨幹中央横断示数から、弱度のピラステルの形成がみられる。脛骨――左？、骨体中央部分（約16 cm）とほかに一括される骨片。骨壁は厚く頑丈である。

性別は男性で、大腿骨の骨幹周は大きく、弱度ながら柱状形成も認められ、かなり頑丈な骨格を具えている。縫合や歯の咬耗の程度から壮年期とみられるが、１号墓人骨に比較して体格は強壮で、年齢は若干低年齢が推定される。

（残存歯の歯式）

I_1	C	$M_1M_2M_3$
$M_3M_2M_1P_2P_1$		$P_1P_2M_1M_2$

（右大腿骨の計測値）
骨幹中央周〔８〕　　86.0（cm）
中央矢状径〔６〕　　28.8
中央横径〔７〕　　27.5
中央横断示数〔６：７〕104.73

5 まとめ

今回の調査は、大星尻古墳群として確認されていた古墳時代の遺跡を対象としたものであったが、はからずも縄文時代から弥生時代にかけての遺物包含層や土坑群の検出をみ、また、古墳の１つと推定されていた石積みが僧侶を葬ったとみられる近世墳墓であったことが確認されるなど、予想外の成果を得ることとなった。これらの調査された遺構や出土遺物についての個別・具体的な説明は前記したとおりであるがそこで明らかとなったように、各時代・各時期の遺構と遺物はそれぞれに特徴的なあり方を示すものであったと言える。以下、こうした特徴的な事象のうち、特に整理が必要と認められる事柄について、他遺跡での状況や該期の時代的・社会的な背景などを踏まえつつ、調査の成果と課題として考察を加える。

(1) 縄文時代遺跡としての性格

大星尻古墳群の名称で捉えてきた本遺跡が、縄文時代から弥生時代にかけての遺構群も占地の対象とした「大星尻遺跡」とも呼称すべき複合遺跡としての性格を合わせ持つ点を確認してきた。そこでまずここでは、古墳の築造が行われる以前の大星尻遺跡、とりわけ、まとまった数の遺構検出をみた縄文時代に焦点をあて、遺構群の性格ひいては遺跡の性格について考えてみたい。

縄文時代に帰属する遺構は、南・北拡張区より焼土址１基、土坑27基が検出され、それらが中期初頭後半から同前葉にかけての所産とみられることは既に詳述した。以下、中期初頭後半期と同前葉とに大別し遺物の出土状況や隣接する丸山遺跡の様相など含め、時期ごとに遺構群の性格・変遷を追ってみる。

中期初頭後半――大星尻の地にはじめて縄文人の足跡が残された時期である。遺物の出土がなく時期を特定しえない土坑も少なからずあり、実数は若干増えると思われるが、北側拡張区に１基、南側拡張区に２基の土坑が検出された。また、北側拡張区のやや窪地となった所からはまとまった量の遺物が出土した。本期の遺構で特記されるのは、南側拡張区で検出され、坑底付近に土器破片が遺存していた１号土坑の存在であり、これはリン酸や脂肪酸を対象とした科学分析を経てはいないものの、墓坑として捉えてよい遺構であろう。墓坑と判断される例が１基のみで断定し難いが、この南側拡張区とした地点が該期に墓域ととして選定されたことがうかがわれる。一方、北側拡張区には土坑とともにまとまった遺物出土が認められ、後述するように、同地区の一部が生産域として利用されていた可能性も示唆される。根茎類など野生の可食植物の自生地で周期的な採集が行われていたのか、有用植物の半栽培や栽培といった管理が行われていたのかは不明であるが、環境の有効利用が充分に計られていたことが考えられる。こうしたことから、２つの相異なる認識空間が隣接し、それぞれの場を侵すことなく共存していたことが推測される。それは「生の空間」と「死の空間」というすぐれて象徴的な領域が不可分な関係をとりむすび、両者がそれぞれ機能的な側面を相互に補完していたと理解することもできよう。また、北側調査区からは土偶２点が出土しており、生産の場のみならず、祭祀的な要素が見いだせる。土偶祭祀の意味や目的が現在のところ不明であり、軽率に即断することはできないが、生産行為に関連した儀礼過程の存在も考えられよう。墓域の成立については、同時期の土坑墓とみられる遺構が本遺跡の西に隣接する丸山遺跡からも複数検出され、両者の関係が注目される。出土土器を対比すると、丸山遺跡は前期末葉から中期初頭後半に位置し、本遺跡は中期初頭後半から同前葉にかけてである。このことから両遺跡は中期初頭後半を境として明確な時期差をもって営まれていたことが理解される。また、地形的環境や遺構の属性などにも共通した要素がみられ、両遺跡が同一集団によって遺された可能性はきわめて高い。こうした理解が的を射ているならば、経緯は不明ながらも、中期初頭後半のある時期に墓域が丸山遺跡から当遺跡へ移ったと考えられ、該期における集団の領域やその内部でのセツルメント的な場のあり方の一端を示すとともに、生業や墓制など社会

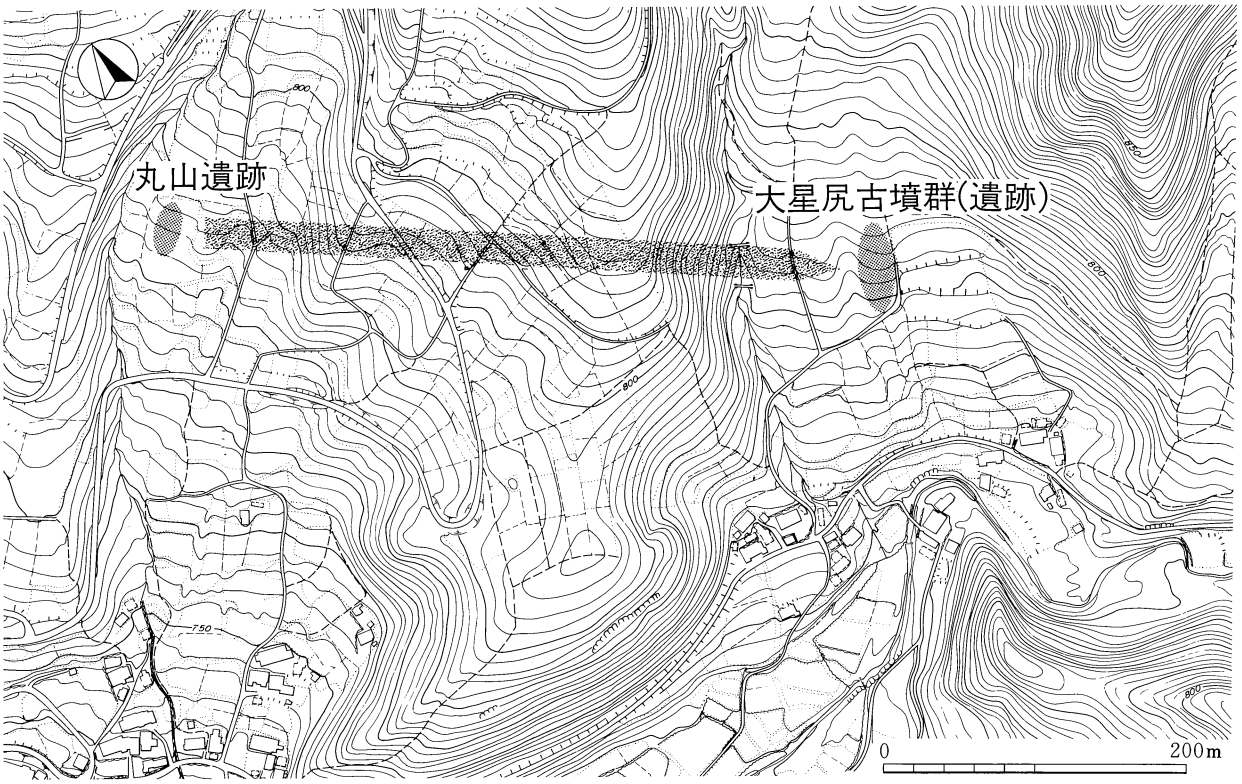


図34　丸山遺跡と本遺跡の位置関係

的側面を垣間見せる資料といえよう。

中期前葉――焼土址１基、土坑８基が確認された。出土遺物がなく時期決定し難い土坑の中には、形態的に本期に帰属するとみられる土坑（5号・29号など）もあり、実数はさらに増えるであろう。焼土址は北側拡張区の遺物がまとまって出土した部位に検出された。こうした焼土址と遺物の集中的な出土とが組み合わされる事例は、時期こそ違え、本報告書の東祢ぶた遺跡でも認められ、時を越えて共通する事象として注目される。しかし本遺跡の場合、石器の製作と剝片・残核などの廃棄行為を伴う点に相違が看取され、焼土址は石器製作や調理にかかわる屋外炉的な施設であったと考えられる。また、その石器製作は石鏃など狩猟を目的とした石器群を意図したものとみられ、層位的裏づけを持ち合わせていないものの、本期にはキャンプサイト的な機能が北側拡張区に加えられたと推定される。

他方、南側拡張区には前代と占地を同一にして土坑群が構築される。土坑には土器を伴うもの、石器を伴うもの、平石など礫を伴うものが認められ、土坑墓群として捉えられる。これらのことから、南側拡張には墓域としての意識が継続して与えられていたと考えられ、それが同一集団による営為であったことも合わせて推定できよう。この場合、住居址の存在が前代同様調査区内に想定しえないことから、主たる生活の場＝集落は調査区南方の傾斜地あるいはこの地から見渡せる平地部に営まれていたと考えられる。集落から離れた地に生産および狩猟拠点の場と墓地とが相接するように検出されたことは、上記した領域の問題や社会的側面のみならず、背景にある時代性を考える上で興味深いあり方といえる。

本期を境として遺構はおろか遺物の出土も途絶え、中期末葉を向えるまで当遺跡に縄文人の遺した痕跡を確認することはできない。生産の場、狩猟キャンプの場、そして墓地までも他地へ移転したとみられるが、それは恐らく集落の解体や移動に起因する現象であったと思われる。こうした事実をもたらした原因が何であったかは推測できないが、こうした特定集団の動向を時期を追って追跡することが今後の調査によって可能となれば、そうした原因を原理的な側面にまで踏み込んで究明するための足掛かりとなろう。

(2) 石器群からみた生活基盤の一様相

本遺跡の石器群の器種組成からみると、石鏃の多出が特徴的で、特に北側拡張区のN9グリッドに数多くの石片類とともに集中する。またその9割ほどは欠損品で、著しく欠損したものが多い。石鏃の製作工程では必然的に微細なチップ類が生じるが、その構造的な捉えとしてチップ類の“多数検出型”と“少数検出型”とに大別し、前者を実際の製作の場とする指摘がされる(阿部1982)。そこで石片類の法量別数量の相関を図36に示した。水洗選別を行っておらず、検出された0.1g以下のチップ類の夥しさを資料として提出できないが、調査時の所見などを総合的に検討すると、黒曜石製の石器製作の場であった可能性は高い。また必ずしも明らかではないが、その場は後背斜面の崩落によって部分的に形成されたテラス状の平坦部を利用したとも考えられる。

石器群の位置づけとして、同じく石器製作址と捉えられた栗毛坂遺跡群A地区と対比する。同地区は、石鏃を主とした石器製作と狩猟動物の解体処理をも兼ねた場であり、作業台として扁平な礫を据え集石を形成した、いわば長期的・意図的な製作の場と考えられる。それに対して本遺跡は、矢柄などを調整し欠失した石鏃を再加工・補充製作した、いわば狩猟後の日常的な作業の一環としてなされた場である。それが定期的か一時的なものか、また期間的な長短や季節性などについては、石鏃の必要数量・実際の欠失率や剥離作業量などの諸条件の検討の結果として判断しうるものであるが、本遺跡については比較的短期間の場であったと考える。

石鏃や石片類の平面的な検出分布からみると、N9グリッドを中心とした範囲に限定される。法量の小さな石器や石片類は自然営力により移動しやすいことが知られている(詳細は栗毛坂遺跡群の記述を参照されたい)。では、緩斜面の頂端部に廃棄された欠損石鏃や石屑が、ほぼ同位置で検出されたのは何故であろう。換言すると、降雨に伴う地表面の流水などの自然営力による移動を阻止した営力とは何であろうか。

それは、当時の二種の植生によると考える。縄文時代の遺物包含層は暗褐色のⅣ層上部で、北側拡張区の中では比較的厚く腐植土が堆積した箇所である。ひとつの植生とは、石器製作・廃棄の場に草木などが繁茂していただろうことの指摘である。実験的研究の成果によれば、植物の生長や繁茂は遺物移動を抑制する要因であり、植生が疎らであったりパイオニア植物が地面を覆うまでの裸地では、その移動が加速度的であることが報告されている(御堂島・上本1988)。つまり、石器や石片類の拡散を抑制したものが植物によるものとも考えられ、さらに裸地とはなりえなかった状況の派生として、前記した短期間でキャンプサイト的な位置づけもできる。もうひとつの植生とは、根茎類などの有用植物が自生ないし半栽培されていた

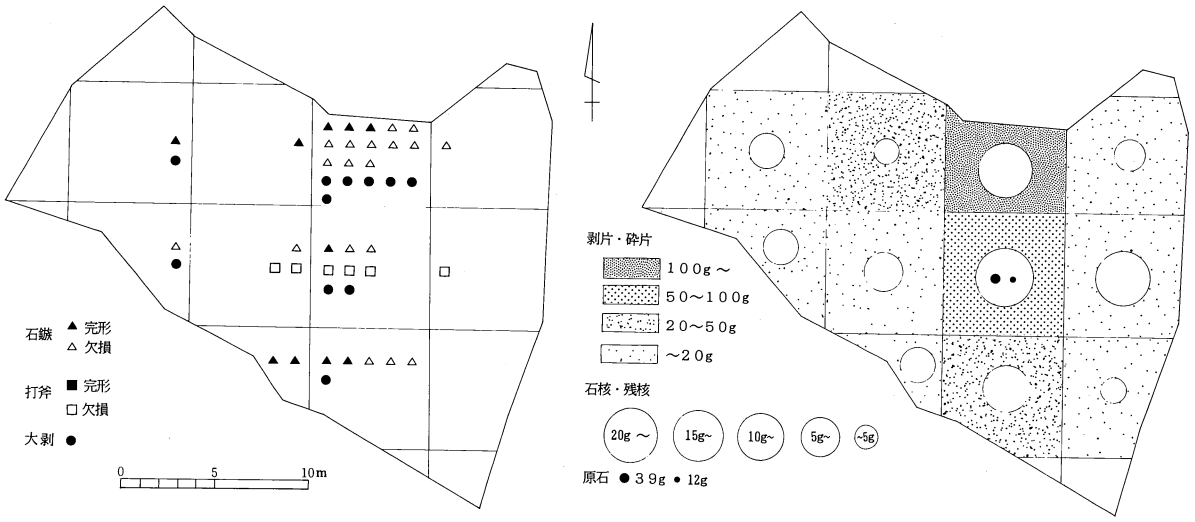


図35 出土石器・石片類分布状況

だろうことの指摘である。図35に示したように、欠損した打製石斧が明らかに異なった検出分布を示し、そこに土掘りなど打製石斧の消耗や破損を伴う行為が集中的に行われたことが想定される。北側調査区の性格上その対象は植物と考えられ、例えば多年生のヤマノイモなどの採集が推定される。80 cm ほどでローム土に達する、いわば地が浅い当地では必ずしも適しているとはいえないが、地中に根をのばしたヤマノイモなどの根茎類の群生が、遺物移動の抑制要因として働いたことも想像にかたくない。

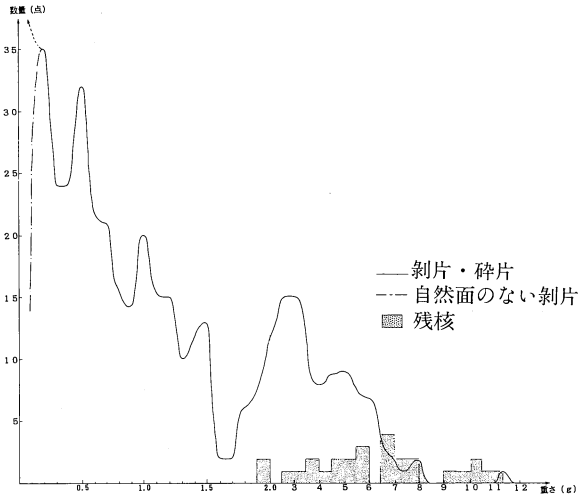


図36　剥片・砕片・残核法量別数量

石屑を放置することの危険性と根茎類が長期間自生しえることなどのプラス要因とマイナス要因を考慮しても、石鏃を製作した集団と打製石斧を用いた集団とが同一であるか否かは判断できない。しかしそこには狩猟活動の拠点となった場と植物質食料の採集・生産の場という、空間的に隔てられた生活基盤をうかがうことができる。

大形剥片石器の検出分布もまた、N9グリッドを中心とした範囲に集中する。近隣で採取できる緻密な安山岩剥片を素材とした石器(詳細は吹付遺跡の記述を参照されたい)で、特に横長な刃部形態のものは穂摘みなどの機能が想定される。アワなど雑穀類の採集に用いられたのであろうか、また陽当りがよくアルカリ性土壌を好むワラビなどの根茎の採集に用いられたものであろうか。分布状況などから石鏃と大形剥片石器は同一集団の所有とも考えられる。すると、狩猟動物の繁殖期という規制要因と有用植物の適した採集時期などとの相互関連のもと、このキャンプサイト的な場の季節的な捉えも可能となる。

(3)　大星尻古墳の諸相

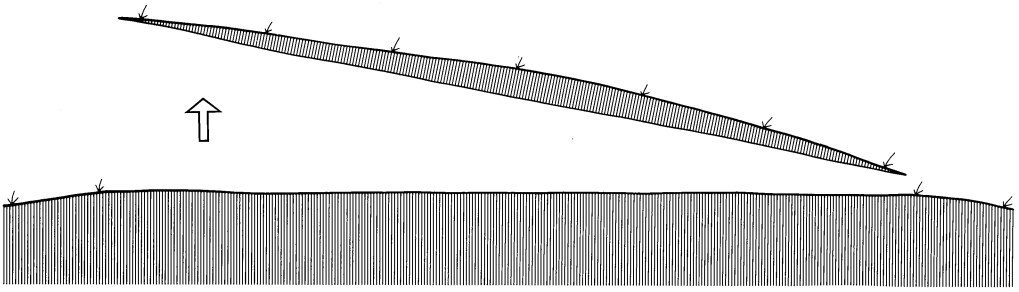
大星尻古墳の築造年代を８世紀中葉と想定した。今のところ佐久地方においては後続するものがないばかりか、同期に築かれた古墳さえ見出しえない。そのためか、ほかの終末期古墳にはみられない様相が所々に垣間見られるのである。前記したように、それは墳丘および石室構造、そして占地・群構成であった。これらに若干の検討を加え、いくつかの推察を図りたい。

①　築造工程（図37）

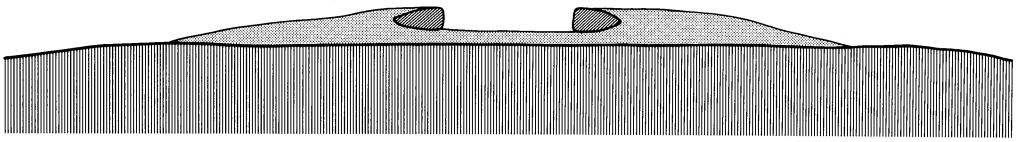
墳丘が単純な３層構造であること、ならびに石室が小形でしかも簡略化されたものであることから、とかく粗率性ばかりに目がいくが、果たしてそうか。ここでは工程を解して、事の実態を探る。なお、工程第一段階には葬地選定という思考的作業を当てなければならないはずだが、別項で記述する。

第１工程　整地作業の段階である。尾根筋に似た高まりを削り取ることで基底面を設けている。しかしその範囲が墳丘内に限られ、周堀を掘削することもないため水平に保たれるわけもなく、墳端での比高差を解消する役割はなんら果たしていない。しかし、墳丘セクションを観察すると（図28参照）、南北（B—B′）で変換点１・東西（A—A′）で同２か所が認められ、直接基底面に石室を構築していないにもかかわらず、石室が設置される箇所に限って水平に保たれている様子がうかがえる。石室をより安定させるがための工夫と考えられよう。ならば、石室の構築を第一義に据えた整地とすることも大げさなことでなく、意味を返すなら整地作業を始める時点で既にどこに石室を置くかが決定されていたということになろう。また整地範囲が墳丘外縁と等しいのなら、それは石室に限られるものでなく、墳丘規模および墳丘内における石室

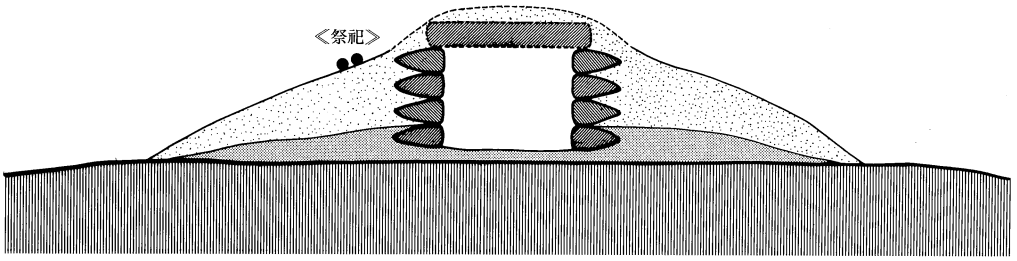
〈第 1 工程〉



〈第 2 工程〉



〈第 3 工程〉



〈第 4 工程〉

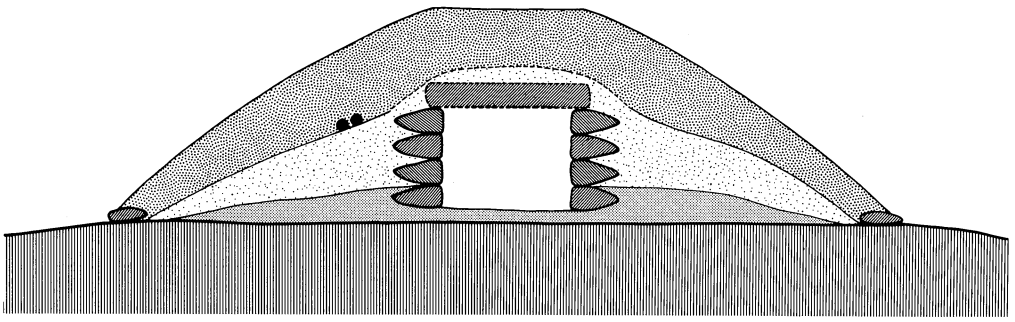


図37　築造工程

の位置さえも決定済みであったと考えることができる。

第２工程　粘性に富んだ土を使って盛土を開始する。裏込め石を除いて礫をほとんど混入させていない。墳丘裾まで及ばず、おおむね50 cm～１ m内側から盛土されており、また一様に石室の根石上端のレベルで終了する。根石周辺は、広くそのレベルが保たれ水平な面を形成していた。小工程として、この土を石室基底面まで薄く盛り、ほぼ水平としたところで裏込めとともに根石を配し、それを固定するかのように再び根石上端まで盛土するという３工程が辿れよう。石室の基礎を構築するまでが本段階に含まれるわけだが、本工程だけに選択された土質、および根石を完全パックするかのような盛り方、あわせてそれが根石周辺に広く厚くまた墳端にまで達していないこと等々、すべてはこれをより強固なものにすることだけを目的にした作業と考えられまいか。妥当なら、本工程を盛土第一段階とするよりも石室の基礎構築段階として規定したほうがよく、盛土は小封を形成することもひとつの目的としたかもしれないが、主は石室の基礎を強化することにあったとすることができよう。

第３工程　墳丘をおよそ半分の高さまで盛る段階である。基本土層第Ⅲ層に似た粘質の黄褐色土を主体としながらも、大振りの礫を多分に含んでおり土石混合層となっている。この盛土も石室の構築過程と切り離すことはできず、墳丘を盛り上げていくことと側壁を積み上げることとが相関しながら進んでいったらしい。天井部分は不明だが、少なくとも側壁が完成するまではこれをもって墳丘を構築していったことがセクションから読み取れる。したがって、この工程も石室を構築するがための盛土であったとすることも可能だが、間違いなさそうなことは石室を強化するために粘質土を主体とした封土が選択されたということである。第２工程同様、目的のもとは石室にあり、これを完成させる段階と規定することが妥当と考えられる。

これを裏づけるものとして、本工程終了後、墳丘上で祭祀らしき行為が執り行われた形跡があることを忘れてはなるまい。南西側石室寄りの箇所から須恵器坏蓋２個体および坏身２～３個体・同甕１個体・土師器坏１個体が出土しており、みな破片であったが狭い範囲に散在するものであった(ただし、図を提示したのは須恵器坏蓋１個体と同坏身だけである。また、甕は胴部破片に限られたが一定量を得ている。)。生活域と場所を等しくしていないから、偶然的な混入物とは考えられず、坏や甕を使った祭祀的行為を想定すべきだろう。何故この段階で祭祀を行ったか、これを解明する手掛かりはないが、作業工程の中でひとつの重要な区切りに位置していたに相違ない。まさしくそれは石室の完成にあったと考えることもあながち誤りではなかろう。

第４工程　第３工程の解釈が正当なら、天井石架構後(その被覆も含むか)の作業であり、ただ封土を足して墳丘を整え古墳を完成させるという１工程だけが本段階に相当する。礫だけを積み上げているが、それも石室が完成してることによって堅耐性を必要としなかったことで可能ならしめるのだろう。また、これが初めて石室にとらわれない純粋な盛土（石積み）であることを意味しており、ましてや最終段階でもあるなら、本古墳の性格を解明するための重要な要素となりえよう。

以上、築造過程を順次追ってみた。基礎的な構造は単純でありながらも、各工程において目的を達成させるための工夫が随所で認められた。さらにおのおのは、次の工程を配慮しながら行われているようであるから、そつのない設計計画の基に推進されていったと考えられる。粗雑にみえても、実は計画的かつ精密なる構造物とすることができるのである。ひいては、当地で造墓を生活の糧とした集団が、８世紀中葉になってもなお生きながらえていたことを裏づけることになろう。しかし石室の構造だけをみれば、技術的な衰退か、あるいは埋葬施設に対する思潮の変容は確実に進行していたらしい。

ここで確認を要するのは、第４工程における礫の使用である。墳丘を整飾するといった葺石的なものでなく、墳丘の一部、否むしろ主体となっている。第２・第３工程での粘質土を主とした盛土が、石室を構

築・強化するためのものなら、まさに質・量とも墳丘の主体であったとすることができる。“狭義の”という前提を必要としたとしても、これを「積石塚」と呼ばない人はまずいないだろう。なぜ敢えて礫を用いたのか。いくら野石が豊富であろうとも、これだけの量の礫を用意することは至難の業である。ましてやそれによって墳丘の崩壊を助長することになるのであれば、常識的に考えて土石混合のかたちをとるのが自然なあり方と考えられる。また、石室の強化に固執した第3工程までの意識とも相反する。したがって、余計な労働力が必要になることや崩壊の危険性を避けること以上に、本古墳には必要不可欠な要素であったに違いなかろう。少なくとも自然環境に左右された結果としてかたずけるわけにはいくまい。しかしながら、積石塚にたんなる構造的特質以上の評価を下すのが一般なら、今これを北信地方で主要に分布するそれと同一視するのは尚早過ぎよう。本古墳の特質のひとつには、時期的に突出するという点もあったはずである。葬送観念の変化や、それと併行して造墓集団の設計構想にも変容を来したであろうことは想像に難くない。あわせて、終末期でも最終段階に位置づけられた古墳を見渡してみると、類型化が困難なほどバラエティーに富んだものが多いことを特徴として挙げられる。この段階に至ってはもはや共通した規範は崩壊し、各造墓集団が独自に葬法を変移させながら消滅の方向に向かったのだろう。ここで被葬者論を展開するつもりはないが、これを論ずる前にまず佐久平での推移を把握しなければ、大星尻古墳の性格を明らかにすることはできないのである。

② 設計企画 (図38)

多くの古墳の設計に尺が使用されていることが判明して久しいが、本古墳の場合はどうか。ここではこれを探り、あわせて企画全般にも触れたい。

先の第1工程でみたように、整地地業の段階で、既に墳形・規模・石室の位置および主軸が決められていた可能性が高い。したがって整地に入る前に、前もって用意されていた設計図ないし構想を、実物大で地面に投影することが必要であったはずである。それにはまず円を描くこと、主軸ラインを決定し石室の位置を確定することが先決となろうが、すなわちそれは、円を描くための中心点とそこを通る中心軸の決定である。まずこれらを求めることから始めよう。

主軸は側壁ラインを延長さえすればいいから、求めるのはたやすい。この場合、ぴたりと南北方向を取る。円の中心は、墳形が正円形となっていないため多少の誤差を含むものと理解されるが、主軸に平行させて座標軸をスライドさせ、恐らくは測量時の基本点になったであろうY軸(南北)・X軸(東西)上の両端2点がほぼ等しい数値を示した時点の(X, Y=0, 0)の位置をこれとした。この場合Y軸が古墳の中心軸となるが、石室の西側内壁ラインに乗ることから当を得たものと考えられる。図38で見ると、N－Sラインが古墳の中心軸・それとE－Wラインとの交点が円の中心点となる。

使用尺度の問題に移りたい。これまでの研究成果によれば、晋尺(24 cm 近似)・高麗尺(35 cm 近似)・唐尺(30 cm 近似)その他が古墳の築成に使用されたようだが、時期的な点で晋尺の使用はあり得まい。また7世紀以後、高麗尺に唐尺が加わり両者併用されながら、8世紀には唐尺が主体を占めるようになり、いずれは唐尺に統一されることが、古墳ばかりではなく都城やその他建造物の調査からも判明している。文献においても、713年の大宝令の改正で唐尺を意味する「小尺」に統一されたことがうかがえるため、8世紀中葉に位置づけた本古墳が尺度を利用したものであれば、それは唐尺であった可能性が高い。その検証を次に行う。

古墳の中心点を(0, 0)とし、中心軸をY軸に取って唐尺の単位で座標割りしたのが図38である。1目盛りが1尺(30 cm)、1区画が5尺(1.5 m)を表す。唐制に習い5尺は当時の量田尺で1歩を指すが、墳丘については日本個有の身度尺である「尋」の使用を想定する場合が多いから、一概に5尺単位で割るわけには

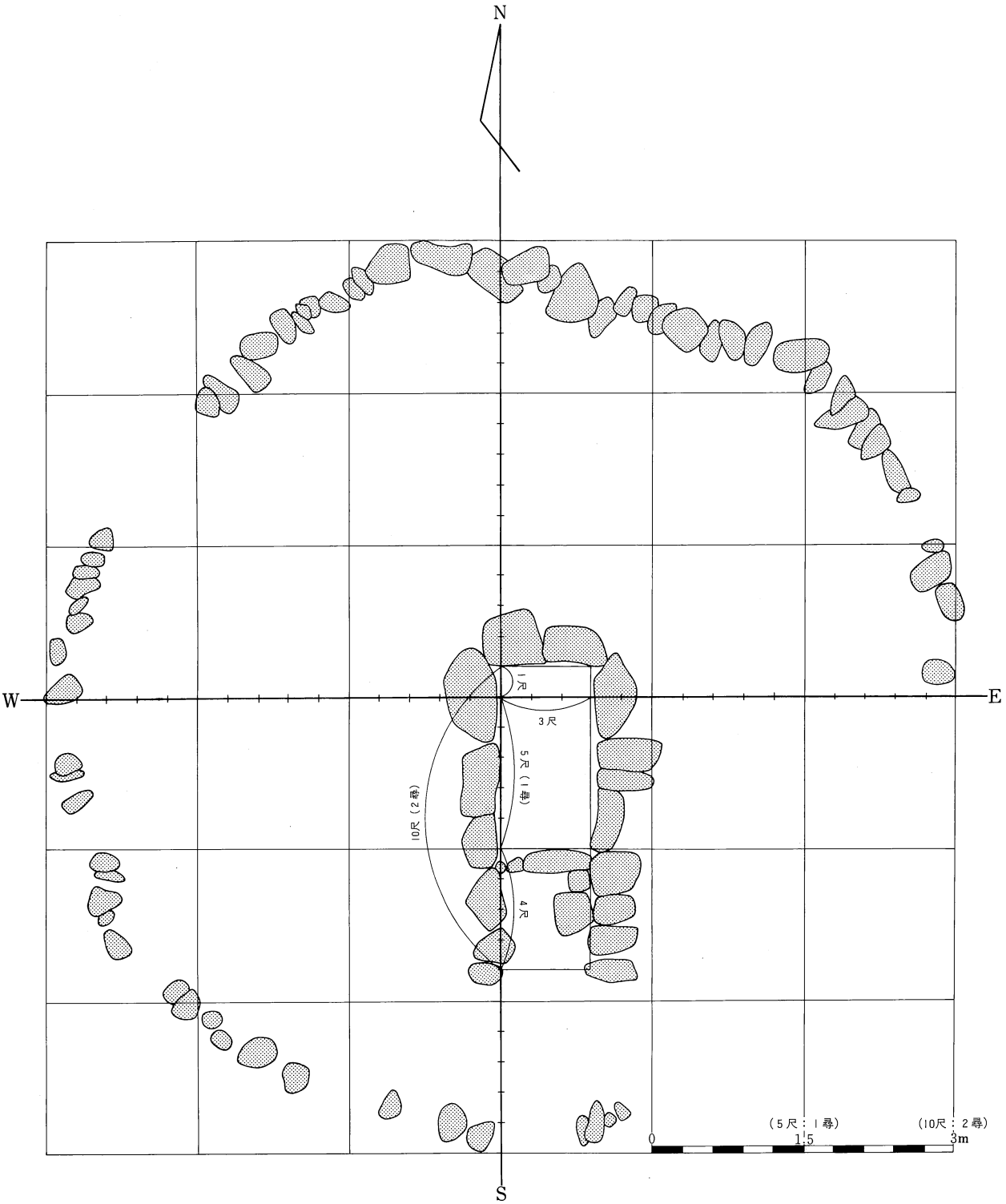


図38　設計企画

いかないだろう。しかし、「尋」が身度尺であるが故に１尋150～160 cm 内外に収まるならば、唐尺換算では５尺がほぼ１尋に値し、事実、墳丘の半径を５尺単位で割ると完数が得られるため、ここでは５尺を１尋とする。ただし、新来的な検定尺と日本古来の造墓用度地尺を結び付けること自体に問題があるわけで、ここでは検定尺から割り出したにもかかわらず慣例に習って「尋」の単位を使うが、実際には「歩」を意味するものと理解されたい。

そこでまず墳丘をみると、中心点からの墳丘の半径は4.5ｍであるから、唐尺換算で15尺（3尋）となる。また石室は、玄室幅３尺・框石までの玄室長６尺・全長10尺（2尋）をはかることが明らかである。すべて完数が得られることから唐尺を使用したと考えて大過あるまい。

前置きが長かった割りには、結果は単純にして明快なものであった。だがそれだけではない。古墳の設計が、すべての面で前記した中心点と中心軸を基軸に据えて行われていたことを示す結果ともなっている。

まずそれは、石室の西側側壁ラインが中心軸と完全に合致している点にある。これには根石を設置する段階で再度中心軸上に縄張りすることを要したに違いない。企画に則ることへの強いこだわりを感じるが、これも石室の主軸を正確に北へ向けなければならないという企図が働いたためであろうか。いずれにせよ石室が大きく東にずれていることの原因はそこにある。さらに、Ｘ座標の値だけでなくＹ座標においても企画性が認められ、中心点（0，0）から＋１尺の位置に奥壁を設定し、－５尺（1尋）に至ったところで框石を埋設するというように尺度計算が行われているのである。

以上のことから、唐尺を使用していることが判明し、また中心点・中心軸の存在から結果的に座標計算に似た方法が取られているのも確かなようだ。加えて、中心軸の向きが恣意的なものならば、企画段階には方位も重要な要素であったろうし、北を導き出す術も知っていたということになろう。とにかく墳丘の築成過程も含め、すべては計画的に作業が進められたのである。

③　立地条件からみた葬送観念および被葬者の性格（図39）

佐久市内における終末期古墳が、平地部東縁の山麓斜面に集中していることはよく知られている。これらは小規模な古墳群を形成しながら、北は横根の横根古墳群から南は常和の天神久保古墳群まで、約９ kmの間に分布している。古墳群として登録されているものは計22を数えるが、単に分布だけに目をやればいくつかのグルーピングが可能であり、そのひとつに横根古墳群・平古墳群・矢口古墳群・矢沢古墳群・城古墳群・一本松古墳群・丸山古墳群・そしてこの大星尻古墳までを含む、平尾富士西麓一帯を葬地としたグループがある。大星尻古墳はその南端に位置するが、ほかの古墳群が平地に西面した山麓部を中心に、しかも群構成をとって築かれているのに対し、本古墳だけが平地を眺望できない南面する谷の斜面に単独で存在している。大星尻古墳以外は未だ調査を受けないまま今日に至っていることから、それらの造墓期を知る手段はないものの、仮に本古墳が最終末に築造されたものとするなら、葬法における観念的変化が予測できるし、またそうでないにしてもほかとは違った観念がはたらいたが故の占地であると考えられよう。ここでは、大星尻古墳築造の背景にある葬送観念を中心に検討を試みたい。

大星尻古墳の立地条件を詳細にみてみよう。東部山地から佐久平に流下する東西性河川のひとつである霞川は、北の平尾富士山塊と南の閼伽流山山塊との隙間を流れており、狭長な谷を形成している。この谷の末端近くで、平尾富士側へ派生した谷間内に大星尻古墳は存在する。古墳の占地する谷は、谷といっても押し出し地形が本来の姿であるから、北へ上がるほど尾根状となり、したがって谷頭も存在しない。南西に向かって下り始めるが、霞川に面したところでほぼ南に向きを変え、谷幅も150m程に広がる。この南面した幅広な斜面の中央に古墳を築こうとしたのだろうが、そこには谷筋に沿うかたちでさらに谷状の窪みが走るため、位置をやや西へずらさざるを得なかったと考えられる。東西の尾根は、尾根裾の位置を揃えて「ハ」の字状に開き、また古墳の位置から望めば高さ・形状も似たようなものであるため、均整のとれた空域という感が強い。それとは別に、川向こうの南側には閼伽流山山塊から伸びてきた尾根が谷に向かって迫り出していることから、閉ざされた空域とも感じる。

ここで想起するのが奈良市此瀬町で発見された太安萬侶卿（723年没）の墳墓である。平城京から遠く東に離れた幽境の地に葬られているが、この占地は後背・左右が尾根に画された南斜面であり、開けた眼前に

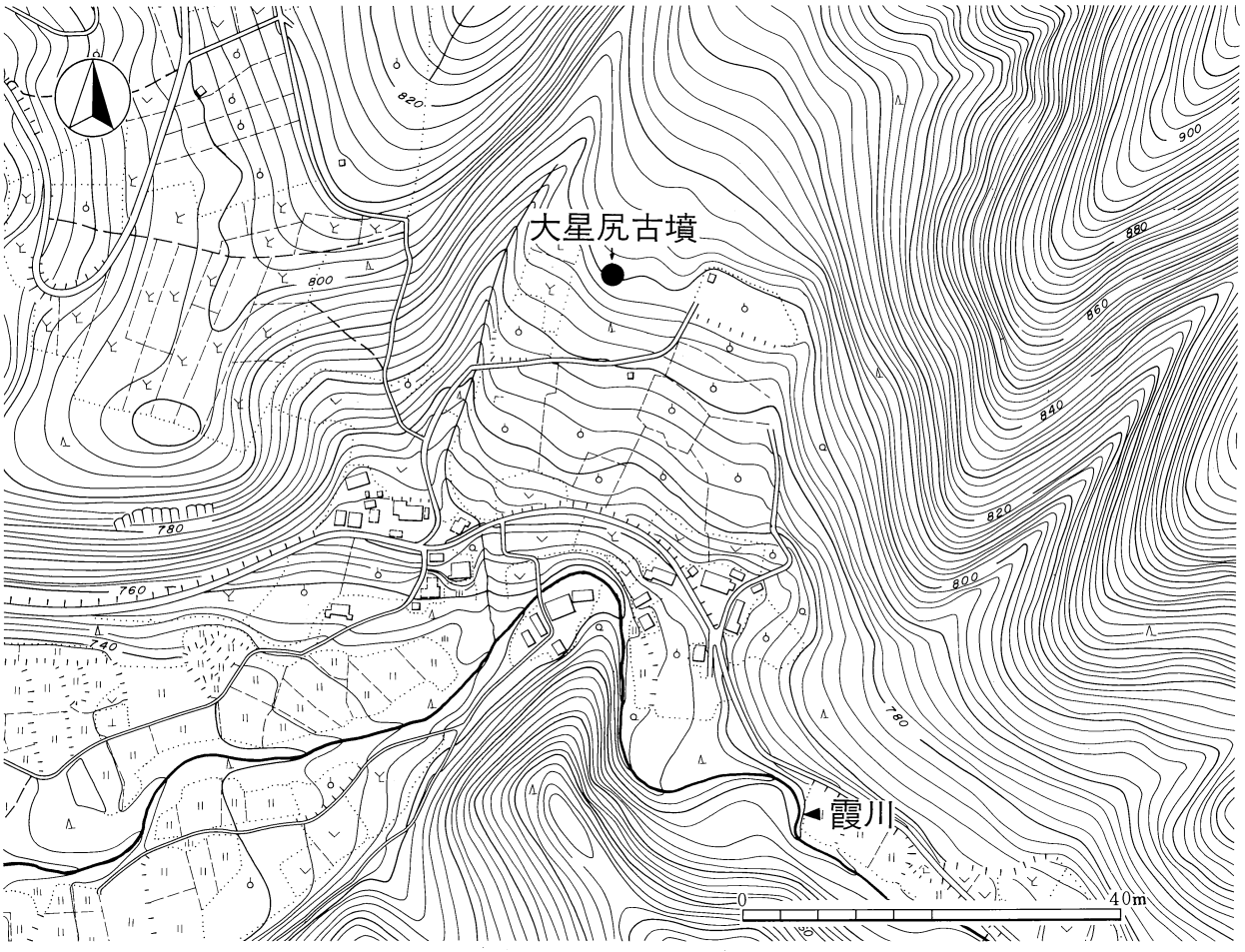


図39　立地環境

は小渓が東から西に流れている。大星尻古墳と相似た風景である。水野正好氏は、こうした占地が中国・韓国の風水思想に関係したものだという(水野1984)。風水思想に基づく墳墓が、奈良時代の高級官人層の間で築かれたらしいことは以前より知られていたが(斉藤1935)、儒教の浸透、それとは別に陰明道の活躍が目ざましい当時の社会情勢に鑑みるなら、墓相・家相の吉凶を占う風水説もまた、外来思想のひとつとして早くから受け入れられていたとしても何ら不思議はない。奈良時代の火葬墓の例だが、長野県内でも岡谷市大久保Ｂ遺跡や同大洞遺跡においてその可能性が指摘されている（百瀬1987)。

ところで風水説における墓地の吉相とは、まず南に開けていてそこに立ちはだかるものがないこと、北風を遮る背後の山・凶気の侵入を拒む左右の山を有することによって墓を鎮めること、そして前面に東から流れる川があり、さらに前方に山があればなお良しとするものである。視界があまり開けていないことを除けば、大星尻古墳の場合も、背後に尾根(さらにすぐ後方には平尾富士)を従え、東西にも険しい尾根がそびえ立ち、開けた南面前方に西流する霞川、それを挟んで突出する尾根裾を構えるなど諸条件を満たしており、むしろ太安萬侶墓以上にそれぞれが確然としている。大久保Ｂ・大洞遺跡の例も含め、風水の思惟が思いのほか広範囲に波及していた可能性が高いといえよう。また、これが火葬墓に限られるものでないことも示唆している。

風水思想の影響とみるもうひとつの理由に、単独墳として存在するという点を挙げることができる。風水の念によって得られた空間は、水野も指摘するところであるが、これ自体が「墓域」としての役割を担っている。ここで重要なことは、原則としてこれが一個人墓に付与されるものであるということであり、いわば特定個人墓の「兆域」なのである。大星尻古墳における兆域とは、前記した「閉ざされた空域」にほ

かならない。大星尻古墳の単独墳としての意味はまさしくそこにあると考えている。すべてのことが妥当なら、大星尻古墳は単独墳であって、また個人のための単葬墳でもあったといえよう。

風水説とは別に、儒教一般の影響も看取される。技術的な問題も考慮しなければならないが、少なくとも北頭位を厳密に守っているのはその表れであろう。想像をたくましくすれば、唯一副葬品として認められた鉄鏃が、冥数を示す4本であったことも示唆的である。

終末期古墳には、もはや政治的シンボルとしての意味合いは失せ、死者のための単なる墓という意識の基で築造が続けられた。だからこそ、当時の葬送観念、いわば死生観が如実に反映されていると考えられるが、中国思想はただならぬ影響を及ぼしたに相違ない。大星尻古墳からその一端を垣間見ようとしたが、根拠不充分で多くが今後の研究に期待することとなった。しかし、火葬か否かという絶対的差異はあるものの、火葬墓を中心とした奈良時代の墳墓に似た葬送観念が働いていることは確からしい。終末期のしかも8世紀中葉にまで下ろうとする古墳を、「古墳」としてだけでなく「奈良時代の墳墓の一類型」として捉えることも重要な視点といえそうである。

さて、被葬者について少し触れておきたい。終末期古墳の一般的立地は、村里から離れた山間・丘陵地の斜面である。殊、眺望の良い南斜面が葬地に選ばれるケースが多い。これは続く奈良時代の火葬墓にも受け継がれるが、石室内に火葬骨を埋葬するものを除けば、一般に終末期まで存続する群集墳と場所を共有しない。このことに対する答えは充分に用意できないが、大星尻古墳の場合をみれば西隣の尾根に丸山古墳群・次の尾根に一本松古墳群・続いて城古墳群が営まれており、これら全体でひとつの群集墳を形成しているといえる。すなわち、大星尻古墳も群集墳の一角に位置づいているわけである。律令体制の整備が押し進められたこの頃の被葬者は、体制に下った「佐久郡」の郡司層ないしはその傘下の者たちであったろうが、これほどの兆域が与えられているならけっして下級官人で終わりを遂げた人物ではなかったろう。にもかかわらず、共有された葬地に埋葬されたのは、群集墳を営んだ集団と強い繋がりをもった人物であったからに相違ない。大分前の問題に立ち返るが、墳丘の構造的特徴から突如渡来系氏族を登場させるわけにはいかないのである。被葬者は在来の有力者層のひとりにほかならない。

(4) 1号墓について

近世の長方形石積墳墓であったが、このような形態を呈するものは、一般に平安時代末から中世の比較的古い段階に多く見出せる。1号墓の墳墓形態がこれに系するのか、これだけでも論の対象となろうが、佐久地方は無論のこと周辺にも間隙を埋める石積墳墓の調査例が皆無であるため、多くを記すことはできない。ただ確かなことは、前代の基壇状墳墓がそうであったように厚葬としての感が強く、恐らく庶民とは異なる被葬者の身分・階層を表徴したものであろうと考えられる。しかしながら、含まれる遺物量の限界から、墳墓と被葬者の性格を有機的に結びつけるのが困難な場合が多い。仏塔を持ち、また出土遺物の豊富な当1号墓は、それを可能とする好例となろう。この分野に対する知見は甚だ乏しいものであるが、被葬者論を中心に二・三検討を試みたい。

墳頂に立つ無縫塔は、僧侶の墓に造立されるのが一般だが、時が降りるにつれ次第に民衆にも採用されるようになったものであるから限定はできない。しかし、副葬品中に数珠・伏鉦などの仏具が含まれていたのは、被葬者層解明のための大きな手掛かりとなる。数珠は副葬品として時折みられるものだが、一方の伏鉦については稀有な存在であり、また極めて限定された機能をもつものである。これは木魚で打ち鳴らすことによって、阿弥陀仏の称名念仏を強調し、かつ念仏の調子を取るための梵音具である。また、その念仏を数える役割を果たすのが数珠なのである。したがって、葬られた人物は南無阿弥陀仏を念誦した僧侶と断定でき、無縫塔も立つべくして立てられたものであったといえる。阿弥陀如来の信仰といえば浄

土教であるが、調べた限りでは伏鉦の使用もこれに限定されるものであった。したがって、被葬者は浄土宗に属した僧侶に違いない。

被葬者が僧侶なら、手厚く葬られたとしても何ら不思議でなく、信仰に厚い信者たちの手によって造墓されたのだろう。しかし、ここは寺ではない。しかも山中である。寺僧とは考えられず、また副葬遺物や石塔が粗雑であることから高僧でもなかったようだ。集団墓内に営まれたものでもないから、推測に過ぎないが、地方を渡り歩いた念仏行者、あるいは世を遁れ山林にこもった仏法の修行者のような僧侶ではないかと考えている。それにしても、これほどに手厚く葬送する必要は何にあったのだろうか。斜面を基壇状に削り出し、墳丘を築き石塔を造立させるまでの作業は容易なものではない。類例を知らないため答えは用意できないが、この僧の死を思いいる気持ちにはただならぬものがあっただろうし、この地の民衆信仰と深い関わりをもっていた人物・宗派であったからこそ労を省みない埋葬方法が取られたのであろう。この土地の人々にとっては崇高なる僧侶であったと考えられる。

ところでこうした造墓活動が本墳墓に限られるものでないことは、先に報告した干草場遺跡(第７節)の近世墳墓にも見られるように明らかである。この場合の被葬者も修行僧の可能性が高いものであった。寺を離れた僧の死に対して、多かれ少なかれこうした造墓活動を行う風潮が民衆の中に存在していたと考えられる。本墳墓の意味づけを明確にするには、僧侶に対する葬送儀礼の類別化・葬法の地域的差異を明らかにしなければならないが、いまは類例の増加を待つほかない。今後の研究の進展に期待するところである。

被葬者の問題から離れて、もうひとつ遺体の安置方法について検討を加えておきたい。本墳墓では北頭位の右側臥屈葬であった。要は北枕であり顔を西に向けていることにある。北枕の状態で安置したのち、顔の向きを西方に変える行為を一般に「枕直し」といい、仏式葬方のひとつに数えられるが、その西とは、死後の極楽世界を扱う阿弥陀如来が鎮座する方角であり、当然これは西方極楽浄土を唱える浄土教の教えによるものである。被葬者が浄土宗の僧なら、向く顔方向は必然的に西になる。浄土教は、平安末期以後日本人の他界観念に大きな影響を与えており、また日想観も広く受容されたらしい。人骨が遺存するものについては、頭位や顔の向きにも注意を払う必要があろう。それによって、葬送観念の一端を垣間見ることが可能となるからである。

参考文献

会田　進他　1986　『梨久保遺跡』岡谷市教育委員会
五十尚　彰　1986　『奈良地区遺跡群Ⅰ発掘調査報告書』横浜市奈良地区遺跡調査団
斉藤　　忠　1935　「上代に於ける墳墓地の選定」『歴史地理』65－６
田中　英司　1977　「縄文時代における剝片石器の製作について」『埼玉考古』第16号
寺内　隆夫　1984　「角押文を多用する土器群について」『下総考古学』７
長野県埋蔵文化財センター　1987　『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書１』
〃　1988　『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書２』
能登　　健　1982　『十二原遺跡』群馬県教育委員会ほか
三上　徹也　1987　「梨久保式土器再考」『長野県埋蔵文化財センター紀要』１
水野　正好　1984　「奈良朝貴人の墳墓と葬地」『郵政考古紀要』Ⅸ　郵政考古学会
百瀬　久雄　1987　「５．成果と課題（大久保Ｂ遺跡）」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書１』長野県埋蔵文化財センターほか

第12節　丸山古墳群・丸山II遺跡

1　遺跡の概観

丸山古墳群・丸山II遺跡は、佐久市大字上平尾(かみひらお)字丸山2713番地を中心とした平尾富士西麓に位置する。平尾富士から南西に派生する尾根の先端部一帯、標高800ｍ内外に営まれており、平地部とは高度差80ｍ前後を有する。佐久平を東側から一望できる眺望のよい地である。

佐久平東縁の山麓斜面には終末期以降の古墳群が数多く分布するが、平尾富士西麓一帯はその北端に当たる。南北3.5ｋｍの間に、北から横根古墳群・平古墳群・矢口古墳群・城古墳群・一本松古墳群などが並び、この丸山古墳群と本報告書所収の大星尻古墳(第11節)がそれに続く。丸山古墳群は古くから周知されていたものの、幾度となく破壊を受けていることから、現在では円墳２基および可能性のあるマウンド１基が尾根の先端部に残るだけとなっている。１号墳(『佐久市遺跡詳細分布調査報告書』による。位置は図１を参照。)の東に点在した２基の古墳が戦後破壊されたことを当事者から聞いているが、かつての記録ではこれらの合計を上回る数が記されており、佐久市近辺では中規模程度の古墳群を形成していたと考えられる。

丸山II遺跡は、丸山古墳群の周知範囲内に存在する。西面する浅い谷状の斜面に営まれており、古墳群の確認調査途中に発見した包蔵地である。遺跡範囲を地図に落としていないが、地形の様子と今回の調査結果から推定すれば、斜面上半の約8,000㎡の範囲が遺跡対象となるだろう。新規登録について佐久市教育委員会と協議した結果、隣接する周知の丸山遺跡(第13節)に対するかたちで、丸山II遺跡と呼ぶことにした。

平尾富士西麓の斜面は、古くから桑畑を中心とした畑作が行われていたが、戦後間もなくモモ栽培を目的に一挙造成の機に至った。丸山古墳群・丸山II遺跡の所在する地も、それに洩れることなく一面モモ畑として活用されている。そのため、原地形が大きく変貌するところも少なくなく、古墳の破壊もこの際に行われたものと思われる。

2　調査の経過と概要

上信越自動車道は、ここをパーキングエリアとして通過することになった。聞き取りによっておよその位置をつかんだ壊滅古墳２基を含め、現古墳群の北側外を通るものであったが、付近一帯が古墳群の周知範囲として登録されていることから、古墳の存在確認を目的とした試掘調査が必要になった。

調査対象面積約22,000㎡のうち、規定に従って全体の1/10に当たる2,200㎡を試掘調査の対象とした。

これを昭和62年に実施し、本調査を翌年に回すよう計画した。試掘調査については、広大な面積の中から散点する古墳を探し出さなければならないため、くまなくトレンチ調査を行う必要があったが、トレンチ設定に当たっては、古墳の規模も考慮に入れて、当センターが採用する地区割りのひとつ、８ｍグリッドに則ることにした。また、トレンチ調査に先立ち、下草刈りを全域に渡って行い、微地形観察をした上で古墳らしきものがあれば、重点的にその箇所の確認調査をする予定でいた。

試掘調査は、昭和62年９月28日から同年11月30日にかけ、調査研究員４名・作業員34名の体制で行い、実働日数44日・延べ作業員数884名を要した。微地形観察では古墳を確認することができず、早々とトレンチ調査に移行した。トレンチ掘りは基本的に人力に依り、一部重機でも掘削した。また、地形から古墳存在の可能性の高低を判断し、それによってトレンチの間隔・幅を変えた。

古墳はどこからも検出できなかった。かつて古墳が築かれていた可能性をなお残すが、その場合も存在を確認できないまでにことごとく破壊を受けていると判断した。基本的に分布域の中心から外れているこ

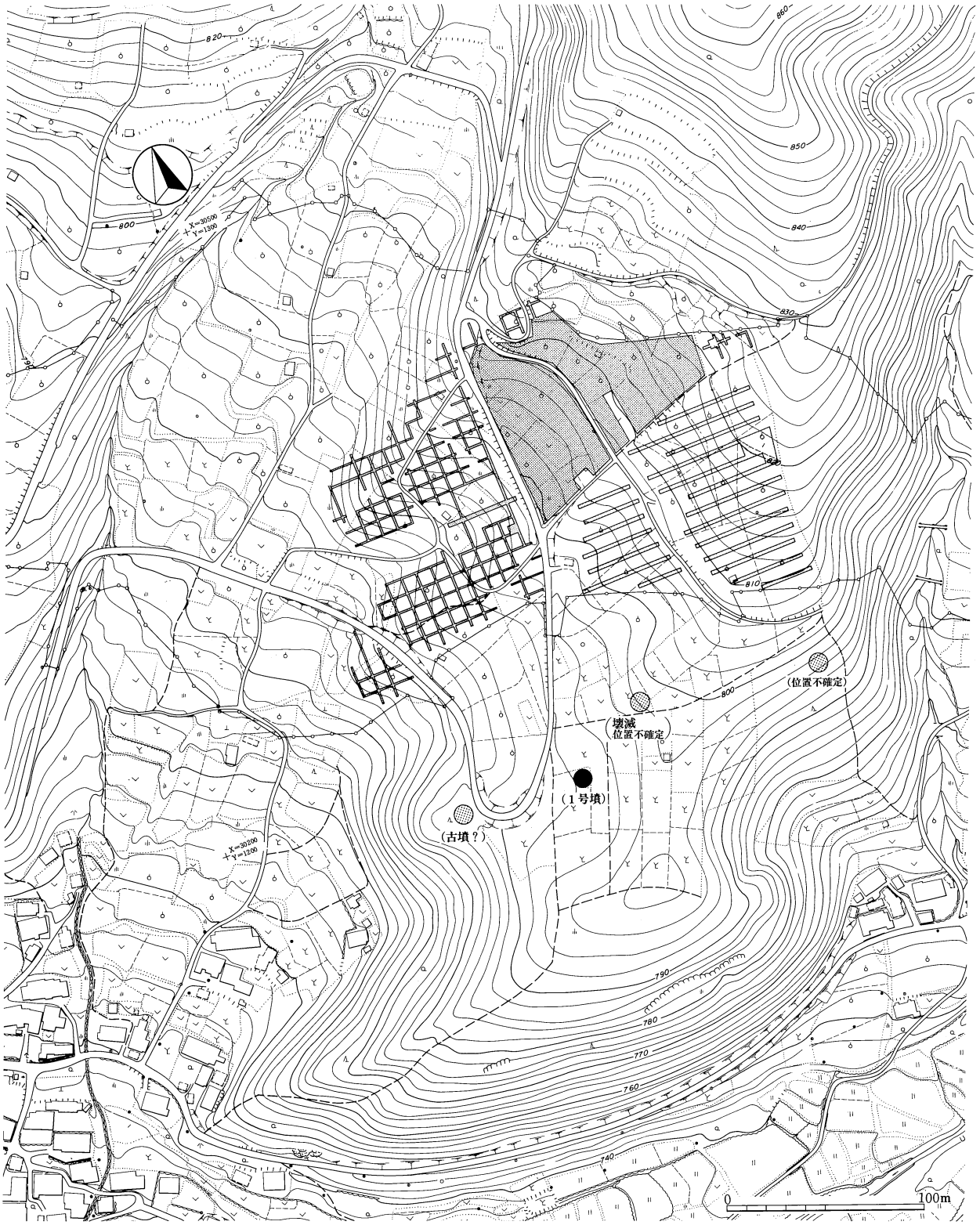


図１　地形および調査範囲（１：3,000）

と、該期の遺物が皆無であったことも勘案し、本調査必要なしという判断に至った。

丸山Ⅱ遺跡は、試掘調査開始直後、遺物包含層と住居址１軒を検出したことで存在が判明した。調査計画からすれば本調査は翌年となるが、遺物包含層の広がりが限られ、地形をみても広範な展開を予想しえないことから、本年度に終了できると見込んで急きょ本調査に入った。約6,000 m²の範囲を重機で表土剝ぎ

し、以後手掘りで包含層以下を調査した。包含層は、縄文時代前期末～中期初頭と同後期の土器・石器を微量に含むもので、斜面中央付近にだけ分布していた。遺構は、弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の竪穴住居址２軒および時期不明の土坑９基を検出した。丸山古墳群の試掘調査と並行して行ったことから、費やした調査期間・延べ作業員数は前記した中に含まれる。

調査日誌抄

９月28日　テント設営および器材搬入。草刈り開始。
９月30日　地区割りと並行してトレンチ設定に着手。
10月５日　ⅣA区からトレンチ掘り開始。
10月６日　ⅣA・B区から縄文時代の土器片出土。包蔵地であることを確認。後に丸山Ⅱ遺跡と命名。
10月７日　ⅣA区から土坑のコーナーらしき落ち込みを検出。拡張し、竪穴住居址であることが判明。
10月19日　丸山Ⅱ遺跡の範囲を確定し、重機による表土剝ぎを東端から開始。
10月21日　丸山Ⅱ遺跡から土坑数基を検出。
10月27日　丸山Ⅱ遺跡の調査のため、テントを遺跡外に移動。
11月２日　重機による表土剝ぎ終了。
11月12日　遺構調査開始。１号住居址から着手。
11月17日　２号住居址を検出。即調査に着手。
11月20日　調査対象となる周知範囲全域のトレンチ掘りが完了。古墳なしと判断し試掘調査終了。
11月26日　土坑の調査開始。トレンチ設定図・丸山Ⅱ遺跡全体図・基本土層図作製。
11月30日　遺構調査終了。テント・器材を引き揚げ、すべての作業が終了。

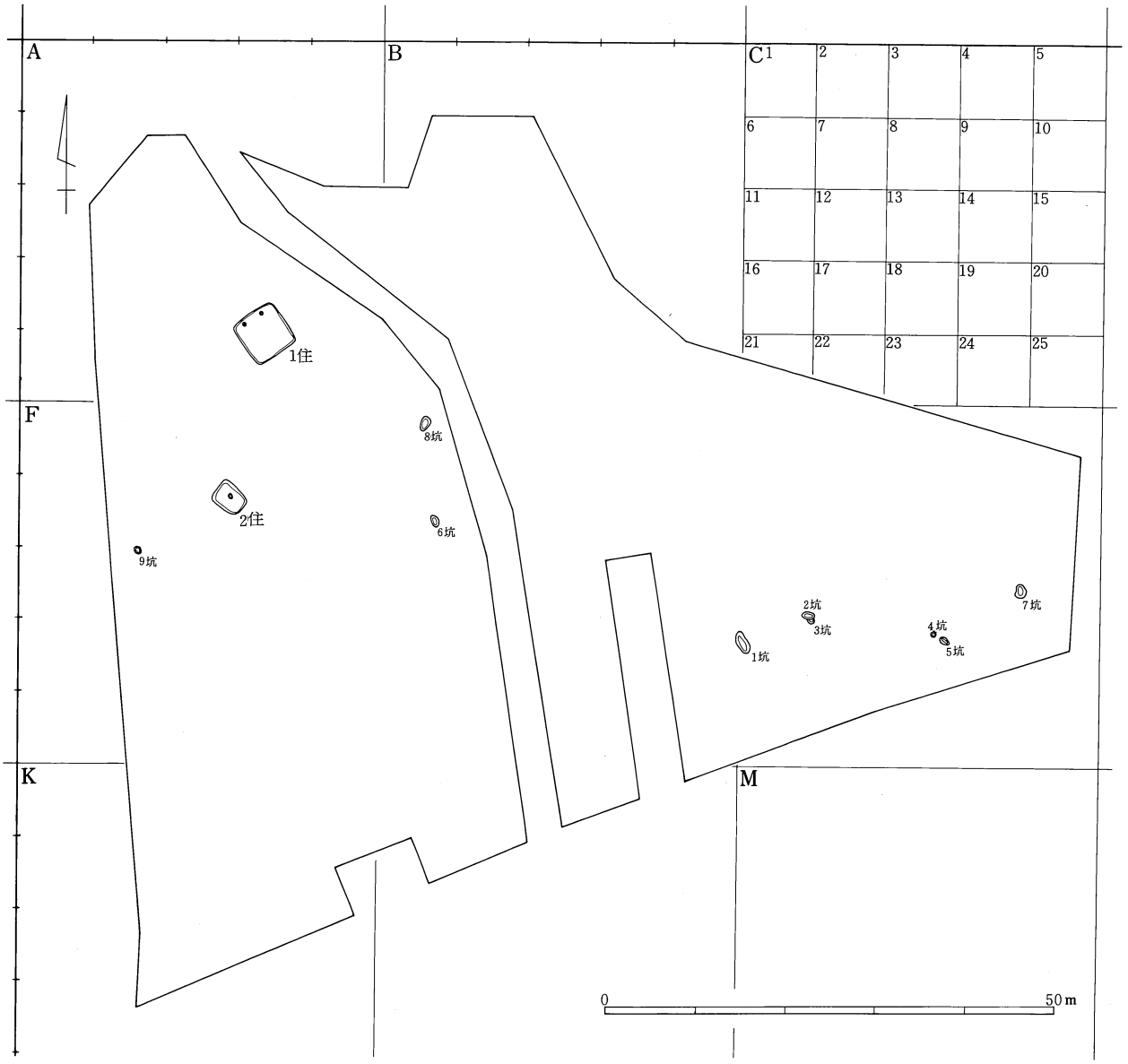


図２　遺構配置

3　基本土層

丸山II遺跡の位置する谷部を除いて、耕作土ないし客土直下にローム層が堆積している状況であった。したがって、丸山II遺跡の土層説明に限りたい。

図３は、谷がもっとも深く下がった地点の土層柱状図である。当然ながら、ローム層以降の堆積はここがもっとも顕著であるが、場所による層厚および切・盛土の違いこそあれ、普遍的な層序関係を示していたことからこれをもって全体の土層説明に替える。なお、第III層が縄文時代の遺物包含層である。また、香坂地区全域で認められた「降下テフラ」は存在しなかった。

ＩＡ：客土される以前の表土で、その内耕作が及んでいる範囲である。

ＩＢ：客土される以前の表土で、その内耕作が及んでいない範囲である。暗茶褐色を呈し、砂粒・赤色スコリアを多く含む。

II　：茶褐色を呈し、細砂・赤色スコリアの微粒子・安山岩質の風化した細礫を多量に含む。

III　：黒褐色を呈し、細砂・赤色スコリアを少量含む。ほかに炭化物の粒子が多く混入している。全体にきめが細かく粘性もすこぶる富む。比較的安定した環境の中で堆積したと考えるが、崩積性の安山岩質の巨礫を多く含んでいる。

IV　：ローム層。

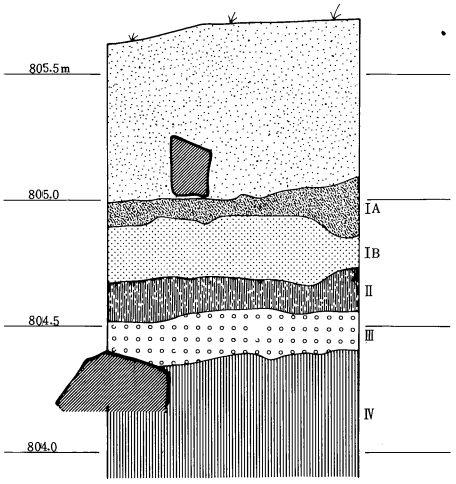


図３　基本土層

4　遺構と遺物（丸山II遺跡）

遺構・遺物ともに微量なことから、ここでは時代ごとに扱わず、遺構・遺物単位で記述をすすめる。なお、丸山II遺跡以外の範囲からは、一切遺物の出土をみていない。

ア　住居址

１号住居址（図４、PL92・94）

IVA—23・24グリッド、谷部北縁の南西斜面に存在する。IV層（ローム層）上面で検出した。一辺約5.3ｍの、比較的整然とした隅丸方形を呈する。壁高は、斜面上方側である北壁で最高50 cm、対する南壁で最低10 cmをはかる。南北方向を主軸と考えるとＮ－33°－Ｗを指すことになるが、主・副軸を考えることもなく傾斜に対して平行ないし直交させるように構築していることを看取する。

覆土は２種の層からなる。壁際にロームを母材とした黄褐色土（２層）が堆積し、以後細砂を多く含む黒褐色土（１層）が一気に埋めつくしている状況であった。層理面が明瞭で、かつ異質の母材で構成されていることから、１層と２層とでは堆積環境に大きな隔たりがあるものと考えられる。なお、流入方向には特に傾向がない。

床は、掘り込んだ面をそのまま利用するもので、中央にのみ踏み固めによる堅緻面が認められた。比較的平坦に整えられているが、地形の傾斜に従うかたちで、南北では比高20 cmの差が存在した。

北壁際に直径35 cmほどの小ピットを２穴穿っている。深さを大きく違えているが、住居中心軸に対して左右対称の位置にあり、柱穴の可能性が高いと考えられる。ほかに付属施設はない。焼土や炭化物が床面

に飛散することもなかった。

遺物　すべて床面から出土している。ただし、図示した高坏以外には、甕か壺の胴部破片と思われる土器片が数点含まれるだけであった。高坏は北西辺を中心に散在していた土器片を接合したものである。坏部はほぼ完存するが、脚部は1片たりとも遺存していなかった。口径31.2 cm・推定坏部高11.5 cm をはかる大形のもので、内外面とも赤彩が施されている。

時期　高坏の形式は、弥生時代後期後半の新しい段階から古墳時代前期初頭の間に多く認められるものである。一方住居址の形態では、平面プランからして弥生時代後期にまで遡らせるにはやや難がある。しかし、炉や4本支柱を欠くことから一般的な住居と直ちに対比するわけにもいかず、したがって取りあえず広い時間幅の中で捉えるほかない。古墳時代前期初頭に下る可能性が高いということだけに留めておきたい。

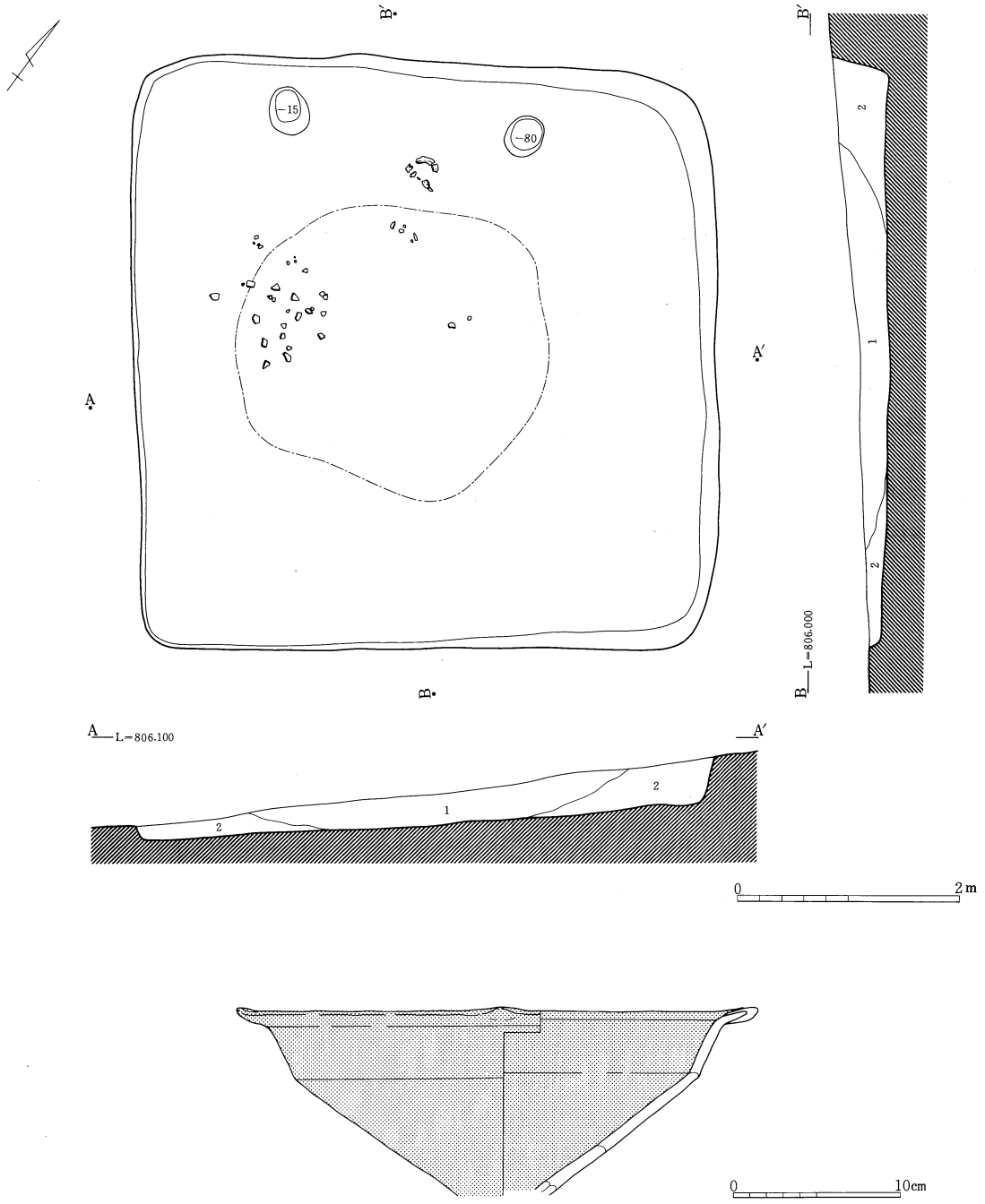


図4　1号住居址

２号住居址（図５、PL93）

ⅣＦ—08グリッド、谷底からわずかに北へ上がった南西斜面に存在し、１号住居址の南15mの地点に位置する。Ⅲ層上面で検出した。

3.4×2.6ｍの、西隅が大きく張り出す不整長方形を呈する。壁高は最高でも20cmにとどまり、谷底側の南隅付近では辛うじて５cmほどが残存しているに過ぎない。全体になだらかな立ち上がりをみせ、また下端ラインに歪みを認めることから、総じて雑な造りという感が強い。

長軸側を主軸と考えると、Ｎ－45°－Ｗを指すことになるが、本址の場合も傾斜に従うようにして構築されたと考えられる。

覆土は単層である。１号住居址第１層とほぼ同質の細砂を多く含む黒褐色土が堆積していた。埋没環境ならびに埋没時期までも１号住居址と等しい可能性がある。

床は、Ⅲ層中に設けられている。掘り込み面をそのまま利用するもので、堅緻面も存在しない。凹凸は少ないが、中央に向かってなだらかに傾斜している。

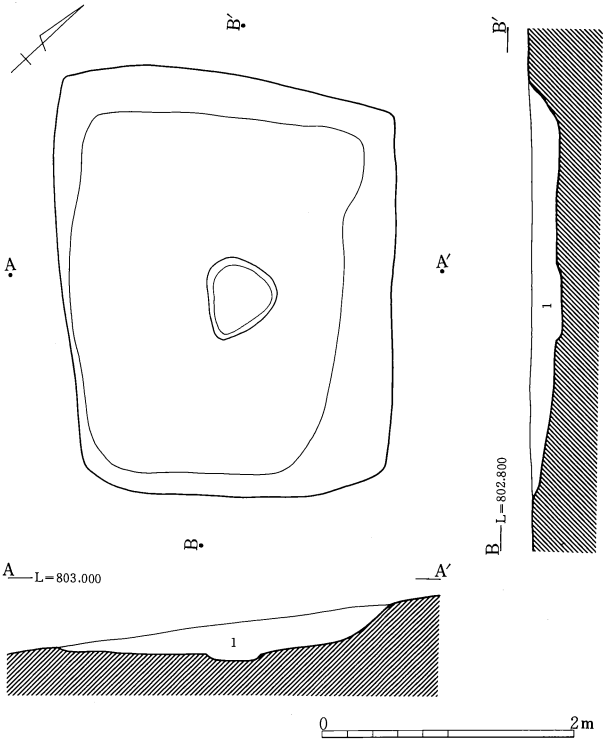


図５　２号住居址

中央に直径50 cm内外の不整円形を呈する浅いピット存在する。位置や掘り方は炉に近いものだが、火を焚いた痕跡は皆無であった。ほかに付属施設はない。

遺物　床面から、櫛描波状文を施した甕の破片が数点出土しただけである。すべて同一個体と考えられる。拓本に耐えうる資料ではないため、提示を控えた。

時期　土器の特徴からは、弥生時代後期から古墳時代前期初頭としかいえず、１号住居址よりもさらに時間幅をもたさざるを得ない。しかし、覆土の観察所見から、１号住居址と同時併存していた可能性が高いといえる。

イ　土坑（図６、PL93）

谷奥南縁に沿って６基、住居址近辺の谷北縁に３基、計９基が存在する。南縁のものはⅣ層、北縁のものはⅢ層のそれぞれ上面で検出した。全体に散点する状況であり、重複は１か所に限られる。また、規模・形態も特に傾向はない。覆土は、ロームブロックを混入するか否かという差異を看取するが、おおむねⅢ層に似た細砂を母材とする暗褐色から黒褐色を呈する土壌が充満していた。分層可能なものはない。遺物を含んだものはなく、したがっていずれも時期不明である。

ウ　遺構外出土遺物（図７、PL94）

縄文時代の土器と石器に限られる。すべてⅢ層中から出土した。調査区中央付近からの出土が目立ったが、全期をとおして微量である。

石器はすべてを図化した。土器については出土点数約30片の内、拓本に耐え、なおかつ時期比定可能な

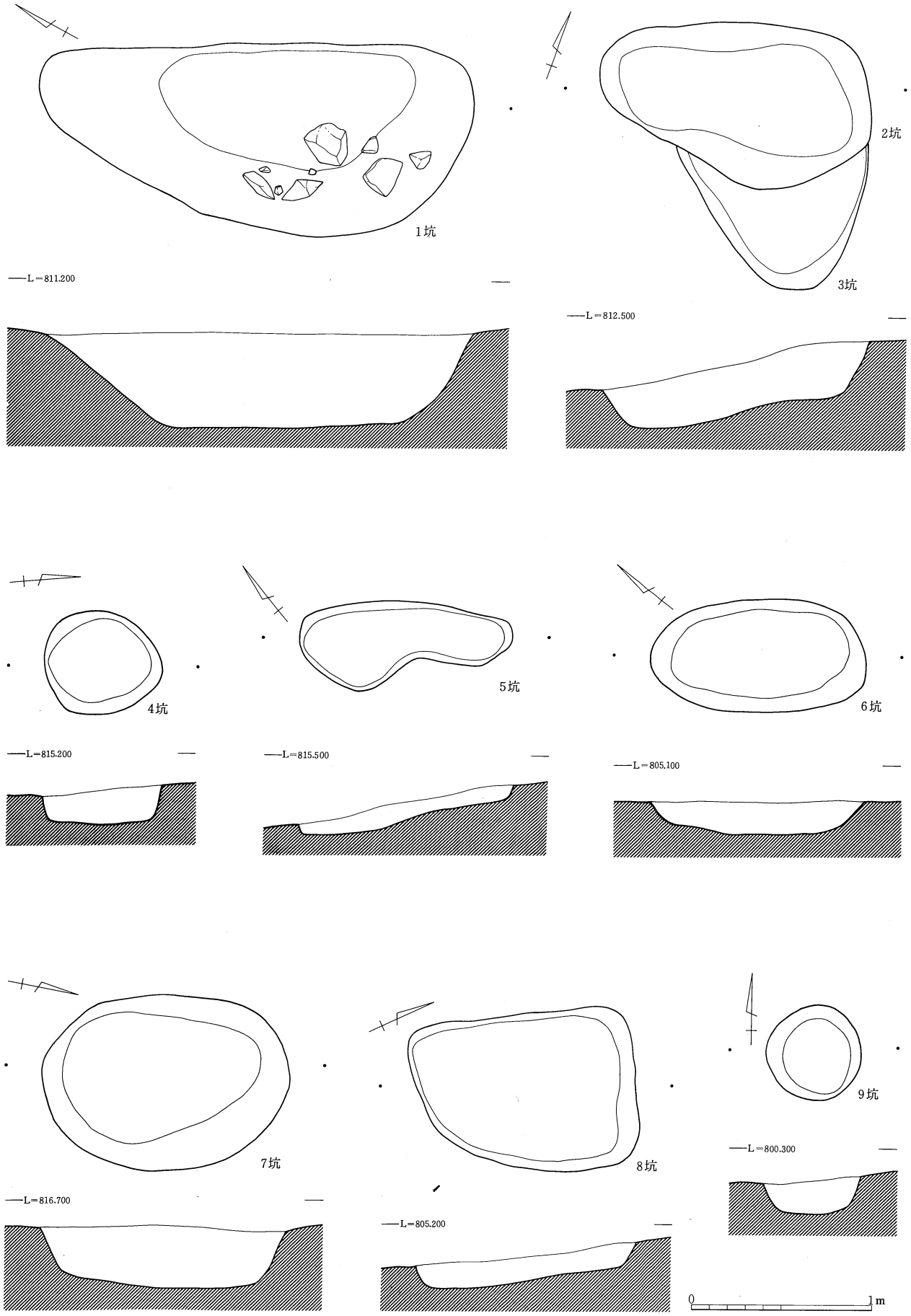

1坑
L=811.200
2坑
3坑
L=812.500
4坑
L=815.200
5坑
L=815.500
6坑
L=805.100
7坑
L=816.700
8坑
L=805.200
9坑
L=800.300
0
1m

図6　土坑

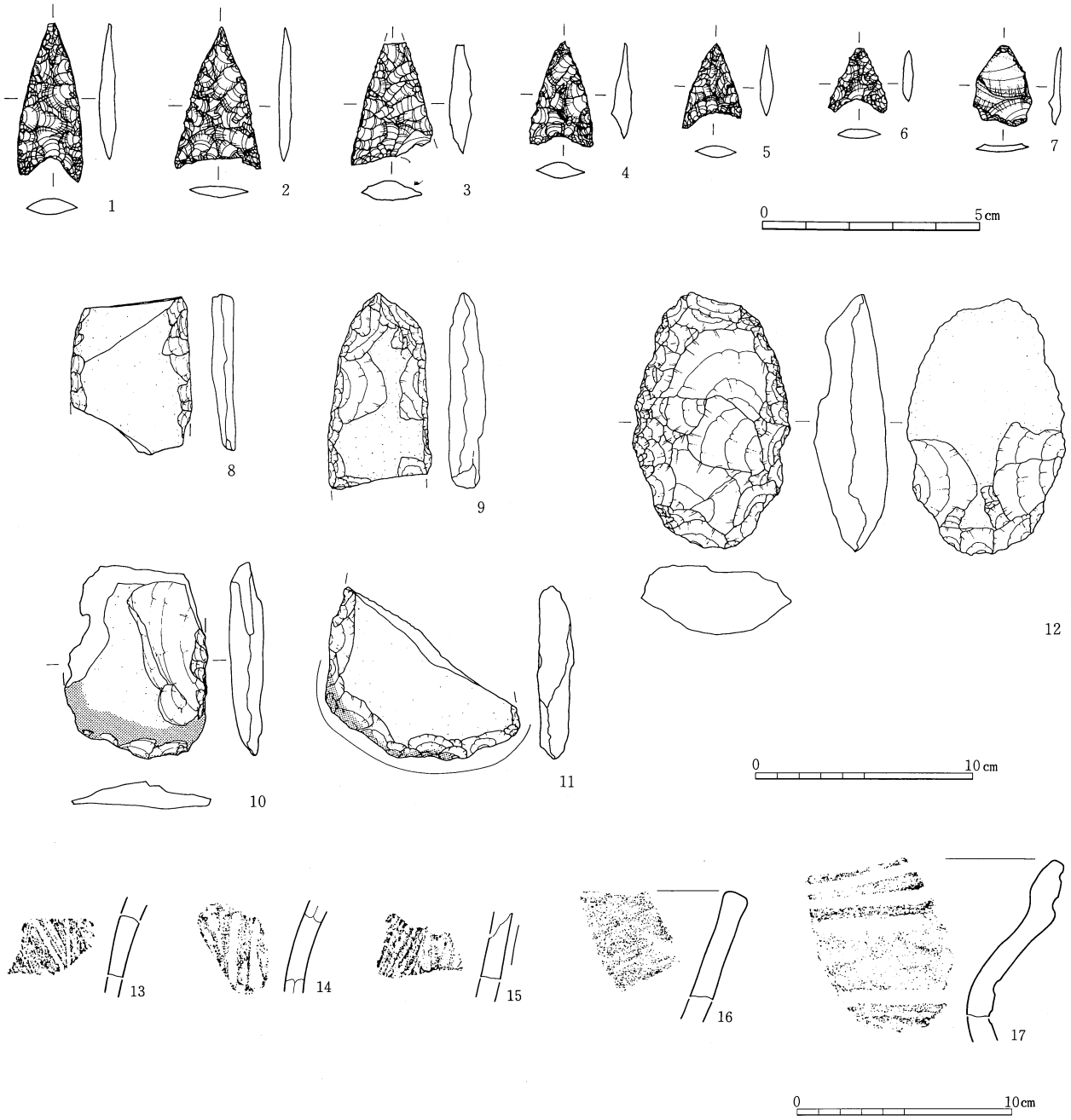


図７　遺構外出土遺物

５片だけを提示した。

１～７は黒曜石製の石鏃である。すべて無茎凹基鏃の形態をとる。１は、長幅比が2.5と鏃身が長く、側辺部は外湾する。また抉りは浅く逆刺し部は鋭角的である。入念な調整により整形され、側辺部には刃つぶしのような微細剥離痕が連続してみられる。２は、側辺部をキンクさせて先端を尖鋭化したもので、鏃身が長い割りには最大厚は３ mm と薄い。上半部は対角へ斜行する長めの剥離痕に覆われるが、脚に寄るほど時計まわり方向に軸を振る剥離となる。基部の調整が最終剥離である。７は、素材の性状を生かし、先端部と基部にだけ調整を施して製品としている。１は、調整の入念さと形態的特徴からして中期以降の産物とは考えがたい。３は、石灰質を縞状に含む黒味の強い黒曜石を原材としており、これも石材の特徴から同様である。２は、栗毛坂遺跡群Ａ地区（第18節所収）で認められた五角形鏃に類し、早期末の可能性が

ある。また、7のような剝片鏃も栗毛坂遺跡群A地区に多数認められた。

8～12は安山岩製の打製石斧で、12を除いてほかは欠損品である。欠損品の折れ面はすべて裏表方向のリングが観察される。10、11は横長剝片を素材としたものである。12は、縦長剝片を素材とし、背面には礫面を残している。整形は、背面の一部を剝離調整したのち、主要剝離面を全面剝離調整している。使用痕は認められない。石槍などの未製品とも考えられるが、ここでは打製石斧の未製品として扱った。いずれも時期を推察できる要素はない。

13～17は土器破片である。1は、ヘラ状の工具による細く鋭い条線文と半截竹管による平行沈線文が施される。胎土に粗砂を多く含み、ややくすんだ明褐色を呈する。前期後半から末葉にかけてのものだろう。2・3は中期後葉の加曽利E式土器で、2は同III式に、3は同IV式に比定される。4・5は、後期前葉の堀之内I式に伴う口縁部破片である。4は平縁、5は一部波状の口縁をなす。

5　まとめ

丸山古墳群の試掘調査では、古墳の存在を確認できなかった。尾根の先端部付近だけを葬地に選んだ古墳群として捉えるほかないが、必ずしもそうとは言い切れない面もある。

終末期古墳は周堀を伴わないのが一般であるから、墳丘を失った古墳を確認するのはきわめて困難な作業である。石室の遺存に頼るしかないが、破壊の当事者から聞いた話では、家の石垣や庭石にするため根石までも完全に取り払ったとのことであり、これが普通なら、確認のための手段はもはや残されていないといえる。したがって、調査結果からは「調査すべき古墳が遺存していなかった」と言えるだけで、けっして存在を否定することにはならない。

丸山II遺跡は、縄文時代の遺物散布地として、また弥生時代と古墳時代の接点の頃に営まれた集落址として把握される。

縄文時代は、遺跡の大半を調査したにもかかわらず、居住した痕跡が一切認めらなかった。しかし、少量ながらも土器は多時期に及んでおり、積極的ではないにしても長期に渡って何らかの役割を果たしていたと考えられる。強引な解釈だが、小型石器が石鏃に限られること、また打製石斧に欠損品が多いことから、狩猟・採集の場として利用されることが多かったのではないかと考えている。土器の面では、両脇の谷に営まれた大星尻古墳群内の縄文遺跡（第11節）と丸山遺跡（第13節）でも同時期のものがわずかに認められており、それぞれが相互関連して成立していることがうかがえる。縄文時代に限るなら、厳密にはこれらを一括させて「遺跡群」と捉えるべきだろう。

弥生時代後期末葉ないし古墳時代前期初頭に位置づく2軒の住居址は、特異な構造を呈するものであった。ともに炉・柱穴・掘り方などが明瞭でなく、2号住居址に至っては住居址として認定することさえ疑念を抱く。上屋構造も含め、極端に簡略化して構築しているようだが、特に炉を欠く点から使われ方自体も通常のものとは違っていたらしい。併せて出土遺物が微量なことから、こと、生活感に乏しい内容であったといえる。少なくとも、人が常時住まうことはなかったろう。

ところで、山間部に営まれた該期集落の調査は、佐久地方では初例のことである。佐久平を一望にできるほどの高所かつ好地であるから、いわゆる「高地性集落」の一類型とも取れるが、比較材料が周辺にないためここでは検討を避けたい。しかし、一般に考えられている集落の立地概念の中にはない占地であり、したがって佐久平において隆盛を誇った該期集落との対比が今後の課題として残されよう。それには類例の増加が必須の条件となるが、本遺跡がそうであったように、いわば偶然的な発見に頼るしかなく、今後の増加にはあまり期待をもてない。その意味では、今回の調査はきわめて貴重であったと言える。

第13節　丸山（まるやま）遺跡

1　遺跡の概観

丸山遺跡は佐久市大字下平尾字丸山2327番地ほかに所在する。標高は765ｍ～800ｍをはかる。平尾富士山麓の西斜面に広がる、通称「桃源郷」と呼ばれる桃畑地帯に所在し、やせ尾根に挟まれた谷部に占地している。谷の先端には下平尾万助地区の集落が広がり、そこには万助久保・木戸橋遺跡が隣接し、谷奥には下伴助Ａ遺跡が隣接して所在する。東に並列する尾根上には昨年度調査された丸山古墳群と丸山Ⅱ遺跡が、さらに尾根を隔てた東谷には大星尻古墳群が所在する。

佐久平北東の平地に面する東側山間部の発掘調査はほとんど例がなく、今回の上信越自動車道に関連した当センターおよび佐久市教育委員会の調査が初めてである。周囲の丸山古墳群の調査では古墳は確認されず、丸山Ⅱ遺跡からは弥生時代の竪穴住居址2軒が、大星尻古墳群からは古墳１基・近世墓２基・縄文時

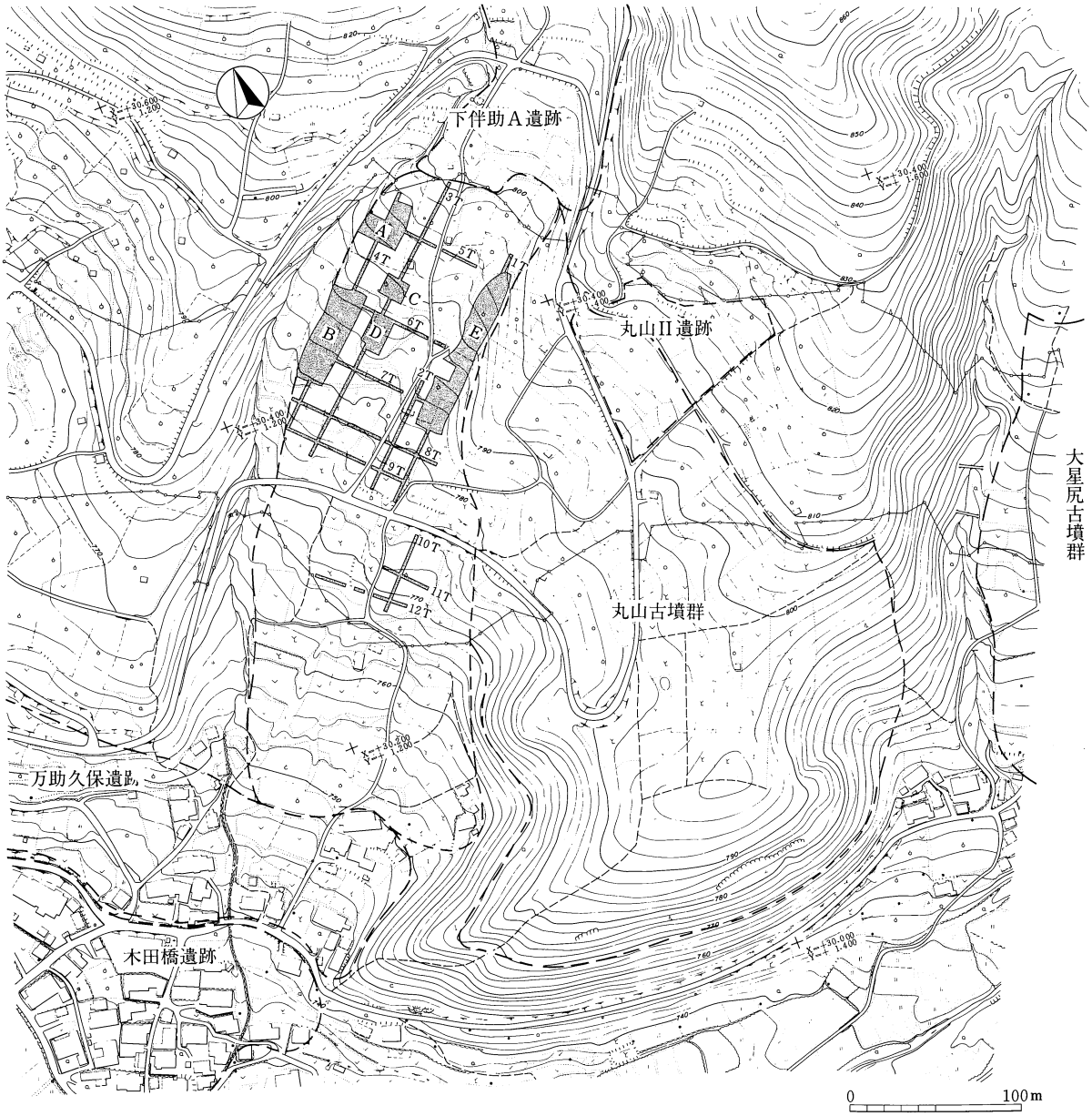


図１　地形および調査範囲（１：4,000）

代の土坑27基などが検出されている。

2　調査の経過と概要

当遺跡の一部は、当初佐久市教育委員会では丸山古墳群の範囲とされていたが、長野県教育委員会(文化課)の分布調査によって古墳群から除外され、新たに縄文・平安時代の集落址と推定された。丸山古墳群の範囲とされていたが、今回の調査対象面積は25,300 m²である。

現在の谷部は右端に沢が流れ比較的平坦で一見一様に見える斜面であるが、地形形成時に取り残された小規模な谷状の地形が入り込み、切り盛りによって棚畑として開墾され旧地形をとどめる部分が少なかった。このことから遺構の残存状態が心配された。

調査は遺構の有無および旧地形の把握を目的とし、人力と重機による12本のトレンチ掘りから開始した。その結果、旧地形は河川による浸食と多量の巨礫を含む土砂の押し出しなどによって形成され、現在中央にみられる谷状地形はその痕跡である。またその谷状地形両側にも同地形が４本確認された。標高780～800 m付近には縄文・平安時代の遺物を含む黒褐色土が検出され、同層の認められる部分５か所（A～E区）を拡張し面的調査を行った。

拡張地区の精査を進めた結果、遺跡の東西端のＢ・Ｅ地区から縄文時代の竪穴住居址１軒・土坑群、平安時代竪穴住居址２軒が検出された。発掘調査期間は昭和63年7月27日から10月28日まで行ったが、実質は草刈りとトレンチ調査にその大半をさいた。グリッド設定は第１章第４節で前述した方法に添って設定し、トレンチの位置は光波測距儀を用いて計測した。

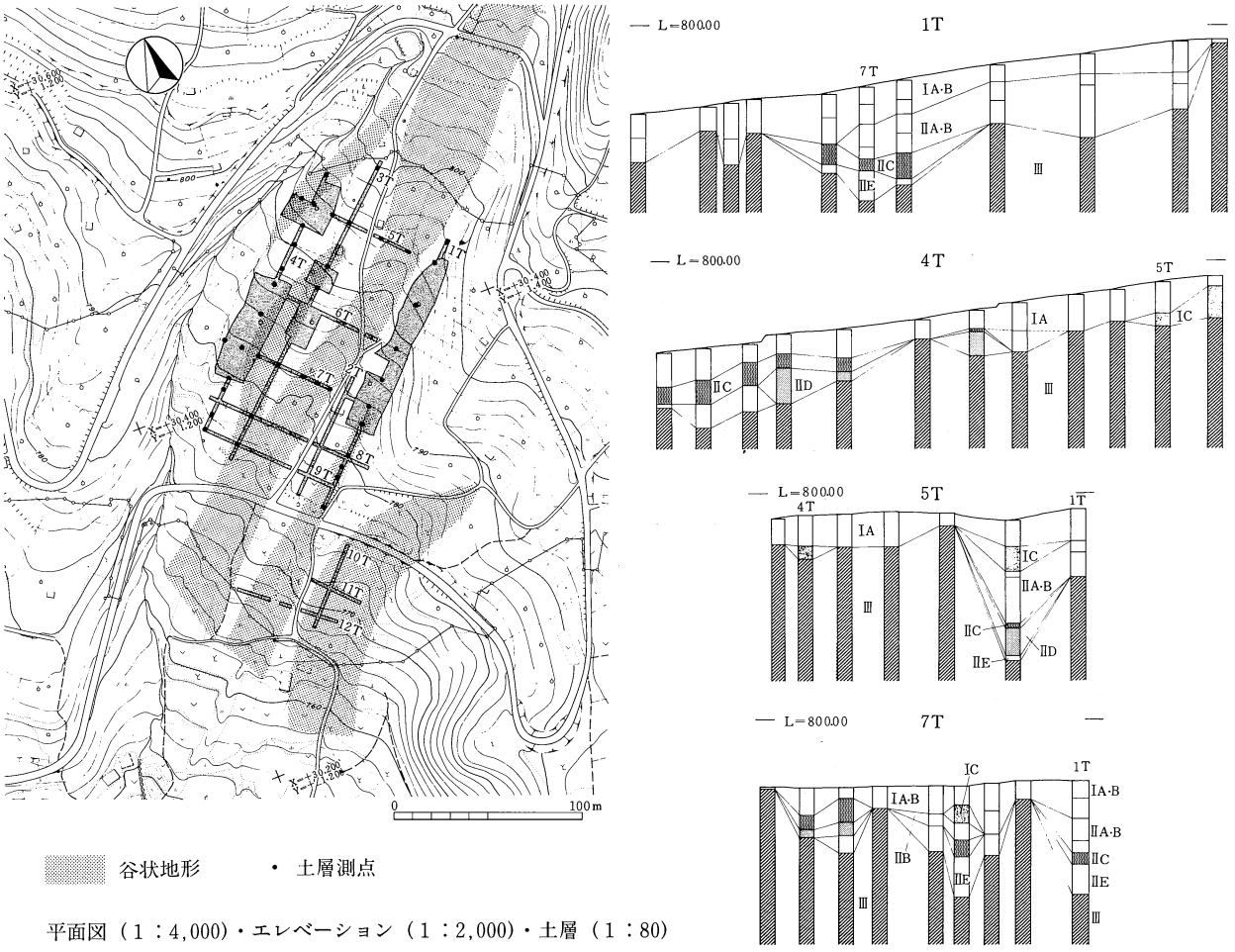
調査日誌抄

昭和63年度

７月26日～８月22日　草刈り。
８月23日～９月12日　１・２・４トレンチ掘り下げ開始。
９月２日　３・５～12トレンチ重機で掘り下げ。
　　抗打ち開始（一部）。
９月３・12～14日　重機により範囲拡張。
９月７日　トレンチ位置の光波測距儀による計測。
９月13日　検出作業開始。
９月19日　トレンチ土層柱状図作成。
９月27日　Ｅ区にて１号竪穴住居址検出。
９月28日　１号住居址検出写真撮影・掘り下げ開始。
10月３日　Ｂ区土坑群の調査開始。
10月４日　１号住居址完掘写真撮影。
10月11日　２号住居址検出、検出写真撮影・掘り下げ開始。
10月12日　３号住居址検出。
10月13日　３号住居址検出、検出写真撮影・掘り下げ開始。
10月14日　腰巻遺跡と並行調査開始。
10月19日　２号住居址完掘写真撮影。
10月25日　２号住居址終了。３号住居址埋甕炉断ち割り。
10月27日　３号住居址終了。土坑群終了。全体図作成。
10月28日　調査終了。

平成元年度

４月１日　整理作業を開始。



平面図（１：4,000）・エレベーション（１：2,000）・土層（１：80）

ＩA$_1$　：暗褐色の現耕土（III粒散在、φ１～２cmの礫がわずかに含む。）
ＩA$_2$　：暗褐色土（Ｉ A1の母材と考えられる。ローム粒子ややＩ A1に比べ多い。）
ＩＢ　：暗褐色土（Ｉ A2に類似。）
ＩＣ　：褐色土（パミス粒散在、水の影響によりややグライ化、上部のほうがやや褐色が強い。下部ほど暗褐色。）
ＩＤ　：褐色土（ローム質で軟かかい。一部でパミス粒が混入する。）
ＩＥ　：黒褐色土（ローム質で軟かい。礫はなくφ５mm未満小砂利がごくわずかに混入。）
ＩＩＡ　：黒褐色土（しまり良し、粘性やや強い。φ５mm程度の小砂利・III・パミス粒わずかに混入。）
ＩＩＢ　：黒褐色（ＩＩＡと同質で褐色がやや強い。南側ではやや黒味を帯びIIIブロック（φ３～５cm）を含む。）
ＩＩＣ　：黒褐色土（巨礫が多く混入しているが、マトリックス自体には礫、小砂利の混入は極めて少なく淘汰よし。）
ＩＩＤ　：黒～黒褐色のIII質土（ＩＩＣに比べややしまり良い。III・パミス粒を多く混入。φ10cm～１cm以下の礫やや多く混入。下部ほどIII多くブロックもみられる。）
ＩＩＥ　：黒褐～暗褐色の砂質土でグライ化している。(12Ｔ両側付近は指頭大～こぶし大の礫層マトリックスは暗褐色の砂質で、巨礫を多く含む礫層。)
III　：ローム。

図２　発掘範囲および基本土層

３　基本土層

調査対象区は、前述したような現地形および地目から地形・土層の把握と遺構の有無を確認するため12本のトレンチを設定した。

調査地の土層概観は、棚畑で切り盛りのため攪乱が下位まで及んでいた。谷状地形の低い部分には堆積土がみられ、谷状地形間では耕土下で即III層に達する。

Ｉ層は暗褐色土を中心とした現耕土以下の堆積土である。II層は黒～黒褐色土の堆積および腐食土である。ＩＩＣ層は縄文時代の遺物包含層で、遺構はＩＩＤ層から掘り込まれていると思われる。平安時代の遺構はＩＩＣ層から掘り込まれている。

4　遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構は、標高780 m～788 m 付近を中心に、調査対象区の東端（B区）と西端（E区）で確認された。概要は以下のとおりである。(図3)

B区　縄文時代　竪穴住居址　1軒
　　土　坑　　17基
　　平安時代　竪穴住居址　1軒

E区　平安時代　竪穴住居址　1軒

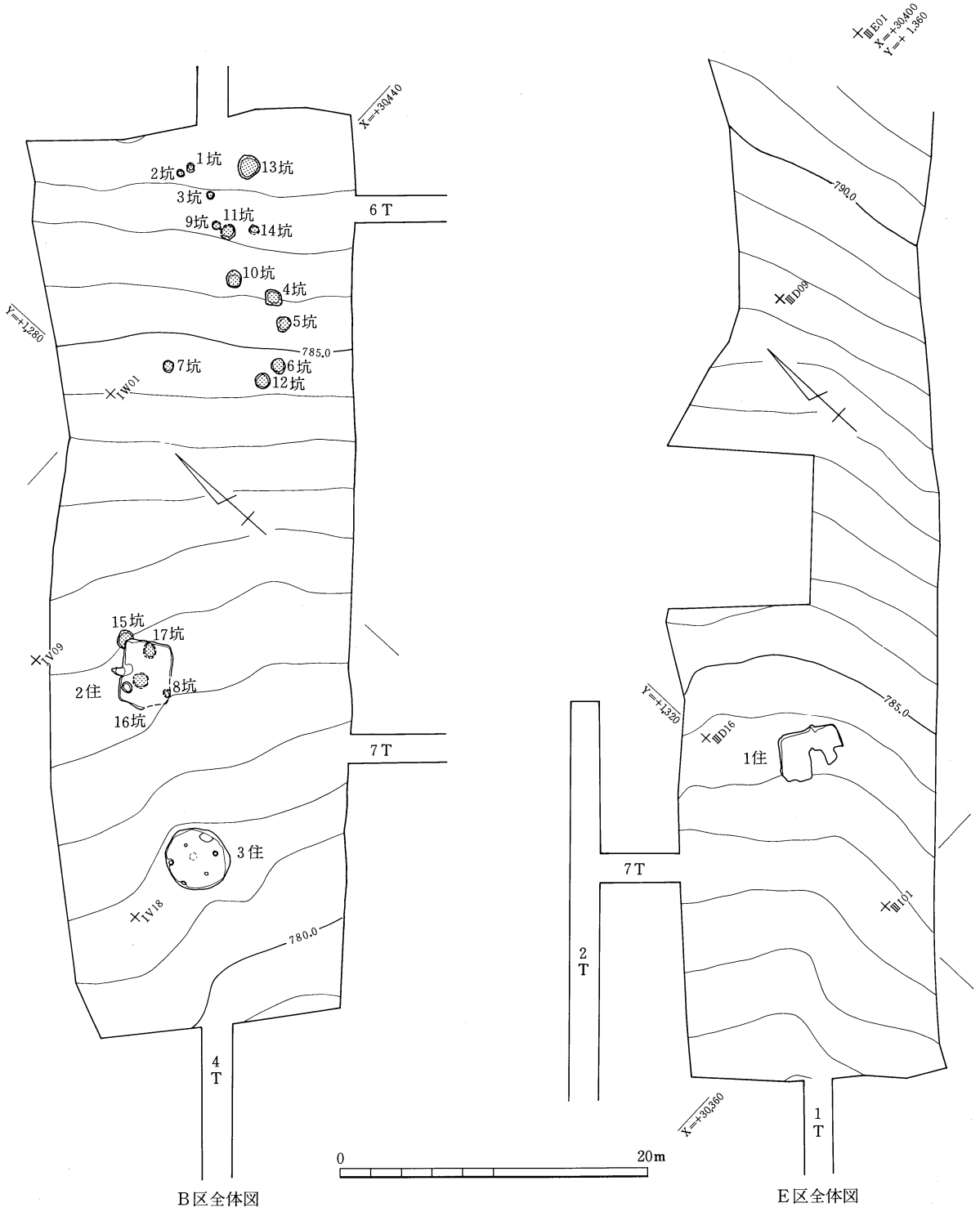


図3　B・E区遺構配置

(1)　縄文時代の遺構と遺物

ア　住居址

３号住居址（図４～６、PL96・98・102）

Ｂ区南端、ＩＶ―13・18に位置する。小規模な谷状地形の南東に傾斜している斜面に築かれIIＤ層とIII層上面で検出した。平面形は円形を呈し、規模は南北4.1ｍ×東西3.6ｍをはかる。床面積は11.2 m²である。壁はほぼ垂直に近い角度で掘り込まれている。

床面は掘り込んだIII面をそのまま床とし、平坦だが北西付近が若干高く、炉を中心にやや硬い床が広がっている。

炉は土器片囲炉で住居中央やや北寄りに位置する。深鉢形土器の大形破片を円形に埋めてつくられている。規模は上部径15～20 cm、底径10 cm、深さ12 cmほどである。焼土は炉の底にブロックあるいは粒状にみられた。掘り方は、直径50 cm、深さ15 cm程の不整円形である。

ピットは、やや西寄りに楕円形状に配されて12個検出され、深さ・形状から９個（P1～9）を柱穴と判断した。しかし、P10・11はP2・３に隣接していることから補修により建て替えられた可能性がある。これら主柱穴は床面より15～25 cmの深さがありP1・９は径40 cm、その他は径20～30 cm程度である。P12は、壁際にゆるやかに掘り込まれている。

覆土は２層に分かれる。堆積状況は１層が住居内をほとんど埋めており壁際には２層がわずかみられる。１層はローム粒子がやや多く混入しているがIIＤ層と比べても大差はない。２層はIIIブロックが多くみられ壁の崩れと考えられる。以上から住居廃棄後自然に埋没したと思われる。

遺物　土器は炉に使用された土器以外床から出土したものはわずかで、大半が覆土中から出土した。出土量はわずかで小片であった。１は炉体に用いられていたもの。口径推定40 cmと大形の深鉢形土器である。大きく外反する口縁下をタガ状に肥厚させ、三角形の印刻を鋸歯状にめぐらす。器面には異種の縄を結束

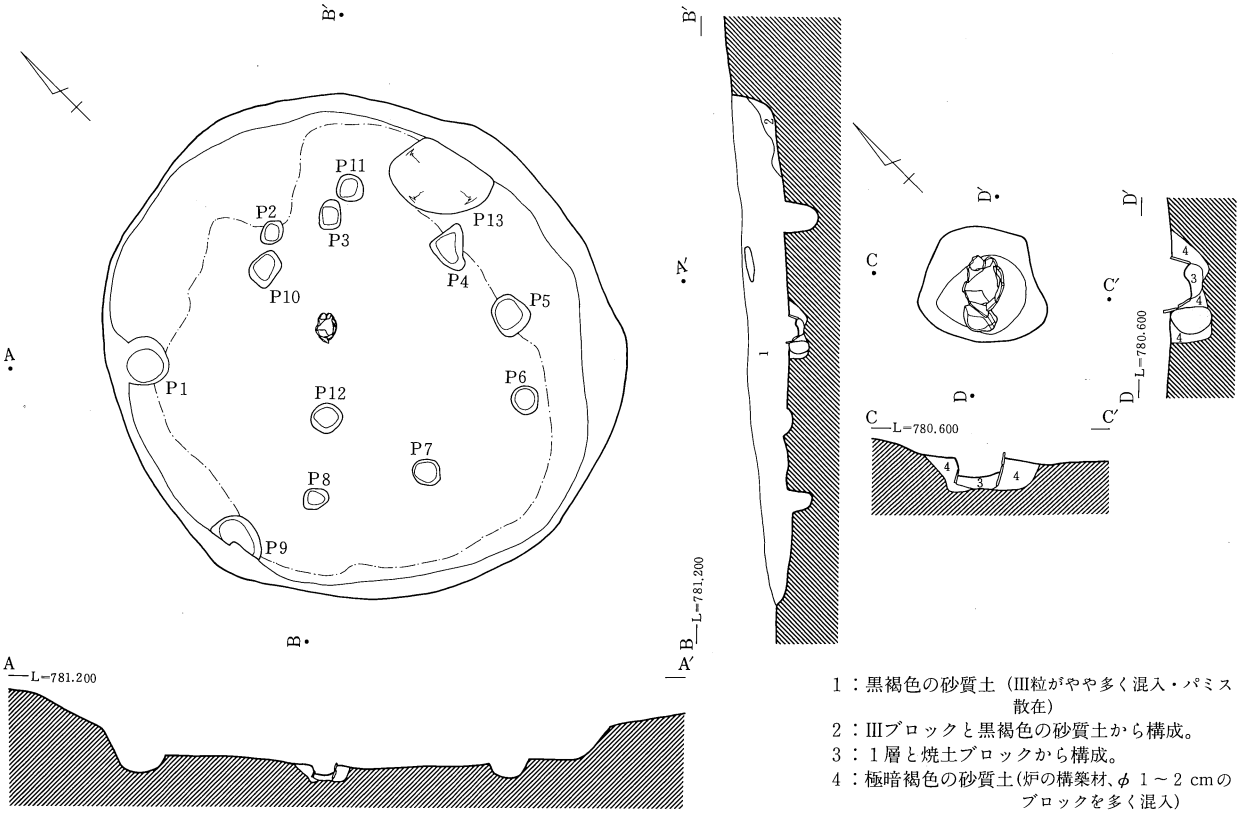


図４　３号住居址（１）

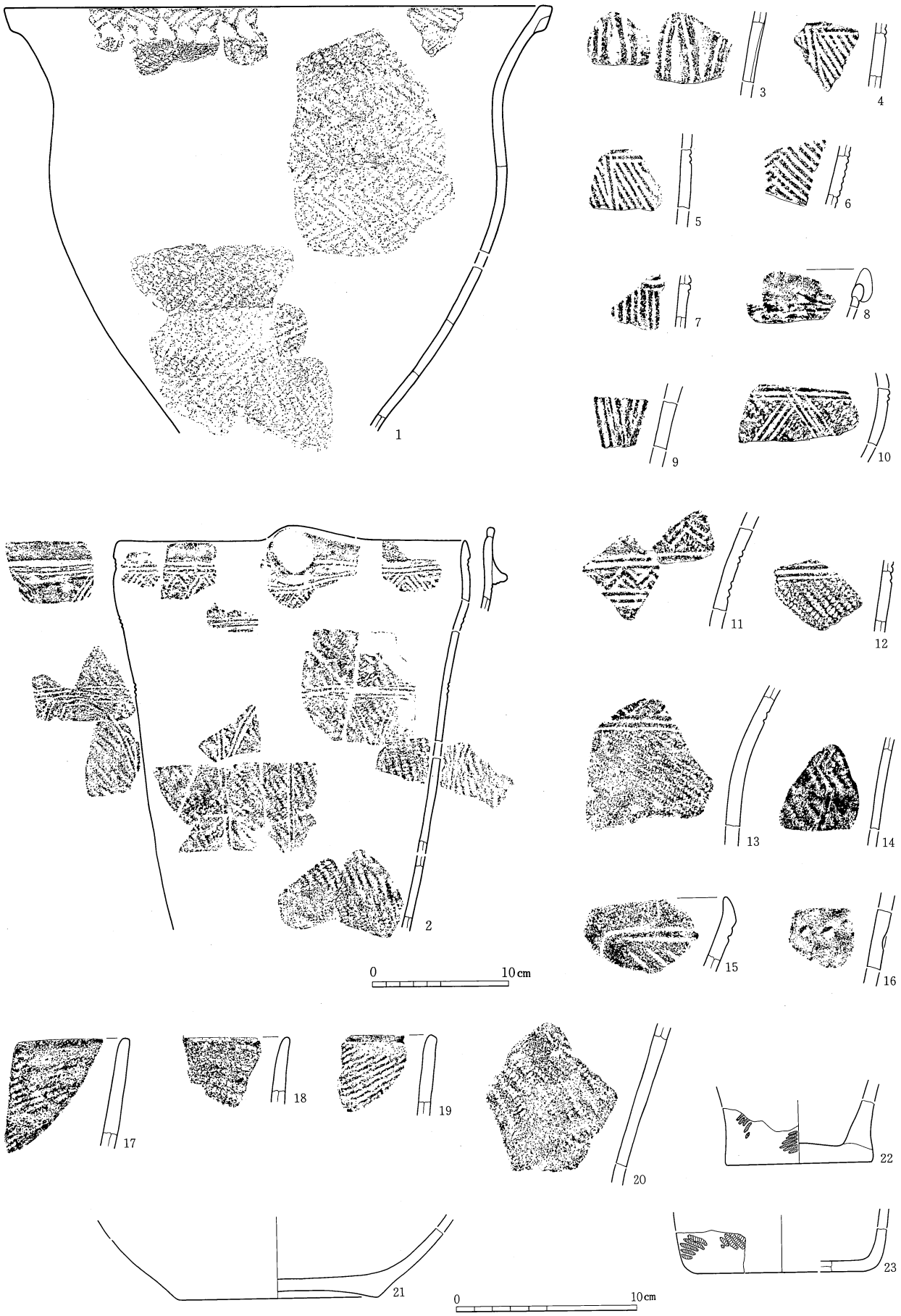


図5　3号住居址（2）

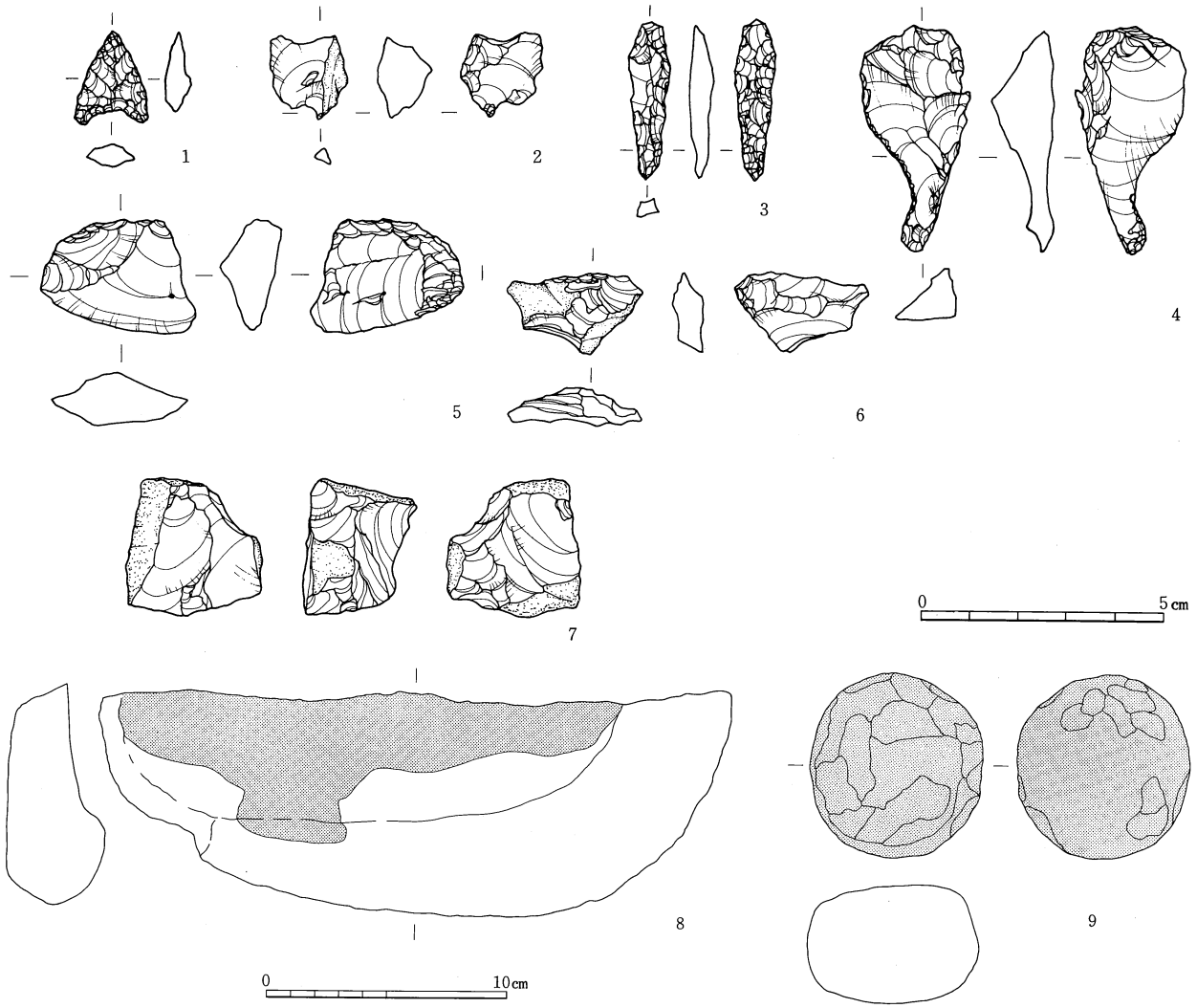


図６　３号住居址（３）

した原体による羽状菱形構成の縄文が施される。胎土に砂粒・雲母・石英を多く含む。火熱を受けたためか著しく脆弱である。２は覆土中より出土した土器片、破片から器形を復元した。口径は推定25 cm 余りをはかる。口縁下にゆるやかなふくらみをもち、若干のくびれ部をへて直線的に底部へ移行するものと考えられる。文様は半截竹管状の工具により器形の変換部に即して、口縁部・頸部・胴部の三帯に横位分割される。口縁部は断面三角状にわずかに把厚する口縁下を無文帯としてさらに分帯し、下段には鋸歯状のモチーフが描かれる。頸部から胴部にかけては縄文を地文とし、胴部には「Y」字状の縦位懸垂文が施される。器厚５ mm 前後と薄手の土器であり、胎土に砂粒・褐色粒子などを含む。３は半截竹管状工具により対向する弧状文を描き、その口縁および胴部破片。10は縄文を地文とする。11～14は縄文を地文として、半截竹管状工具により横帯する山形波状文などを描くもの。15は胎土に雲母・石英などを多く含む。17～19は縄文施文のみの土器。１・３は前期末の、15を除く他の土器は中期初頭前半の土器であろう。15は中期初頭後半に置かれる。

石器は石鏃（1）、石錐（2・3）、スクレイパー（4）、ピエス・エスキーユ（5・6）、石皿（8）、磨石（9）が覆土中より出土した。また、７点の石核が併せて出土したことが特記される。８は安山岩、９は輝緑岩製である。それ以外は黒曜石製である。

１は無茎凹基鏃で、やや厚みを有すもののていねいな調整が施されている。特に先端部に仕上げ痕が認められ、尖鋭化の意図がうかがえる。２・３は、素材の尖端部を利用したつまみを有するものと、全面調

整の棒状のものとである。ともに磨耗などの使用痕は認められない。4については3機能を推察できる。それは、鈍角的な内湾状縁辺部・鉤爪状の末端部・断面三角形の3部位より推察できる機能であり、縁辺部に連続する微細な剥離痕は使用時のものと考える。5は表裏ともにネガティブな剥離面で構成され、連続する階段状剥離痕とツブレのような剥離痕が集中する、いわば“面一点”という刃部構成である。6は欠損したピエス・エスキーユである。

北壁寄りの覆土中より、5点の石核が集中して検出された。その形状や夾雑物を含むことを考慮すると、すでにその用途を喪失し廃棄された一群であろう。

イ　土坑（図7～12、PL97・99・102）

B区北東2/3の範囲に2グループに別れて検出された(図3)。時期的に前期と中期に大別されることから、以下時期を追って記す。

15号土坑（図7・図10—24、PL97）

ⅠV—09グリッドローム層上面において南側3分の1を2号住居址北コーナーに切られて、検出した。規模は約110 cm、深さ45 cmの円形を呈する。底面は平坦である。覆土は単層で黒褐色の砂質土覆土で、3～5 cmの礫を含む。長さ60 cmをはじめとする大形の礫と縄文土器が出土した。

遺物　24は胴上半が大きくラッパ状に開く深鉢形土器。RL単節縄文を地文として、歯数5～6条の櫛歯状工具による集合平行沈線文を一定の間隔をあけながら帯状に多段施文する。胴下半部には斜位および円弧状のモチーフも組み合わされる。前期後葉・諸磯b式に比定される。

17号土坑（図7・図11—27）

ⅠV—09グリッドにおいて2号住居址の床下から検出した。15号土坑の南側に近接する。規模は約90×100 cm、深さ14 cmの円形を呈する。底面は平坦で地山の礫が露出している。覆土は単層で8号土坑に類似する。

遺物　27は24と同類の胴部破片である。

1号土坑（図7・図10—25・11—28、PL97）

ⅠR—22グリッドにおいてⅡD層上面で検出した。北東ブロックの北東端に位置する。規模は55～61 cm、深さ35 cmの不整円形を呈する。底面はほぼ平坦、南西方向へやや低くなっている。覆土は単層で黒褐色で淘汰の良いしまった土である。

遺物　25は最大径40 cm以上をはかる大形の深鉢形土器。横帯する隆帯をはさんで上部には「T」字状の沈線文が、下部には縦位・横位の多条平行沈線文と連続刺突文などが施される。28を含め、中期初頭後半期の土器である。石器は剥片（黒曜石）が2点出土している。ともに角礫を母材としている。

2号土坑（図7・図11—29～32、PL97）

ⅠR—22グリッドにおいてⅡD層上面で検出した。1号土坑の西50 cmに位置する。規模は46～48 cm、深さ24 cmの円形を呈する。底面はほぼ平坦である。底より10 cmほど浮いて扁平な石が出土した。覆土は単層で1号土坑に類似する。

遺物　29・31は平線の口縁部破片。口縁下に2条の沈線をめぐらし、以下斜位枕線文を充塡する。30・32は同類の頸部および胴部破片。これらは中期初頭後半期に位置づけられる。

３号土坑（図７・図11―33、PL99）

ＩＲ―22グリッドにおいてⅡＤ層上面で検出した。２・９・１号土坑の中央に位置する。規模は48～52 cm、深さ22 cm の円形を呈する。底面は平坦である。覆土は単層で１・２号土坑に類似する。

遺物　33は内湾しながら外傾して開く口縁部破片。粘土紐を渦巻状に貼り付けた文様が付加される。横位にめぐる平行沈線文間を斜位・縦位の短沈線文で埋める。中期初頭後半期の土器である。その他黒曜石の剥片２点・石核１点出土している。後者は３ cm ほどの方形角礫を母材としている。

４号土坑（図７・図11―34・35、PL99）

ＩＷ―02グリッドにおいてⅡＢ層上面で検出した。５・10号土坑の間に位置する。規模は110 cm～126 cm、深さ24 cm の隅丸方形を呈する。底面は平坦である。覆土は単層で黒色の砂質土でしまりが良く、ローム粒を混入する。

遺物　34はめぐる沈線と短沈線とによりモチーフが構成されるもの。35は横位の平行沈線と連続刺突文が施されるものであり、くびれ部には隆帯をめぐらす。中期初頭後半期の土器である。

５号土坑（図８）

ＩＷ―02グリッドにおいてⅡＢ層上面で検出した。４・６号土坑の間に位置する。規模は約97 cm 前後で、深さ30 cm の方形を呈する。底面は平坦であるが、壁・底には地山の巨礫が露頭している。覆土は単層で黒褐色の砂質土でしまりが良く、Ⅲ粒を混入する。

６号土坑（図８・図12―10、PL102）

ＩＷ―02グリッドにおいてⅡＢ層上面で検出した。５・12号土坑の間に位置する。規模は88×102 cm、深さ40 cm の円形を呈する。主軸はＮ－40°－Ｅである。底面は多少凸凹があるものの平坦である。覆土は単層で黒褐色の砂質土でしまりが弱く、Ⅲ粒は下部でやや多くなる。

遺物　石錐および剥片であるが、10はつまみを有する石錐である。バルブ部の厚みを生かして角錐状刃部を作出している。つまみ部の側辺に鈍角的刃部が認められる。他剥片（黒曜石）が１点出土している。

７号土坑（図８）

ＩＷ―01グリッドにおいてⅢ層上面で検出した。北東ブロックの南西に単独で所在する。規模は72～76 cm、深さ13 cm の円形を呈する。底面は平坦である。覆土は3号土坑に類似する。

８号土坑（図７）

ＩＶ―09グリッドにおいて２号住居址の床下から検出した。南西ブロック南端に位置する。16号土坑南東に近接する。規模は40×50 cm、深さ14 cm の楕円形状の円形を呈する。主軸はＮ―40°―Ｅである。底面は平坦である。覆土は単層で黒褐色の砂質土でしまりがよく、Ⅲ粒を混入するが淘汰はよい。

９号土坑（図８・図11―26、PL97）

ＩＲ―22グリッドにおいてⅡＤ層上面で検出した。11号土坑西に近接している。規模は約56 cm 前後で、深さ25 cm の円形を呈する。底面は平坦で、東側へわずかに低くなっている。覆土は単層で黒褐色の砂質土で粘性があり、Ⅲ粒をわずかに混入する（3号土坑に類似）。

遺物　26は口径推定50 cm をはかる大形の深鉢形土器。口縁に２箇１対の山形突起がつく。頸部をめぐる隆

帯により口縁部文様帯とを区画・分割し、前者はさらに半弧状の隆帯区画が施される。文様は縄文を地文として隆帯文に沿うように重区画文が施されるとともに、三又状の抉り文や「コ」の字状の交互刺突文が加えられる。中期初頭後半期に位置づけられる。

10号土坑（図８・図11―36～38、PL99）

ＩＷ―02グリッドにおいてⅡＤ層上面で検出した。4号土坑北80 cm に位置する。規模は110～115 cm、深さ20 cm の円形を呈する。底面は平坦である。覆土は単層で黒褐色の砂質土でしまりは弱い。

遺物　36は「く」の字状をなす頸部破片。38は結節縄文を地文とするもので、平行沈線文が底部付近まで垂下する。中期初頭後半の土器群である。

11号土坑（図８・図11―39～41、PL99）

ＩＲ―22グリッドにおいてⅡＤ層上面で検出した。９・14号土坑の間に位置する。規模は92×102 cm、深さ24 cm の円形を呈する。底面は丸く東側はやや深い。覆土は単層で９号土坑に類似する。

遺物　39は横位区画する２条１組の平行沈線間を斜位および縦位の短沈線文で埋める。40には平行沈線文とともに、「Ｙ」字状の抉り文が加えられる。41は隆帯に沿って角押状の連続押し引き文が施されるもの。39・40は中期初頭に、41は中期前葉の古い段階に位置づけられよう。

12号土坑（図９・図12―11・12、PL102）

ＩＷ―02グリッドにおいてⅡＤ層上面で検出した。北東ブロックの南西端に位置する。規模は約100 cm、深さ25 cm の円形を呈する。底面は北東部が深くなっている。覆土は単層で５号土坑に類似する。

遺物　黒曜石製のつまみを有する石錐 (11) とスクレイパー (12)、10～25 cm 位の礫が5個出土している。11は素材の尖端部を利用する。

13号土坑（図９・図11―42～45・12―13・46～48、PL97）

ＩＲ―23グリッドにおいてⅡＤ層上面で検出した。北東ブロック北の東端に位置する。規模は140×154 cm、深さ26 cm の円形を呈する。底面は平坦である。覆土は単層で3号土坑に類似する。

遺物　42は大きく外傾する口縁部破片。円弧状の隆帯文とそれに沿った沈線文とによって文様が描かれる。45は底部付近の破片であるが、垂下する隆帯をはさんで弧状沈線文や三又状の抉り文が施される。48には沈線文とともに、「コ」の字状をなす交互刺突文が縦位・横位に加えられる。すべて中期初頭後半期の土器である。石器は黒曜石製で、板状礫を素材としたつまみを有する石錐 (13) と剝片が２点出土している。

14号土坑（図９・図12―49～54、PL99）

ＩＲ―22グリッドにおいてⅡＤ層上面で検出した。11号土坑南東に近接する。規模は56×66 cm、深さ24 cm の楕円形状の円形を呈するが、検出に困難をきたし上端の一部は推定である。底面は平坦で南東に傾斜している。覆土は単層で黒褐色の砂質土で粘性があり、３ cm の炭化物が点在する。遺物は底より少し浮いて20cm 位の石が２個重なって出土している。

遺物　49は頸部に「矢羽」状のキザミが加えられた隆帯をめぐらすもので、口縁部にも隆帯が垂下する。51・54には斜格子状の沈線文が施される。中期初頭後半期に位置づけられる。その他剝片が２点出土している。

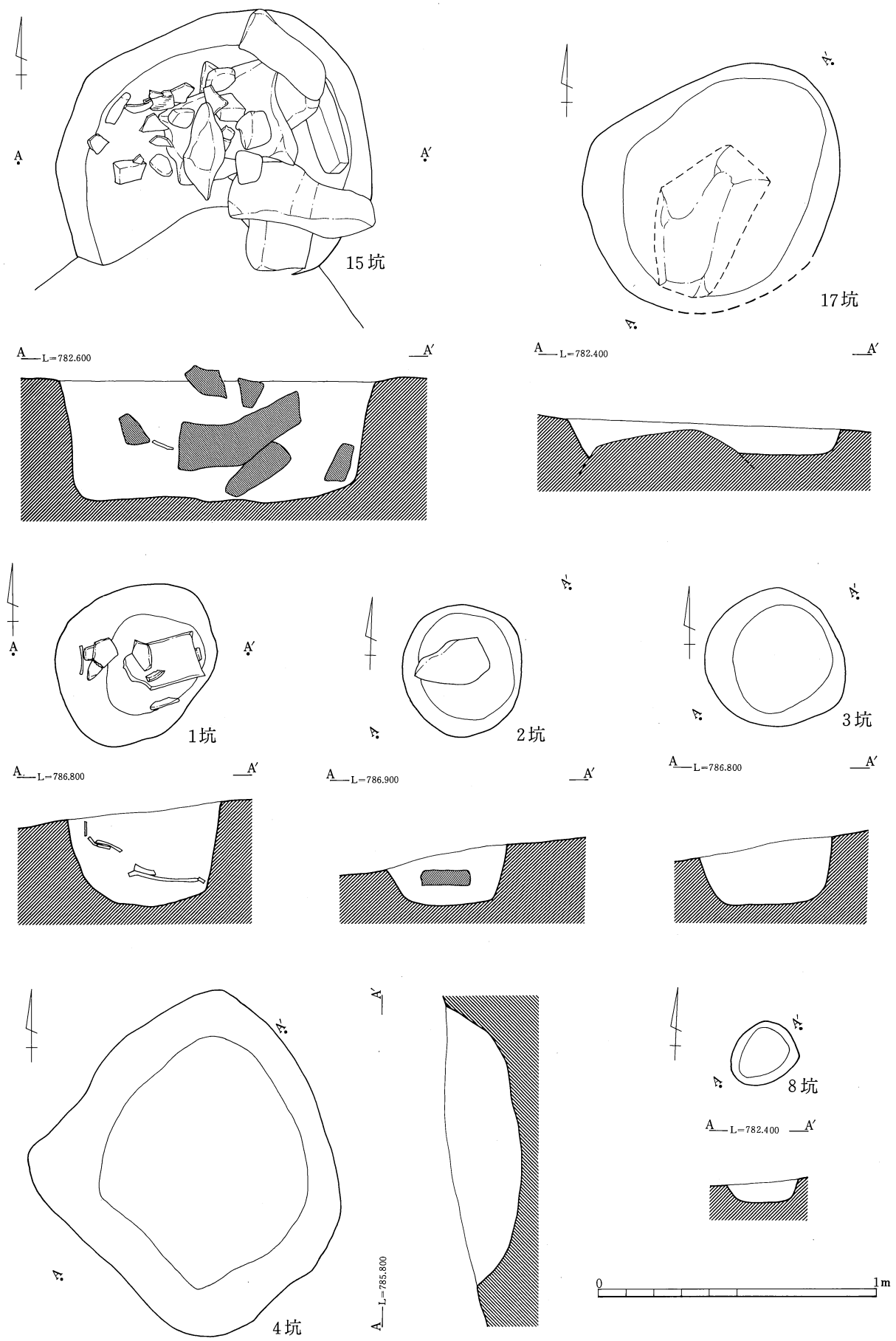

15坑
A
A′
L=782.600
17坑
L=782.400
1坑
L=786.800
2坑
L=786.900
3坑
L=786.800
4坑
L=785.800
8坑
L=782.400
0
1m

図７　土坑（１）

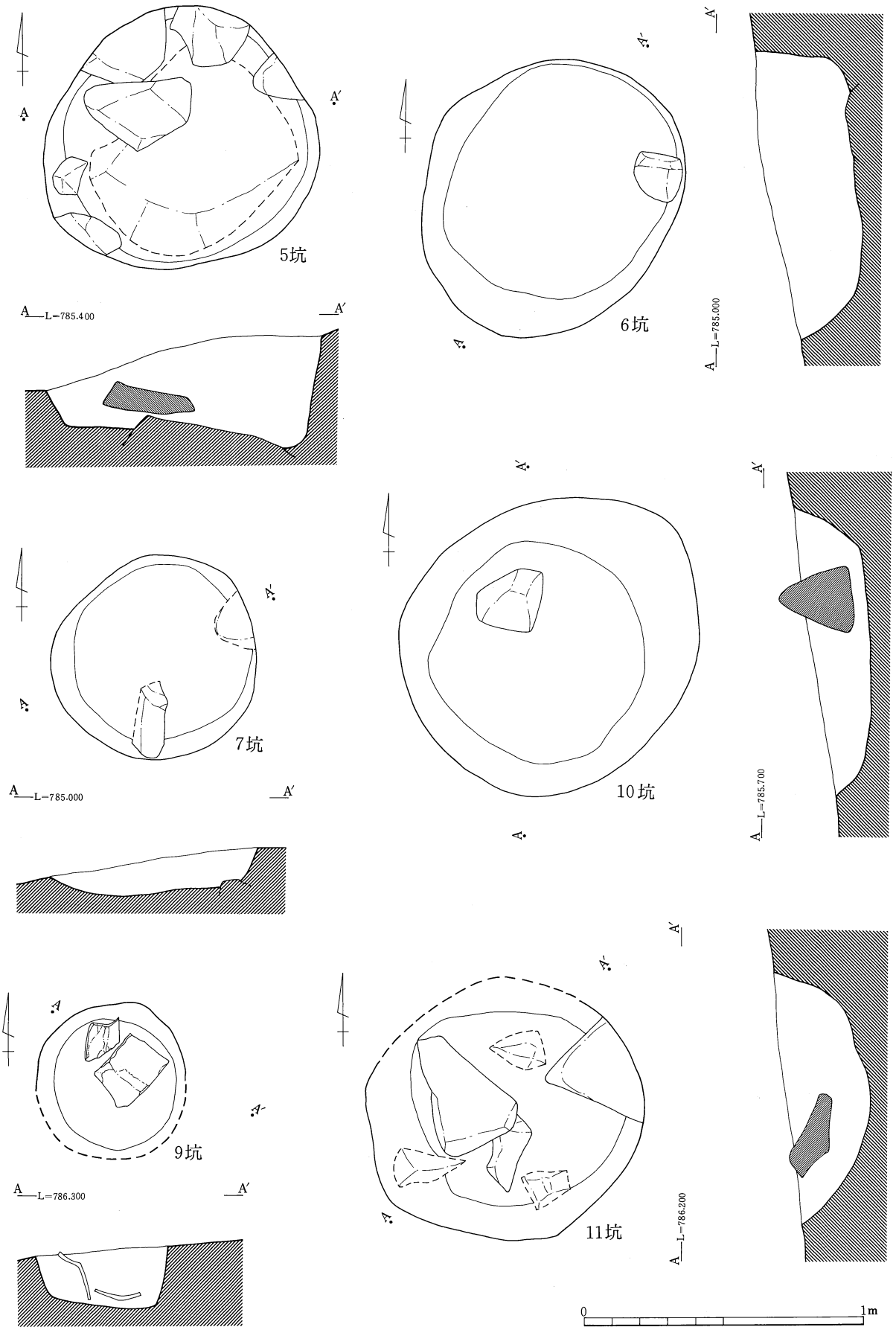

5坑
A
A′
L=785.400
6坑
L=785.000
7坑
L=785.000
10坑
L=785.700
9坑
L=786.300
11坑
L=786.200
0
1m

図8　土坑（2）

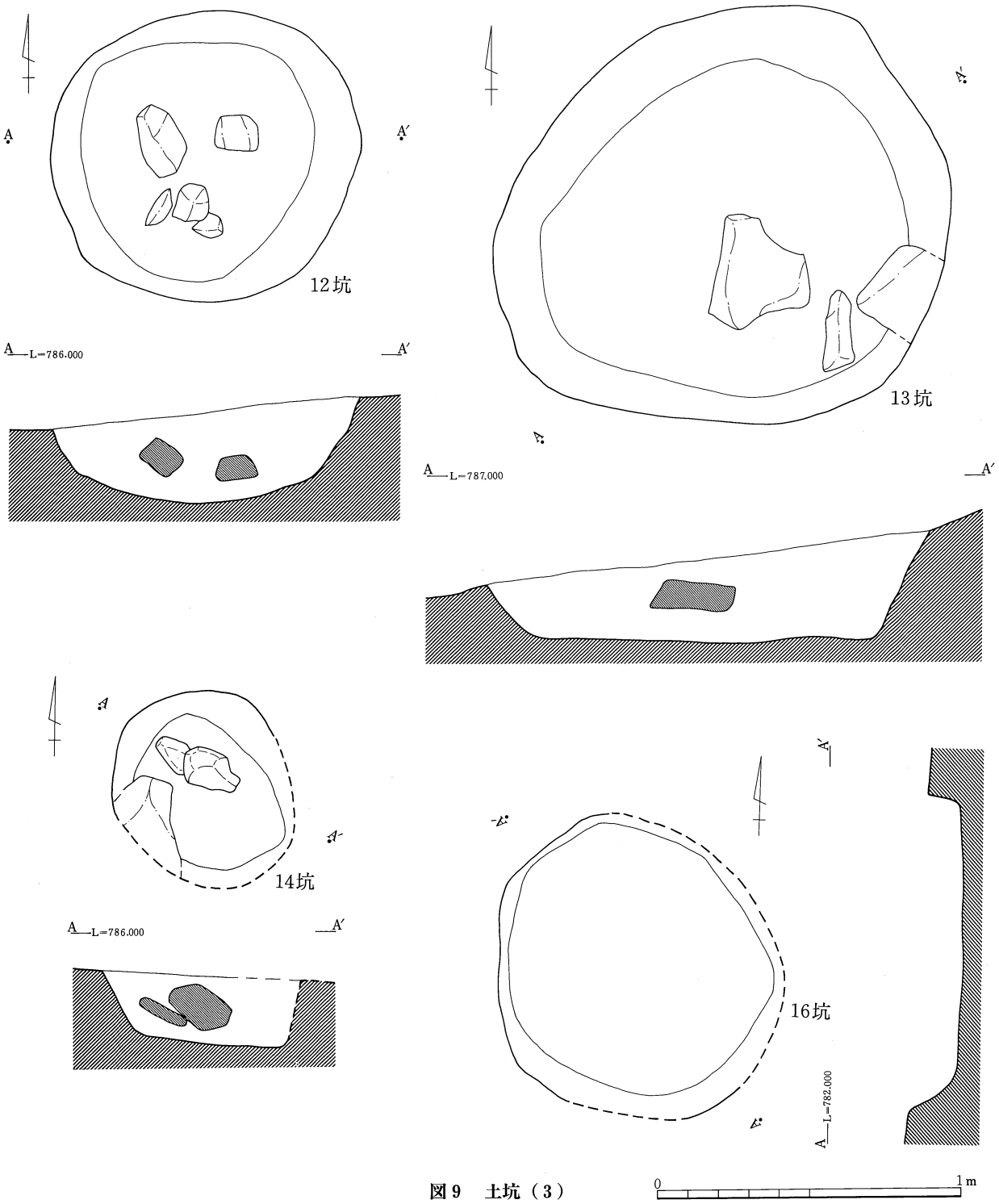
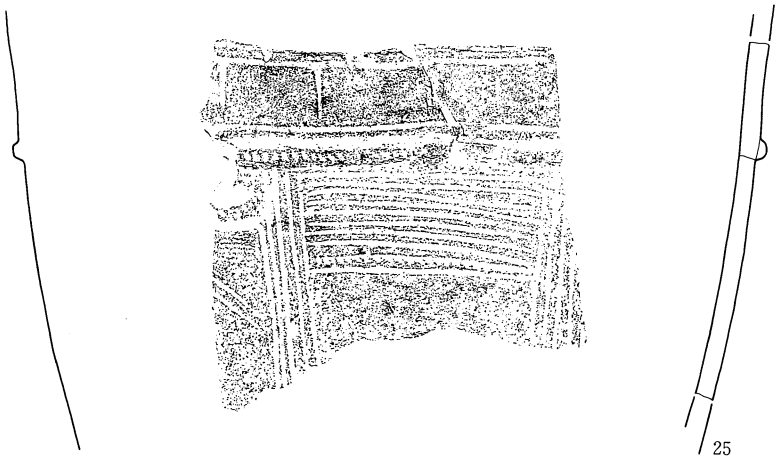


図９　土坑（３）

16号土坑（図９・図12―55、PL100）

ＩＶ―09グリッドにおいて２号住居址の床下から検出した。17号土坑の西に位置する。規模は約100 cm前後で、深さ14 cmの円形を呈する。底面は平坦である。覆土は単層で8号土坑に類似する。

遺物　55は縄文のみ施文される深鉢形土器。口縁はほぼ直立し、口端は尖頭状に細まる。縄文原体はＬＲ。時期は特定しえないが、胎土・調整などの特徴から中期初頭前半期の土器である可能性が高い。



0　10cm

図10　土坑出土遺物（1）

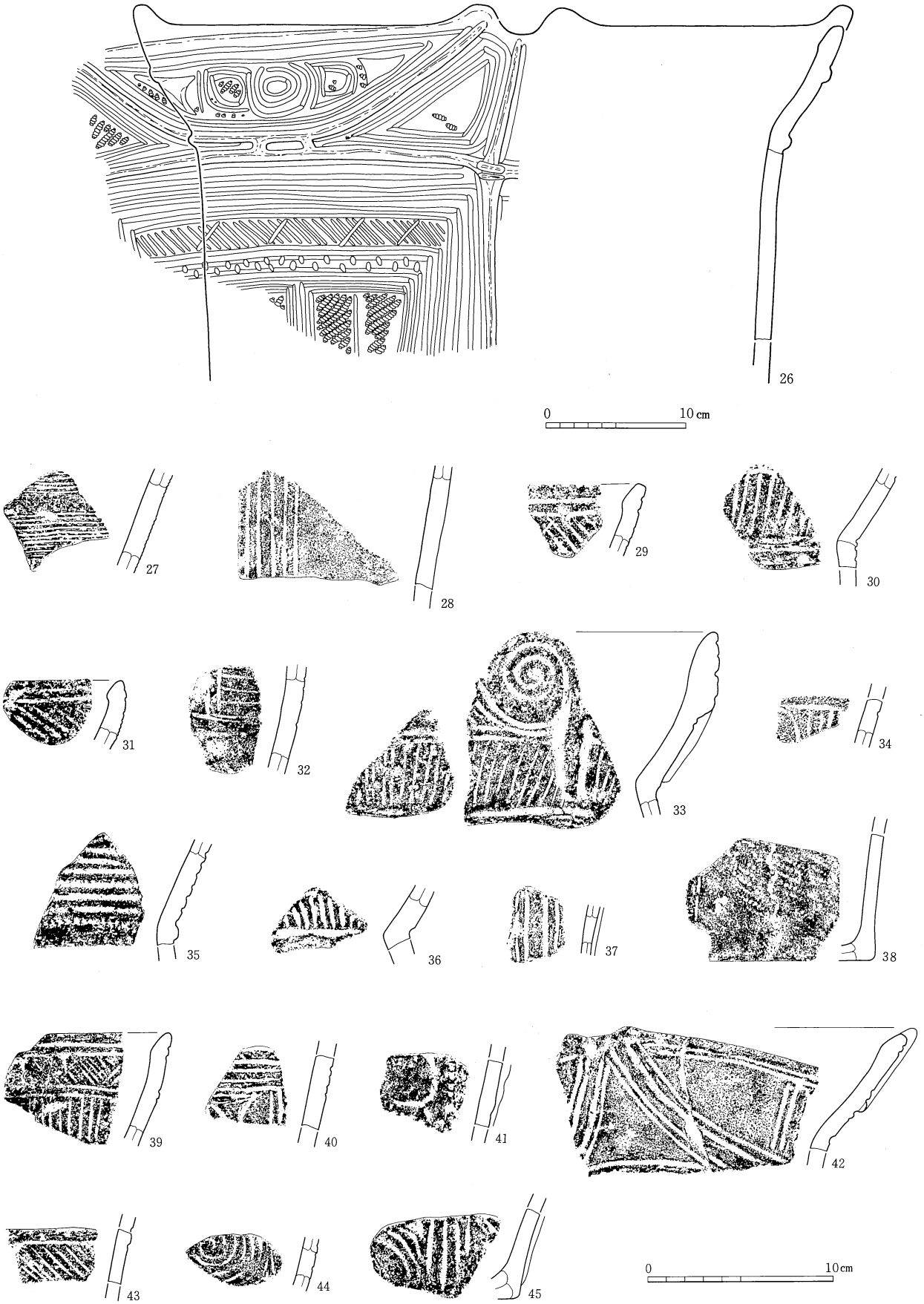

26
0
10 cm
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
0
10cm

図11　土坑出土遺物（２）

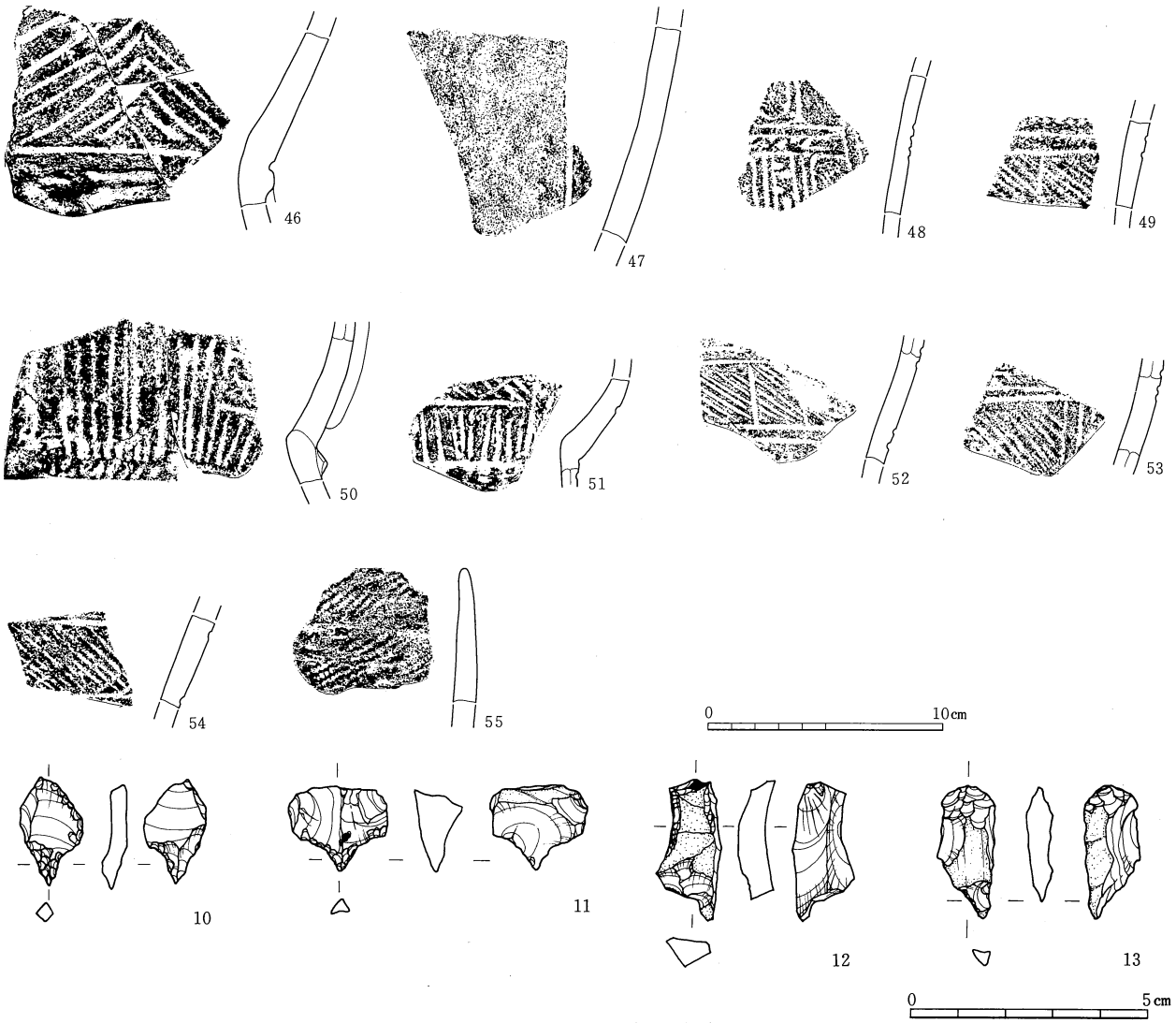


図12　土坑出土遺物（3）

ウ　遺構外出土遺物

1）土器（図13～15—56～168、PL100・101）

前期後葉の土器（図13—56～74）

56は縄文を地文として細かい粘土紐を貼り付け、その浮線文上にヘラ状工具による鋭いキザミを加えるもの。57・58は縄文を地文として、櫛歯状工具による平行沈線文を帯状もしくは曲線状に施す。胎土に粗砂を多く含むものの、内面はていねいにナデつぶされて平滑に仕上げられている。

59は半截竹管による半隆起状沈線文を施し、さらに「ボタン」状の貼り付け文がつけられる。60は縄文を地文とする。61は縄文施文のみの深鉢形土器とみられるもの。口唇の一部に押圧によるキザミを加えている。63～64は平行する半隆起状沈線文により「レンズ」状あるいは「矢羽」状のモチーフを構成する一群。74は口縁がラッパ形に開く深鉢形土器。やや雑然とした「矢羽」状モチーフが描かれている。内面はナデつけ調整が行われ、比較的なめらかに仕上げられている。胎土に粗砂・褐色粒子など含む。56～58は諸磯b式に、59～74はおおむね諸磯c式に比定されよう。

前期末葉の土器（図13—75～79）

75・76は三角印刻文が施される口縁部破片。77は竹管による刺突文帯がめぐる。78は抉り状の刺突文を密に施文する胴部破片。茶褐色を呈し胎土に粗砂を多く含む。79は重層する平行沈線文間に「C」字状の

連続爪形文を加えるもの。

中期初頭の土器（図13～16―80～139、PL100・101）

80～89は半截竹管状の工具による平行沈線文により文様が施されるもの。80・81は口縁部破片。81は断面三角形に肥厚した内面にも施文がおよび、口端には爪形文がめぐる。83は横位平行沈線により分帯された内部を斜行する短沈線文で埋め、さらに斜格子状にヘラ切りされる。86は横帯する沈線文をはさんで、矢羽状に短沈線を充塡する。90は竹管による円形刺突文が密接施文されるものであり、図示した１点のみ出土した。90～104は縄文を地文とする一群。92は内湾ぎみに立ち上がる口縁部破片。対をなす円弧状のモチーフが描かれ、下部は横位沈線文により区画される。93～97は横位にめぐる平行沈線により帯状に区画され、内部に山形波状文を施す。98～104は胴中位～下部にかけての破片とみられ、「Ｖ」字状ないし「Ｙ」字状の懸垂文などが施される。

105～139は隆帯文や棒状ないしヘラ状の工具による文様が施されるものであり、胎土に雲母や石英などを多く含むことを特徴とする。105は波状、106は渦巻状の隆帯がそれぞれ施される口縁部破片。108は隆帯によって円弧状のモチーフを描くと思われるもの。110～114は棒状およびヘラ状の工具によって横位平行沈線文や斜行する短沈線充塡文が施され、さらに113～114にはキザミのある隆帯が横位にめぐる。115は「コ」の字状をなす連続交互し突文と「Ｙ」字状の抉り文が施文される。123～125～127は断面カマボコ状の隆帯文が垂下する。

129～135・139は縄文を地文する。129は４単位とみられる大きな山形状口縁をなす深鉢形土器。頂部より菱形文を伴う隆帯を垂下させ、さらに胴部にも隆帯による「Ｙ」字状の懸垂文を貼付する。口縁部文様は重区画状をなし、胴部文様も含め随所に三叉状の抉りが付加される。地文は結節縄文ＲＬ。131・133・134は縄文施文のみの深鉢形土器。136は円弧状隆帯文が重三角文化したものと考えられる。80～104は中期初頭前半に、105～139は同後半にそれぞれ位置づけられよう。

中期前葉の土器（図15―140～159、PL101）

140は角押文が施されるもの。141～155は斜行沈線文や波状沈線文を特徴とするもの。141～145には横位楕円区画文がみとめられる。147には玉抱き三叉文が施される。胎土に砂粒・石英・長石などをやや多く含むものが多い。156は断面三角形に近い隆帯文とそれに沿う沈線文・押引き文とが施されるもので、胎土に粗砂と石英粗粒を多く含む。

140は狢沢式に、141～155は斜行沈線文系の土器、156は阿玉台系の土器にそれぞれ比定される。

晩期の土器（図15―160・161、PL101）

160は平縁の口縁部破片。ほぼ垂直に立ち上がり、内面口縁下に幅広の凹線文ををもつ。口唇から外面にかけては横方向のていねいなナデつぶしが加えられて平滑である。内面は横方向のナデつけ調整。明褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。160は径約10 cmをはかる底部破片であり、裏面に網代痕をとどめる。全体にていねいな器面調整が行われ、底面にもナデ調整が及ぶ。

その他の土器（図15―162～168、PL101）

162～168は同一個体。口縁端部を外側に肥厚して指頭状の押圧を加えたもので、口縁下から胴部にかけては半截竹管状工具による平行沈線を縦位に施文する。直立する口縁からゆるやかに内湾しつつ胴下半へ移行する深鉢形を呈すと考えられる。外面はケズリ調整が行われ砂粒の移動痕が顕著である。口唇から内面はていねいにナデつぶし、平滑に仕上げている。胎土に粗砂などを多く含むほか、微量の黒曜石が混入される。焼成は良好で硬く焼きしまる。

類例を知らず時期を特定しえない。中期初頭～前葉、もしくは後期中・後葉あたりの粗製的な土器とも考えられるが断じえない。

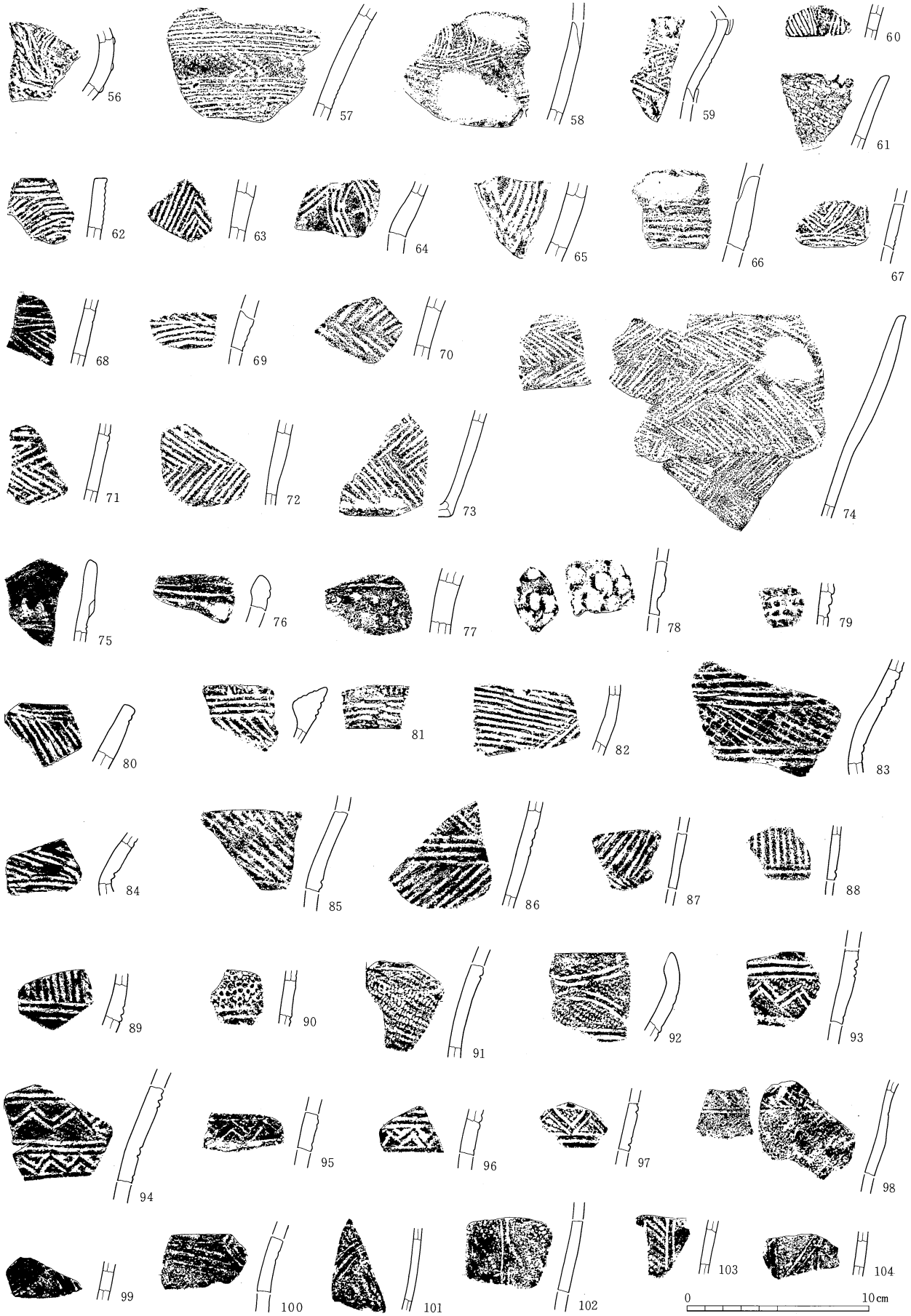


図13　遺構外出土遺物（1）

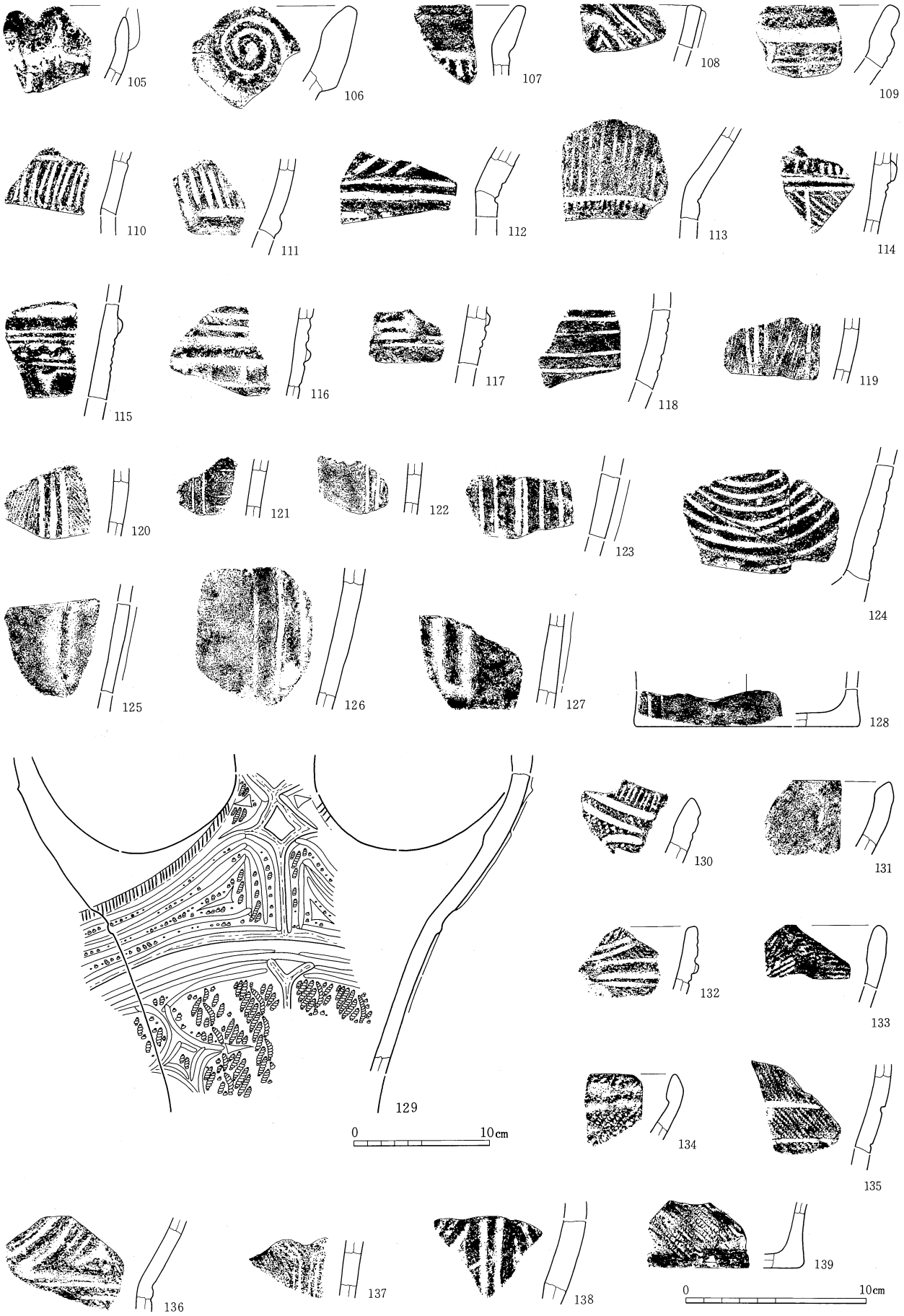


図14　遺構外出土遺物（２）

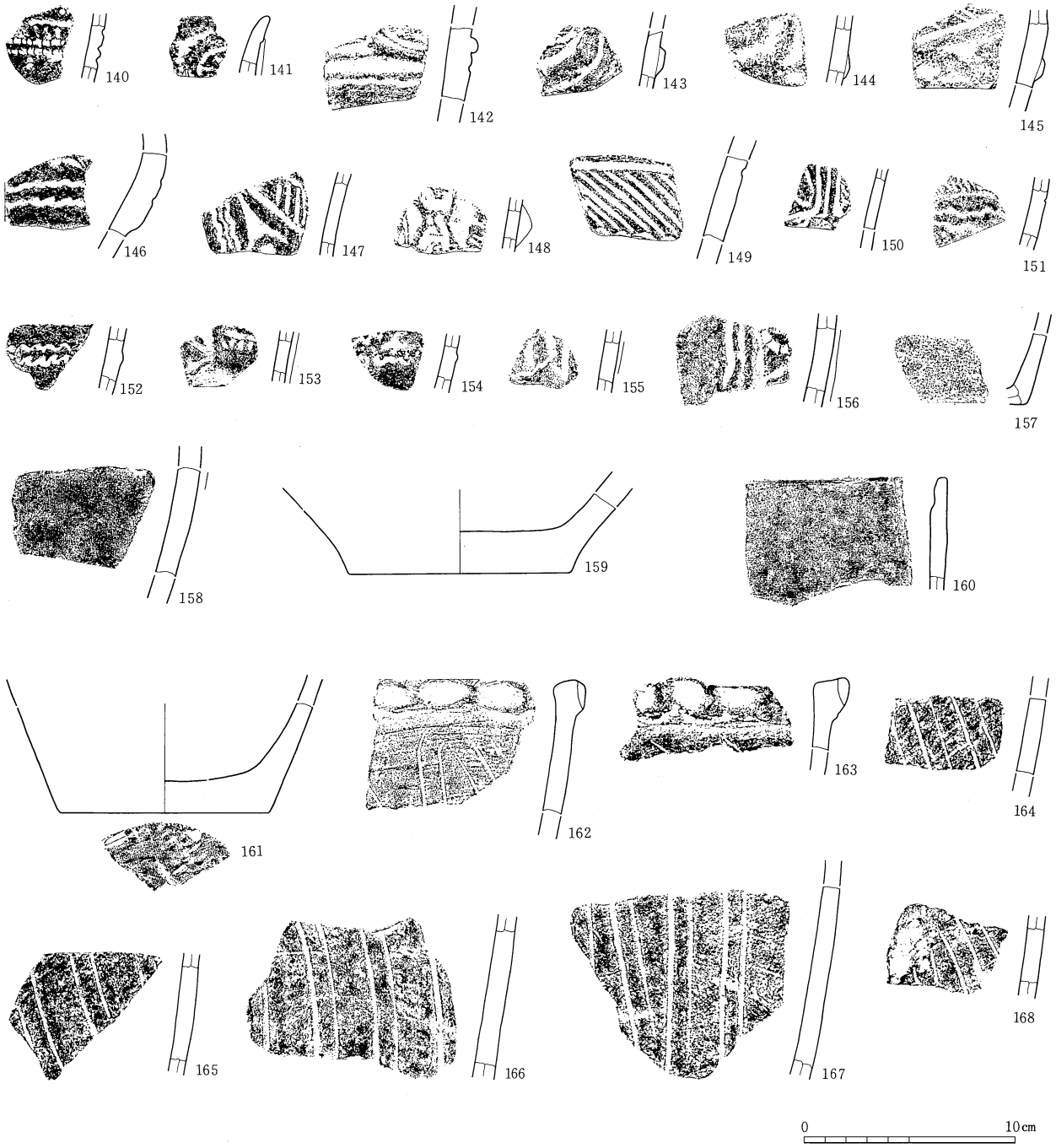


図15　遺構外出土遺物（3）

2）土製品（図16—69、PL101）

土製円板1点が出土した。169は径4 cmの略円形を呈し、周囲は摩耗が著しい。中期初頭後半の土器破片を用いている。重さは17.0gをはかる。

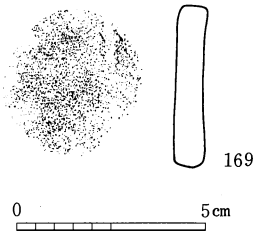


図16　遺構外出土遺物（4）

３）石器（図18―14～46、19―47～68、PL102）

石器はその７割弱が、谷中部の包含層中より出土した。平面的な分布状況を概観すると、15号土坑より３号住居址付近までひろがる谷中部に、石器はほぼ全体的・網羅的に分布するが、剥片類などはやや下方部に集中する傾向が認められた。また、中期初頭前半の土器が多く出土した土坑群付近では、石器や石片などの出土量はわずかである。出土数量を表１に示した。

石鏃（図18―14～26、PL102）

石鏃は、21が緻密な安山岩製のほかすべて黒曜石製である。形状はさまざまであるが、無茎凹基鏃(14～20)が８点と主であり、ほかに無茎平基鏃（21～24）４点、無茎凸基鏃（25、26）2点である。欠損は片脚とその他の部位がそれぞれ３点である。押圧剥離でていねいに仕上げられるもののほか、縁辺部に簡便な調整を施すだけのもの(20など)がある。素材面を良好に残すもののうち、22は表裏とも同一方向から打ち剥がされた剥片を素材とする。その主要剥離面のバルブの発達は弱く、密集するリングが認められる。またその左側辺部には急角度の剥離調整が施され、尖端部を作出している。23は欠損した無茎凹基鏃に調整を施した再加工品である。26は調整が粗雑でやや厚みがある。

石錐（図18―27～33、PL102）

石錐は、27が安山岩、29がチャート製のほかすべて黒曜石製である。つまみを有するもの（27～30、33）と棒状のもの(31、32)がある。33は２個の錐部を有し、側縁部に微細な使用痕が観察される。29は全周縁部に

表１　出土石器類・石片類一覧

器種／数量	石鏃	石錐	石匙	スクレ	ピエス	小剥離	打石斧	大剥片	磨石斧	磨石類	石皿等	多孔石	石製品	その他	剥片　点／g	石核　点／g	原石　点／g
遺構内(点)	1	5		2	2					1	1				14／168.2	8／107.3	
遺構外(点)	15	6		25		43	3								312／253.7	40／144.6	2／11.0
総重量（g）	17.2	24.3		175.7	45.9	57.4	240.7			430	1612				326／421.9	48／396.5	2／11.0

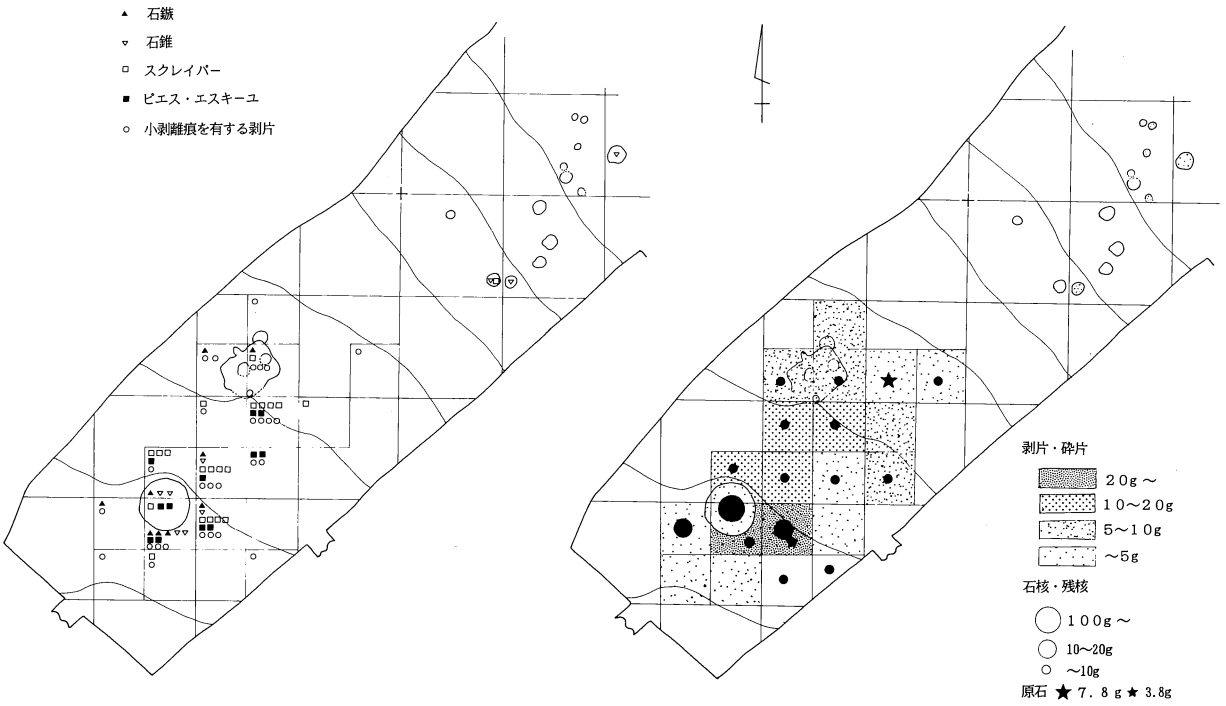


図17　出土石器類・その他の分布状況

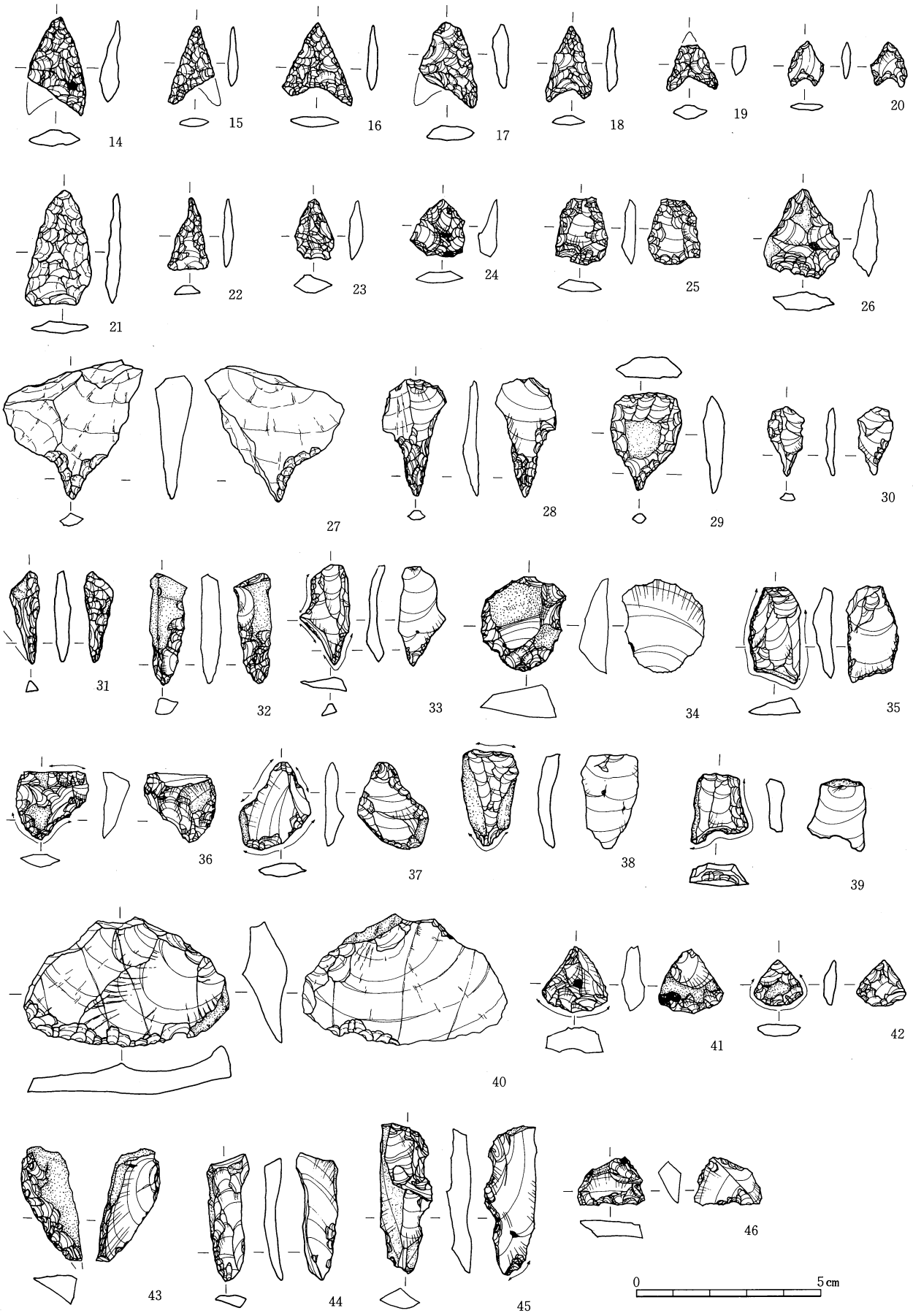


図18　遺構外出土遺物（5）

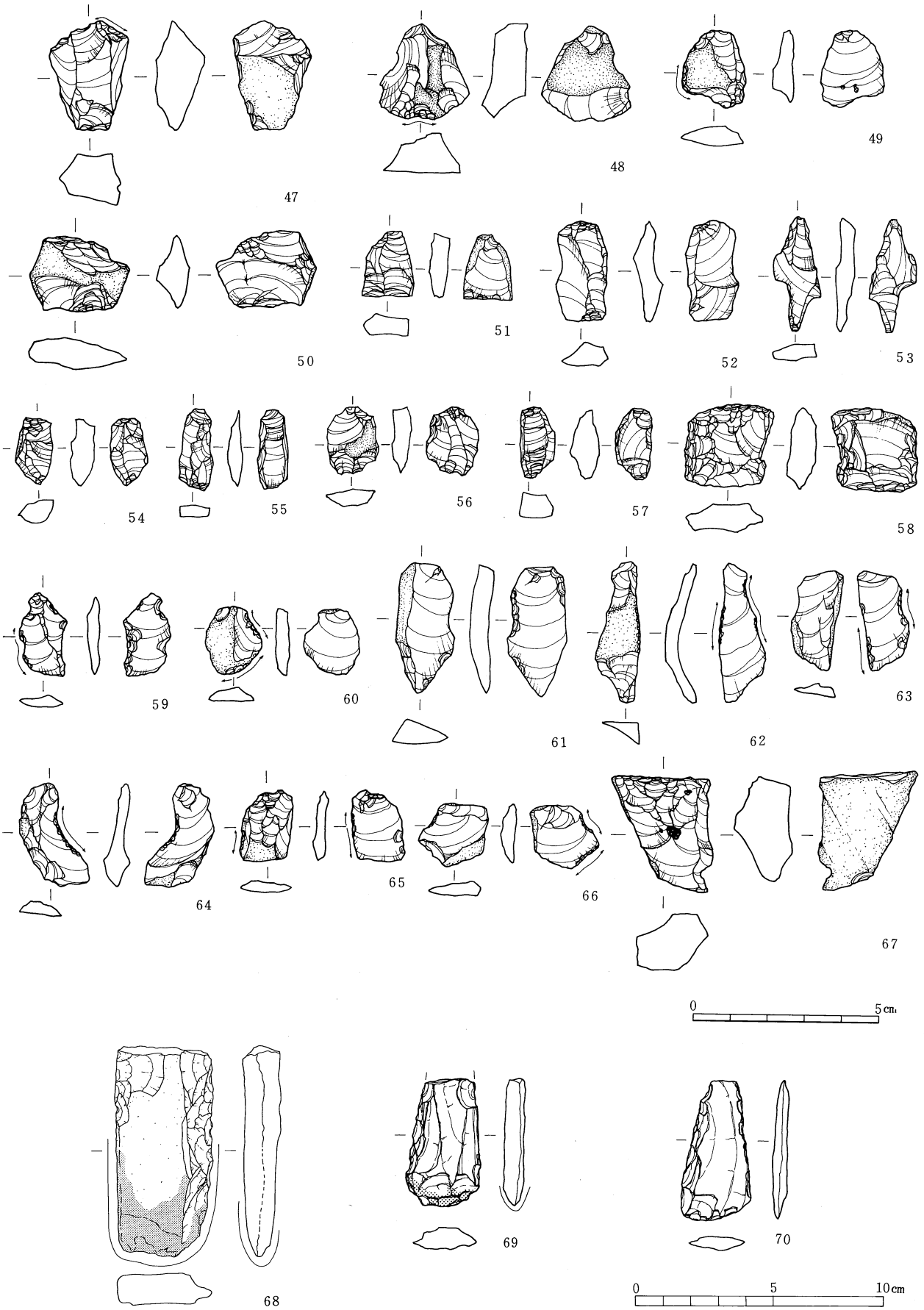


図19　遺構外出土遺物（６）

両面剥離調整が施される。32は縦長の板状礫を素材とし、３方向からの剥離調整により錐部を作出する。なお、板状の原材を直接素材とした石錐は、和田峠などの原産地の近隣遺跡での製作法のひとつとの指摘がある（高見1986）。31は剥離痕や割れ面の観察より、欠損した石鏃を転用したものと思われる。

スクレイパー（図18―34～46・19―47～49、PL102）

スクレイパーは、40がチャート製、安山岩製１点のほかはすべて黒曜石製である。石鏃などの定形的な石器用の素材を選択した後、その残余の剥片や残核がスクレイパーなどの剥片石器の素材として利用されたという指摘がある。つまり残余の素材を利用することにより、スクレイパーの形状がバラエティーに富むということになるのであろう。一方、その絶対量は極めて多く、我々に多面的・重複的な用途を提示する。換言すると、素材の形状にとらわれず、いかにして有効利用するかという「機能性をより重視した石器」として位置づけられようか。

素材縁辺部の性状と調整方法より、形態分類した。

Ⅰ－ａ類：素材縁辺部の性状を利用し、急角度な刃部を作出する。簡便な片面調整（35，44，45，47，49）。

Ⅰ－ｂ類：素材縁辺部の性状を利用し、急角度な刃部を作出する。簡便な両面調整（37，46）。

Ⅱ－ａ類：素材縁辺部より深く片面調整を施し、刃部を作出する（34，38，39，43，48）。

Ⅱ－ｂ類：素材縁辺部より深く両面調整を施し、刃部を作出する（36，40～42）。

全体の7割ほどに自然面が認められ、うち4点は表裏両面に有している。剥片や残核などさまざまな形状の素材を用いている。その刃部の形状も複合的で多岐にわたり、全周縁部に調整を施すものから、５mmほどの刃部を部分的に作出するものまである。主要剥離面側からの調整による片刃が主である。

34はほぼ全周縁部に剥離調整を施している。左側縁部は一段、右側縁部は二段の規則的な剥離痕により構成されているが、図の右上部のみ刃つぶしのようなツブレが認められる。scrapeを想定した際、第二指があたる部位でもある。35は微細な剥離が連続し、刃部の磨耗が顕著である。36は10mmほどの薄い板状礫を素材とする。38は打面を利用したハング状の刃部を有す。原材の稜を介在し、２方向の調整により横断面三角形の刃部も作出する。39は径８mmほどのノッチ状の刃部を有する。40はチャート製で、最大のものである。その主要剥離面剥離軸は石目に対して斜行し、バルブが発達している。41は小形な石鏃に類似するが、側辺部には調整が施されていない（打角上、調整は可能である）。43は柱状角礫のコーナーから、対角線状に打ち剥いでいる。その平坦なバルブ部に磨耗痕が認められる。規則的な剥離調整により、鋭角な外湾状片刃を作出する。45は表裏とも同一方向の剥離面で構成されている。47・48は小岩塊の性状を利用して、直角の刃部を作出する。特に48は板状角礫に対して、先行する剥離面を順次利用しつつ、反時計回りに打ち剥がされた残核を利用している。49は凸部に片面調整を施している。

ピエス・エスキーユ（図19―50～58、PL102）

ピエス・エスキーユは、すべて黒曜石製である。その形状はバラエティーに富む。使用痕により抽出される石器で、定形化されうるものではないという指摘がある（阿部1983）。表裏とも両極からの剥離面により規則的に構成されているもの（50，51）は5点のみで、先行する剥離面の軸が振れるもの（57，58など）が大部分である。自然面を有するものが8割を占め、50などは小礫を素材とする。

ピエス・エスキーユの認定にあたって、以下の点に留意した。

①両極打法の特徴を有する石片類を抽出した。その特徴として、打点下に縦長の剥離痕や砕けが認められ、打面は線的で薄い。バルブは扁平で、リングは密集した波状が多い。石器製作に見合う大きさ・形状の剥片と砕片を除く。本体より剥落した可能性のあるものを含む。前者は目的的で、

後者は意図されないものの可能性が高い。

②刃部の平面形が鋸歯状、側面形に鋭い突起が連続するものを除く。これらは擬似的なものとする。

③一辺に規則的な階段状剥離やツブレ状の痕跡が並列する小岩塊を除く。石核Ｇ類に属す。

形態分類は、栗毛坂遺跡群Ａ地区（第18節所収）に準じた。

Ｉ類：II類以外で、一対の刃部を有する（50，51，56）。

II類：縦長で、縦位一対の刃部を有する（52～55，57）。

III類：二対以上の複合的な刃部を有する（58）。

Ｉ類は8点（44%）、II類は9点（50%）、III類は1点（6%）。欠損により、一方の刃部を欠くものはない。前述した①に該当する石片は12点、うちその縁辺部に小剥離痕が連続するもの（65）が４点ある。51，54，55はすべてネガティブな面で構成されている。50はフリーフレイキングによる剥片を素材とする。表面の先行する剥離痕は貝殻状痕である。51の下端部は横方向に欠損しているが、新たに微細剥離が進行し、継続使用がうかがえる。52は剥片を素材とし、縁辺部に小剥離痕が認められる。55は内部に波状のヒビが入り、白濁したように見える。表面を構成する剥離面の剥離軸は45°前後の振れをもち、両側面は折れである。57は、角礫原材の自然面に打点部が位置する。原材と石器との形状は相似的で、断面形は紡錘形をなす。

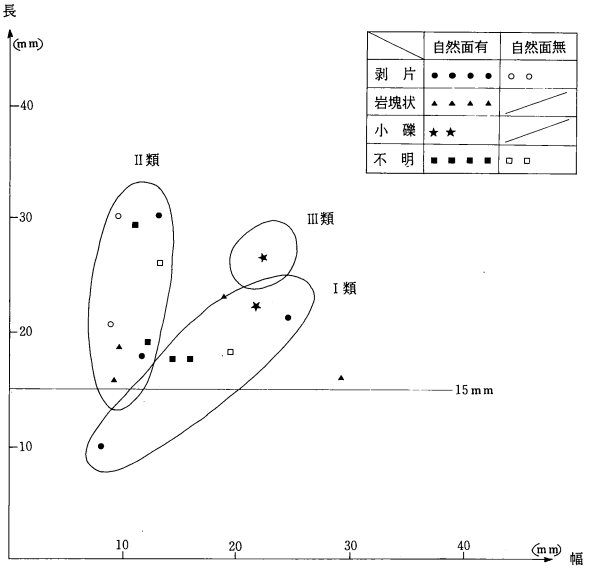


図20　ピエス・エスキーユの長幅相関および素材形状

小剥離痕を有する剥片（図19―59～66、PL102）

小剥離痕を有する剥片は、チャート製・安山岩製が１点ずつのほかすべて黒曜石製である。小剥離痕部を刃部ととらえ、使用痕のある剥片や二次加工のある剥片と称せられるものを一括した。素材の縁辺角と刃部角とを比較し、鋭角的な性状を生かしたものを認定する。概して、刃こぼれ状の不連続な小剥離痕や不揃いな小剥離痕である。

Ｉ類：剥離痕の大きさがほぼ一定で、規則的に並ぶ。片面のみ（60，61）４点、両面１点（59）。

II類：剥離痕の大きさが不揃いで、不連続なもの（62～66）36点。

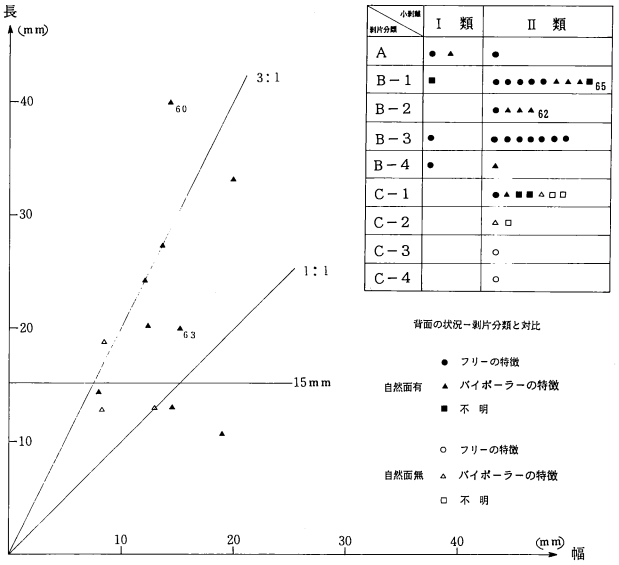


図21　小剥離痕を有する剥片の長幅相関および背面状況

背面の剥離痕状況を栗毛坂遺跡群Ａ地区の剥片分類に対応させ、図21に示した。Ｉ類はすべて自然面を残し、剥離面数が少ない。II類ではその６割ほどに自然面が認められた。作業過程での打法の特徴を示す剥片、例えばフリーフレイキングによるものとバイポーラフレイキングによるものとを抽出した。概して前者は打面を残し、バルブの発達した剥片であり、後者は崩れて薄い打面・密集する波状リングや扁平なバルブなどが識別できる。これら12点の長幅比を図

21に示した。縦長で扁平な素材であること、自然面を残さないものが左下方に集中すること、下限値は10mmであることなどがうかがえる。62のみ両極に剥離痕を認める。

剥片・砕片

剥片・砕片の分布状況を図17に示した。

石核・残核（図10—67、PL102）

石核・残核は、すべて黒曜石製である。ネガティブな剥離作業面で構成された小岩塊である。自然面占有率と重量を図22に示した。不整かつ小形で剥離作業の続行が困難と思われる、いわば放棄性の強い残核が主である。ほとんどが自然面を残し3～5cmの原石に復元推定できるものが多い。夾雑物を含み、原材として不良なものも持ち込まれている。67は石核G類に属す。一辺につぶれ状の痕跡が並び、掻器的な機能を推察させる。注目したい。

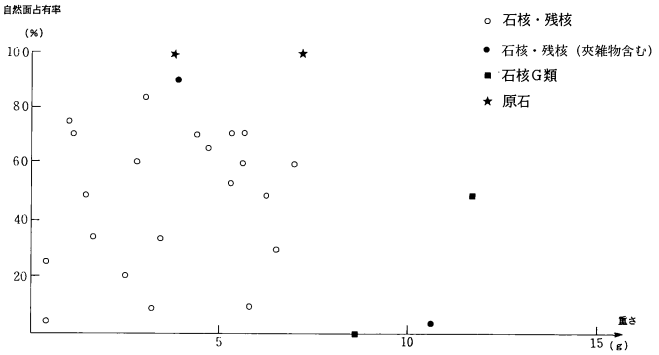


図22　石核・残核の自然面占有率と重量相関

打製石斧（図19—68～70、PL102）

68は横長剥片を素材とし、左側縁、表面に原礫面を残す。調整は右側縁に集中し、左側縁には簡単な調整しか見られない。調整を刃部形成のものと見れば、いわゆる横刃形石器状であるが、刃部に摩耗が著しく縦方向に利用されたことは明らかである。折れ面は裏からの横折れである。石質は安山岩製である。

69・70横長剥片を素材とし、両者とも小振りで薄手である。70は調整が少ない。69は刃部摩耗がみられる。

(2)　平安時代の遺構と遺物

ア　住居址

1号住居址（図23、PL95・103）

調査対象区東端のE区南寄り、IIID16に位置する。東側には尾根の斜面が迫り小規模な谷状地形の黒褐色土の厚く堆積した土層中に、地形に沿って構築されている。本址の大部分は黒褐色土層中に構築されていたため検出に困難をきたした。南西壁は後世の堆積で削平されたようで検出されなかった。平面形は方形を呈していると思われる。規模は東西4.0×3.0m。壁は残存部分は少ないが斜めに掘り込まれている。残存高は北東壁で約40cmである。床面は掘り込んだ面をそのまま床としており、平坦で硬化し、特にカマドの前は顕著であった。だが地山（IIE層）には礫が多く含まれ、壁・床から礫が顔を出していた。

カマドは北東壁中央にやや外に張り出すかたちで検出した。火床は、壁のラインよりやや内側に位置し、床面の高さとそれほど変わらない。袖石・支脚石は、カマド部分全体を掘り下げて据えられている。構築材は黒褐色のしまりのよい土でつくられている。支脚石は径7cmで、火床の奥で住居址下端線上に設置されていた。火床の上部からは、天井石の一部と思われる大形の平石2個・支脚石脇からは細長い石2個が若干浮いて出土している。

床面を精査したが柱穴・周溝などは確認しなかった。

埋没状況は1層の淘汰のよい黒色土が住居内のほとんど埋め、ブロックなどの混入はみられない。その

点からみて自然埋没と思われる。

遺物　出土遺物の全体量は土師器甕２（５・６）・小形甕2（３・４）・内面黒色坏1（1）・土師質坏１（2）・須恵器坏１が出土している。出土位置はほとんど床直出土である。５・６はロクロ成形による土師器甕で、５

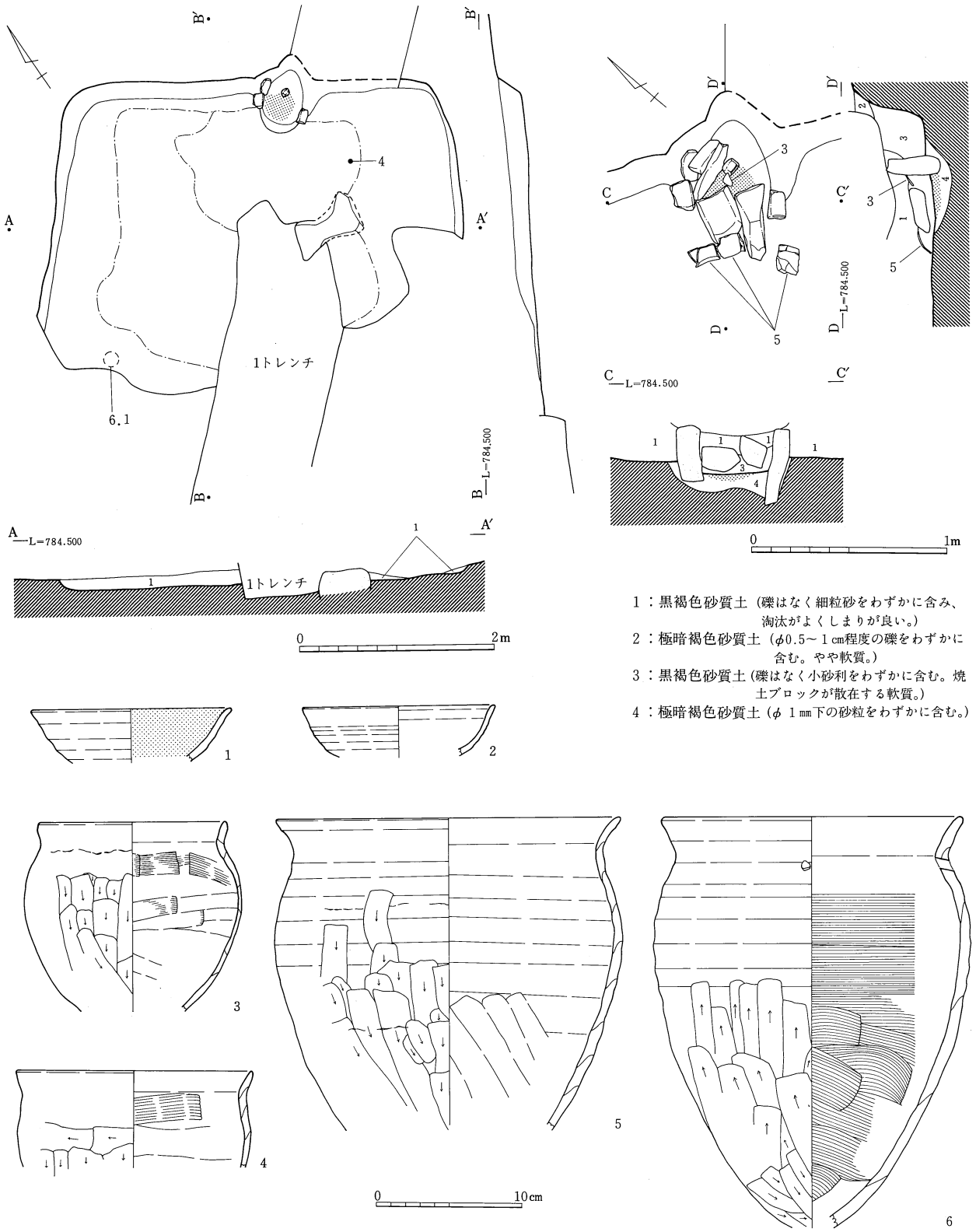


図23　１号住居址

はカマド内から、３は天井石とともに出土している。口径は比較的大きく肩部と同径である。口頸部のくびれは緩やかに外反して口縁部にいたる。６は西隅床直から１とともに50 cm 四方にまとまって出土した。状況は押しつぶされたものではなく、部位がバラバラな状態であったことから落として割れたようである。肩部に最大径をもつ。成形はロクロであるが内面はハケが使用されている。注目されるのは焼成後頸部に１穴が開けられていることである。３・４は紐作りで雑な整形である。口頸部は「コ」字を呈さず直立している。４にいたっては頸部が不明瞭で、退化してきている。１は黒色処理され、ミガキは不明瞭で力を入れずに施されている。

時期　土師質坏の登場、ロクロ甕の口頸部・小形甕の口頸部の退化の状況から９段階に相当する。

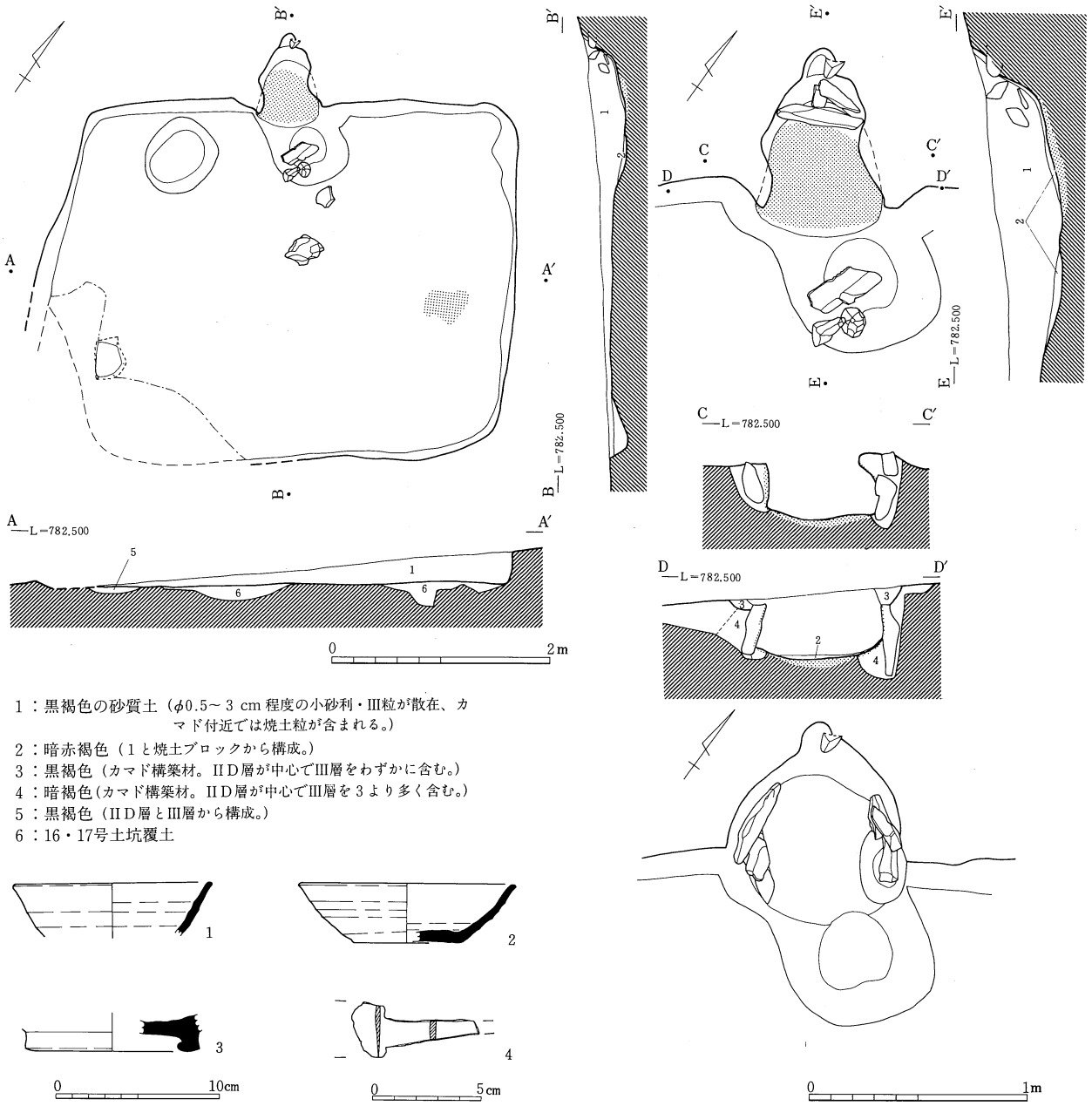


図24　２号住居址

２号住居址（図24、PL96・103）

調査対象区東端のＢ区中央南寄り、ＩＶ09に位置する。小規模な南東下する谷状地形の北西斜面上に築かれ、耕土下Ⅲ層上面にて検出したが、耕作によって削平され南隅は消滅している。平面形は北東～南西軸の若干長い長方形を呈し、地形に沿って構築されている。

規模は東西4.4×3.2m。壁は残存部分は少ないが斜めに掘り込まれている。残存高は北東壁で25 cmである。

カマドは北西壁中央に張り出すかたちで検出された。火床は壁のラインより外に位置している。天井部は手前の天井石がカマド手前にまとまり、奥の天井石はわずかに崩落しているがほぼ原位置を保った状態で検出した。天井部は火床中央右側で一部残っていた。袖石は両袖とも２か所に検出された。石の据え方は１号住居址とは異なり、袖石部分のみを掘り下げて据えている。構築材は黒褐色のしまりのよい土で、地山のⅡＤ層土が用いられている。支脚石は設置されていない。カマドの手前には浅い凹みがあり灰・炭粒が入っていた。カマドの左側には径60～70 cm、深さ10 cmの貯蔵穴らしいピットが検出され、覆土内には焼土・炭化物粒が散点していた。

床面を精査したところ、中央北東寄りに径約30～40 cmの範囲で床面が焼けた部分が認められたが、その周囲からは特別な出土遺物は検出されなかった。東コーナー寄りには床下から露出した自然石が検出された。これは表面が平坦で滑らかなため、叩き石などの工作台に使用されたものと推測される。

覆土は単層、ブロックなどの混入はみられないことから自然埋没と思われる。

遺物　出土遺物の全体量は須恵器坏３（1・2）・長頸瓶２（3）、土師器甕1・小型甕1個体分・刀子１（3）などで、遺物のほとんどは小片ばかりである。１・２は焼成がよく火ダスキも明瞭に発色している。３は胎土が白く東海産と思われる。土師器甕は図化できないが、口頸部は「コ」字化していない。刀子は刃幅が2.5 cm・背幅３ mm弱で、一般的に出土する刀子に比べて大きいが、刃巾はせまい。

時期　遺物が少なくはっきりとした時期を示すものはないが、６段階頃に比定されると思われる。

イ　遺構外出土遺物（図25）

１号住居址の周囲から若干出土したが、ほとんどが小片で図化できない。それらは１号住居址に伴いそうな遺物が中心で、須恵器坏・甕片、土師器甕・内面黒色坏・碗片などである。１はヘラオコシの須恵器坏で、これのみ１号住居址覆土上層部分から出土し、時期も異なることから、流れ込みによるものと判断した。

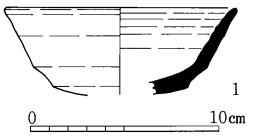


図25　遺構外出土遺物

5　まとめ

本遺跡は平地部に面した山麓中腹の谷部に立地し、尾根裾の現集落から300～350 m程離れているにすぎないが、標高差は50～70 mをはかる。立地的には山間部で現在は居住に適さない傾斜面である。遺構は縄文時代の住居址1軒・土坑17基、平安時代住居址２軒が検出され、土坑を除き住居址は単独で存在する縄文時代と平安時代の混合する遺跡であることが分かった。

縄文時代の遺構は竪穴住居址が前期末葉に、土坑は前期後葉～中期初頭後半に位置する。土坑は北東ブロックと南西ブロックとに２分することができる。

北東ブロック13基はすべて中期初頭に属し、大小の規模に細分することができそうである。大形（4・5・6・10・12号）土坑は弧状に配列され、小形（1・2・3・9・14）土坑はほぼ南北方向に並ぶ。

南西ブロック４基は前期後葉と中期初頭に属し、８号は若干小形ではあるがほぼ等間隔に展開する。

遺物の出土した土坑には大形の土器破片を伴う15・１・９号土坑があり、そのほか礫を伴う２・５・10・

11・12・13・14・15号土坑である。出土状況は、そのほとんどが壁から底に向かって傾き、底から浮いた状態で出土している。これらは墓坑的性格が推測できるのではなかろうか。

住居址は前記したように前期末葉に属し、該期の遺構は類例が少ないことが一般的に知られている。柱穴は円形状に9本が配され、炉は土器片囲炉であった。これらの特徴は中期の住居構造および埋甕炉の発生を探る上で貴重な資料となろう。

平安時代の住居址は9世紀中頃と10世紀前半に位置づけられる。山間部において検出される平安時代の住居址は、これまで「山棲み集落」・「離群住居址」・「離れ国分」などと称され、律令体制の崩壊に伴って出現し、新たに中世社会形成期に見られる特徴であろうと説明されてきている。このような集落の主要な生活基盤は農耕と非農耕とに別れる。

当遺跡が、農耕地であれば地形の占有地状態から畑(畠)作農耕であろうし、非農耕であれば樵・木地師・狩猟・鋳物師・山岳宗教（修験者）などが推測される。だが、検出された住居址・遺物からはどの様相もはかり知ることのできる資料は得られなかった。

山間部の調査では、前節で記した西祢ぶた・東祢ぶたの両遺跡をはじめ、佐久市内においても山間部で古代住居址が検出された調査例はあまり多くないが、確認されている古代の住居址は平安時代ばかりで、古墳から奈良時代に該当する住居址は認められない。住居址は同時存在する可能性を持つものはわずかで、ほぼ単独で検出される例が多い。平地では近年、古墳後期から平安時代前半(9世紀)にかけて計画村落的な集落が検出され、平安時代前半(9世紀後半)からは住居址数は激減し集落は縮小されてゆく傾向が報告されている。こうした山間と平地における居住傾向の中、当地方の山間地域では、9世紀以降単独に近い1～2軒の住居が構築されていくが、集落を営むものではないことが明らかにされつつある。こうした住居址が展開してゆく傾向は現在まで一般に論じられてきている状況とそう大差はないものであろうと考えられる。

当初、山間の谷部に所在する当遺跡・東祢ぶた・西祢ぶた遺跡などは、周知の遺跡として把握されていなかった。今回一連の上信越道関連の調査で遺跡に登録されたこのような縄文時代と平安時代の混在する遺跡は、前述したように現在は居住地に不適当な地形で、なおかつ、遺跡として捉えられてこなかった場所である。今後は今回の成果をふまえ、山間部の集落を理解していくうえでこのような場所に留意し調査して行かなくてはならないだろう。

参考文献

六合村教育委員会　1984　『熊倉遺跡』
佐久市教育委員会　1984　『佐久市遺跡詳細分布調査報告書』
佐久市教育委員会　1988　『茂内口遺跡』
佐久埋蔵文化財調査センター　1987　『西祢ぶた』
佐久埋蔵文化財調査センター　1987　『淡淵・屋敷前・西片ケ上・曲尾Ⅲ・曲尾Ⅰ』
長野県教育委員会　1987　『関越自動車道上越線建設予定地内遺跡詳細分布調査報告書』
橋口定志　1985　「平安期における小規模遺跡出現の意義」『古代61』

第14節　北山寺遺跡（きたやまでら）

1　遺跡の概観

北山寺遺跡は佐久市大字下平尾字北山寺2572番地ほかに所在し、平尾富士南西麓端に位置する。眼前には幅約500ｍ、標高差７ｍの南北に延びる緩やかな斜面をもつ谷状地形の水田地帯が広がり、その谷状地形形成時に取り残された小規模な段丘上に立地している。背後には急斜面の谷が入り込んでいる。遺跡の範囲は南北に沿った段丘の南側に占地し、面積は43,000 m²をはかる。

周辺には、背後の山麓に一本松・城古墳群・橋ヶ窪遺跡・平尾城址が、段丘上北約400ｍ付近に十二前・矢沢遺跡が所在し、南側の痩せ尾根を挟み木田橋遺跡が所在する。またこの段丘面（矢沢遺跡～木田橋遺跡にかけて）は平尾城の段曲輪と想定されている。眼前の水田地帯には地形形成時に取り残された微高地に宮前遺跡が所在する。

周囲の調査例としては、佐久市教育委員会によって昭和63年北山寺遺跡では高速道路平尾工事線に伴う調査・平成元年古宿遺跡（道路工事に伴う）の調査が実施された。北山寺遺跡では時期不明の竪穴状遺構２基、古宿遺跡では平安時代の竪穴住居址２軒が検出されている。

2　調査の経過と概要

上信越自動車道は遺跡のほぼ中央を東西に通過し、平尾高架橋が建設される場所となる。調査前は一帯が果樹園となっていた。調査対象となった面積は5,100 m²である。

地形はほぼ中央付近が高く水田側と背後の山側に緩やかに傾斜している。山側と水田地帯には湧水がみ

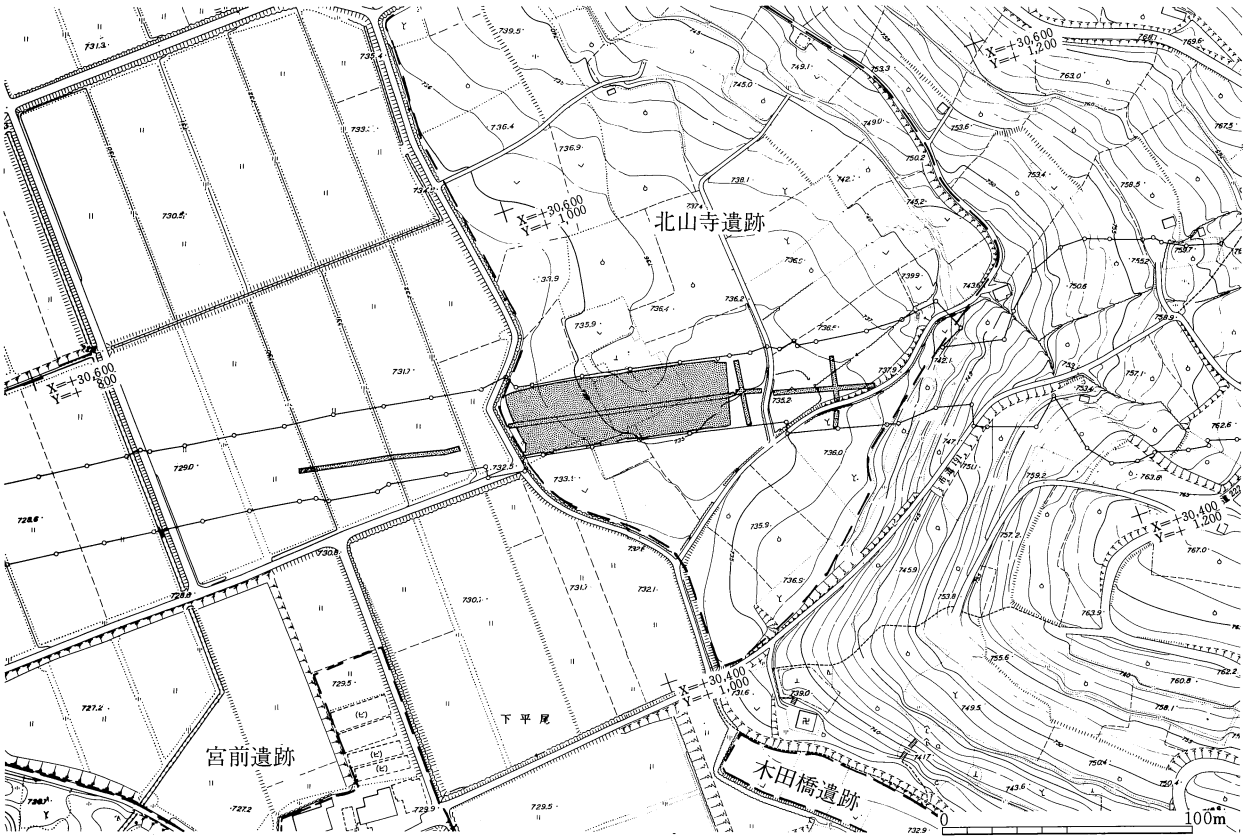


図１　地形および調査範囲（１：3,000）

られ、山側では葦や芹が繁茂していた。

発掘調査は昭和63年4月25日から当初東大久保遺跡群と並行して行い、最後は丸山遺跡と並行して実施し、7月29日に終了した。最初は遺跡の状況を把握することを目的とし、トレンチを高速道の中心杭沿いに設定し、人力で掘り下げた。東側の南北に通る農道付近以東からは、地表下30 cm 位から湧水があり重機を入れてトレンチをあけた。

その結果、農道付近以東は遺構は検出されないだろうと判断し調査対象外とした。中央のやや高まった付近では厚さ20 cm の耕土を取り除くとIII A2面に至り、竪穴住居址のプランが検出された。西斜面では耕作土下に黒色土層（III A1層・漸移層）が確認され、斜面が下がるにつれ厚くなる。黒色土層中からは焼土・炭が検出され、遺構の存在が予想されたが遺構と覆土の差が明らかでなく検出できなかった。以上から、農道付近以西を面的調査範囲としIII A2上面にて検出を実施した。

検出作業の結果、西端の黒色土のもっとも厚い場所で検出された5号住居址は、掘り方の痕跡のみが検出されたにとどまった。しかし、幸いにも調査区の壁面に住居址の一部が掛かり、掘り込み面が黒色土層上方であることが確認できた。

調査日誌抄

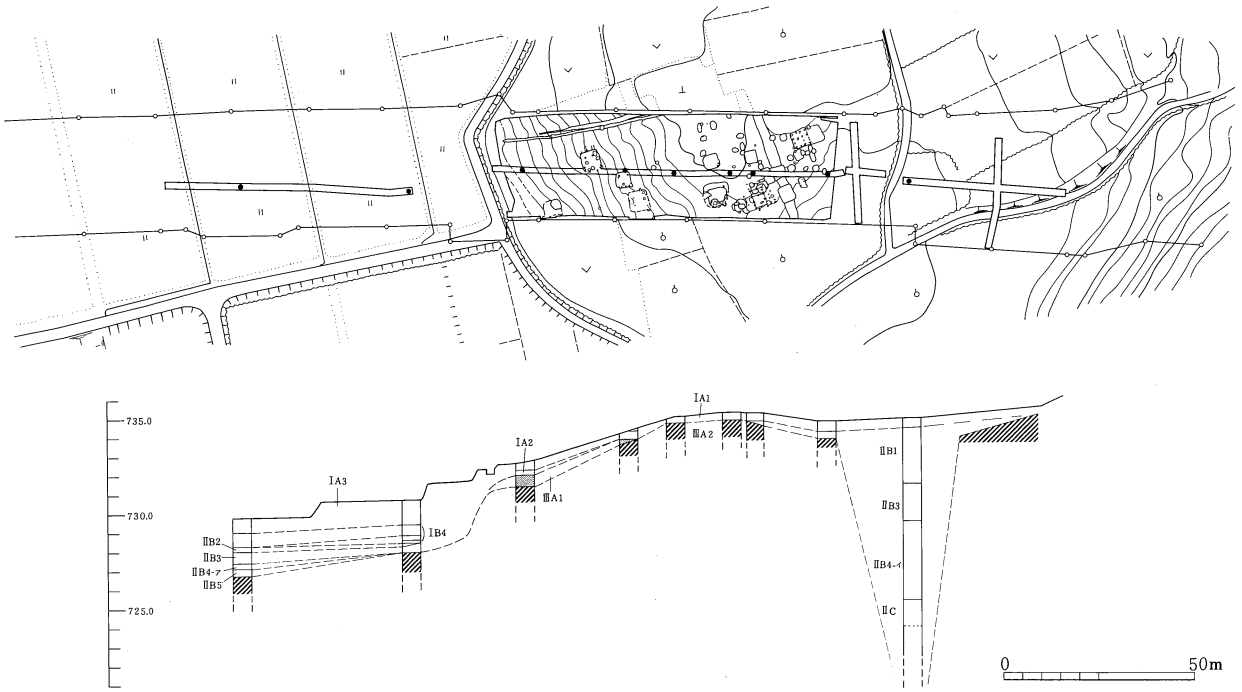
4月25日　トレンチ調査開始。
4月26日　1号住居址の一部検出。
5月2日　1号住居址を手掘りにより表土剝ぎ開始。
5月6日　重機によりトレンチを東部分に入れる。
5月9日　重機による表土剝ぎ開始。
5月11日　3号住居址の検出写真撮影。
5月14日　発掘調査区域外（西側）に重機によりトレンチを入れる。
5月17日　検出作業開始。
5月18日　6・8・9・10号住居址に先行トレンチを入れ始める。
5月24日　検出状況の航空写真撮影を実施。
7月25日　掘り下げ作業がほぼ終了し、一部の写真5月2日1号住居址を手掘りにより表土剝ぎ開始。撮影・実測作業が残るのみとなり、丸山遺跡へ発掘器材の移動開始。
7月29日　発掘作業終了。
8月9日　航空写真撮影準備のため清掃。
8月10日　航空写真撮影天候不順のため中止。
8月23日　完掘状況の航空写真撮影を実施。

3　基本土層（図2）

調査区中央の高い部分では耕土（I A1層）が薄く直ちに軽石流2次堆積物層（IIIA2層）に達する。これは浅間火山の軽石流堆積物が氾濫原面に堆積した水成層であり、軽石流の物質から成る。この高い付近は削平され客土（I A2層）として西・南側の斜面に運ばれている。西側付近では耕土下に前者の客土が見られ、その下は黒色土の漸移層（III A1層）を経てIII A2層に至る。

東側ではトレンチ調査の際20～30 cm 下から湧水がみられ、地中からは幅30 m 余りの谷が南西方向に形成されている(IIB1～IIC層)。重機で地表下4 m 40 cm ほど掘り下げたが基盤までは至らず、軟弱地盤であることから一部土層確認したのみで崩落してしまった。調査区の西側に広がる谷部の区画整理された水田下は河川による堆積層（II層）である。

遺構の掘り込み面は、中央の高い部分では、削平されていることもあるがIIIA2層ですべての時代の遺構が検出されるが、西側部分では平安時代の遺構がIIIA1層中に掘り込まれている。



ＩＡ１：現畑耕土
ＩＡ２：客土
ＩＢ３：現水田耕土及び客土
ＩＢ４：旧水田耕土
ⅡＢ１：黒色シルト質土（砂粒を含む、鉄の集積がみられる）
ⅡＢ３：黒色シルト質土（１mm位の砂粒を多く含む）
ⅡＢ４―ア：オリーブ黄色と青黒色の２～３ mmのブロックからなる砂層
ⅡＢ４―イ：灰色～黒色のシルト質土と砂が交互に堆積、多量の根が腐食せずにみられる
ⅡＢ５：白色粘土
ⅡＣ　：川砂、流木を含む
ⅢＡ１：黒褐色土
ⅢＡ２：軽石流２次堆積物・P3

図２　基本土層

４　遺構と遺物（図３）

今回の調査で検出された遺構は、拡張部分西側斜面に平安時代の遺構が、東側の高い部分に中世の遺構がまとまって占地して検出された。平安時代の遺構は北側に並走して西流する２本の溝と東側に南流する溝とに囲まれた範囲から検出されている（図３）。遺構外からは縄文時代の土器･石器がわずかではあるが出土した。

遺構

平安時代	竪穴住居址　７軒		中世	竪穴住居址　６軒	火葬墓　１基
	（１・２・３・４・５・11･12号）			（６・７・８・９・10･13号）	（１号）
	溝址　３本			掘立柱建物址　１棟	土坑　50基
	土坑　２基				

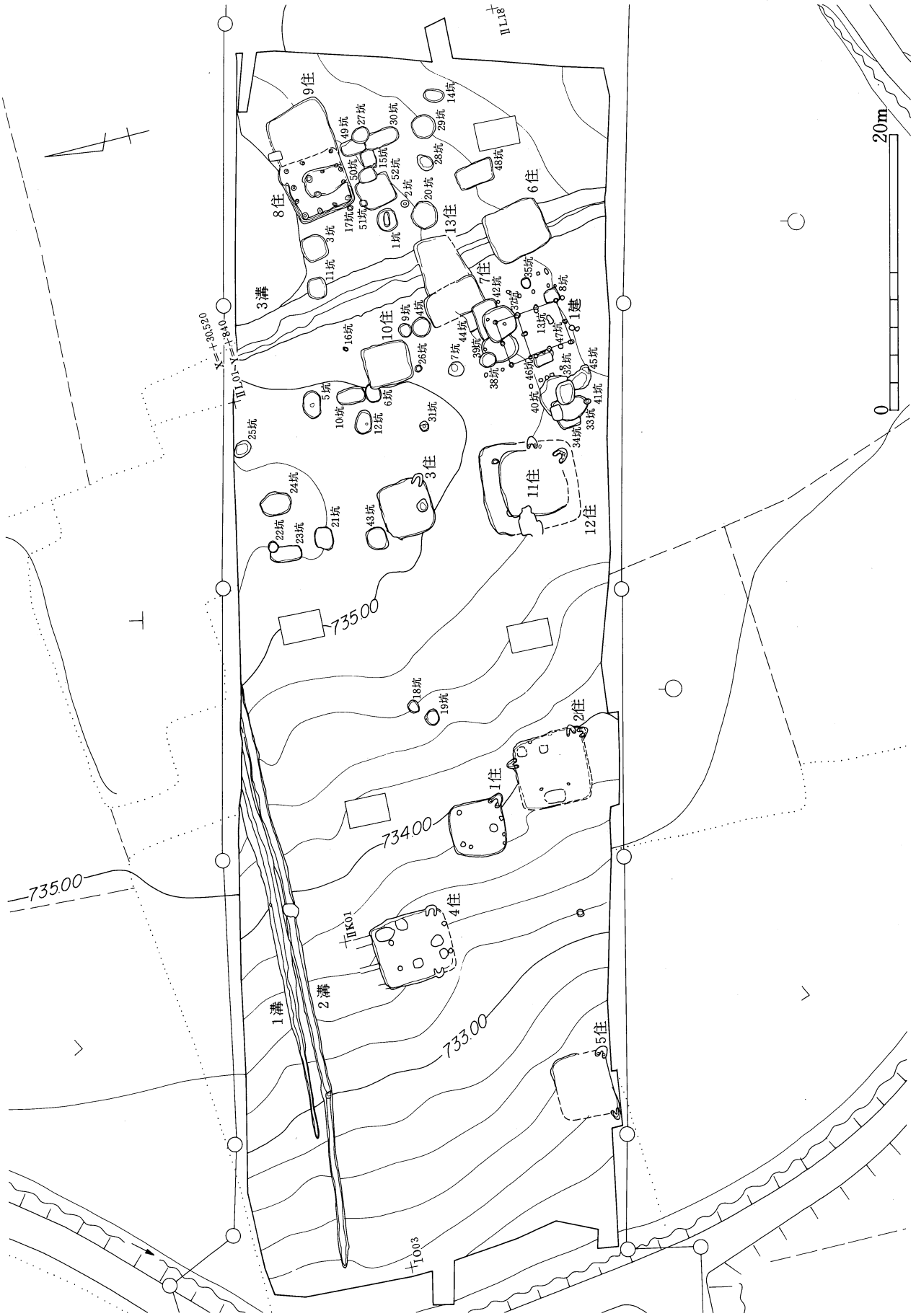

9住
8住
6住
13住
7住
10住
3住
11住
12住
2住
1住
4住
5住
1建
3溝
1溝
2溝
1坑
2坑
3坑
4坑
5坑
6坑
7坑
8坑
9坑
10坑
11坑
12坑
13坑
14坑
15坑
16坑
17坑
18坑
19坑
20坑
21坑
22坑
23坑
24坑
25坑
26坑
27坑
28坑
29坑
30坑
31坑
32坑
33坑
34坑
35坑
37坑
38坑
39坑
40坑
41坑
42坑
43坑
44坑
45坑
46坑
47坑
48坑
49坑
50坑
51坑
52坑
735.00
734.00
733.00
20m
0

図 3　遺構配置

(1)　縄文時代の遺物（図４、PL113）

土器　遺構は検出されなかったが、耕土から後期堀之内式の深鉢片が出土した。しかし、小片のため図化できなかった。

石器（図４）　１は６号住居址（中世）を切る攪乱中より出土した。以前『年報５』においてナイフ形石器として報告したが、整理段階においてその特徴は認められないことが判明した。黒曜石製縦長剥片を素材とし、自然面がわずかに残る。背面を構成する剥離面剥離軸は、時計まわりの方向に振れる。先行する剥離による上下にのびる稜が介在し、横断面に三角形を呈する。右側辺部は片面調整により刃部が作出され、刃潰しのような微細なツブレが部分的に認められる。刃部角は30～80°で、末端に寄るに従い急角度となる。左側辺部は両面調整であるが、主要剥離面側からの剥離調整が主で刃部角は30°～45°をはかる。内湾部にわずかに剥離痕が観察される。末端は横断面菱形状を呈する。使用痕は看取されない。

以上の観察から形態的には鋭い先端部はみられず、側縁加工は刃潰し加工とは異なり刃部加工的な剥離面を持つことから、サイドスクレイパー的な範疇に属すものと思われる。

石鏃は２点。２は黒曜石製の無茎凹基鏃で、先端部を欠損する。小形で鏃身15 mm弱と推定する。３は安山岩製有茎鏃で、先端部を欠損する。貝殻状剥離痕が覆い項部に微細な調整が施される。

スクレイパー（４）１点で黒曜石製である。鋭角的縁辺部に連続的な剥離調整が施されることより認定する。

石核は２点。５は11号住居址（平安）の覆土中より認定する。遺構外としてあつかう。黒曜石製角礫で、重さ30ｇ弱をはかる。稜の磨滅などは認められない。剥離作業面は１面のみだが、稜３か所にツブレが観察される。

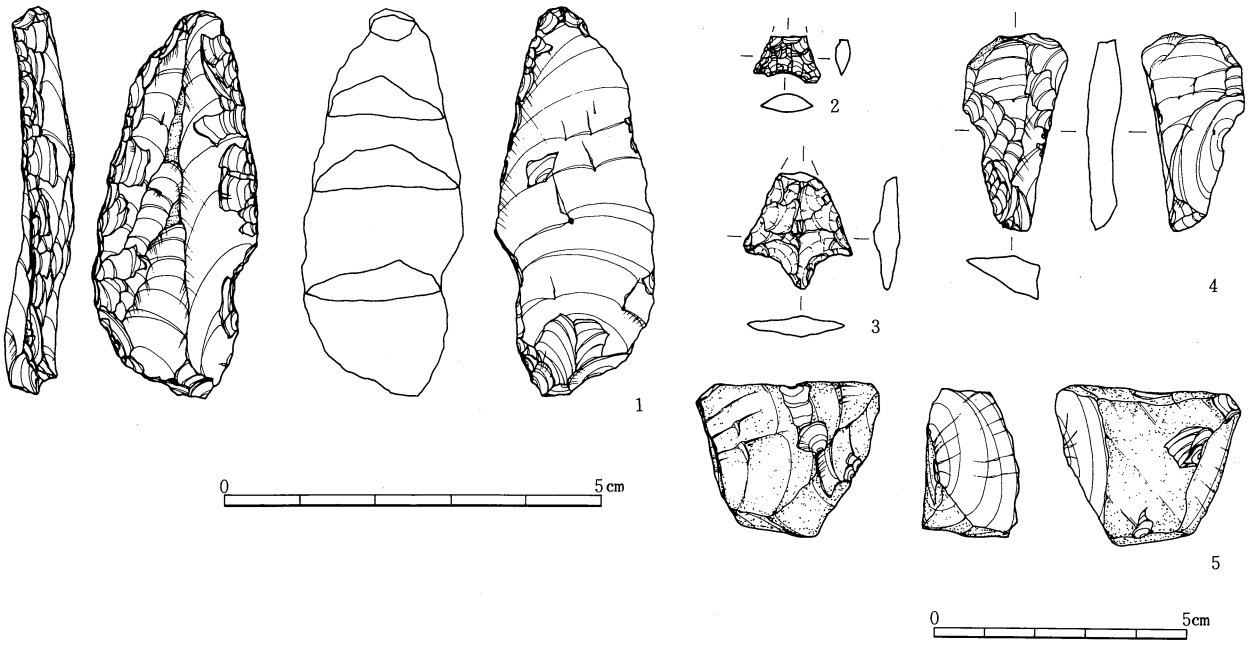


図４　遺構外出土石器

(2)　平安時代の遺構と遺物

ア　住居址

1号住居址（図5、PL105・113）

II K—06グリッドに位置し、トレンチ調査で検出した。2号住居址の北に近接し、他の遺構と重複はみられない。

平面形態は、西壁が若干湾曲するが、東西南北に沿った方形を呈する。規模は3.8×3.8 m・深さ40 cm・床面積13.5 m²をはかる。

覆土はカマドを除き単層で暗褐色土が住居址内のほとんどを埋めている。カマド堆積の3～5層は構築材に使用された土の残骸だろうと思われる。特に、3層には白色粘土が使用されている。床面は比較的硬く特に中央周辺は顕著である。ピットは6基検出され、そのうち柱穴はP1～4の4本と推測される。規模はP1・2は径約30 cm・深さ24～25 cm、P3・4は径25×30 cm・深さ22～23 cmをはかる。南壁近くのP5は径60 cm・深さ80 cmをはかる。

カマドは南東隅に位置する。残存状態は悪く、天井石・袖石はなく、据え付けの穴のみ検出された。袖石と考えられる石は住居西側に集中して出土した。火床は住居壁の延長上に位置する。その他、西壁近くに、径約40cmの範囲で床面が焼けていた。炭・焼土は出土していない。

遺物　出土土器の全体量は、土師器甕7（7・8）、羽釜3（10）、土師質の坏B3（4.5）・小皿5（2）・小碗1（3）・手づくね小皿1、灰類陶器碗1（6）・壺類1個体分が出土している。

土師質の小皿は、体部から直線的に口縁に至るものと口縁がわずかに外反するものとに分かれる。1は前者にあたり、口径8.0 cmをはかる。3は土師質の小皿に高台が付くもので、小皿に比べ深くなるものである。4・5の坏は器厚で、直線的に口縁に至る。ロクロ痕は不明瞭である。甕は粗雑な胎土で、口縁部をわずかに外反する。体部は寸胴（7）・球状（8）・口頸部に最大径をもち、底部に向かって小さくなっていくもの（9）がある。成形方法はみな同じである。外底部は表面一面に砂が付着している。6の灰釉陶器は覆土上層中から出土したもので、器厚で緻密な胎土をもつ。

時期　土師質の小皿、坏の共伴および法量の特徴から16段階と考えられる。

2号住居址（図6・7、PL105・113・114・115）

II K—06・07・11・12グリッドに位置する。1号住居址南側に近接し、長芋の耕作による攪乱を多く受けている。他の遺構との重複はみられない。平面形態は方形を呈し、東西南北に沿って配置されている。規模は約5 m前後・深さ30～50 cm・床面積24.5 m²をはかる。

覆土は2層に大別される。2層はIII A1層とIII A2層の混在しあった層で人為的に埋められてものと考えられる。1層は黒褐色土で淘汰がよく、III A1層を基調とする自然埋没と推測される。

床面は掘り込んだIII A2層面をそのまま整地して床とし、平坦だが若干西へ傾いている。

ピットは7基検出され、配置・形状からP1～4を柱穴を判断した。柱穴は東寄りに配されている。規模は径約20～28 cm、深さはP1・20 cm、P2～4は40～57 cmをはかる。P5・6はカマドに付随する貯蔵穴と考えられる。規模はP5が径70 cm・深さ25 cm、P6が径80×110 cm、深さ58 cmをはかる。P7は楕円形で西壁に沿って位置する。規模は径90×155 cm・深さ35 cmで垂直に掘り込まれている。

カマドは、南東隅・東壁・北壁から計3基が検出された。検出状況から、北壁・東壁・南東隅の順に造りかえられたものと思われる。

南東隅のカマドは最後に構築されたものであるが、長芋栽培の攪乱より、全体像は不明である。残存状

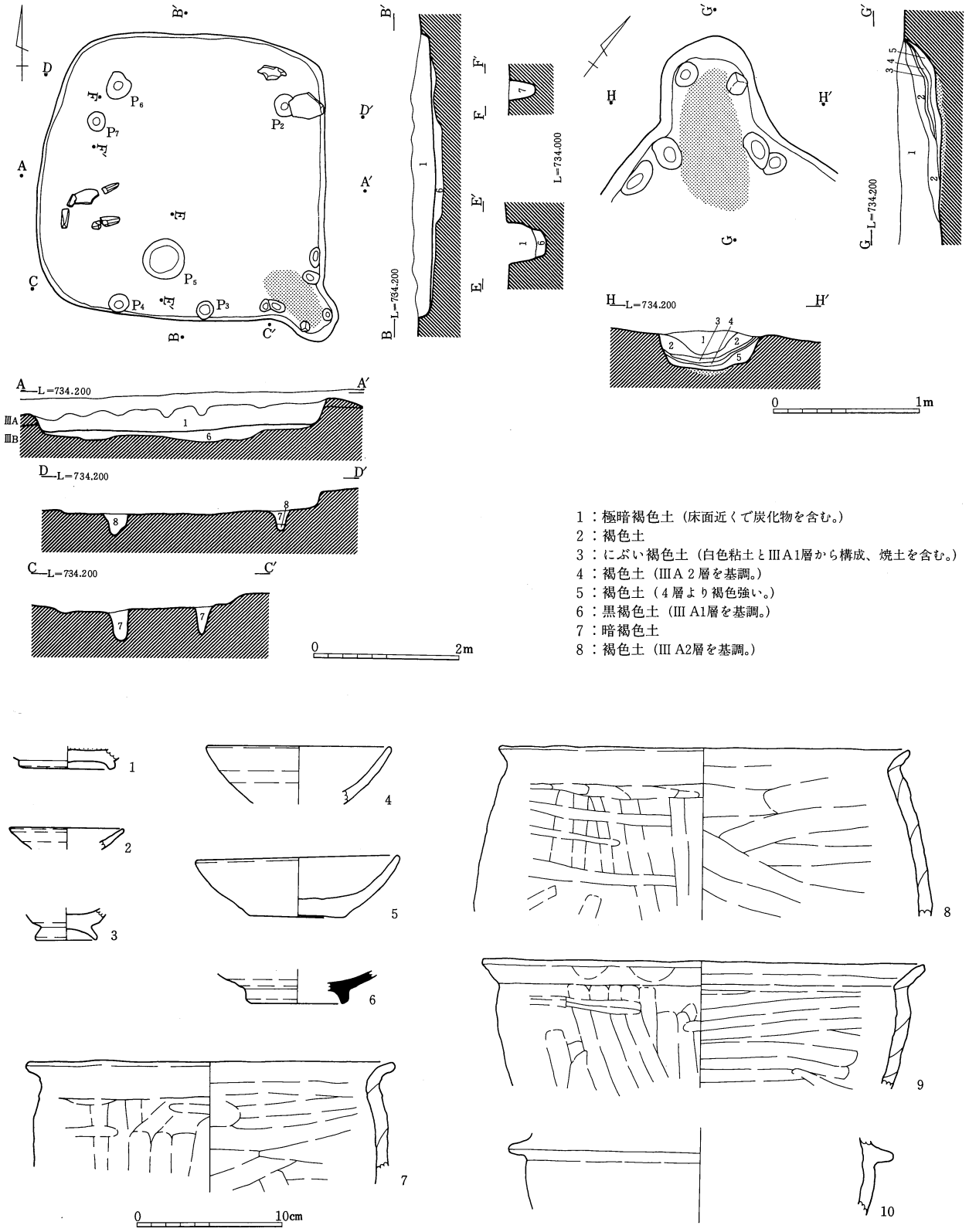


図５　１号住居址

況から推測すると、住居壁よりやや外へ張り出すかたちで構築され、火床の右袖・左袖の一部が残っている。袖石は右袖手前のみ原位置を保っている。構築材として白色粘土が使用されている。